

大学院履修案内・講義要綱

平成 17 年度

(2 0 0 5 年度)

慶 應 義 塾 大 学 大 学 院

經 濟 学 研 究 科

振 鈴 表

| 時 限 | 授業振鈴時間 | 定期試験振鈴時間 |
|--------|-------------------|-------------------|
| 第 1 時限 | 9 : 00 ~ 10 : 30 | 9 : 30 ~ 10 : 30 |
| 第 2 時限 | 10 : 45 ~ 12 : 15 | 10 : 45 ~ 12 : 15 |
| 第 3 時限 | 13 : 00 ~ 14 : 30 | 13 : 00 ~ 14 : 30 |
| 第 4 時限 | 14 : 45 ~ 16 : 15 | 14 : 45 ~ 16 : 15 |
| 第 5 時限 | 16 : 30 ~ 18 : 00 | 16 : 30 ~ 18 : 00 |
| 第 6 時限 | 18 : 10 ~ 19 : 40 | 18 : 15 ~ 19 : 45 |

(注) 国際センター・知的資産センター設置講座のみ。
修士課程基礎科目のうち学部設置科目と併設している科目については、定期試験期間中に定期試験を行うことがあります。

緊急時における授業の取扱いについて (三田)

交通機関ストライキ、台風・大雨・大雪・地震などの各種自然災害により鉄道等交通機関の運行が停止した場合や、政府や気象庁から「東海地震注意情報」が発せられた場合などの授業の取扱いは次のとおりとします。

1. 鉄道等交通機関運行停止時の授業の取扱い

【対象事由】

1. 交通機関のストライキ
2. 台風・大雨・大雪・地震などの各種自然災害によるもの

【対象路線】

・山手線 ・中央線 (東京 高尾間) ・京浜東北線 (大宮 大船間) ・東急 (電車に限る)
のいずれか 1 路線の全区間または一部区間において運行停止となった場合は下記のとおりとします。

【時間・対応策】

1. 午前 6 時30分までに運行を再開した場合は、平常通り授業を行います。
2. 午前 8 時までに運行を再開した場合は、第 2 時限から授業を行います。
3. 午前10時30分までに運行を再開した場合は、第 3 時限から授業を行います。
4. 正午までに運行を再開した場合は、第 4 時限から授業を行います。
5. 正午を過ぎても運行が再開されない場合は、当日の授業を休講とします。

【その他】

授業開始後に運行停止となるような場合は、状況により授業の短縮や早退など別途措置を講じます。掲示や構内放送、下記のホームページによる大学からの指示に従ってください。

<http://www.gakuji.keio.ac.jp/index.html>

交通機関の運行状況に係わらず、大規模な災害や事故等が発生した場合の授業の取扱いについては、状況によりその都度指示することとします。

2. 政府や気象庁から「東海地震注意情報」が発せられた場合の授業の取扱い

首都圏・東海地方を中心とする大規模な地震発生が予想され、政府や気象庁から「東海地震注意情報」が発せられる場合の授業の取扱いは下記のとおりとします。

[1] 「東海地震注意情報」が発せられた場合、ただちに全学休校とします。

[2] 地震が発生することなく「東海地震注意情報」が解除されたときの対応は、交通機関運行停止時の場合に準じます。

早慶野球戦が行われる場合の授業について

授業は 1 時限のみとし、2 時限以降は応援のため休業とします (3 回戦以降もこれに準じます)。

雨天等により試合が中止になるときは、神宮球場の判断によります。

神宮球場テレフォンサービス.....TEL 03-3236-8000

本案内は、大学院経済学研究科における履修の方法、手続きと講義内容を記載したものです。
また、履修要項は、実際に適用される「学則」の運用について解説したものであり、学則に明示されていない細則もこの要項によります。

学生諸君は本案内を熟読したうえで、履修する授業科目を決定し、指定された期間に必ず申告してください。履修申告後の履修授業科目の変更は認められません。

本案内を読んでなお、疑問や不明な点があれば下記の学習指導担当より説明を受けることができます。

| 領域 | 分野 | 学習指導担当 |
|----|--------------------|---------|
| | 1：経済理論 2：計量・統計 | 教授 瀬古美喜 |
| | 3：学史・思想史 4：経済史 | 教授 柳沢遊 |
| | 5：産業・労働 6：制度・政策 | 教授 中村慎助 |
| | 7：現代経済 8：国際経済 | 教授 竹森俊平 |
| | 9：環境関連 10：社会関連 | 教授 金子勝 |

目 次

| | |
|-------------------------------------|-----|
| 学事関連スケジュール..... | 4 |
| 経済学研究科履修案内の配布にあたって（経済学研究科委員長） | 6 |
| 学科目履修にあたって（経済学研究科学習指導）..... | 7 |
| 一般注意事項 | 8 |
| 履修申告方法..... | 17 |
| 学事 Web システム | 20 |
| 分 野 表..... | 26 |
| 履 修 要 項..... | 27 |
| 開講科目と単位数..... | 28 |
| 課程修了にいたるまでの要件..... | 33 |
| 指 導 教 授..... | 34 |
| 学位請求論文の提出..... | 34 |
| 休学・留学・退学..... | 36 |
| 単位取得退学および在学期間延長..... | 37 |
| 修士課程設置科目講義要綱 | 39 |
| 博士課程設置科目講義要綱 | 81 |
| 慶應義塾大学在外研修プログラム..... | 110 |
| 国際センター設置講座..... | 112 |
| 知的資産センター設置講座 | 156 |
| 関係規程抜粋..... | 159 |

| | |
|------------------------|-------------------------|
| 在学料等納入期限（秋学期分納） | 10月31日（月） |
| 早慶野球戦【第2時限以降休講】 | 10月下旬 |
| 秋学期補講日(1) | 11月18日（金）午前 |
| 三田祭（準備・本祭・片付を含む）【休講】 | 11月18日（金）午後～11月24日（木） |
| 秋学期休学願提出期限 | 11月30日（水） |
| 修士課程2年生 | |
| 修士学位申請・修士論文題目提出 | 12月22日（木） 予定（詳細後日揭示） |
| 冬季休業 | 12月23日（金）～1月5日（木） |
| 三田一斉休暇 | 12月28日（水）～1月5日（木） |
| 授業開始 | 1月6日（金） |
| 秋学期末試験時間割発表（修士課程基礎科目） | 1月上旬（詳細後日揭示） |
| 福澤先生誕生記念日【休講】 | 1月10日（火） |
| 秋学期月曜代替講義日 | 1月18日（水） |
| 秋学期補講日(2) | 1月20日（金） |
| 秋学期授業終了 | 1月21日（土） |
| 修士課程2年生 修士論文および要旨提出 | 1月中・下旬（詳細後日揭示） |
| 秋学期末試験（修士課程基礎科目） | 1月23日（月）～2月4日（土） |
| 秋学期末追加試験申込受付（修士課程基礎科目） | 1月中（詳細後日揭示） |
| 福澤先生命日 | 2月3日（金） |
| 春季休業 | 2月上旬～3月下旬 |
| 秋学期末追加試験（修士課程基礎科目） | 2月下旬（詳細後日揭示） |
| 博士課程3年生 在学期間延長許可願届提出期限 | 2月28日（火） |
| 博士課程3年生 単位取得退学届提出期限 | 2月28日（火） |
| 博士課程3年生 | |
| 学位論文題目および研究計画書提出期限 | 2月28日（火） |
| 修士課程2年生 修士学位面接審査許可者発表 | 3月上旬 学事センター内掲示板（詳細後日揭示） |
| 修士課程2年生 修士学位面接審査 | 3月上旬（詳細後日揭示） |
| 学業成績表送付（本人宛） | 3月中旬 |
| 学位授与式 | 3月29日（水） |

（注1） 印の期間には学事センター窓口業務を執り行いません。証明書発行等も行わないので注意してください。

（注2） 事情により、日程・教室等は変更があり得るので、掲示板等に注意してください。

経済学研究科履修案内の配布にあたって

経済学研究科委員長 池尾和人

慶應義塾大学経済学研究科は、経済分野の専門的研究者、あるいは経済学の専門知識を有した高度な職業人を養成することを使命としている。

こうした使命が果たされるためには、大学院生諸君自身が、強い目的意識をもって、質・量ともに濃密な研究内容をこなすことが求められる。換言すると、大学院での日常生活を学部でのその単なる延長として過ごしてはならない。常に自分の頭で考え、執拗に問題を追及し解決しようとする姿勢に徹する必要がある。それによって「問題」を発見し、それを自分で解明し得た際の醍醐味は、研究者でなければ味わえないものである。大学院で学ぶ諸君は、そうした至高の経験ができることを目指すべきである。

それと同時に、経済学を学ぶものである以上、時間という（ある意味で）最も希少な資源をできるだけ有効に活用することを考えなければならない。いくら意欲があっても、無手勝流に勉強に取り組むだけでは、さほど効果はあがらないであろう。系統的に学習を進めることが重要である。こうした観点から、現在のカリキュラムでは、修士課程の段階においては、細分化された特定の科目を学ぶことよりも、むしろ基礎的な知識を順序立って学ぶことが求められている。基礎科目の履修が必要とされているのは、まさにこのためである。

修士課程の段階でより広く基礎的事項を学ぶことによって、自分が専攻したい研究分野への視野も広がることが期待されている。そして、研究テーマが定まり、研究の内容を深めて行くときには、指導教授とのかかわりが大切になる。

指導教授は、自分が選んだテーマの先達であり、研究を進める上での助言者である。修士課程の場合、6月に「指導教授希望届」を提出してもらうことになっている。したがって、それまでに十分熟慮し、どの教授に指導を依頼するのが最も適切かを慎重に考えておきたい。もし指導教授の選択に関して悩みや迷いが生じた場合には、5つの領域ごとの各学習指導担当者に相談すればよい。正式に指導教授が決まるのは、6月下旬である。

後期博士課程の目標は、もちろん博士学位の取得を目指して研鑽を重ね、博士論文を仕上げることである。1999年度以降に後期博士課程に入学した学生は、入学後3年間の内に「学位論文予定題目および研究計画書」を提出しなければならないことになっている。研究計画書提出後は、指導教授と研究科委員会が選出した論文指導担当者から論文指導を受けることになる。なお、博士論文を提出するためには、その一部（ないしは全部）が査読（レフリー）制度のある専門刊行物に掲載されている（あるいは掲載予定である）ことが必要条件とされている。こうした提出要件にも十分留意されたい。

本研究科の大学院生諸君には、志を高くもって、学問的精進を遂げることを期待する。

学科目履修にあたって

経済学研究科は、幅広い視野に支えられた高度な専門知識と研究能力の育成を目指している。これは、言うに易くして行うに難い課題である。「幅広い視野」ということは、往々にして「浅薄な雑学」になりやすく、また「高度な専門知識と研究能力」は、「専門馬鹿」のしるしと見られがちである。しかし、経済学は社会科学の一分野であり、意味のある社会科学は、この両者の幸せな結合なくしては成り立たない。

この点、現在の経済学は、それ自身が、数学的なものから歴史的なものまで大変に広い守備範囲を備えている。このような経済学の特質を生かし、本研究科で学ぶ諸君は、自分の専門分野を深く追求すると同時に、他の経済学の諸分野に対する十分な知識を備えてもらいたい。少なくとも、経済学内部で、異分野間の専攻者が意味のあるアカデミックな会話を交わせるようになることが、われわれの学問の土壌として望ましいのである。本研究科では、とりわけ修士課程においては、複数分野に亘る履修を求めているが、これは、このような必要性を考えての要求である。履修に当たっては、この点を考え、設置科目を利用して自らの能力を十分に拡大してもらいたい。

とはいうものの、大学院の最終目標が「高度な専門知識と研究能力の育成」にあることは言うまでもない。そして、その各段階での到達目標が修士論文、博士論文の作成である。このためには、学部段階とは異なった各人の積極的な研究姿勢が重要である。もちろん、本研究科の指導体制は、この論文作成に導くように組まれてはいるが、そのみでは不十分であり、教室を離れた場で個々人が最大限の努力を自らの研究に傾注することが求められている。

しかし、個々の専門的研究は、始めてみると、行き詰まりや自信喪失の連続である。そのような時に、自分の殻の中で萎縮してはならない。まず、第一に必要なことは、行き詰まりの前に立つ壁を越える道を捜して、休まずに試行錯誤を続けることである。第二には、指導教授や学習指導をはじめとする教授陣と、自発的に、緊密かつ率直に研究上の相談や議論をする必要がある。修士課程では一年次六月に「指導教授登録用紙」を提出することになっているが、それは、それまでに指導を希望する教授等に会い、自分の研究について自発的に相談していることを当然の前提としている。大学院では、それだけの積極性が求められているのである。第三には、同じ研究科の学生同士で、読書会など様々な機会を作り、相互に刺激しあうことも有効な手段であることを忘れてはいけない。つまり、大学院においては、自分の殻に閉じこもらずに教授陣や友人達との間の「多事争論」を自ら作り出して行く積極性も必要なのである。

最後に、円滑な大学院生活を送るためには、事務的な諸手続きにかんしてつねに責任ある対応を望みたい。大学院も社会の一制度であり、その制度を活用してゆくためには、甘えることなく、求められる諸手続きを期限を守り適切に行ってゆかなければならない。言わずもがなのことだが、念のために付言しておく。

大学院経済学研究科学習指導

一 般 注 意 事 項

学生証（身分証明書）

1. 学生証は、諸君が慶應義塾大学大学院生であることを証明する身分証明書です。同時に慶應義塾大学学生健康保険互助組合員証、および本塾図書館入館票を兼ねています。
2. 学生証は次のような場合に必要となるので、登校の際常に携帯しなければなりません。
 - (1) 本塾教職員の請求があった場合
 - (2) 各種証明書および学割証の交付を受ける場合
 - (3) 各種試験を受験する場合
 - (4) 通学定期券または学生割引乗車券購入の際、およびそれを利用して乗車船し係員の請求があった場合
3. 再交付手続
学生証を紛失したり、汚損した場合は、写真（縦4 cm 横3 cm、カラー光沢仕上げ、最近3ヶ月以内に撮影したもの）1枚を添えて学事センターで再交付を受けてください。新しい学生証は原則、当日発行いたします。ただし、機械のメンテナンス、故障等により当日発行できないこともありますのでご了承ください。
学生証の紛失、裏面シールの紛失については、手数料として2,000円が必要です。
4. 返却
再交付を受けた後、前の学生証が見つかった場合や退学・修了などで離籍した場合はただちに学事センターへ返却しなければなりません。

掲示板

1. 学生諸君への通達事項は、すべて大学院校舎1階の掲示板に掲示されます。毎日機会あるごとに、掲示板に注意してください。掲示に注意しなかったために、諸君自身が不利益を被ることもあります。
なお、他研究科・学部設置科目を履修した場合は、その科目を設置している研究科・学部の掲示板を見てください。諸研究所、各センター設置科目・講座等については共通掲示板に注意してください。
2. 主な掲示事項は、授業の休講・補講・時間割の変更、教室の変更等毎日の授業に直接関係のある緊急通達、各試験の実施要領、学事日程、呼出し等です。休講・補講、呼出しについてはインターネットに繋がるパソコンまたは携帯電話（i-modeのみ）により学事 Web システム（<http://gakuji2.adst.keio.ac.jp/>）においても確認できます。
また、試験の実施要領、各種発表・通達の一部については塾生ページ（<http://www.gakuji.keio.ac.jp/>）において確認できます。

試験・レポート・成績

1. 試験

随時授業時間内に行われます。別途指示がある場合には掲示されることがありますので、掲示板にも留意してください。

なお、学部と併設する修士課程基礎科目については学部に基づき定期試験を行うことがあり、追加試験の対象ともなります。掲示を確認してください。

定期試験に関する注意事項

受験に際しては不正行為のないように、真摯な態度で臨んでください。

答案は必ず提出しなければなりません。持ち帰った場合は不正行為と判断され、処分の対象とされます。

学生証を必ず携帯し、提示してください。

試験当日、万一学生証を携帯しなかった場合は、学事センターで必ず仮学生証（発行当日に限り全キャンパスで有効、図書館入館も可）の交付を受けてください。なお、仮学生証の発行には、手数料500円が必要となります。

学生証または仮学生証を携帯せずに試験教室に入室することは一切認められません。

仮学生証発行手続きにより、試験教室への入室が遅れても試験時間の延長はありません。

答案用紙の担当者および科目名並びに学籍欄の記入事項はすべて略さず正確に記入してください。記入がない場合、成績はつきません。

試験開始後20分までの遅刻の場合は、試験を受験することができます。ただし、遅刻理由が電車遅延等追加試験の対象となるものの場合、当該試験をそのまま受験するのか、それとも追加試験を受験するのかは、本人の判断に依ります。電車遅延等により遅刻をしても試験開始20分以内で入室した場合は追加試験の対象となりません。また、試験時間の延長もありません。

試験開始後の体調不良などの場合で途中退室する場合は、追加試験の対象とはなりません。

2. レポート

レポート提出は、教室および研究室で直接教員に提出する場合と、学事センターに提出する場合があります。学事センターへの提出を指示された場合は、学事センター指定のレポート提出用紙（2枚複写）に必要事項を記入し、添付してください（2枚とも）。レポート提出用紙は学事センター窓口および西校舎1階学部掲示板前に備えてあります。

学事センターレポートボックス受付時間

(1) 授業期間中 月～金曜日…… 8時30分～18時10分

土曜日……… 8時30分～16時30分

授業期間中であっても都合により閉室することがあります。

(2) 休業期間中 月～金曜日…… 8時30分～11時30分、12時30分～16時30分

休業期間中は土曜日の受付は行いません。

3. 学位請求論文（修士論文・博士論文）

履修要項34ページ参照。

4. 成績通知

学業成績表は9月上旬および3月中旬に本人宛に発送します。（ただし、取得した科目の成績が成績証明書に記載されるのは翌年度の4月以降となります。）

諸届

下記事項はすべて学事センターで取り扱います。

1. 休学願・就学届・退学届・国外留学申請

履修要項36ページ参照。

2. 住所変更届（本人・保証人）、保証人変更届、改姓（名）届

各届とも所定の用紙に記入のうえ速やかに学事センターに届け出てください。学生証の記載事項変更も同時に行ってください。なお、郵便および電話による届け出は受け付けません。

必要書類

- ・住所変更届：在学カード
- ・保証人変更届：変更届，在学カード，誓約書（本人・保証人押印），保証人住民票
- ・改姓（名）届：改姓（名）届，在学カード，誓約書（本人・保証人押印），戸籍抄本，学生証再交付願

なお、履修上の連絡、あるいはその他の重要な事柄の処理に際し、これらの変更届が出されない場合は、極めて重大な支障をきたすことがありますので、十分に注意してください。

各種証明書

証明書の発行、申込み、受取、いずれの場合でも学生証が必要です。

在学料等が未納の場合、すべての証明書が発行できません。定期健康診断未受診の場合、学割証が発行できません。

1. 証明書自動発行機で即時発行する証明書（和文）

| 証明書 | 発行開始日 | 発行手数料 (1通あたり) |
|------------|--------------|------------------|
| 在学証明書 | 4月1日 12時30分～ | 200円 |
| 成績証明書 | 4月1日 12時30分～ | 200円 |
| 修了見込証明書 | 5月6日～ | 200円 |
| 修了見込付成績証明書 | 5月6日～ | 400円 |
| 履修科目証明書 | 6月1日～ | 200円 |
| 学割証 | 4月1日 12時30分～ | 無料 |
| 健康診断証明書 | 6月中旬～(年度末まで) | 200円 |

料金は改定されることがあります。

- (1) 稼働時間

学事センター事務室内発行機：学事センター事務取扱時間内

南校舎1階設置発行機：9時～20時 [休日、大学休業日および授業期間外の土曜日は除く]
メンテナンス、故障等により、証明書発行機を停止することがあります。使用する時期や枚数に注意し、あらかじめ早めに準備してください。

- (2) 学割証（JR 各社共通・学校学生生徒旅客運賃割引証：片道 101 km 以上の区間を乗車または

乗船する場合)は1人1年間10枚まで発行。有効期限は発行日から3か月以内(有効期限内でも離籍した場合は無効)。各種学生団体の課外活動に必要な学割証は学事センターに申し出てください。なお、定期健康診断を未受診の場合には、学割証の発行はできません。

- (3) 各種証明書等で厳封を必要とする場合には、学事センターに申し出てください。(自動発行機で発行した証明書は厳封できません。)
- (4) 成績証明書には、本年度取得の成績は春学期取得分も含め次年度4月以降反映されます。
- (5) 健康診断証明書は、6月中旬以降、定期診断受診者を対象に発行されます。なお、奨学金申請等で6月中旬以前に証明書が必要な場合は、保健管理センター三田分室受付に相談してください。

2. 学事センター窓口で即時発行する証明書(英文)

| 証明書 | 発行開始日 | 発行手数料 (1通あたり) |
|-----------|--------------|------------------|
| 英文在学証明書 | 4月1日 12時30分～ | 200円 |
| 英文成績証明書 | 4月1日 12時30分～ | 200円 |
| 英文修了見込証明書 | 5月6日～ | 200円 |

料金は改定されることがあります。

2003年4月以降の入学者は証明書自動発行機で発行できます。その他の学生については従来どおり窓口での発行となります。ただし、2004年4月以降、窓口で一度英文証明書の申請・交付を受ければ、その翌日から証明書自動発行機での発行が可能になります。

3. 学事センター窓口で申し込み、日数を要して発行する証明書・文書

前記以外の証明書・文書等(例:英文履修科目証明書,他大学院受験等のための形式指定の調査書等)の発行に関しては、余裕をもって学事センターで相談のうえ申請してください。なお、交付には和文書類は申請後標準3日、英文書類は申請後標準1週間日数を要します。

学事センターの窓口

1. 学事センター事務取扱時間

- (1) 授業期間中は次のとおり取り扱います。

月～金曜日……8時30分～18時10分

【なお、各学部・研究科に関する相談・問い合わせは、次の時間帯でお願いします。】

8時30分～16時30分

- (2) 休業期間中は次のとおり取り扱います。

月～金曜日……8時30分～11時30分,12時30分～16時30分

土曜,日曜,祝日,義塾が定めた休日および大学事務の休業期間は閉室となります。

事務取扱時間を変更する場合,および事務室の閉室については,掲示等でお知らせします。

2. 窓口業務

- (1) 学籍・成績・履修に関すること
- (2) 授業・試験・レポート等に関すること

- (3) 時間割に関すること
- (4) 休講・補講に関すること
- (5) 追加試験の申込み（一部の修士課程基礎科目）
- (6) 休学願・国外留学申請・退学届・住所変更届・保証人変更届・改姓（名）届等
- (7) 学生証の発行
- (8) 成績証明書・在学証明書等各種証明書の発行（和文はおもに証明書自動発行機）
- (9) 教室に関すること
- (10) 通学証明書の発行

落とし物は学生総合センター学生生活支援窓口が取り扱います。

修士課程修了後および博士課程単位取得退学後の成績証明書等の発行は、塾員センター（北館3階）で行います。ただし、修士課程修了予定者については、3月中の申請方法を学位審査合格者発表時に掲示します。

教員を訪ねる場合

授業のある日に研究室または教員室を訪ねてください。

専門科目担当（三田）専任教員（教授・助教授・専任講師）……研究室（三田研究室棟）

他地区専任教員および塾外からの出講者（講師）……教員室（南校舎2階）

学生総合センター窓口

学生総合センターには、主に課外活動・課外教養・奨学金および学生健康保険互助組合を担当する学生生活支援窓口、就職進路支援を行う就職・進路支援窓口があります。ここでは、学生総合センターの窓口業務について紹介します。

学生生活支援

山食・西校舎学生食堂ホール・北館学生食堂の使用申込み受付

公認学生団体・教職員・OB等が、山食・生協食堂・北館学生食堂をパーティー等で利用したい場合は、学生生活支援窓口の使用申込みをし、予約してください。さらに、予約後1週間以内に学内集会届を提出し、許可を得る必要があります。学内集会届の提出を怠った場合は予約は取り消されますので注意してください。なお、日曜日・祝日は利用できません。

学外行事届の受付

公認学生団体や研究会で、合宿、コンサート、パーティなどの学外行事を行う場合には、その4日前までに届け出てください（学生教育研究災害傷害保険の項参照）。なお、団体割引、減税証明書等の必要があれば申し出てください。合宿等で団体割引が必要な場合についても学生課で受け付けています。

学内における掲示・配布

ポスターやチラシ・パンフレット等を学内で掲示・配布する場合は、学生課に届け出て、場所等の指示を受けることが必要です。

備品使用申請の受付

ステッカー、ワイヤレスマイク、塾旗、水差、椅子、机等を借用したい場合は、使用希望日の4日前までに申請してください。

車両入構申請の受付

塾生の車両入構は認められていませんが、やむを得ず車両入構の必要がある場合は、入構希望日の4日前までに申請してください。

学生ラウンジの使用

南校舎1階の学生ラウンジは、個人での利用ができます。開室時間は8時45分～21時です。室内での飲食はできません。

伝言板および「DENGON」の利用

学生ラウンジ横の黒板および第一校舎南西角の伝言板「DENGON」は、塾生間の連絡用として自由に利用してください。A4用紙1枚のみ掲示可能ですが、必ず伝言者の研究科・学年・氏名・連絡先を明記してください。

その他

学生総合センター「大学生生活懇談会」では見学会、講演会、討論会等の催物を随時行っていますので、積極的に参加してください。また、学生生活支援の窓口には、財団法人大学セミナーハウス、展覧会の招待券・割引券等も置いてあります。

遺失物は学生生活支援の窓口で取り扱っています。

奨学金

学生生活支援窓口において、概ね4月初旬から奨学金案内を配布し、出願受付を行います。

・慶應義塾大学奨学金 [給費]

5月下旬に出願受付を行います。募集日程は西校舎ロビー学生総合センター掲示板に掲示します。

・慶應義塾大学特別奨学金 [給費]

家計支持者の死亡・失職等により家計状況が急変し、経済的に学業の継続が困難になった者を援助することを目的とします。募集日程は西校舎1階中央ホール学生総合センター掲示板に掲示します。

・日本学生支援機構奨学金 [貸費]

4月中旬に出願受付を行います。第一種（無利子）と、1999年度から設置された第二種（きぼう21プラン）（有利子）があります。その他に家計急変者を対象とした緊急採用（第一種）・応急採用（第二種）があります。

・地方公共団体、社・財団法人等の各種奨学金

募集は主に4・5月に行います。募集日程はその都度、西校舎1階中央ホール学生総合センター掲示板に掲示します。

・指定寄付奨学金 [給費]

募集は主に4月に行います。募集日程はその都度、西校舎1階中央ホール学生総合センター掲示板に掲示します。

奨学融資制度 [奨学金付き学費ローン]

学生諸君の学費の調達の手助けになるよう配慮した制度で、学生本人に金融機関が低金利で学費を直接貸し出しする方式です。在学生であれば、誰でも応募することが可能です。在学中の借りに伴う利子は、規程に従い、慶應義塾が奨学金として給付します。

入学年度等により、適用制度が異なりますので、詳細は学生生活支援窓口までお問い合わせください。

学生健康保険互助組合

保険証を提示し、病院や診療所で受診した場合、健康保険が適用された自己負担分について、学生健保から医療費給付が受けられます。給付を受けるための手続きは、医療機関によって異なりますので、以下に従って手続きしてください。なお、給付方法は銀行振込となりますので、口座登録が必要です。

(1) 慶應病院で受診した場合

病院で診察を受ける際、保険証と学生証を提示してください。また「医療給付金振込口座届」を学生生活支援窓口へ提出し、振込口座を登録してください。通院は受診月の翌月20日に、入院は翌々月20日に、給付金が振り込まれます。

(2) 一般病院で受診した場合

学生生活支援窓口においてある「医療費領収証明書」に、病院で1か月ごとの診療内容を記入してもらい、塾生記入欄を各自記入して、学生生活支援窓口へ提出してください。ただし、「学生氏名」「保険点数または保険適用金額」「負担割合」の3点が明示された領収証が発行されている場合は領収証の添付でかまいませんが、必ず「医療費領収証明書」に保険者番号、傷病名等を記入して提出してください。受診月を含め、4か月以内に提出されない場合は無効となります。振込日は証明書を提出した月の翌月20日です。

組合ではこのほか、契約旅館に対する宿泊費補助や、海の家、スキーハウスの開設などを行っています。さらに、日吉塾生会館内にトレーニングルームも設置しています。詳しくは、入学時に配付した「健保の手引き」(学生総合センターにも置いてあります)をご参照ください。

就職・進路支援

就職担当は、就職活動に関するさまざまな情報を収集して提供しています。企業からの求人票・説明会案内をはじめ、会社案内、OB・OG情報などを、南校舎地下1階の就職担当事務室、1階の就職資料室にて、自由な利用に供しています。就職担当のホームページには求人企業一覧やさまざまな説明会案内などを掲載しています。

また就職活動支援の一貫として、10月から2月にかけて多様な専門家等による講演会、就職ガイダンス、公務員志望者のための説明会、OB・OGや内定者によるディスカッションなどを開催しています。こうした催しはビデオテープに収録し、後日貸し出しも行っています。

就職担当は就職活動の進め方を解説した「就職ガイドブック」を作成し、修士1年生全員に配布しています。また皆さんが就職活動をするなかでわからないこと、困ったことがあった場合など、いつでも個別相談に応じています。

就職担当を皆さんの進路決定や就職活動におおいに利用してください。

学生相談室（西校舎地下2階）

学生相談室は、学生生活の中で当面するさまざまな問題や悩みについての個別の相談に応じています。それと共に、小集団の中で自己をみつめることで自己成長を促す「サイコドラマ」や「エンカウンター・グループ」の行事も行っています（このスケジュールは相談室にお問い合わせください）。

相談内容に関しては、それがいかなる種類のものであっても個人の秘密を厳守しますし、すべては来談者とカウンセラーの間のこととして扱われますので、気軽に相談に来てください。

学生総合センター窓口取扱時間

学生生活支援，就職・進路支援

月～金曜日…… 8時30分～17時

都合により閉室することがあります。

土曜日……閉室

学生相談室

月～金曜日…… 9時30分～16時30分

土曜日……閉室

昼休み……11時30分～12時30分

学生教育研究災害傷害保険について

諸君の教育研究活動中の不慮の災害事故補償のために、大学で保険料の全額を負担し、日本国際教育支援協会の「学生教育研究災害傷害保険」に加入しています。

この保険の適用を受ける「教育研究活動中」とは次の場合をいいます。

(1) 正課を受けている間

講義，実験・実習，演習または実技による授業（総称して以下「授業」という）を受けている間をいい、次に掲げる間を含みます。

指導教員の指示に基づき、卒業論文研究または学位論文研究に従事している間。ただし、もっぱら被保険者の私的生活にかかわる場所において、これらに従事している間を除きます。

指導教員の指示に基づき、授業の準備もしくは後片付けを行っている間、または授業を行う場所、大学の図書館・資料室もしくは語学学習施設において研究活動を行っている間。

(2) 学校行事に参加している間

大学の主催する入学式，オリエンテーション，卒業式など教育活動の一環としての各種学校行事に参加している間。

(3) (1)(2)以外で学校施設内にいる間

大学が教育活動のために所有，使用または管理している施設内にいる間。ただし，寄宿舍にいる間，大学が禁じた時間もしくは場所にいる間，大学が禁じた行為を行っている間を除きます。

(4) 学校施設外で大学に届け出た課外活動を行っている間

大学の規則に則った所定の手続きにより，大学の認めた学内学生団体の管理下で行う文化活動または体育活動を行っている間。ただし山岳登はんやハンググライダーなどの危険なスポーツを行っている間を除きます。

保険金は本人（被保険者）の申請に基づき支払われますので，上記活動中に万一事故があった場合は，学生生活支援窓口で相談のうえ，所定の手続きを行ってください。また，本保険の適用が円

滑に行われるため、ゼミ合宿を学外で行う場合、および校内学生団体が学外で活動する場合は、その都度「学外行事届」を提出してください。

その他この保険に関する詳細については、直接学生生活支援窓口で尋ねてください。

任意加入の補償制度について

任意加入の補償制度としては、保険と共済の2つがあり、加入希望の場合は直接それぞれに申し込むかたちになっています。

「学生総合補償」保険は、(株)慶應学術事業会（慶應義塾関連会社）に、「学生総合共済」保険は慶應生活協同組合に、資料請求してください。

連絡先：(株)慶應学術事業会 TEL. 03-3453-6098、慶應生活協同組合 TEL. 045-563-8489

学生カードの提出について

次に従って提出してください。

1. 提出学年

全学年

2. 提出方法

提出日：4月末日まで

提出先：学生総合センター学生生活支援窓口

3. 記入上の注意

学生カードは諸君の在学中に活用する資料ですので必ず提出してください(やむをえず提出日に提出できなかった場合でも、後日必ず学生生活支援窓口に出してください)。

定期健康診断について

定期健康診断は、学校保健法に基づいて全学年を対象に年1回実施しています。

学部学則第179条にも「学生は毎年健康診断を受けなければならない」と定められていますので、必ず受診してください。

未受診の場合には、「体育実技」の履修および健康診断証明書・学割証（学校学生生徒旅客運賃割引証）の発行はできません。

履修申告方法

具体的な履修については、本書熟読のうえ、各自の指導教授又は、各領域の学習指導担当と必ず相談して決定してください。なお、それでも不明な点がある場合は、各領域の学習指導担当者または学事センター経済学研究科係に問い合わせてください。また、履修申告用紙もしくは Web 登録科目一覧は、指導教授の認印を受けたうえで期日までに提出してください。

科目履修を望まない場合は、博士課程の在学期間延長者に限り認められます。履修申告用紙の学籍欄を記入し、指導教授の認印を受けたうえで期日までに提出してください。それ以外の者は、修了に必要な単位を取得していても、修学の意志を示すため必ず 1 科目以上は申告してください。

期日までに申告せず、休学・退学の願い出もなく修学の意志が確認できない時は、退学処分となります。(学則第 161 条)

1 履修申告について

(1) 履修申告方法について

学事 Web システムによる申告を推奨します。学事 Web システムにより登録を行うと、即時にエラーチェックおよび学則による履修判定が行われ、メッセージが表示されます。(科目を選択せずに登録を行うと、前年度までの取得状況による判定が行われ、修了単位に不足している科目が分かります。)ただし、最終的な履修科目およびエラー等の確認は、自宅宛に送付する履修申告科目確認表で行ってください。

履修申告用紙により申告することもできますが、履修申告用紙による申告と学事 Web システムによる申告を併用することはできません。履修するすべての科目をどちらか一方の申告方法により申告してください。

(2) 指導教授の認印について

指導教授印欄に指導教授の認印が必要です。学事 Web システムにより申告を行った場合は、登録科目一覧画面を印刷し、その用紙の所定欄に認印を受け、期日までに提出してください。

なお、修士課程 1 年生の春学期申告時には、学習指導担当より認印を受けてください。

(3) 履修申告日時について

履修申告は、必ず指定された期日に行ってください。

春学期

Web 履修申告システムを利用する場合

申告期間 4月14日(木) 10:00 ~ 16日(土) 13:00

Web による登録科目一覧提出

締切日時: 画面を印刷し指導教授の承認印を得たうえで、4月18日(月) 11:00

場 所: 学事センター前受付ボックス

履修申告用紙を利用する場合

履修申告提出

締切日時：指導教授の承認印を得たうえで、4月15日（金）8：30～18：10

場 所：学事センター前受付ボックス

秋学期（詳細後日掲示）

Web 履修申告システムを利用する場合・履修申告用紙を利用する場合

申告期間

10月上旬（予定）

- (4) 経済学研究科設置の科目については、春学期の履修申告では春学期の科目を申告し、秋学期の履修申告では秋学期の科目を申告してください。

ただし、他研究科および学部設置の通年・秋学期開講科目についてはすべて春学期に申告してください。通年開講の科目を申告した場合、秋学期の申告では時間等の重複がないように注意してください。通年科目と秋学期開講科目が同一の曜日時限で申告された場合は、履修中の通年科目を優先し、秋学期科目の申告を無効とします。

- (5) 原則として、申告後は、履修科目の変更・追加・取消しを認めません。また、閲覧・照会にも応じません。学事 Web システムによる登録後、登録科目一覧画面を印刷、あるいは履修申告用紙をコピーし、時間割とともに控えとして保管してください。

期日までに申告しない場合は、原則として修学の意志がないものとして退学処分にすることとなります（学則第 161 条）。

- (6) 履修申告科目確認表は春学期は5月上旬、秋学期は10月中旬に送付します。確認のうえ、年度末まで大切に保管してください。この確認を怠ったために生じた問題（誤登録による申告漏れ等）については大学側は一切責任を持ちません。確認期間は送付後約1週間（詳しくは掲示により指示します）とし、この期間経過後は確認が終了したものとみなします。

- (7) 時間割は変更することがありますので、掲示を確認のうえ申告してください。なお、履修申告の時点で時間割の定まっていない科目については申告できません。

- (8) 登録されていない授業科目を受験しても一切無効です。単位は取得できません。

- (9) 学則 124 条による留学が認められた者および予定の者の履修申告については、学事センター経済学研究科係まで問い合わせてください。（履修要項36ページ参照）

2 登録番号および分野について

- (1) 授業科目名、担当者名と登録番号（5桁）を十分確認してください。

- (2) 1つの授業科目には1つの登録番号が付いています。

集中講義等で複数の曜日・時限にわたって開講している授業科目についても、1か所の登録番号をマークすることで全ての時限について登録されます。

- (3) 「分野」とは授業科目の種類を番号で表記したものです。履修科目により登録番号を登録するだけで自動的に分野が登録される場合（履修申告用紙では「A欄」と、各自分野を選択しなければなら

ない場合（履修申告用紙では「B欄」）があります。各自分野を選択して申告する際には、履修申告用の2桁のB欄分野を登録します。分野表（26ページ）を確認してください。

〈登録番号のみ申告する科目（履修申告用紙では「A欄」）〉

- ・1997年度以降入学の修士課程在籍者は経済学研究科修士課程の時間割に記載されている科目
- ・博士課程在籍者は経済学研究科博士課程および修士課程の時間割に記載されている科目

〈B欄分野を申告する科目（履修申告用紙では「B欄」）〉

- ・1996年度以前入学の修士課程在籍者は経済学研究科修士課程の時間割に記載されている科目
- ・他研究科，学部および研究所等設置科目

3 学事 Web システムによる履修申告について

詳細は次項「学事 Web システム」を参照してください。

4 履修申告用紙（マークシート）による履修申告について

(1) HB か B の鉛筆を使用してください。誤記・記入漏れがないように、丁寧に記入してください。特に「0」と「1」のマークミス等に注意してください。

(2) 学籍等の記入方法

修士・博士の欄はどちらかに 印をつけ、研究科・学年・氏名・学籍番号および提出日を記入してください。学籍番号は数字で記入するとともに、該当する数字をマークしてください。なお専攻欄の記入は不要です。

(3) A 欄記入上の注意事項

形態欄：その科目の形態（春学期・秋学期）を で囲み、曜日・時限を記入します。

科目名・教員名を記入します。複数の教員が担当する科目は、時間割上段に記載されている教員名を記入します。

登録番号欄：履修する授業科目の時間割表記載の登録番号（5桁）を記入し、マークします。

(4) B 欄記入上の注意事項

形態欄：その科目の形態（春学期・秋学期・通年）を で囲み、曜日・時限を記入します。

科目名・教員名を記入します。

登録番号欄：履修する授業科目の時間割表記載の登録番号（5桁）を記入し、マークします。

分野欄：分野表（26ページ）記載のB欄分野（2桁）を記入し、マークします。

(5) 「無効マーク」（A欄・B欄に共通）にマークすると、その枠内について無効にすることができます。訂正は消しゴムを使用して修正することができますが、跡が残ったり、黒くこすれたりした場合は、「無効マーク」を利用してください。

(6) 履修申告用紙の再交付について

無効マーク欄を使用して無効にしたうえで正しい科目を登録しても訂正し切れない場合は用紙を交換しますので、その履修申告用紙を持参のうえ、学事センターに申し出てください。

交付された履修申告用紙では記入欄が足りない場合も学事センターに申し出てください。

学事 Web システム

1. 学事 Web システム (<http://gakuji2.adst.keio.ac.jp/>) について

学内のパソコンからは無論のこと、自宅などからでもインターネットに繋がるパソコンがあれば、学事 Web システムを利用して履修申告や登録済科目の確認、休講・補講情報の確認などができます。

学事 Web システムを利用するためには ID (学籍番号) と事前に通知したパスワードが必要です。このパスワードは途中変更は可能ですが、離籍するまでの間使用することになります。すべて個人管理になるので忘れないように十分注意してください。

学事 Web システムには以下の 5 つの機能があります。

履修申告

登録済科目確認

休講・補講情報

パスワード変更

受付確認メールの送付先アドレス変更

また、携帯電話 (i-mode のみ) では、休講・補講情報の確認、パスワード変更が可能です。

...注 意...

学事 Web システムでは、4月1日 (金) から休講・補講情報の確認ができます。必ず4月7日 (木) までにログインできることを確認してください。

もし学事 Web システムのパスワードを忘れてしまった場合には、4月7日 (木) 16:30 までに学事センターでパスワード変更申請の手続きを行ってください。(2004年度以前に入学した在学生の初期パスワードは、変更していない場合、2005年3月に送付した学業成績表に印字されています。)

また、学内のパソコンを利用するための Windows パスワードを忘れてしまった場合は、三田インフォメーションテクノロジーセンター (ITC : 大学院校舎地階) で変更申請の手続きを行ってください。

学事 Web システムのユーザー名とパスワードは、ITC 発行の Windows アカウントのユーザー名とパスワードとは異なりますので注意してください。

学事 Web システムのユーザー名 : 学籍番号

Windows アカウントのユーザー名 : m ***** (修士) または d ***** (博士)

2. 学事 Web システム操作上の注意

- ・複数のブラウザを起動して同時にログインしないでください。
- ・学事 Web システムにログインした後は、ブラウザの [戻る] および [進む] ボタンは使用しないでください。誤ってクリックしてしまい画面が正しく表示されなくなった場合には、[更新] ボタンを押してリロードしてください。
- ・学事 Web システムは30分間何も操作しないと自動的に切断されます。インターネットサービスプロバイダーによっては、これよりも短い時間でタイムアウトする場合がありますので注意してください。
- ・ブラウザの [戻る] ボタンや [進む] ボタンを何度も押したり、30分間何も操作をしなかったためタイムアウトになった場合、画面にアクセスエラーと表示されたり、真っ白な画面になる場合があります。そのような場合には、一旦ブラウザを終了し、10秒程度待ってから再度ブラウザを起動し直してください。このような場合、最後に履修申告メイン画面の [登録] ボタンを押した時点のデータ更新までが反映されています。
- ・氏名等に難しい字が使われている場合、画面上にうまく表示できない場合がありますが、システム上問題はありませぬ。
- ・学事 Web システムは、各種設定 (Cookie, SSL, Proxy等) を正しく行わないと、ログインできない場合があります。
- ・各種設定方法、履修エラーメッセージ詳細説明、Q&A (質問回答集)、Web 履修にあたっての注意事項 (地区 / 学部別) については、学事 Web システムのブラウザ用トップページ (http://gakuji2.adst.keio.ac.jp/index_br_top.html) からのリンクを参照してください。

3. 学事 Web システムの操作説明

(1) 履修申告

学事 Web システムを利用する2005年度の履修申告期間と学事 Web システムの URL は以下の通りです。

[春学期履修申告期間] 4月14日(木) 10:00 ~ 16日(土) 13:00
(毎日4:00~5:00はメンテナンスのため稼働を停止します)
[秋学期履修申告期間] 10月上旬(予定)
学事 Web システムの URL <http://gakuji2.adst.keio.ac.jp/>

受付期間中に時間割が変更される場合があります。各キャンパスの掲示板に注意し、必要であれば締め切りまでに再申告(申告の修正)を行ってください。

学事 Web システムトップページ

上記 URL にアクセスし [ブラウザー用] をクリックしてください。履修申告は「Internet Explorer」や「Netscape」などの標準ブラウザーを使用してください。i-mode からは操作できません。



学事 Web システムブラウザー用トップページ

学事 Web システムの操作方法(特にログインできない場合などの解説)や、よくある質問についての回答などは、このページに用意されています。[ログイン画面へ] ボタンをクリックしてください。



ログイン

「ID(学籍番号)」と、事前に通知したパスワードを入力し、[ログイン] ボタンをクリックしてください。画面がうまく表示されない場合は、前述の画面の「ログインできない時は」のリンク先で、ブラウザーの設定方法等を確認してください。

この画面以降ブラウザーの「進む」「戻る」ボタンは使用しないでください。

複数のブラウザーを起動して同時にログインしないでください。



トップメニュー画面

「メールアドレス登録・変更」から、履修登録後に自動送信される受付確認メールの送信先の登録・変更ができます。変更する場合には、新たに登録するメールアドレスを2箇所入力し（再入力欄にも同じものを入力する）、[登録] ボタンをクリックしてください。

【注意】

メールアドレスの登録間違いにより、受付確認メールが届かないケースが多発しています。

学事 Web システムには大学配付のメールアドレス（*****@mita.cc.keio.ac.jp 等）を登録し、個人所有のメールアドレスに送りたい場合は、転送設定を利用してください。

メールアドレスのユーザー名（例：「*****@mita.cc.keio.ac.jp」の*****部分）は変更できません。また、ユーザー名のみ登録しても届きません。

履修申告メイン画面

[履修申告] ボタンをクリック後、[Web による履修申告上の注意] をクリックし、必ず注意文を熟読してください。その後、[履修申告メイン画面へ進む] ボタンをクリックしてください。



科目の選択

(a) と (b) の 2 通りの方法で科目の選択ができます。

(a) 時間割から科目を選択するとき

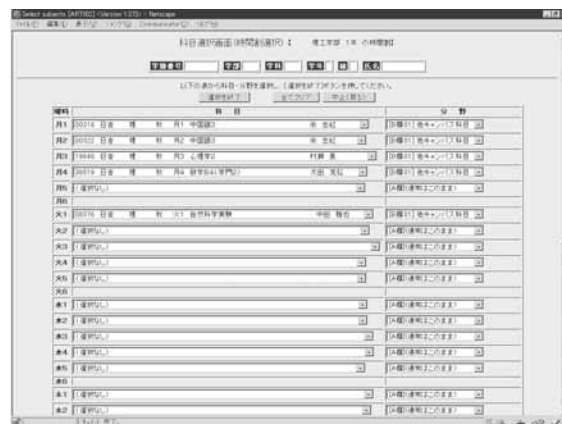
履修申告メイン画面で、[時間割から選択] ボタンの右側のドロップダウンリストから設置学部・学科・学年を選択してから、[時間割から選択] ボタンをクリックしてください（初期設定では、所属する研究科および学年が自動的に指定されています）。

科目選択画面（時間割選択）が表示されますので、曜日時限毎に科目および分野をドロップダウンリストから選択してください。

他学部の科目を履修する場合など、B 欄分野を選択しなければならない場合は前項「履修申告方法」の「2. 登録番号および分野について」（18ページ）および「分野表」（26ページ）をよく読んでください。選択が完了したら、[選択を終了] ボタンをクリックしてください。

(b) 登録番号から科目を選択するとき

[登録番号で選択] ボタンをクリックしてください。科目選択画面（登録番号）が表示されますので、時間割表に記載されている 5 桁の登録番号を入力してください。[科目名を確認] ボタンを押し、科目情報欄に表示される科目名、曜日時限などの情報を確認したうえで、最後に [選択を終了] を押ししてください。



他学部の科目を履修する場合など、B欄分野を選択しなければならない場合は前項「履修申告方法」の「2. 登録番号および分野について」(18ページ)および「分野表」(26ページ)をよく読んでください。選択が完了したら、[選択を終了] ボタンをクリックしてください。

(a) (b) の手順は、連続して行うことができます。同一の曜日時限に春学期と秋学期の科目を一度に選択することはできません。その場合、一度 [選択を終了] を押し、再度時間割または登録番号から科目を選択してください。



選択した科目の確認

で選択した科目が、一覧表示されますので確認してください。ただし、[登録] ボタンを押すまで有効になりません。(「状態」欄に「未登録」と表示されています。)



選択した科目を取り消す場合

の画面から、取り消したい科目の登録 No. の左側にチェックをつけ、[選択の取消] ボタンをクリックしてください。その後、一覧表から削除されたことを確認してください。ただし、[登録] ボタンを押さなければ完全に削除されません。

選択した科目の登録

選択されている科目を確認したら、画面一番下の [登録] ボタンを押してください。
(選択) および (取消) で行った内容はこの [登録] ボタンを押すまで有効になりません。

登録結果表示の確認

[登録] ボタンを押すと、選択した科目について、曜日時限の重複や不足科目等のエラーチェックが行われ、その結果が表示されます。各科目の「エラー」の欄にメッセージが表示されていないか確認してください。(エラーメッセージの詳細については、の「履修申告メイン画面」の STEP 2 の右側にある [エラーの詳細説明] をクリックし、参照してください。)



次に右端の「状態」欄が「登録済」と表示されていることを確認してください。「状態」欄が「保留中」と表示されている場合、エラー科目があるためにすべての科目が未登録です。エラー内容を確認して登録し直してください。「保留中」と表示されている科目は履修申告期間終了後に登録が取り消されます。

さらに、上部の「現在の登録状況」に必要な条件不足・不備等のメッセージが表示されていないか確認してください。不足・不備がある場合は登録し直してください。

この画面をプリントアウトし、指導教授の承認印を得たうえで、期日までに提出してください。

Web による登録科目一覧提出
 締切日時：4月18日(月) 11:00
 場 所：学事センター前受付ボックス

登録内容を変更したい場合は、[履修申告画面へ戻る] ボタンをクリックし、からの手続きを再び行ってください。登録内容がこれで良ければ、[履修申告を終了する] ボタンを押してください。

ここで Web ブラウザーを終了しないでください。(ブラウザーの右上の×印をクリックして閉じないでください。)

受付確認メール

「登録」ボタンを押した後、正常にログアウトする際、で登録されているメールアドレスに受付確認メールが自動送信されます。

でメールアドレスの登録を行っていない場合は、今回の受付確認メールのみの一時的な送信先を指定できる画面が表示されますので、メールアドレスを入力し [指定する] ボタンを押してください。受付確認メールの送信先が表示され、そのアドレス宛に送信されます。メールアドレスの間違いにより受付確認メールが届かないことがあります。入力する際は注意してください。(この場合、メールアドレスは登録されません。)

なお、hotmail (@hotmail.com) のアドレスを指定した場合、受付確認メールが文字化けすることがあります。他のプロバイダーのアドレスを指定するか、大学配付のメールアドレスを指定してください。また、携帯電話のメールアドレスを指定すると正しく送信されない場合がありますので使用を避けてください。

今回のみの一時的な指定を行わず、で登録を行っているメールアドレスに送信する場合は、[指定しない] ボタンを押してください。

ログアウト

[ログアウト] ボタンをクリックして、ログアウトしてください。

(2) 登録済科目確認

履修申告で正しく登録された科目は、4月28日(木)9:00(予定)より、学事 Web システムを利用して再度確認することができます。確認できる日程や詳細などは掲示および塾生ページ (<http://www.gakuji.keio.ac.jp/>) に掲載します。ただし、5月上旬に本人宛送付する「履修申告科目確認表」で必ず最終確認を行ってください。

前述(1)の (トップメニュー画面) までは、同様の操作です。画面上の [登録済科目確認] ボタンを押して、履修申告科目を確認してください。

(3) 休講・補講情報の確認

学事 Web システムから、全キャンパスの休講・補講情報を確認することができます。またこのサービスは、i-mode 対応の携帯電話からも同様に見ることができます。

ただし、公式の情報は科目設置学部・研究科のキャンパスの掲示板とします。休講・補講情報は変更することがありますので、必ず直前に掲示板を確認するようにしてください。

代替講義日の休講は、通常講義と異なり学事 Web システムの休講情報では対応していませんので、塾生ページ (<http://www.gakuji.keio.ac.jp/>) および各キャンパスの掲示板で確認してください。

[ブラウザー編]

(1)の から までを参照して、学事 Web システムにログインしてください。

(1)の の画面 (トップメニュー画面) から [休講補講情報] ボタンをクリックしてください。



| 科目名 | 曜日 | 時間 | 科目名 | 担当者 | 備考 |
|---------------------------|----|-------------|-----------|-------|----|
| 2001-12-10 [1] 経営 英語総合1 | 木 | 11:00-12:00 | 経営 英語総合1 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [2] 経営 英語総合2 | 木 | 12:00-13:00 | 経営 英語総合2 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [3] 経営 英語総合3 | 木 | 13:00-14:00 | 経営 英語総合3 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [4] 経営 英語総合4 | 木 | 14:00-15:00 | 経営 英語総合4 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [5] 経営 英語総合5 | 木 | 15:00-16:00 | 経営 英語総合5 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [6] 経営 英語総合6 | 木 | 16:00-17:00 | 経営 英語総合6 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [7] 経営 英語総合7 | 木 | 17:00-18:00 | 経営 英語総合7 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [8] 経営 英語総合8 | 木 | 18:00-19:00 | 経営 英語総合8 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [9] 経営 英語総合9 | 木 | 19:00-20:00 | 経営 英語総合9 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [10] 経営 英語総合10 | 木 | 20:00-21:00 | 経営 英語総合10 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [11] 経営 英語総合11 | 木 | 21:00-22:00 | 経営 英語総合11 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [12] 経営 英語総合12 | 木 | 22:00-23:00 | 経営 英語総合12 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [13] 経営 英語総合13 | 木 | 23:00-24:00 | 経営 英語総合13 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [14] 経営 英語総合14 | 木 | 24:00-25:00 | 経営 英語総合14 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [15] 経営 英語総合15 | 木 | 25:00-26:00 | 経営 英語総合15 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [16] 経営 英語総合16 | 木 | 26:00-27:00 | 経営 英語総合16 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [17] 経営 英語総合17 | 木 | 27:00-28:00 | 経営 英語総合17 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [18] 経営 英語総合18 | 木 | 28:00-29:00 | 経営 英語総合18 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [19] 経営 英語総合19 | 木 | 29:00-30:00 | 経営 英語総合19 | 藤田 雅之 | |
| 2001-12-10 [20] 経営 英語総合20 | 木 | 30:00-31:00 | 経営 英語総合20 | 藤田 雅之 | |

自分の履修科目，あるいは他キャンパス設置の科目など，検索するキャンパスの対象を選択してください。また，検索期間の選択も同様に行ってください。選択が終了したら，[休講・補講情報を検索する] ボタンをクリックしてください。

休講・補講情報を確認してください。科目名のヘッドに【取消】が入っているのは，休講が取り消された（したがって通常通り実施する）科目となりますので注意してください。確認後は [ログアウト] ボタンをクリックして，ログアウトしてください。

[i-mode 編]

学事 Web システムの URL (<http://gakuji2.adst.keio.ac.jp/>) を携帯電話の i-mode 画面から入力し，(1) の画面上で [i-mode 用] を選択してください。以後，Web 休講補講情報を繰り返して利用する場合には，上記の学事 Web システムの URL を i-mode のブックマーク等に登録しておくとう便利です。（詳しくは使用している携帯電話の説明書で確認してください。）

[サーバー 1] もしくは [サーバー 2] のどちらかを選択してください。選択は任意です。

「学籍番号」と(1)で説明のあった「学事 Web システムパスワード」を入力し，[ログイン] ボタンを押してください。

この画面から [休講情報] [補講情報] ボタンを押してください。

パスワードの変更もこの画面からできますが，ここでは説明を省きます。後述の(4)を参照してください。

自分の履修科目の休講・補講情報，あるいは他キャンパス設置の科目など，検索するキャンパスの対象を選択してください。検索期間は検索日から 1 週間後までの情報が表示されます。休講・補講情報の確認が終了したら，[検索画面へ戻る] ボタンを押してください。

(4) パスワードの変更

初期パスワードは紙面に印刷されているため，セキュリティ上パスワードを変更することを推奨しています。以下の操作で行ってください。

前述(1)の画面（トップメニュー画面）から，[パスワード変更] ボタンをクリックしてください。

「現在のパスワード」を入力し，「新パスワード」を 2 箇所入力後（再入力欄にも同じものを入力する），[パスワード変更] ボタンをクリックしてください。

【注意】

パスワードは英数字半角で入力してください（大文字 / 小文字を区別します）。生年月日や学籍番号など，予想できそうなパスワードは設定しないでください。また変更したパスワードは，必ず忘れないようにしてください。特に，学内のパソコンを利用するための Windows アカウントのパスワードと混同しないよう注意してください。

分野表

修士課程 (1997年度以降入学者)

| 科目名称 | | 分野 | 申告用 B 欄分野 |
|------------------|--------------------|----------|-----------|
| 基礎科目 | ミクロ経済学 | 01-01-01 | |
| | マクロ経済学 | 01-01-02 | |
| | 計量経済学中級 | 01-01-03 | |
| | 数理統計学 | 01-01-04 | |
| | 欧米経済史・日本経済史 | 01-01-05 | |
| | 経済学説・経済思想 | 01-01-06 | |
| | 認定科目 (ミクロ経済学) | 01-01-51 | |
| | 認定科目 (マクロ経済学) | 01-01-52 | |
| | 認定科目 (計量経済学中級) | 01-01-53 | |
| | 認定科目 (数理統計学) | 01-01-54 | |
| | 認定科目 (欧米経済史・日本経済史) | 01-01-55 | |
| 認定科目 (経済学説・経済思想) | 01-01-56 | | |
| 専攻科目 | 分野 1 に属する各科目 | 01-02-01 | |
| | 分野 2 に属する各科目 | 01-02-02 | |
| | 分野 3 に属する各科目 | 01-02-03 | |
| | 分野 4 に属する各科目 | 01-02-04 | |
| | 分野 5 に属する各科目 | 01-02-05 | |
| | 分野 6 に属する各科目 | 01-02-06 | |
| | 分野 7 に属する各科目 | 01-02-07 | |
| | 分野 8 に属する各科目 | 01-02-08 | |
| | 分野 9 に属する各科目 | 01-02-09 | |
| | 分野10に属する各科目 | 01-02-10 | |
| 演習科目 | 01-03-01 | | |
| プロジェクト科目 | 01-04-01 | | |
| 関連科目 (他研究科設置科目) | 01-05-01 | 51 | |
| 自由科目 (学部・研究所科目) | 09-01-01 | 91 | |

修士課程 (1996年度以前入学者)

| 科目名称 | 分野 | 申告用 B 欄分野 |
|-----------|----------|-----------|
| 理論経済学専攻科目 | 01-01-01 | 11 |
| 経済史専攻科目 | 01-02-01 | 21 |
| 経済政策専攻科目 | 01-03-01 | 31 |
| 指定科目 | 01-04-01 | 41 |
| 自由科目 | 09-01-01 | 91 |

博士課程

| 科目名称 | 分野 | 申告用 B 欄分野 |
|----------|----------|-----------|
| 特論科目 | 01-01-01 | |
| 演習科目 | 01-02-01 | |
| プロジェクト科目 | 01-03-01 | |
| 自由科目 | 09-01-01 | 91 |

履 修 要 項

(修士課程・博士課程)

授業構成，諸手続き（休学・留学等），修士・博士学位の申請方法等は，必ず本書で確認の上，不明な点は，学習指導担当または学事センターで確認してください。また，本書で未掲載の部分については掲示で連絡しますので，注意してください。

第1 開講科目と単位数

2005年度（平成17年度）経済学研究科に開講される科目と単位数は次のとおりです。

講義は週1回の半期（春学期または秋学期）科目を原則とします。なお、科目により秋学期の履修は春学期の履修を前提にする科目もあります。講義要綱を参照してください。

修士課程在籍者が博士課程設置科目を履修することはできません。

1. 修士課程設置の科目

(1) 基礎科目

| 科 目 名 | 単 位 | 備 考 |
|-----------------------|-----|----------------------|
| ミ ク ロ 経 済 学 | 2 | ミクロ経済学 |
| マ ク ロ 経 済 学 | 2 | マクロ経済学 |
| 計 量 経 済 学 中 級 | 2 | 計量経済学 |
| 数 理 統 計 学 | 2 | 確率・統計 ⁽¹⁾ |
| 欧 米 経 済 史 ・ 日 本 経 済 史 | 2 | 欧米経済史，日本経済史 |
| 経 済 学 説 ・ 経 済 思 想 | 2 | |

(注) 備考欄に科目名が記載されている科目は、今年度併設されている経済学部設置科目です。

⁽¹⁾ 新井益洋君のみ経済学部設置科目と併設。

(2) 専攻科目

| 分野 | 科 目 名 | 単 位 | 備 考 |
|----|-----------------|-----|--|
| 1 | ミ ク ロ 経 済 学 上 級 | 2 | |
| | マ ク ロ 経 済 学 上 級 | 2 | |
| | 数 理 経 済 学 | 2 | 数理経済学 |
| | 経 済 数 学 | 2 | 解析学 数理経済学特論 [微分方程式論] 数理経済学特論 [確率論] |
| 2 | 計 量 経 済 学 上 級 | 2 | |
| | 応 用 計 量 経 済 学 | 2 | |
| 3 | 経 済 学 史 | 2 | 本年度休講 |
| | 社 会 思 想 | 2 | |
| | 経 済 思 想 | 2 | |
| 4 | 欧 米 経 済 史 | 2 | |
| | 日 本 経 済 史 | 2 | |
| | ア ジ ア 経 済 史 | 2 | |

| | | | |
|----|-----------------|---|----------|
| 5 | 産 業 組 織 論 | 2 | |
| | 労 働 経 済 論 | 2 | |
| | 社 会 政 策 論 | 2 | |
| | 工 業 経 済 論 | 2 | |
| | 農 業 経 済 論 | 2 | |
| 6 | 経 済 政 策 論 | 2 | |
| | 金 融 論 | 2 | |
| | 財 政 論 | 2 | |
| | 公 共 経 済 学 | 2 | |
| | ア ジ ア 経 済 と 日 本 | 2 | アジア経済と日本 |
| 7 | 現 代 日 本 経 済 論 | 2 | |
| | 現 代 資 本 主 義 論 | 2 | |
| 8 | 世 界 経 済 論 | 2 | |
| | 国 際 貿 易 論 | 2 | |
| | 開 発 経 済 論 | 2 | |
| | 国 際 金 融 論 | 2 | |
| 9 | 経 済 地 理 学 | 2 | |
| | 都 市 経 済 論 | 2 | |
| 10 | 環 境 経 済 論 | 2 | |
| | 社 会 史 | 2 | |
| | 人 口 論 | 2 | |

(注) 備考欄に科目名が記載されている科目は、今年度併設されている経済学部設置科目です。

(3) 演習科目

| 科 目 名 | 単 位 | 備 考 |
|----------|-----|-----|
| ミクロ経済学演習 | 2 | |
| マクロ経済学演習 | 2 | |
| 数理経済学演習 | 2 | |
| 経済数学演習 | 2 | |
| 計量経済学演習 | 2 | |
| 経済学史演習 | 2 | |
| 社会思想演習 | 2 | |
| 経済思想演習 | 2 | |
| 経済史演習 | 2 | |
| 古文書演習 | 2 | |
| 産業論演習 | 2 | |
| 産業組織論演習 | 2 | |
| 労働経済論演習 | 2 | |
| 社会政策論演習 | 2 | |
| 経済政策論演習 | 2 | |
| 金融論演習 | 2 | |
| 財政論演習 | 2 | |
| 公共経済学演習 | 2 | |
| 日本経済論演習 | 2 | |
| 国際経済論演習 | 2 | |
| 都市経済論演習 | 2 | |
| 環境経済論演習 | 2 | |
| 社会史演習 | 2 | |
| 人口論演習 | 2 | |
| 産業社会論演習 | 2 | |

(4) プロジェクト科目

| 科 目 名 | 単 位 | 備 考 |
|--------|-----|-------|
| プロジェクト | 2 | 本年度休講 |

成績評語は「P」（合）または「D」（否）の2種類です。

2. 博士課程設置の科目

(1) 特論科目

| 科目名 | 単位 | 備考 |
|------------|----|----|
| ミクロ経済学特論 | 2 | |
| マクロ経済学特論 | 2 | |
| 数理経済学特論 | 2 | |
| 計量経済学特論 | 2 | |
| 経済学史・思想史特論 | 2 | |
| 経済史特論 | 2 | |
| 制度・政策論特論 | 2 | |
| 国際経済論特論 | 2 | |
| 社会・環境論特論 | 2 | |

(2) 演習科目

| 科目名 | 単位 | 備考 |
|------------|----|----|
| ミクロ経済学演習 | 2 | |
| マクロ経済学演習 | 2 | |
| 数理経済学演習 | 2 | |
| 経済数学演習 | 2 | |
| 計量経済学演習 | 2 | |
| 経済学史・思想史演習 | 2 | |
| 経済史演習 | 2 | |
| 制度・政策論演習 | 2 | |
| 国際経済論演習 | 2 | |
| 社会・環境論演習 | 2 | |

(3) プロジェクト科目

| 科目名 | 単位 | 備考 |
|--------|----|-------|
| プロジェクト | 2 | 本年度休講 |

成績評語は「P」（合）または「D」（否）の2種類です。

3. 関連科目（修士課程在籍者のみ）

他研究科設置科目で、指導教授が履修を必要と認める科目については関連科目として履修することができます。関連科目は4単位まで修了の単位に含まれます。

4. 認定科目（修士課程1年生のみ）

修士課程基礎科目は、年度により経済学部設置の基本科目と併設されている場合があります。併設されていた年度に、学部設置科目（基本科目）としてすでに履修し成績が「A」の場合にのみ、基礎科目として認定されます。この場合の修士課程における成績評語は「P」、単位は2単位となります。

ただし、基礎科目として修了に必要な10単位（1科目4単位を限度）には含まれますが、必要最低総単位数30単位には含まれません。（認定科目2単位と同一名称の科目を4単位取得すると合計6単位となりますが、基礎科目として修了に必要な10単位は1科目4単位を限度としますので、超過分の2単位は基礎科目として修了に必要な10単位に含まれません。）

認定科目を申請する場合は、4月12日（火）までに「大学院認定科目申請用紙」（学事センターにて交付）に記入のうえ、成績証明書を持参して学習指導担当と面接し認定を受けた場合は、申請用紙および成績証明書を学事センターに提出してください。なお、認定された科目については履修申告の必要はありません。

| 認定科目 | 認定単位 | 学部の基本科目 | 併設年度 |
|-------------|------|---------|------------------------------|
| ミクロ経済学 | 2 | ミクロ経済学 | 2001・2002（須田伸一君のみ）・2003・2004 |
| | 2 | ミクロ経済学 | 2001～2004 |
| マクロ経済学 | 2 | マクロ経済学 | 2001～2004 |
| | 2 | マクロ経済学 | 2002（前多康男君のみ） |
| 計量経済学 中級 | 2 | 計量経済学 | 2001～2004 |
| 数理統計学 | 2 | 確率・統計 | 2001～2004 |
| 欧米経済史・日本経済史 | 2 | 欧米経済史 | 2001～2004 |
| | 2 | 日本経済史 | 2001～2004 |
| 経済学説・経済思想 | 2 | 経済学史 | 2001 |
| | | 社会思想史 | 2003 |

5. 自由科目

上記以外の科目は自由科目としての履修が認められ、学業成績表にも記載されますが、課程修了に必要な単位には含まれません。

第2 課程修了にいたるまでの要件

1. 修士課程（1997年度以降入学者）（大学院学則第27，28，29，30，109条参照）

2年間以上経済学研究科修士課程に在籍し，経済学研究科が指定する下記～を充足したうえで，合計30単位以上を履修・合格すること。

修了に必要な科目

基礎科目 10単位以上（同一科目4単位を限度）

専攻科目 3分野以上にまたがり10単位以上

演習科目 6単位以上

学位論文（修士論文）の審査及び最終試験に合格すること。

注（1）「関連科目」は合計4単位まで必要最低総単位数（30単位）に含みます。

（2）「プロジェクト科目」「自由科目」「認定科目」は必要最低総単位数（30単位）に含みません。

「認定科目」の単位は，基礎科目10単位に含めることができますが，上記のように修士課程修了の必要最低総単位数（30単位）に算入することはできません。したがって，基礎科目単位に充当した「認定科目」の単位数は，その他の基礎科目か専攻科目または演習科目の単位で充足しなければなりません。

2. 修士課程（1996年度以前入学者）

2年間以上経済学研究科修士課程に在籍し，各自が所属する専攻の開講科目20単位を含む合計30単位以上を履修・合格すること。

学位論文（修士論文）の審査及び最終試験に合格すること。

注（1）1996年度以前入学者に適用された旧学則は1998年3月31日をもって停止しましたが，1999年度以降も在籍する場合には，修士論文審査を除き旧学則で対応します。（1998年度までに取得した科目については旧学則で対応します。）大学院旧学則第27，28，29，30，109条を参照してください。また，今年度の履修科目の申告については，指導教授と相談して決定してください。指導教授または学習指導担当に，履修する科目の該当する（旧）専攻を確認し，その分野を申告してください。

（2）修士論文の提出の手順については，「第4：学位請求論文の提出（34ページ）」を参照してください。

3. 博士課程（大学院学則第35，36，37，109条参照）

3年間以上経済学研究科博士課程に在籍し，合計12単位以上を履修・合格すること。

学位論文（博士論文）の審査及び最終試験に合格すること。

注 上記要件のうち，学位論文の審査および最終試験を除き，所定の教育課程を終えた段階で修了する場合「単位取得退学者」として扱われます。（第6：単位取得退学および在学期間延長（37ページ））

第3 指導教授

- (1) 経済学研究科では、学生は特定の指導教授の指導を受けることを基本とし、その指導教授の指示により、複数の教員の指導を受けられるように指導します。
- (2) 修士課程1年生の指導教授は春学期の間、学習指導担当が担当します。なお、6月17日(金)までに「指導教授登録用紙」を提出してください。これにもとづき春学期末に指導教授を決定します。詳細は掲示します。

第4 学位請求論文の提出

1. 修士学位申請と修士論文の提出

学位規程

修士の学位は、大学院前期博士課程を修了した者に与えられる。(第3条)

第3条の規定に基づき修士学位を申請する者は、学位論文3部を指導教授を通じて当該研究科委員会に提出するものとする。(第7条)

修士学位申請および修士論文提出に関する手順は次のとおりです。

(1) 「修士論文予定題目並びに要旨」の提出(7月22日(金)締切予定)

修士論文を提出しようとする者は、提出予定年度の所定の期日までに提出してください。所定用紙は学事センターにて交付します。詳細は掲示します。なお、この届を提出した後に申請を取り下げる場合は、必ず研究科委員長宛文書をもって学事センターに申し出てください。

(2) 修士論文予備審査(論文報告会)(10~11月)

予備審査実施方法は掲示しますが、詳細は指導教授の指示にしたがってください。

なお、予備審査に合格した者は、経済学研究科博士課程入学試験出願資格が与えられます。

(3) 「修士学位申請書」および「論文題目届」の提出(12月22日(木)締切予定)

所定用紙は学事センターにて交付します。所定の期日までに提出してください。

詳細は掲示します。なお、論文題目届を提出した後は、題目(副題も含む)は一切変更できません。

(4) 修士論文および要旨の提出(1月中・下旬予定)

修士論文(3部)および要旨(5部)を所定の期日までに提出してください。詳細は掲示します。

博士課程に進学を希望する者は、あわせて出願手続が必要です。出願手続については2006年度経済学研究科入学試験要項(6月販売開始予定)を参照してください。

(5) 修士学位審査(3月上旬)

論文審査および面接審査が行われます。論文審査により面接許可者が決定します。面接許可者および修士学位審査合格者はそれぞれ学事センター内の掲示にて発表します。日程等詳細は掲示します。

(6) 修士論文複写許諾(三田メディアセンターからの協力依頼)

三田メディアセンター(図書館)では修士論文を保存し利用に供しています。利用者が修士論文を学術目的のために「複写する」ことに対し、現行の著作権法下では、事前に著作権者からの許諾

を必要としています。

修士論文を学事センターに提出する際に、「修士論文複写に関するお願い」をお渡しします。趣旨に賛同いただける方は「修士論文複写許可回答」に必要事項を記入のうえ、修士論文とともに学事センターに提出してください。なお、今年度の学位授与名簿に記載されなかった場合は、メディアセンターが責任をもって廃棄します。

2. 博士学位の申請

博士論文を提出する場合は、学事センターで提出書類、手続方法について確認してください。

(1) 課程による博士学位（「課程博士」）

〈学位規程〉

博士の学位は、大学院博士課程を修了した者に与えられる。（第4条）

第4条の規定に基づき博士学位を申請する者は、学位申請書に学位論文3部及び所定の書類を添え、指導教授を通じて当該研究科委員会に提出するものとする。（第7条）

課程による博士学位申請および博士論文提出についての条件は以下のとおりです。

課程博士（甲号）の学位を取得しうるのは、入学後6年以内に学位請求論文を提出したものとします。ただし、留学期間については、留学期間の2分の1（最大2年間）を猶予期間として認めます。

後期博士課程正規の在籍期間に「学位論文予定題目および研究計画書」を提出しなければなりません。

学位論文提出の条件

1. 後期博士課程所定の単位を取得済みであること。（大学院学則第35条）
2. 論文提出までに、査読制度のある刊行物に1点以上の既刊あるいは審査を通過した刊行予定の論文があること。あるいは、それに相当する研究成果発表の機会をもったものであること。
3. 以上を助案し、論文指導担当者2名が提出を許可したものであること。
4. 論文提出に際しては、所定の手続きに加え、論文指導担当者の「提出許可書」を添付すること。

(2) 論文による博士学位（「論文博士」）

〈学位規程〉

博士の学位は、研究科委員会の承認を得て学位論文を提出して論文の審査に合格し、かつ大学院博士課程の修了者と同等以上の学識があることを確認（以下「学識の確認」という）された者に与えられる。（第5条）

第5条の規定に基づき博士学位を申請する者は、学位申請書に学位論文3部及び所定の書類を添え、その申請する学位の種類を指定して、学長に提出しなければならない。（第8条）

論文による博士学位申請および博士論文提出についての条件は以下のとおりとします。

審査は、論文審査ならびに面接審査によって行われます。

経済学研究科の後期博士課程を単位取得退学したもので、博士課程入学後6年以上を経過したのものについても、上記と同様の扱いとします。

論文の提出については、経済学研究科委員の「推薦理由書」を必要とします。

論文博士を申請する場合の審査料については、学位規程第9条を参照してください。

3. 学位請求論文体裁について

学位請求論文については三田メディアセンター（図書館）および国立国会図書館（博士論文のみ）に所蔵しますので、下記の体裁に整えてください。なお、資料等の都合で規定の大きさに入らない場合は、これに従って表紙を付けて製本してください。既に公刊されている書物等を学位請求論文とする場合についてはこの限りではありません。

製本について

本文の縦書き・横書きにかかわらず、原則としてA4判縦で製本してください。（縦書きの場合は右綴じ、横書きの場合は左綴じとします。）

製本の表紙の表示は、本文が縦書きの場合は縦書き、横書きの場合は横書きとします。

製本の背文字は、本文の縦書き、横書きにかかわらず縦書きとします。

製本時のレイアウト、表示内容は、裏面の見本を参照してください。

製本は黒表紙で、白文字とします。

製本の業者は指定しません。

第5 休学・留学・退学

1. 休学（学則第125条）

病気その他やむを得ない理由により欠席が長期にわたる場合には休学することができます。

本年度休学希望者は、指導教授と相談のうえ、「休学願」に事由を証する書類（病気の場合は医師の診断書、語学研修等の場合は入学願書の写し等）を添えて、原則として履修申告日までに学事センターに提出してください。履修申告後の休学願提出期限は、春学期は5月31日、秋学期は11月30日です。必要に応じて学習指導担当との面接を指示することがあります。

休学は学期（春学期は4月1日から9月21日、秋学期は9月22日から3月31日）を単位として許可し、休学期間は修了に必要な在学年数に算入しません。

休学が次の学期におよぶ場合は、改めて許可を得なければなりません。

休学期間が終了した場合は、速やかに就学届を提出しなければなりません。なお、病気を理由に休学していた場合はあわせて医師の診断書の提出が必要です。

なお、学費については休学期間中も同額となります。ただし、病気による休学が長期にわたる場合は減免されることがあります。学生総合センター-学生生活支援窓口にご相談してください。

2. 留 学 (学則第 124 条)

研究科委員会が教育上有益と認めるときは、休学することなく外国の大学の大学院に留学することを許可することがあります。

留学希望者は、指導教授と相談のうえ、あらかじめ学事センターで相談・確認し、遅くとも出発の1ヶ月前には「国外留学申請書」を提出してください。必要に応じて学習指導担当との面接を指示することがあります。

留学は1回の申請につき1年を限度とし、延長する場合は全留学期間3年まで許可されます。また、留学期間が3年を超えて更に継続する場合は休学とします。この場合は、許可された留学期間の残りの期間について休学願を提出しなければなりません。その際も早目に学事センターで手続き等の詳細を確認してください。

留学した期間は、1年を限度として修了に必要な在学年数に算入することができますので、希望する場合は学事センターに申し出てください。なお、申し出がない場合は在学年数に算入しません。

留学の期間が終了した場合は、速やかに就学届を提出しなければなりません。

なお、学費については留学期間中も同額となります。ただし、留学の延長が許可された場合、学費が減免されることがあります。

3. 退 学 (学則第 126 条)

病気その他の事由により退学したい者は、指導教授と相談のうえ、速やかに「退学届」に学生証を添えて学事センターに提出してください。

4. 退学処分 (学則第 128 条・第 161 条)

(1) 修士課程において4年、後期博士課程において6年の在学最長年限を超える者は学則第128条により退学処分となります。ただし、休学期間は在学年数に算入しません。

(2) 大学の学則もしくは諸規律に違反したと認められた場合、履修申告を期日までに提出せず休学・退学の願い出もなく修学の意志が確認できない場合などには学則第161条により退学処分となります。

5. 注意事項

経済学研究科では、学年毎の進級条件を設けていませんので、休学または留学していても学年は年度毎に最高学年（修士2年、博士3年）まで加算されます。

第 6 単位取得退学および在学期間延長（博士課程在籍者）

以下の取扱いについては巻末諸規程抜粋を合わせて参照してください。

1. 単位取得退学

博士課程修了に必要な単位を取得し、規定の教育課程期間（3年）を満了した場合、単位取得退学者として扱われます。2月28日までに「単位取得退学届」を学事センターに提出してください。詳細

は掲示します。

年度の途中で単位取得退学を希望する場合は「退学届」を提出し、その旨申し出てください。

課程博士（第4の2参照）は原則として博士課程在学中に論文を提出し合格した case ですが、入学後6年以内に提出された博士学位請求論文についてのみ、課程博士（甲）としての申請を認めます。ただし、留学期間については、留学期間の2分の1（最大2年間）を猶予期間として認めます。なお、課程博士として学位申請するためには、博士課程の正規の在籍期間に「学位論文予定題目および研究計画書」を学事センターに提出してください。ただし、提出締切は入学後3年目の2月28日までとします。

2. 在学期間延長許可願

3年間の在学中に博士課程修了に必要な単位を取得した者で、博士論文作成にまだ時間を要する場合、1年を単位として在学最長年限を超えない範囲（3回限度）で在学を許可することがあります。2月28日までに指導教授の承認を得たうえで「在学期間延長許可願」を学事センターに提出しなければなりません。詳細は掲示します。

| | | |
|------|-------|------------------------|
| 関連規程 | 1 - 1 | 学位規程 |
| | 1 - 2 | 学位の授与に関する内規 |
| | 4 - 2 | 大学院在学期間延長者取扱い内規 |
| | 4 - 3 | 大学院在学期間延長者の学費に関する取扱い内規 |

3. 単位取得退学後のメディアセンターの利用

3年以内に博士論文を提出する目処がある場合に限り、三田メディアセンターの図書貸出を受けることができる「塾員貸出券」（有料）を発行しています。詳細は三田メディアセンター1階メインカウンターまでお尋ねください。

有効期間：申込日より6ヶ月もしくは1年

サービス範囲：三田メディアセンターに関しては大学院生と同等の貸出規則を適用する。

日吉、理工学、湘南藤沢の各メディアセンター、白楽サテライトライブラリーへの入館・閲覧が可能。

他大学図書館への紹介状の発行。

修士課程設置科目講義要綱

おおむね下記のように構成されています。

| 学則に示される科目名（具体的な科目名）*1 | 担当者名 |
|-----------------------|------|
| 1. 授業形態*2 | |
| 2. 当科目の目標・意義・方法 | } |
| 3. 授業内容 | |
| 4. テキスト | |
| 5. リーディング・リスト | |
| | |

*1 : () 内の記載がないもの、および項目の記載のないものはそれぞれ省略されています。

*2 : 本書作成後に変更される場合がありますので、時間割及び掲示を参照してください。

注 : 同一名称の科目については、担当者名五十音順で並べられています。

基礎科目

ミクロ経済学

教授 長 名 寛 明

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

ミクロ経済学における規範的分析に重点を置いて講義する。この講義は経済学部設置「ミクロ経済学Ⅱ」の前半部分（春学期）に対応する。

授業内容：

1. 競争市場の効率性
2. 市場の欠陥

成績評価はレポートに基づく。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

講義概要を配布し、その中で参考文献を指示する。

ミクロ経済学

教授 長 名 寛 明

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

ミクロ経済学における規範的分析に重点を置いて講義する。この講義は経済学部設置「ミクロ経済学Ⅱ」の後半部分（秋学期）に対応する。

授業内容：

3. 厚生基準と社会的厚生関数
4. 経済活動の誘因
5. 資源配分機構の情報の効率性

成績評価はレポートに基づく。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

講義概要を配布し、その中で参考文献を指示する。

ミクロ経済学

教授 須 田 伸 一

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

ミクロ経済学は、個々の経済主体の市場活動を通じて、資源配分決定の仕組みについて分析する学問である。これは価格機構の役割について分析することに他

ならない。この科目では、学部で 1 年間ミクロ経済学を学んだ学生を想定して講義を進める。

授業内容：

1. 消費者行動
2. 生産者行動
3. 不確実性下の経済行動

リーディング・リスト：

- ・奥野正寛・鈴木興太郎『ミクロ経済学Ⅰ，Ⅱ』岩波書店，1985 年，1988 年
- ・西村和雄『ミクロ経済学』東洋経済新報社，1990 年

ミクロ経済学

教授 須 田 伸 一

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

ミクロ経済学は、個々の経済主体の市場活動を通じて、資源配分決定の仕組みについて分析する学問である。これは価格機構の役割について分析することに他ならない。この科目では、学部で 1 年間ミクロ経済学を学んだ学生を想定して講義を進める。なお、この科目は春学期に開講される「ミクロ経済学」の内容を前提としている。

授業内容：

1. 完全競争市場
2. 厚生経済学の基本定理
3. 通時的経済モデル

リーディング・リスト：

- ・奥野正寛・鈴木興太郎『ミクロ経済学Ⅰ，Ⅱ』岩波書店，1985 年，1988 年
- ・西村和雄『ミクロ経済学』東洋経済新報社，1990 年

ミクロ経済学

助教授 玉 田 康 成

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

本講義では、ミクロ経済学の基本的内容について、理論的側面に重点を置いて講義を行う。具体的には、個別の経済主体（消費者・企業）の市場における意思決定問題を理論的に分析する。また、不確実性下での意思決定についても詳しく議論する。本講義の内容と分析手法は、あらゆる（応用）ミクロ経済分析の根幹をなすものであり、経済学を学ぶ上で欠かすことのできないものである。本講義は初級のミクロ経済学の学習を想定している。また、講義内容は学部「ミクロ経済学Ⅰ」と同じである。

授業内容：

1. 消費者行動の理論
2. 企業行動の理論
3. 不確実性下の意思決定（期待効用理論）

成績評価方法：

- ・数回の宿題（20%）
- ・春学期末試験（80%）

リーディング・リスト：

- ・奥野正寛・鈴木興太郎『ミクロ経済学Ⅰ，Ⅱ』岩波書店，1985年，1988年
- ・西村和雄『ミクロ経済学』東洋経済新報社，1990年
- ・Hal R. Varian, *Microeconomic Analysis*, 3rd edition, Norton, 1992
- ・Geoffrey A. Jehle and Philip J. Reny, *Advanced Microeconomic Theory*, 2nd edition, Addison-Wesley, 2001

ミクロ経済学

助教授 玉田 康 成

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

本講義では、ミクロ経済学の基本的内容について、理論的側面に重点を置いて講義を行う。具体的には、市場での競争均衡とその効率性や、一般均衡理論の枠組みを用いたトピックについて厳密な議論を行う。本講義の内容と分析手法は、あらゆる（応用）ミクロ経済分析の根幹をなすものであり、経済学を学ぶ上で欠かすことのできないものである。本講義は初級のミクロ経済学の学習を想定している。また、講義内容は学部「ミクロ経済学Ⅰ」と同じである。

授業内容：

1. 競争市場と均衡，および余剰分析（部分均衡分析）
2. 完全競争均衡の効率性：厚生経済学の基本定理（一般均衡分析）
3. 一般均衡分析の拡張 1：通時的な意思決定と先物市場
4. 一般均衡分析の拡張 2：不確実性

成績評価方法：

- ・数回の宿題（20%）
- ・秋学期末試験（80%）

リーディング・リスト：

- ・奥野正寛・鈴木興太郎『ミクロ経済学Ⅰ，Ⅱ』岩波書店，1985年，1988年
- ・西村和雄『ミクロ経済学』東洋経済新報社，1990年

- ・Hal R. Varian, *Microeconomic Analysis*, 3rd edition, Norton, 1992
- ・Geoffrey A. Jehle and Philip J. Reny, *Advanced Microeconomic Theory*, 2nd edition, Addison-Wesley, 2001

マクロ経済学

教授 尾崎 裕 之

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

マクロ経済学は、「集計された」経済変数について、その水準、動向、他のそれとの関係、などを明らかにする経済学の一分野である。この講義では、その分析に用いられる手法に焦点を当てて解説を行うが、それによって、マクロ経済学という「方法」を参加者が習得する事を本講義の目的としたい。講義を通して、「経済学的直観」を生かしつつ、それを的確に表現する術を身につけて欲しい。

授業内容：

1. 単純な一般均衡マクロモデル
2. 非線型連立方程式の理論
3. 新しいマクロ経済学とそのミクロ的基礎
4. マクロ動学

「1. 単純な一般均衡マクロモデル」で貨幣が中立的となる非常に単純なマクロモデルを考察した後、「2. 非線型連立方程式の理論」では、線形連立方程式の解法、微分による線形近似、陰関数定理、などの若干の数学的準備を経て、非線型連立方程式の解法を解説する。その「応用」として、いわゆる「IS-LM 分析」にも触れる。「3. 新しいマクロ経済学とそのミクロ的基礎」では、「2.」の手法を用いる分析に代わるものとしての、「ルーカス革命」以降のマクロ経済分析の手法を詳しく解説する。本講義の中心的部分である。特に、経済主体の「合理性」、および、経済の「均衡」という 2 つの概念を中心に、最適化問題の解法をも含めて解説する。「4. マクロ動学」では、「3.」の手法に基づく動学的マクロ均衡モデルや最適経済成長モデルを説明する予定であるが、講義の進捗状況によっては割愛する事も有り得る。

テキスト：

講義ノートを用いる。

マクロ経済学

講師 酒井 良 清

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

マクロ経済現象を分析するための基礎知識を解説する。現実には発生している経済現象をモデル解析する手段を提示する。

授業内容：

テキストにあげた『新しい金融理論』を基に、金融取引のミクロ的基礎から金融システムの設計に至るまでの考え方を説明する。現代のマクロ経済学の議論は、ゲーム理論、情報の経済学を基礎としているので、そうした知識の入門的解説も行うつもりである。

テキスト：

- ・酒井良清・前多康男『新しい金融理論』有斐閣、2003年

リーディング・リスト：

- ・酒井良清・鹿野嘉昭『金融システム〔改訂版〕』有斐閣、2000年
- ・酒井良清・前多康男『金融システムの経済学』東洋経済新報社、2004年

マクロ経済学 (1) 月曜日 1 時限 (2) 金曜日 1 時限

助教授 白井 義昌

授業形態：春学期 2 単位・講義〔月曜日 1 時限・金曜日 1 時限いずれも履修しなければなりません。〕

目標・意義・方法：

マクロ経済学の基本的知識を身につける。

授業内容：

教科書にそって講義を行う。毎週の宿題提出と小テスト、そして中間および期末試験の合計によって成績評価を行う。詳しくは、<http://www.econ.keio.ac.jp/staff/yshirai/macrol/>を見よ。

テキスト：

- ・Abel and Bernanke, *Macroeconomics, 5th edition*, Addison-Wesley

計量経済学 中級

助教授 河井 啓希

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

計量経済学の基礎的な理論を講義する。この授業ではテキストで紹介されている様々な分析方法の手順を単に学ぶのではなく、(1) その理論的な背景や根拠について統計学的な知識を補足しながら納得できるようにする、(2) 経済分析にどのように応用することができるのかを知る、(3) PC (ソフトは EViews か LIMDEP) を使った実習を通じて自分で分析ができ

るようにする、点に特徴がある。予備知識としては統計学、微分積分、行列の知識、さらには「計量経済学概論」、「計量経済学 I」の内容を前提とする。計量ソフトについては知識がなくとも、この時間で習得できるよう工夫する。

授業内容：

1. Introduction：経済分析における統計的方法 (1 回)
2. 古典的回帰モデル：実験室の仮定 (5 回)
最小 2 乗法とその統計的性質、最尤法とその統計的性質、仮説検定、モデルの評価
3. 一般化最小 2 乗法 (4 回)
分散不均一性の問題、自己相関の問題
4. 操作変数法 (2 回)
5. その他のトピック (1 回)

テキスト：

- ・William H. Greene, *Econometric Analysis 5th ed. /ISE*, Prentice Hall, IE, 2003
- ・松浦克己、コリン・マッケンジー『EViews 5.0 による計量経済学入門分析 (仮題)』東洋経済新報社、2005年

リーディングリスト：

- ・蓑谷千風彦『計量経済学の理論と応用』日本評論社
- ・Jeffrey M. Wooldridge, *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT press, 2001
- ・Paul A. Ruud *An Introduction to Classical Econometrics Theory*, Oxford University Press, 2000
- ・William H. Greene, *Econometric Analysis 5th ed./ISE*, Prentice Hall, IE, 2003
- ・滝川好夫・前田洋樹『EViews での計量経済学入門』日本評論社、2004年

計量経済学 中級

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

この授業では普通の回帰分析で対応できない制限された従属変数と離散型従属変数を取り上げる。ミクロデータを分析すると、このような変数に頻繁に直面する。私達が観測できるデータはすべて連続型変数ではなく、消費者又は企業又は国がある行動 (例えば、消費者の場合、仕事するかしないか、企業の場合、海外進出するかどうか) の観測できる結果は複数 (極端の場合、二つ) のケースのみがある。ミクロ経済学では、企業の利潤を最大化する場合又は消費者の効用を

最大化する場合、内点解 (interior solution) を中心に議論する。もちろん、ある財の需要量又は消費支出は非負であるが、実際のデータをみると、ある財を全く購入しない (端点解 [corner solution]) 消費者もいる。このようなデータの性質を無視すると、大変なことになる場合がある。この授業では、バランスをとれた形で、経済理論モデルと計量モデルとのつながり、この変わった従属変数の問題点・解決点、や実際のデータの分析を行う。取り上げる実例として、女性が働くかどうか、企業が持っている特許数、や貸金関数などがある。この授業では EViews5.0 という最新の計量ソフトを用いてパソコンによる演習を行うが、EViews に関する予備知識は全く必要としない。

春学期河井啓希君担当「計量経済学中級」と併せて履修することが望ましい。

テキスト :

- ・ Greene, W.H., *Econometric Analysis*, 5th edition, Prentice Hall, Upper Saddle River, NJ, 2003

参考書 :

- ・ Wooldridge, J.M., *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press, Cambridge, MA, 2002

授業計画 :

1. 離散型確率変数、最尤法やモーメント法の復習
2. 二項選択の問題 I (プロビットとロジットモデル)
3. 二項選択の問題 II (プロビットとロジットモデル)
4. EViews による分析 (プロビット)
5. Tobit モデル I
6. Tobit モデル II
7. EViews による分析 (トビットモデル)
8. カウントデータの分析 I
9. カウントデータの分析 II
10. EViews による分析 (カウントデータモデル)
11. サンプル選択問題 I
12. サンプル選択問題 II
13. EViews による分析 (サンプル選択問題)

履修者へのコメント :

実際のマイクロデータ分析に興味があれば是非履修してください。この授業の難点も一つはどうしても積分をある程度利用する必要がある。履修する前に積分について復習していただきたい。

成績評価方法 :

EViews による実証分析に関する宿題と期末試験に

よって決定する。

質問・相談 :

気軽に mckenzie@econ.keio.ac.jp に問い合わせてください。

数理統計学

産業研究所教授 新井 益 洋

授業形態 : 春学期 2 単位・講義および演習

目標・意義・方法 :

観察によって得られたデータをどのように整理して簡単な知識の形にまとめ、その解釈を助ける統計的手法は「記述統計」と呼ばれる。また、観察データの背景に研究目的あるいは仮説としての母集団を想定し、観察データはこの仮説母集団からの無作為標本と見なし、この標本から母集団特性を認識する統計的手法を「推測統計」と呼ぶ。統計学の目的は集団の規則性の探究であるが、この目的のためには、前者は多くの場面で限界を生じ、後者の新しい統計理論を要請し、これを数学的に整理したものが数理統計学である。

数理統計学は観測されたデータが、何らかの確率的法則にしたがう確率変数の 1 つの実現値であると見なすことによって、これら进行分析する方法を与える。すなわち、現実の対象に対して 1 つの確率モデルを想定し、それに基づいてデータを分析する方法である。したがって、数理統計学の方法を有効に適用できるか否かは、想定された確率モデルが現実を適切に表現しているか否かにかかっている。

想定されるモデルがパラメタと呼ばれる未知の要素を含んでおり、確率分布を完全には決定していない。そして、偶然性を含むデータを通して必然的な法則性を知ることは、未知の部分を含む確率分布にしたがう確率変数の実現値から、その分布を決定する確率法則を知ることである。これが数理統計学の方法である。

以上のことを踏まえ、計量経済学や理論専攻をする者にとって最小限必要と思われる内容を講義形式で授業を行う。また、学んだ内容の理解の確認およびその内容をより深めるために、演習を充実させていく。

授業内容 :

春学期の内容は以下の通りとし、後半を秋学期に継続する。確率/確率変数/分布関数/密度関数/確率法則

テキスト :

- ・ Harold J.Larson, *Introduction to Probability Theory And Statistical Inference*, 3rd edition, JOHN WILEY & SONS

数理統計学

産業研究所教授 新井 益 洋

授業形態：秋学期 2 単位・講義および演習

目標・意義・方法：

春学期「数理統計学」の内容についての知識は十分あるものとする。授業形式は春学期「数理統計学」と同じである。

授業内容：

講義の内容は以下の通りとする。結合分布／記述統計／推測統計／パラメタの推定／仮説の検定

テキスト：

- ・Harold J. Larson, *Introduction to Probability Theory And Statistical Inference, 3rd edition*, JOHN WILEY & SONS

数理統計学

助教授 中 妻 照 雄

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

春学期の講義では確率論の基礎を学ぶ。確率論は数理統計学に理論的基礎を与えるのみならず、理論経済学においてもモデル構築のツールとして重要な役割を果たしている。特に本講義では、(1) 学部で習った確率に関する様々な諸概念（確率、確率変数、期待値など）を測度論の観点から見直し、(2) 統計学における大標本理論の基礎をなす大数の法則と中心極限定理を理解することを目指す。成績は出席（30%）、宿題（30%）および学期末の筆記試験（40%）によって決定される。

授業内容：

1. 分布関数
2. 確率測度
3. 確率変数と期待値
4. 様々な収束概念
5. 大数の法則
6. 特性関数
7. 中心極限定理

テキスト：

- ・Chung, Kai Lai, *A Course in Probability Theory, 3rd ed.*, Academic Press, 2001

リーディング・リスト：

- ・Capinski, M., and E.Kopp, *Measure, Integral and Probability*, Springer-Verlag, 1999
(重要な定理とその証明が簡潔にまとめられている。練習問題が豊富であり、解答も巻末に付いている。)

- ・Billingsley, P., *Probability and Measure, 3rd ed.*, Wiley, 1995

(測度論に基づく確率論の代表的な教科書。)

- ・Davidson, J., *Stochastic Limit Theory*, Oxford University Press, 1994

(計量経済学者向けの漸近理論の教科書。確率過程に関する記述が充実している。)

- ・Feller, W., *An Introduction to Probability Theory and Its Applications, Vol. 1 (3rd ed.) and Vol. 2 (2nd ed.)*, Wiley, 1968 and 1971

(かなり包括的な確率論の教科書。基本的に辞書代わり。)

数理統計学

助教授 中 妻 照 雄

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

秋学期の講義では、春学期の授業内容を踏まえて統計分析の理論と応用を学ぶ。特に、(1) 統計的決定理論の枠組みでの推定法と(2) ネイマン-ピアソンの仮説検定を中心に学習する。そして、近年目覚ましい発展を遂げているベイズ法、ノンパラメトリック法、ブートストラップ法についても解説する。成績は出席（30%）、宿題（30%）および学期末の筆記試験（40%）によって決定される。

授業内容：

1. 統計的決定理論
2. 十分統計量
3. 推定論
4. 検定論
5. ベイズ法
6. ノンパラメトリック法
7. ブートストラップ法

テキスト：

竹村彰通『現代数理統計学』創文社、1991年

リーディング・リスト：

- ・Berger, J. O., *Statistical Decision Theory and Bayesian Analysis, 2nd ed.*, Springer-Verlag, 1985
(ベイズ統計学の本だが、統計的決定理論の記述も充実している。)
- ・Efron, B., and R. J. Tibshirani, *An Introduction to the Bootstrap*, Chapman & Hall, 1993
(ブートストラップ法の教科書。)
- ・Lehmann, E. L., *Testing Statistical Hypotheses, 2nd ed.*, Springer-Verlag, 1986

(検定論の古典的教科書。)

・ Lehmann, E. L., and G. Casella, *Theory of Point Estimation, 2nd ed.*, Springer-Verlag, 1998

(推定論の古典的教科書の改訂版。)

・ Mood, A. M., F. A. Graybill, D. C. Boes, *Introduction to the Theory of Statistics, 3rd ed.*, McGraw-Hill, 1974 (一世代前の統計学の教科書だが、よくまとまっている。)

欧米経済史・日本経済史

(1) 月曜日 3 時限 (2) 月曜日 4 時限

助教授 飯田 恭

授業形態：秋学期 2 単位・講義 [月曜 3・4 時限いずれも履修しなければなりません]

目標・意義・方法：

古代から近代に至るヨーロッパの社会経済史について、「農村」を中心に考察する。ヨーロッパの史的発展の世界史における特異性と、その地域的多様性の根源を、農村史の中に探求することを主たる目標とした。具体的な講義内容はおよそ以下の通りである。

I. 序論

1. 本講義の課題
2. 研究史と本講義の基礎視角
 2. 1 発展段階の理論
 2. 2 農業発展の「二つの道」(アメリカ型・ロシア型) ないし「ドイツの特殊な道」
 2. 3 「ヨーロッパの特殊な道」(西欧・中欧と東欧との比較)

II. 古代農村の概観

1. 農業の発達と母系制・父系制
2. 古代ローマと古ゲルマン

III. 中世・近世の農村 (5~18 世紀)

1. 西欧・中欧：封建的農業発展
 1. 1 封建的農業制度の構造
 1. 1. 1 領主制
 1. 1. 2 村落共同体 (含：ヨーロッパ農業の自然的基礎)
 1. 1. 3 農民世帯 = 「西洋家族」：夫婦中心の家族，新居制，相続・隠居制，奉公人制
 1. 2 封建的農業制度の歴史
 1. 2. 1 中世初期における封建的農業制度の生成
 1. 2. 2 中世盛期の農業・人口発展
 1. 2. 3 中世後期の危機

1. 2. 4 近世ヨーロッパ農業の二元性：Grundherrschaft と Gutsherrschaft

1. 2. 5 相続制度の分布：“the egalitarian and lineal extreme” と “the préciput and household extreme”

1. 3 封建的農業制度の特質

1. 3. 1 農村階層分化：土地商品化以前の「階級社会」

1. 3. 2 土地保有許否の基準：家系（世襲性）の維持か，土地（経営）の維持か？

2. 東欧（ロシア）の農業発展：西欧・中欧との対比

2. 1 農奴制の成立と展開

2. 2 ミール共同体：土地割替慣行の成立と展開

2. 3 農民世帯：父系制，財産共有，養子慣行など

3. 西欧・中欧と東欧との比較

3. 1 「近代化」への含意

3. 2 「資本主義化」への含意

IV. 近代の農村 (18 世紀後半以降)

1. 西欧・中欧における農民解放：農業における自由と個人主義

1. 1 「農民解放」の概念

1. 2 イギリスの場合

1. 3 フランスの場合

1. 4 ドイツの場合

2. 東欧における農業進化：ロシア農村の共産主義化

V. 補論：ヨーロッパと日本

テキスト：

特に定めない。

リーディング・リスト：

講義で一覧表を配布するほか，可能な限り三田メディアセンター（図書館）リザーブブックのコーナーに陳列する。

欧米経済史・日本経済史

名誉教授 岡田 泰 男

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

アメリカ経済史を講義する。

授業内容：

1. 発展の概観
2. 人口と資源
3. 南部と北部
4. 工業化の道

5. 資本と企業

以上のトピックを扱う。

テキスト：

・岡田泰男『アメリカ経済史』慶應義塾大学出版会

欧米経済史・日本経済史

名誉教授 岡田 泰 男

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

アメリカ経済史を講義する。

授業内容：

6. 労働者と移民
7. 女性の役割
8. 農民のゆくえ
9. 都市の成長
10. 政府と経済
11. 国際経済

以上のトピックを扱う。

テキスト：

・岡田泰男『アメリカ経済史』慶應義塾大学出版会

欧米経済史・日本経済史

(1) 火曜日 1 時限 (2) 火曜日 2 時限

教授 杉山 伸也

授業形態：春学期 2 単位・講義 [火曜日 1・2 時限いずれも履修しなければなりません。]

目標・意義・方法：

本講義では、17 世紀の徳川幕府成立前後の時期から 1970 年代まで約 400 年にわたる日本経済の変化をマクロ的に概観する。講義では、とくに日本の経済発展の国際的・国内的環境と発展のメカニズムの解明に重点をおき、民間経済の動向とともに、政府の対外政策、財政・金融政策、産業政策について考察する。

この授業は Web 上で配信された講義の予習を前提とするもので、実際の授業では、特定のテーマに関する講義、グループ・ディスカッションおよびグループ・プレゼンテーション、ビデオ鑑賞を行なう。

授業内容：

講義は、以下のテーマにそって、最近の論争も紹介しながらすすめる。なお、授業のレジュメは、ホームページで公開している。

- (1) 日本経済史へのアプローチ：最近の研究動向
- (2) 徳川期の経済システムと「鎖国」体制
- (3) 徳川幕府の財政・経済政策：17～18 世紀前半期の政治と経済

- (4) 徳川期の農業発展と商業的農業の展開
- (5) 徳川期における市場経済化の進展
- (6) 徳川社会の崩壊：19 世紀前半期の政治と経済
- (7) 幕末「開港」の国際的背景と経済的影響
- (8) 明治初期の財政・経済政策：「由利財政」から「大隈財政」へ
- (9) 明治政府の工業化政策
- (10) 1870 年代の政治と経済：「大隈財政」から「松方財政」へ
- (11) 1880 年代の政治と経済：「松方財政」と「企業勃興」期へ
- (12) 「日清戦後経営」と条約改正
- (13) 「日露戦後経営」と国際収支の悪化
- (14) 日清・日露戦後経営期の日本経済
- (15) 日本の「公式」「非公式」帝国：台湾と朝鮮の植民地化
- (16) 第一次世界大戦と日本経済
- (17) 大震災から金融恐慌へ：1920 年代の日本経済
- (18) 「井上財政」と世界恐慌
- (19) 「高橋財政」と 1930 年代の日本経済
- (20) 1930 年代後半期の日本経済：政府と民間企業
- (21) 「準戦時体制」「戦時体制」下の日本経済
- (22) 「戦後改革」から高度経済成長の時代へ：戦前・戦後の連続と断絶

[履修者へのコメント]

Web 講義へのアクセス方法など授業のすすめ方については、4 月 12 日の最初の授業の際に説明するので、履修を希望する受講者はかならず出席すること。履修者数は最大 100 名を予定しているので、受講者を制限することもある。

講義に関して詳しくは、<http://www.econ.keio.ac.jp/staff/sugiyama/>を参照すること。

[成績評価方法]

Web 講義の学習状況、レポート、プレゼンテーション、出席、春学期末試験などを考慮して、総合的に評価する。

リーディング・リスト：

- ・中村隆英『日本経済』（第 3 版）東京大学出版会
- ・新保博『近代日本経済史』創文社
- ・梅村又次他編『日本経済史』全 8 巻、岩波書店
- ・安藤良雄『近代日本経済史要覧』（第 2 版）東京大学出版会

経済学説・経済思想

教授 池田 幸弘

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法

経済思想史・経済学史についての基礎的講義。経済思想や経済学史を専攻する者だけを対象にするものではなく、他の領域を専攻する研究者にとっても有意義で、各々の分析視角を広げるような観点を提供することを目的とする。理論史的方法によるか、あるいは歴史的な方法によるかは、参加者の顔ぶれや問題関心を見てから考えてみたい。参加希望者は、かならず初回の授業に出席されたい。

授業内容：

カール・メンガーからはじまり現代オーストリア学派に至るオーストリア学派について講ずる。半期の講義で、一応この学派について鳥瞰図が持てるように努力したい。講義形式だが、適宜質問やディスカッションの時間を設ける。

テキスト：

・尾近裕幸・橋本努編著『オーストリア学派の経済学』
日本経済評論社，2003 年

リーディング・リスト：

毎回の授業の際に指示する。

経済学説・経済思想（スミスにおける経済学の生誕）

教授 坂本 達哉

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この講義では、社会科学としての経済学の成立を画するとされる『国富論』（1776 年）の著者、アダム・スミスの思想を多角的・総合的に検討する。

授業内容：

序 “経済学の生誕” とは何か

- 1 スミスの時代と生涯
- 2 スコットランド啓蒙とスミス
- 3 『道徳感情論』の方法的意義
- 4 『法学講義』と経済学の萌芽
- 5 『国富論』の方法
- 6 分業論の意義
- 7 価値・価格論と文明社会の秩序形成
- 8 資本蓄積と文明社会の発展
- 9 重商主義批判と自然的自由の体系
- 10 文明社会と国家

結. スミスと現代

テキスト：

・水田洋『アダム・スミス』講談社学術文庫

リーディング・リスト：

以下の文献をできる限り用意すること。

- ・アダム・スミス（大河内一男監訳）『国富論』（3 冊）
中公文庫
- ・アダム・スミス（水田洋訳）『道徳感情論』（2 冊）岩
波文庫

専攻科目

ミクロ経済学上級

教授 塩澤修平
助教授 玉田康成

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期に開講される「ミクロ経済学上級」に引き続き、ミクロ経済学の理論について講義する。

授業内容：

1. 競争均衡の存在，局所的一意性，安定性
2. 厚生経済学の基本定理
3. 競争均衡とコア

テキスト：

・ Mas-Colell, Whinston and Green, *Microeconomic Theory*, Oxford University Press, 1995

ミクロ経済学上級

教授 中村慎助
教授 須田伸一

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

経済学部設置の「ミクロ経済学Ⅰ」および「ミクロ経済学Ⅱ」を履修した者を対象として，個別経済主体行動の基本的性質について講義する。

授業内容：

1. 消費者行動
2. 生産者行動
3. 不確実性下の経済行動

テキスト：

・ Mas-Colell, Whinston, and Green, *Microeconomic Theory*, Oxford University Press, 1995

マクロ経済学上級

助教授 伊藤幹夫

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

最近 10 年間ほどのマクロ経済学の理論・実証の両面における展開を，トピックを絞り込んで講義する。

1. 近年のマクロ経済学の実証で用いられるいくつかの計量テクニック
2. リカードの中立性命題をめぐる展開（消費関数の実証）

3. CCAPM と危険プレミアム・パズル

文献の指定などは最初の講義の時間に行う。また，講義資料などは順次 <http://www.econ.keio.ac.jp/staff/ito/lecture> において公開する。

マクロ経済学上級

教授 矢野誠

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

マクロ経済学に関する数学的分析手法を検討する。

授業内容：

1. 消費者の行動における動学的最適化
2. 企業の行動における動学的最適化
3. 動学的均衡の経路
4. 非線型動学と経済変動
5. 確率過程と経済変動
6. 確率的モデルと決定論的モデル

数理経済学（I-A）

教授 丸山徹

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

一般均衡理論を支える数学的基礎のうち，とくに有効と思われる項目について述べる。

(Ⅱ)も併せて履修することが望ましい。

授業内容：

- I Euclid 空間の位相（簡単な復習）
- II 凸集合
凸集合の概念と例，Carathéodory の定理，凸集合の分離定理，漸近錐。
- III 多価写像の連続性
多価写像と連続性の概念，各種の演算，Berge の最大値定理。
- IV 不動点定理
Brouwer の不動点定理，Browder の不動点定理，角谷の不動点定理，変分不等式，Nash 均衡。

テキスト：

- ・ 丸山徹『数理経済学の方法』創文社，1995 年
- ・ 丸山徹『経済数学』知泉書館，2002 年

数理経済学（I-B）

教授 中村慎助

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

一般均衡理論とその数理的構造について述べる。

一般均衡理論

1. 主体的均衡の理論
2. 競争的一般均衡の存在
3. 厚生経済学の基本定理
4. コアと競争均衡

その他

テキスト：

- ・ G.ドブリュー，丸山訳『価値の理論』東洋経済新報社，昭和 52 年
- ・ 丸山徹『数理経済学の方法』創文社，1995 年
- ・ 丸山徹『経済数学』知泉書館，2002 年

注意 経済学部設置「解析学 I」を同時に履修することが望ましい。

数理経済学 (II)

講師 高橋明彦

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

数理ファイナンスの基礎事項を習得すること。

授業内容：

条件付請求権や最適ポートフォリオに関する理論的・数値的課題を講義する。

テキスト：

特になし。

リーディング・リスト：

授業中に指示する。

経済数学 (I-A)

教授 丸山 徹

授業形態：春学期 2 単位・講義

授業内容：

古典的一般均衡理論における数学解析からの方法を，静学・動学の両面にわたって概説する。

テキスト：

- ・ P.A. Samuelson, *Foundations of Economic Analysis*, Harvard University Press, Cambridge, 1947
- ・ 丸山徹『数理経済学の方法』創文社，1995 年

経済数学 (I-B)

教授 丸山 徹

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

経済数学 (I-A) の続論。

経済数学 (II-A)

商学部 教授 小宮英敏

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

解析学を学ぶ上で必要となる距離空間およびバナッハ空間の基本的な知識を与えることを目的とする。無限次元空間に設定される経済モデルを理解，構築するための基礎を与える。

授業内容：

1. 距離空間
2. 開集合と閉集合
3. 連続写像
4. 完備距離空間
5. コンパクト集合
6. バナッハ空間
7. 共役空間
8. 弱位相

テキスト：

テキストは使用しない。必要に応じて資料を配布する。

リーディング・リスト：

1. コルモゴロフ & フォーミン，函数解析の基礎，岩波書店
2. C.D. Alipranits & K.C. Border, *Infinite Dimensional Analysis: a hitchhiker's guide*, Springer

経済数学 (II-B)

教授 丸山 徹

授業形態：

秋学期 2 単位・講義

授業内容：

位相空間の理論と一般的積分の理論は現代の解析学を支えるふたつの支柱である。第一の理論は春，第二の理論については秋の学期に講義する。具体的な講義項目は概ね次のとおり。

測度空間，可測函数，積分の定義と基本性質，収束定理，Fubini の定理，複号測度と Radon-Nikod'yim の定理，有界変分函数と絶対連続函数，可積分函数の空間，Fourier 変換，その他。

テキスト：

- ・ 丸山徹『積分学』(シュプリンガー・フェアラーク東京) 近刊

経済数学 (Ⅲ-A)

(1) 金曜日 1 時限

講師 大 春 慎之助

授業形態：秋学期 2 単位・講義 [金曜日 2 時限の「経済数学 (Ⅲ-B)」も履修しなければなりません。]

授業内容：

動的経済理論を支える数学的基礎を与え、様々な経済動態を記述する数学モデルの定式化とその取扱いについて解説すると共に、数値シミュレーションを援用する数学的接近について講述する。

1. 解析学と線形代数の準備
2. 微分方程式と差分方程式の基礎理論
3. 解の構成と安定性理論
4. 変分原理と安定性解析への応用

経済数学 (Ⅲ-B)

(2) 金曜日 2 時限

講師 大 春 慎之助

授業形態：秋学期 2 単位・講義 [金曜日 1 時限の「経済数学 (Ⅲ-A)」も履修しなければなりません。]

授業内容：

動的経済理論を支える数学的基礎を与え、様々な経済動態を記述する数学モデルの定式化とその取扱いについて解説すると共に、数値シミュレーションを援用する数学的接近について講述する。

1. 解析学と線形代数の準備
2. 微分方程式と差分方程式の基礎理論
3. 解の構成と安定性理論
4. 変分原理と安定性解析への応用

経済数学 (IV-A)

講師 黒 田 耕 嗣

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

Random walk, Poisson process 等の確率過程の性質を概観し、離散確率空間における information structure, conditional expectation について解説する。またこれらのファイナンスへの応用について述べる。

授業内容：

- ① 離散確率分布 (二項分布, Poisson 分布, 幾何分布) について
- ② 連続型確率分布 (正規分布, 指数分布, t-分布, χ^2 -分布, F-分布) について
- ③ Random walk とその応用
- ④ Compound Poisson process と損保数理への応用
- ⑤ 生保数理概説

⑥ 多期間市場モデル

⑦ 平衡価格速度と裁定戦略について

⑧ Black Sholes 公式について

テキスト：

特になし。

リーディング・リスト：

- ・ Dothan, *Prices in Financial Markets*, Oxford University Press

経済数学 (IV-B)

講師 黒 田 耕 嗣

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

確率過程, 特に Brown 運動の基本的性質を理解し, ファイナンスへの応用について考える。

授業内容：

- ① Riemann 積分より Lebesgue 積分へ
- ② Lebesgue 積分と Lebesgue の収束定理について
- ③ 測度論的確率論の概要 (確率変数列の収束, 大数の法則, 中心極限定理)
- ④ Random walk から Brown 運動へ
- ⑤ Brown 運動の基本的性質 (path の性質, scale property)
- ⑥ Brown 運動の Markov 性
- ⑦ Martingale とは
- ⑧ 確率積分と Ito の公式について
- ⑨ ファイナンスへの応用 (数理ファイナンスへの序論)

テキスト：

特になし。

リーディング・リスト：

- ・ Björk, *Arbitrage Theory in Continuous Time*, Oxford University Press

経済数学 (V)

理工学部 教授 菊 池 紀 夫

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

函数解析を通して変分問題・最適化問題の理解。

授業内容：

Lebesgue 積分, Sobolev 空間, 函数解析の基礎理論から始めて変分問題の数理解析を扱う。多様体間の調和写像型変分問題, 即ち, 制限条件付でのエネルギー型変分問題にも触れたい。

変分汎函数の最小化写像とは限らぬ一般臨界点解析

は数理解析におけるこれからの大切な課題である。

テキスト：

配布する講義原稿。

計量経済学上級

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この授業の目的は計量経済学の理論的な知識を高めること、同時に高度なデータ分析ができることである。実証分析に関する指導のために、数回パソコンによる演習を行う。

授業内容：

授業の内容は下記の通りである。

1. 予備知識
 - a. 行列代数
 - b. 条件付き期待値
 - c. 漸近理論
2. モメント法による推定・仮説検定
 - a. 標準的回帰モデルと最小自乗法 (OLS)
 - b. 操作変数法 (IV)・2 段階最小自乗法 (2SLS)
 - c. 一般化最小自乗法 (GLS)
 - d. 診断検定 (過剰識別テスト, 外生性のテストなど)
3. LIMDEP による計量分析
4. 他の推定方法
 - a. M-推定
 - b. 最尤法 (ML 法)
 - c. GMM 法
5. 時系列分析
 - a. 単位根検定
 - b. 共和分分析
 - c. 誤差修正モデル

実証分析のために、LIMDEP8.0 という計量ソフトを利用し、演習を行うが、LIMDEP に関する予備知識は全く必要としない。

テキスト：

- ・ Wooldridge, J.M., *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press, Cambridge, MA, 2002
- ・ Greene, W.H., *Econometric Analysis, 5th edition*, Prentice Hall, Upper Saddle River, NJ, 2003

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

質問・相談：

気楽に mckenzie@econ.keio.ac.jp に問い合わせてください。

計量経済学上級

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

応用計量経済学 (パネルデータの計量経済学)

【経商連携 COE 科目】

教授 辻村和佑

助教授 宮内環

助教授 河井啓希

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期と秋学期を通じて、パネルデータを用いた実証分析に必要な計量経済学の方法を講義する。

なおこの授業は、21 世紀 COE プログラム「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析—構造的経済政策の構築にむけて—」の連携科目として設置され、商学研究科の「計量経済学」(修士課程)(担当は新保一成教授)と合同で行う。

授業内容：

授業の計画

- 1 パネルデータの特徴と既存のパネルデータ
- 2 資料発生機構, 構造, 識別, 統御実験
- 3 通常最小二乗法の前提と推定量の性質
- 4 観測されない変数を含む線形モデル
一般化最小二乗法と実行可能一般化最小二乗法
ランダム効果と固定効果
1 元配置と 2 元配置
特定化検定
- 5 パネルデータモデルと一般化積率法
- 6 漸近理論と最尤推定法

春学期と秋学期の両方を履修することが望ましい。

成績評価方法は、各学期末に各自の研究と計量経済学との関連について述べたタームペーパーを提出してもらう。

テキスト：

- ・ Paul A. Ruud, *An Introduction to Classical Econometric Theory*, Oxford University Press

リーディング・リスト：

- ・ Jefferey M. Wooldridge, *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press

- ・ Badi H. Baltagi, *Econometric Analysis of Panel Data*, Wiley
- ・ 小尾恵一郎『計量経済学入門』日本評論社

応用計量経済学 (パネルデータの計量経済学)

【経商連携 COE 科目】

教授 辻村和佑
 助教授 宮内環
 助教授 河井啓希

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期と秋学期を通じて、パネルデータを用いた実証分析に必要な計量経済学の方法を講義する。

なおこの授業は、21 世紀 COE プログラム「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析—構造的経済政策の構築にむけて—」の連携科目として設置され、商学研究科の「計量経済学」(修士課程)(担当は新保一成教授)と合同で行う。

授業内容：

授業の計画

- 1 パネルデータと不均一分散
- 2 パネルデータと系列相関
- 3 パネルデータと多変量回帰
- 4 パネルデータと同時方程式体系
- 5 離散的選択モデル
- 6 打ち切りデータと切断データ
- 7 動学的パネルデータ分析
- 8 その他のパネルデータに関する話題

不完全パネルデータ, 擬似パネルデータ, 非定常パネルデータなど

春学期と秋学期の両方を履修することが望ましい。

成績評価方法は、各学期末に各自の研究と計量経済学との関連について述べたタームペーパーを提出してもらう。

テキスト：

- ・ Paul A. Ruud, *An Introduction to Classical Econometric Theory*, Oxford University Press

リーディング・リスト：

- ・ Jefferey M. Wooldridge, *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press
- ・ Badi H. Baltagi, *Econometric Analysis of Panel Data*, Wiley
- ・ 小尾恵一郎『計量経済学入門』日本評論社

経済学史

本年度休講。

社会思想

教授 高草木 光 一

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

トクヴィルの思想を中心に、民主主義の問題点を考察する。

授業内容：

トクヴィル『アメリカの民主主義』および仏語・英語・邦語の研究文献を題材に用いる。必要に応じて、参加者にはリポーターの役割を果たしてもらう。

テキスト：

- ・ Alexis de Tocqueville, *De la démocratie en Amérique*, Paris, 1835-40, nouvelle édition historico-critique revue et augmentée par Edouard Nolla, Paris: Vrin, 2vols, 1990
- ・ 井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治 (全 3 巻)』(講談社学術文庫)があるが、翻訳に問題があるため、参考にとどめる。

リーディング・リスト：

- ・ トクヴィル (小山勉訳)『旧体制と革命』ちくま学芸文庫, 1998 年
- ・ トクヴィル (喜安朗訳)『フランス二月革命の日々—トクヴィル回想録』岩波文庫, 1988 年

経済思想 (日本社会経済思想史)

教授 小室 正 紀

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

荻生徂徠『政談』を輪読しながら、徂徠の具体的政治経済政策論と基本哲学との関係を考察する。徂徠学は、江戸時代日本儒学を特色づける最も注目すべき思想の一つであり、その基本哲学は『弁道』『弁名』の二著で展開されている。それに対して、『政談』は時務策に関して幕府からの諮問に答える形で書かれた具体的政策論である。本講義では、本書を読みながら徂徠において現実と理論がいかなる形で結びついていたかを考察する。また、関連して荻生徂徠関係の文献につき、履修者に報告を求めることもある。なお、小室担当の「経済思想演習 (日本社会経済思想史演習 I)」とあわせて履修することが望ましい。

リーディング・リスト：

- ・ 丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会,

1952年

- ・田原嗣郎『徂徠学の世界』東京大学出版会，1991年
- ・尾藤正英『江戸時代とはなにか』岩波書店，1992年
- ・吉川幸次郎『仁斎・徂徠・宣長』岩波書店，1975年
- ・尾藤正英編『荻生徂徠』中央公論社（中公ボックス；日本の名著），1983年
- ・子安宣邦『「事件」としての徂徠学』青土社，1990年

欧米経済史

助教授 飯田 恭
 助教授 崔 在 東

授業形態：春学期2単位・合同演習

目標・意義・方法：

本科目では、社会経済史の視点から、欧米を中心とする各地の歴史を考察する。とりわけ「日常」にかかわる個別の具体的な歴史事象を、社会経済全体の「構造」と関連づけながらとらえる方法を陶冶することを目的としつつ、活発に討論したい。

授業内容：

本科目で取り上げるテーマ（担当教員の守備範囲）は、およそ次の通りである。

1. 個と共同体
2. 家族・親族問題
3. 社会的移動の諸相

受講者の専門・研究テーマ・興味関心が広い意味でこれらのテーマと重なり合えば、問題はない。また、考察対象地域についても、欧米に限定するものではない。

演習形式を採用する。参加者には、本科目の趣旨を踏まえた上で、各自の専門領域の研究史・研究動向を幅広くしかも詳細に紹介し、その中で自らの研究の位置づけを明らかにするような報告を求める。この報告を参加者全員で共有し、それについて議論したい。このことを通じて、何よりも参加者各自の研究が刺激され、またそれが同時に参加者全員への刺激となることが望まれる。

欧米経済史

助教授 飯田 恭
 助教授 崔 在 東

授業形態：秋学期2単位・合同演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

欧米経済史

名誉教授 岡田 泰 男

授業形態：春学期2単位・講義

目標・意義・方法：

アメリカ経済史の研究

授業内容：

アメリカ経済史の諸問題

アメリカ経済史の研究は、近年大きく変化している。かつて「新しい経済史」と呼ばれた理論的、計量的分析の方法は、もはや一般化し、「新しい」とはいえなくなった。他方、社会史や女性史の研究が進み、その成果を経済史がとり入れることも多くなった。この講義では、研究史的サーヴェイをおこなうと共に、近年話題を集めている市場革命、消費革命、フロンティア理論の再構成などについて述べることにしたい。

欧米経済史

名誉教授 岡田 泰 男

授業形態：秋学期2単位・講義

授業内容：

春学期の継続。

日本経済史

教授 杉山 伸 也

教授 柳 沢 遊

授業形態：春学期2単位・合同演習

目標・意義・方法：

徳川期以降、現代にいたるまでの日本経済の変遷について概観する。テキストは、石井寛治編『近代日本流通史』（東京堂出版，2005年4月刊）を使用する予定である。

成績評価は、授業での報告や討論への参加等を考慮して総合的に判断する。

履修に際しては、日本経済史の基本的事実関係について、すでに履修していることが前提となる。また留学生の場合は、日本経済史の基本的用語をふくめ、十分な日本語能力を備えていることが望ましい。

日本経済史

教授 杉山 伸 也

教授 柳 沢 遊

授業形態：秋学期2単位・合同演習

目標・意義・方法：

徳川期および明治期の日本経済に関する研究書・論

文をとりあげ、院生による報告とディスカッションを中心に行なう。テキストは高村直助編『明治前期の日本経済』（日本経済評論社、2004年）を予定しているが、受講者の関心を考慮に入れて選択する。

成績評価は、授業での報告や討論への参加等を考慮して総合的に判断する。

履修に際しては、日本経済史の基本的事実関係について、すでに履修していることが前提となる。また留学生の場合は、日本経済史の基本的用語をふくめ、十分な日本語能力を備えていることが望ましい。

アジア経済史

教授 古田 和子

授業形態：春学期 2 単位・演習

授業内容：

19 世紀後半から 20 世紀前半における東アジアおよび東南アジアの社会経済構造を、貿易・植民地経済・アジア域内労働力移動の観点から検討していく。参加者は、これらのテーマに関する文献リストの作成とその検討作業を通して、テーマへの専門的な理解を深めていくことが求められる。

アジア経済史

教授 古田 和子

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

春学期に引続いて、19 世紀後半から 20 世紀前半における東アジアおよび東南アジアの社会経済構造を、貿易・植民地経済・アジア域内労働力移動の観点から検討していく。検討してきた研究文献の整理を通して、先行研究による成果と残された課題について考察を深め、具体的な研究対象を設定する作業を進める。

産業組織論

教授 中澤 敏明

助教授 河井 啓希

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

このコースは、産業組織論の分野全体について広く紹介することを課題とせず、産業組織論の実証分析をレビューすることを通じて、組織論の 3 分割法でいえばとくに構造・行動に焦点をあてて、事実発見・理論検証を行うことを直接的に目的としている。中澤・河井 2 名で毎週交代しながら、一方が講義し他がコメントを加え質疑する。典型的には、実証分析の中で

主要な先行研究を紹介し相互比較しながら論じ、扱われている争点が産業組織論の進展の系譜の中で占める位置・研究が明らかにした点・問題点・今後に残された課題などを紹介する。必要に応じて、実証分析にかかわる基本的な理論をレビューする。昨年の例（春）では、中澤がコーポレート・ガバナンスと株式市場・市場競争に係る理論と実証分析、河井がプライスコストマージン・推測的変動・製品差別性と参入を中心とする市場構造・行動にかかわる実証分析を扱った。今年度も、コーポレート・ガバナンスと市場競争との関係についての理論的研究を基礎にして、これにかかわる実証分析に進む予定である。河井は、市場参入にかかわる実証研究を、特にニュー・エンピリカル I O のアプローチの系譜にウエイトを置きながらサーベイする。

秋学期の説明も参照されたい。

授業内容：

学部レベルの知識をもっていることを前提とする。計量経済学・ゲーム理論についても基礎的知識を備えていることが望まれる。後者については、修士課程で設けられている「産業組織論（ゲーム理論）」を並行して履修することが望ましい。

河井の内容は、昨年度は次のとおりである。

Market Power の測定

1. New Empirical Industrial Organization
2. Early Studies: Conduct Parameter Models
3. Some Developments on Conduct Parameter Model
4. Nonparametric Studies
5. Product Differentiation 1: Price Reaction Curve
6. Product Differentiation 2: Dynamic Expansions

テキスト：

講義に使用する参考文献については、講義中に説明するが、履修判断の参考のために、これまで扱った代表的なテキストをいくつか紹介する。論文については、秋学期の部に例示するので、参照されたい。

- ・ M. Stephen, *Advanced Industrial Organization*, Blackwell, 1993, 2002
- ・ P. Ghemawat, *Games Business Play*, MIT Press, 1997
- ・ O. Hart, *Firms, Contracts, and Financial Structure*, Oxford, 1995
- ・ L. Phlips(ed), *Applied Industrial Economics*, Cambridge, 1998
- ・ L. Cabral (ed), *Readings in Industrial Organization*,

- Blackwell, 2000
- X.Vives (ed), *Corporate Governance*, Cambridge, 2002
 - E. Rasmussen, *Games and Information*, Blackwell, 1989, 2001
 - E. Wolstetter, *Topics in Microeconomics*, Cambridge

産業組織論

教授 中澤敏明
助教授 河井啓希

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

講義の目的・進め方は、春学期に同じである。そちらを参照されたい。テーマとしては、昨年の例（秋）では、中澤がコーポレート・ガバナンスとの関連で、会社本質論・垂直統合に係る理論分析を紹介した。河井は、春学期に続き、製品差別性他の市場構造・行動にかかわる実証分析をレビューするとともに、市場への参入の実態・参入発生件数および均衡企業数の実証分析の系譜を紹介した。今年度は、春学期の進捗をみて、カバーするテーマを確定することになる。

授業内容：

学部レベルの知識をもっていることを前提とする。計量経済学・ゲーム理論についても基礎的知識を備えていることが望まれる。後者については、修士課程で設けられている「産業組織論（ゲーム理論）」科目を並行して履修することが望ましい。

昨年度、河井の扱った内容は次のとおりである。

参入退出の実証研究

1. 記述的分析：サーベイ、企業動態と生産性、企業動態と雇用
2. Entry-Exit Decision: Entry Deterrence, Sunk cost の測定
3. 参入退出と市場の成果：Market Structure, Market Performance
4. Dynamic Model: 市場動態の確率モデル
5. 差別化市場における参入の分析

リーディング・リスト：

講義に使用する参考文献については、講義中に説明するが、履修判断の参考のために、昨年扱った論文をいくつか紹介する。テキストについては、春学期の案内を参照されたい。

昨年度、中澤の扱ったものを例示する。

- S. Bhagat and R. H. Jefferis, Jr, *The Econometrics of Corporate Governance Studies*, MIT Press, 2002

- M. Bertrand and S. Mullainathan, *Are CEOs rewarded for luck? The ones without Principals are*, QJE, Vol. 116, 2001
- M. J. Conyon, *Perspectives on the governance of executive compensation*, M. Waterson edited, *Competition, Monopoly and Corporate Governance*, Essays in Honor of Keith Cowling, Edward Elgar, 2003
- M. Hellwig, *On the Economics and Politics of Corporate Finance and Corporate Control*. X. Vives edited *Corporate Governance*, Cambridge, 2000
- Motta, M. and M. Polo, *Leniency Programs and Cartel Prosecution*, International Journal of Industrial Organization, Vol.21, 2003, 347-379 (Motta のサイトに改善版あり)
- R. G. Rajan and L. Zingales, *Power in a theory of the firm*, QJE, Vol.113, No2, May 1998, 387-432
- R. G. Rajan and L. Zingales, *The firm as a dedicated hierarchy: a theory of the origins and growth of firms*, QJE, Vol.116, 2001, 805-851
- R. G. Rajan and L. Zingales, *The influence of the financial revolution on the nature of firms*, AER, Vol.91, 2001, 206-211

産業組織論（ゲーム理論）

教授 中山幹夫
助教授 グレーヴァ香子

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

この授業では講義と演習を通じて、産業組織理論を中心とした経済分析に使われる中級ゲーム理論を学ぶ。学部レベルの初級ゲーム理論の知識を前提とする。成績は演習と学期末のレポートによって決まる。

授業内容：

1. 非協力ゲーム
 - (a) 復習：ナッシュ均衡、部分ゲーム完全均衡、フォーク定理、契約
 - (b) ベイジアンゲームとベイジアンナッシュ均衡
 - (c) Trembling-hand perfect equilibrium, 完全ベイジアン均衡、逐次均衡とその応用
 - (d) 進化ゲーム
2. 協力ゲーム
 - (a) TU ゲームとその応用：コア、安定集合、交渉集合、カーネル、仁
 - (b) NTU ゲームとその応用： λ -transfer

value, 市場ゲーム

- (c) 協力ゲームの戦略形：強均衡, coalition-proof ナッシュ均衡
- (d) コア分析：アルファコア, ベータコア, 自己拘束的戦略, 優位懲罰戦略など
- (e) Scarf の定理と純粋交換ゲーム, NTU 市場ゲーム

リーディング・リスト：

- 1. 中山幹夫『はじめてのゲーム理論』有斐閣, 1997年
- 2. 岡田章『ゲーム理論』有斐閣, 1996年
- 3. Fudenberg and Tirole, *Game Theory*, MIT Press, 1991
- 4. Osborne and Rubinstein, *A Course in Game Theory*, MIT Press, 1994

労働経済論

教授 島田晴雄

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

日本経済の制度と政策に関する主要なテーマを選んで、概説を行うとともに、関連文献を読み、参加者の興味も勘案して議論を深める。

労働経済論

教授 島田晴雄

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

春学期参照。

社会政策論

助教授 山田篤裕

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

下記テキスト講読により、社会政策（特に社会保障）の基礎理論および近年における実証研究の展開の概要を把握することを目的とします。他研究科からの参加も歓迎します。

授業内容：

下記テキストの目次は以下の通りです。履修者の関心に応じ、テキストの参考文献（Further Reading）についても講読します。

PART 1. CONCEPTS

- 1. Introduction, 2. The historical background, 3. Political theory: Social justice and the state, 4.

Economic theory 1: State intervention, 5. Economic theory 2: Insurance, 6. Problems of definition and measurement

PART 2. CASH BENEFITS

7. Financing the welfare state, 8. Contributory benefits 1 : Unemployment, sickness, and disability, 9. Contributory benefits 2: Retirement pensions, 10. Non-contributory benefits, 11. Strategies for reform

PART 3. BENEFITS IN KIND

12. Health and health care, 13. Education, 14. Housing

PART 4. EPILOGUE

15. Conclusion

テキスト

・Barr, N, *Economics of the Welfare State (4th ed.)*, Oxford University Press, 2004

工業経済論

教授 渡辺幸男

助教授 駒形哲哉

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

急速に発展する中国工業を題材にとりあげ、それを地域産業・産業集積の視点から検討する。具体的には、駒形、渡辺の中国工業発展について研究成果を利用して講義を行うとともに、中国研究者による中国地域産業発展についての研究も取り上げる。

中国研究者による中国語での研究成果も輪読することになるが、その場合は駒形等による日本語でのレジュメを利用して検討することになる。それゆえ中国語での輪読が困難なものにも履修可能である。

工業経済論

教授 渡辺幸男

助教授 駒形哲哉

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期参照。

農業経済論

教授 寺出道雄

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この講義では、農業経済論の領域から大きく2つの

問題を取りあげて概観する。

すなわち、環境と農業（林業・水産業を含む）の係わりについての問題と、資本主義の発展と農業の変化に係わる問題である。この2つの話題は、それぞれ農業経済論の新たな研究課題と伝統的な研究課題であり、相互に十分に連続した問題として講義することは困難であるが、研究課題が大きく変わっていているなかで、農業経済論の概観を得るためには、双方にふれる必要があると考える。

授業内容：

前者については、1. 植物の物質生産と農業 2. 農法・農業技術の変化 3. 再生可能資源の利用 4. 現代の農業技術等の話題を、

後者については、1. 農民層分解 2. 農工間の労働力移動 3. 19世紀末以来のいくつかの農業不況 4. 現代の農業政策等の話題を取り上げる。

リーディング・リスト：

講義の全体をカバーする文献はないので、授業中に参考文献を指示する。なお、後者の話題では、速水佑次郎他『農業経済論』（岩波書店、2002年）に言及することが多い。

経済政策論

教授 大村 達 弥

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

講義の目標は、変容しつつある経済システムや産業構造の動きを踏まえ、法・政治システムとの関わりも含め学際的視点から現代の経済問題の検討を進めることにある。

授業内容：

今年度の具体的内容としては、情報通信および関連産業における規制緩和とネットワークの発展が産業構造の変化を促している点に着目して、関連する経済規制改革、ネットワーク外部性、電子取引の理論的・実地的検討等を扱う予定である。

テキスト：

授業開始の時点で指定する。

リーディング・リスト：

下記の文献は 2004 年度で取り上げたものである。

- ・ Church & Gandal, *Network Effects, Software Provision, and Standardization*, J. Indust. Econ., 1992
- ・ Farrell & Saloner, *Standardization, compatibility, and innovation*, Rand, JE, 1985

経済政策論

教授 大村 達 弥

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

金融論

教授 櫻川 昌 哉

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

国内外の金融にかかわる重要なテーマに触れ、論文を書けるようにする。

授業内容：

国内外の金融にかかわる最新の英語の学術論文を読む。「国際金融論」と2コマ続けて行う。

テキスト：

なし。初回にリーディングリストを渡す。

リーディング・リスト：

初回にリーディングリストを渡す。櫻川昌哉『金融危機の経済分析』（東京大学出版会）を参考書として適宜使う。

金融論

教授 吉野 直 行

授業形態：春学期 2 単位・講義

授業内容：

1. Historical fluctuations of Japanese Economy and the Monetary Policy
2. Flow of Funds Table of Japanese Economy (Government Sector, Financial Sector, Firm Sector, Households' Sector)
3. Monetary Policy of Japan, Asset Price Inflation and Recent Recession
4. Fiscal Policy of Japan, Budget Deficits
5. Industrial Policy of Japan, Tax Policy and Fiscal Investment Policy
6. Capital Market of Japan (Bond market, equity market)
7. Bank Failures and Bank Restructuring
8. Aging population of Japan and Its impact on Japanese Economy
9. Privatization of Postal Savings and Japanese Financial Market
10. Currency Crisis of Asia, Its causes and consequences

11. Exchange Rate Policy of Asia and Optimal Exchange Rate System
12. Effectiveness of Public Works in Japan and Revenue Bond
13. Central and Local Government Relations in Japan
14. Japanese Policy Making and Incentive Mechanism
15. Final Examination

財政論

教授 飯野 靖 四

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この授業は学部時代に財政論を履修しなかった諸君のために行われる。したがって授業内容は原則として学部の授業と同じであるが、少人数であることを利用して討論も混じえて進めたいと考えている。

授業内容：

1. 財政論の種類
2. スウェーデンの財政と税制
3. 政府の仕事
4. 公共財
5. 日本の税制，特に所得税
6. 法人税（国際課税も含む）

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

- ・『図説・日本の財政』東洋経済新報社
- ・『図説・日本の税制』財経詳報社

財政論

教授 飯野 靖 四

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この授業は学部時代に財政論を履修しなかった諸君のために行われる。したがって授業内容は原則として学部の授業と同じであるが、少人数であることを利用して討論も混じえて進めたいと考えている。

授業内容：

7. 日本の消費税
8. 公債の理論
9. 日本の社会保障制度
10. いわゆるフィスカル・ポリシー
11. 環境税

（春学期予定通り進まなかった場合にはその続きから始める可能性有）

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

- ・『図説・日本の財政』東洋経済新報社
- ・『図説・日本の税制』財経詳報社

公共経済学

教授 前多 康 男

教授 尾崎 裕 之

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

マクロ経済の諸問題を扱う基本的なモデルとしてはいくつかの型がある。時間の取り扱い方で離散型と連続型に分かれ、対象とする期間の長さによって、有限期のモデルと無限期のモデル、また基本的な枠組みで世代重複モデル、無限期まで生きる経済主体のモデル等に分かれる。公共経済学では、世代重複モデルと無限期まで生きる経済主体のモデルの離散型のモデルを講義するが、特に、モデルの基本的な構造に焦点を置く。講義の目的は、世代重複モデルや無限期まで生きる経済主体のモデルの基本的な枠組みを理解し、実際のモデル構築に自在に理論を使用できるようになることにある。また、そのための数学ツールをマスターすることも本講義の目的とするが、主にモデルの使い方が講義の主な内容であり、高度に数学的な講義にはならない。したがって、履修者の数学的なバックグラウンドとしては、基本的な微分・積分に関する知識を想定している。特に、政府の政策が資源配分に与える影響について、講義の重点が置かれる。受講者には、積極的に学習する態度が望まれる。

授業内容：

内容として以下を含む。1. 経済環境の描写，2. 競争均衡，3. 政府の導入，4. 新古典派成長モデル，5. 貨幣モデル

テキスト：

講義前半のテキスト：マッキヤンドレス・ウォレス著（川又・國府田・酒井・前多訳）『動学マクロ経済学』創文社，1994 年（原書：*Introduction to Dynamic Macroeconomics*, Harvard）（注：2 刷りで 1 刷りのタイプミスが訂正されている）。

講義後半のテキストは、授業開始時に知らせる。

リーディング・リスト：

- ・Azariadis, C., *Intertemporal Macroeconomics*,

Blackwell, 1993

- Sargent, T.J., *Dynamic Macroeconomic Theory*, Harvard, 1987
- Roger E. A. Farmer, *Macroeconomics of Self-fulfilling Prophecies*, 2nd edition, MIT Press, 1999
- Stokey, N.L. and R.E. Lucas, *Recursive Methods in Economic Dynamics*, Harvard, 1989

アジア経済と日本

教授 吉野直行
本塾教授 榊原英資

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

1997 年のアジア通貨危機は、タイ・インドネシア・香港・韓国・マレーシアなどに波及し、タイ・インドネシア・韓国では、一時的に大きな打撃を受けた。香港はカレンシーボード制を採用、マレーシアは資本流出規制を実行、シンガポールは 12 カ国通貨によるバスケット通貨制を採用しており、通貨危機の影響をある程度、食い止めることに成功した。また、中国は、固定相場制を継続しており、外貨準備が溜まっている。こうしたアジアの為替制度の現状、その理論分析・計量分析について講義することが一つの目的である。

さらに、アジア各国の経済政策の実行の背景には、その制度的・政治的な違いが存在する。こうした違いを、当時の政策担当者としての経験も踏まえて、講義を行う。

また、インドは、インターネットの発達と英語が共通語であるために、欧米からのさまざまな業務をインドが引き受けるようになってきている。カースト制度などにより成長の遅れていたインドについても、講義の中では言及する。日本経済とアジアとの連関関係、日本がアジアにおいて果たすべき役割などについても言及する予定である。

授業内容：

主な講義の内容は、

- (1) アジア経済のマクロ分析
- (2) アジアの為替制度、アジア共通通貨への道
- (3) アジア経済の連関性と日本経済
- (4) ASEAN 諸国の文化・政治システムと経済政策
- (5) 中国経済の歴史と現状
- (6) 中国の金融問題・為替政策
- (7) インドの隆盛とその背景
- (8) 日中韓の動きと ASEAN

(9) 日本企業とアジア経済
などが講義される予定。

現代日本経済論

教授 北村洋基

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

現代日本経済の到達点と問題点について、批判的視点から検討する。

授業内容：

テキストの読解と討論を中心に進める。

テキスト：

第 1 回目の講義の際に指示する。

リーディング・リスト：

適宜紹介する。

現代資本主義論

教授 北村洋基

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

現代資本主義を情報化という視覚から分析する。そのことによって現代資本主義の何が明らかになるのかを検討するとともに、経済学の理論的課題を探る。

授業内容：

テキストの講読と討論を中心とする。マルクス経済学についての一定の理解・素養を必要とする。

テキスト：

北村洋基『情報資本主義論』大月書店

リーディング・リスト：

適宜紹介する。

世界経済論

教授 竹森俊平

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

国際金融、および国際貿易についての重要な Issue について講義する。また、研究を進めるための文献を紹介する。

リーディング・リスト：

文献等については、第一回目の講義の際に指示する。

国際貿易論

教授 若杉隆平

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

国際貿易・直接投資に関して、基礎理論と実証分析について、中級レベルの講義をする。

授業内容：

対象とする内容は以下のようなものである。

1. Ricardo の貿易理論
2. ヘクシャー＝オリーンの貿易理論
3. 貿易均衡
4. 特殊要素モデル
5. 完全競争市場の下での貿易政策
6. 不完全競争市場下での貿易政策
7. 直接投資
8. イノベーションと貿易
9. 自由貿易と地域貿易協定

テキスト：

- ・ Robert Feenstra, *Advanced International Trade Theory and Evidence*, Princeton University Press, 2004
 - ・ Jagdish Bhagwati, Arvind Panagariya, and T. N. Srinivasan, *Lectures on International Trade*, 2nd edition, The MIT Press, 1998
 - ・ 伊藤元重・大山道広『国際貿易』岩波書店, 1985年
- リーディング・リスト：**

論文に関するリーディング・リストは、その都度、紹介する。

国際貿易論

教授 若 杉 隆 平

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

開発経済論

教授 木 村 福 成

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

発展途上国の開発に当たって、貿易・直接投資と WTO との関係は避けて通れない重要な問題となっている。本講義では、開発と国際通商政策の関係を鳥瞰し、理論研究、実証・政策研究の可能性を探っていく。

国際貿易論、開発経済学の基礎を身につけていることが望ましいが、経済学研究科の他分野、あるいは他研究科からの参加も歓迎する。

授業内容：

講義は、主要論文の批判的読解と関連トピックについてのディスカッションを中心に進めていく。詳しくは第 1 回目の講義の際に説明する。成績は、授業中のパフォーマンス (40%) と学期末のレポート (60%) によって定める。

テキスト：

第一回目の講義の際に指示する。

リーディング・リスト：

第一回目の講義の際に指示する。

国際金融論

教授 櫻 川 昌 哉

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

国内外の金融にかかわる重要なテーマに触れ、論文を書けるようにする。

授業内容：

国内外の金融にかかわる最新の学術論文を読む。特にアジア通貨危機に関する文献も読む。

テキスト：

なし。

リーディング・リスト：

- ・ 櫻川昌哉『金融危機の経済分析』東京大学出版会
- ・ Freixas and Rochet, *Microeconomics of Banking*, MIT Press

経済地理学

教授 杉 浦 章 介

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

トランスナショナルな生産、物流ネットワークや、FDI パターンの変化に伴って、各国民経済のみならず、都市経済や産業集積に大きな変化が起こっている。このような現状とその将来について、基礎的な文献や最新の動向を紹介しながら、この分野における分析的研究や論文の作成を支援することを目的とする。

授業内容：

下記のテキストに収録されている論文を読み、報告を行うという方法で進めてゆく。なるべく広い範囲にわたる関連するトピックスも取り上げて行きたい。

主なトピックスは、上記のコンテキストにおける、テクノロジー、企業戦略、企業組織、そして空間的側面としての都市や地域（グローバル都市ネットワークや産業クラスターなど）である。

テキスト：

- Chandler, Hagstrom and Solvell (eds), *The Dynamic Firm: The Role of Technology, Strategy, Organization, and Regions*, Oxford University Press, 1998, 2003

リーディング・リスト：

- Henderson and Thisse (eds), *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.4, Cities and Geography*, Elsevier, 2004
- Clark, Feldman and Gertler (eds), *The Oxford Handbook of Economic Geography*, Oxford University Press, 2000

経済地理学

教授 杉浦章介

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

春学期の継続。

都市経済論

教授 瀬古美喜

授業形態：春学期 2 単位・講義および演習

目標・意義・方法：

市場メカニズムが都市においてどのように働いているのかという観点に立って、都市経済学や新経済地理学の基礎的な理論モデルと実証研究について学ぶ。学部修了程度の経済理論と、計量経済学の知識がある方が望ましい。

授業内容：

具体的には、都市空間構造の理論的実証的分析、住宅市場と住宅問題、都市における集積と規模の経済、都市の成長、都市交通などに関する文献を取り上げ、検討する。

テキスト：

具体的な文献については、授業の中で指示する。

リーディング・リスト：

- Edwin S. Mills and Bruce W. Hamilton, *Urban Economics, 5th edition*, Scott, Foresman & Co., 1994
- Denise DiPasquale and William C. Wheaton, *Urban Economics and Real Estate Markets*, Prentice Hall, 1996 (瀬古美喜・黒田達朗訳『都市と不動産の経済学』創文社, 2001年)
- J. V. Henderson, *Economic Theory and the Cities, 2nd edition*, Academic Press, 1985
- Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds.,

Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.1: Regional Economics, Vol.2: Urban Economics, Vol.3: Applied Urban Economics, North-Holland and Elsevier Science Publisher

- M. Fujita, P. Krugman and A. J. Venables, *The Spatial Economy*, MIT Press, 1999 (小出訳『空間経済学』東洋経済新報社)
- M. Fujita and J-F Thisse, *Economics of Agglomeration*, Cambridge University Press, 2002
- 日本住宅総合センター『季刊・住宅土地経済』(各版)
- 中村良平・田渕隆俊『都市と地域の経済学』日本評論社, 1996年
- 瀬古美喜『土地と住宅の経済分析—日本の住宅市場の計量経済学的分析』創文社, 1998年
- 金本良嗣『都市経済学』東洋経済新報社, 1997年

都市経済論

教授 瀬古美喜

授業形態：秋学期 2 単位・講義および演習

目標・意義・方法：

市場メカニズムが都市においてどのように働いているのかという観点に立って、都市経済学や新経済地理学の基礎的な理論モデルと実証研究について学ぶ。学部修了程度の経済理論と、計量経済学の知識がある方が望ましい。

授業内容：

具体的には、都市空間構造の理論的実証的分析、住宅市場と住宅問題、都市における集積と規模の経済、都市の成長、都市交通などに関する文献を取り上げ、検討する。

テキスト：

具体的な文献については、授業の中で指示する。

リーディング・リスト：

- Edwin S. Mills and Bruce W. Hamilton, *Urban Economics, 5th edition*, Scott, Foresman & Co., 1994
- Denise DiPasquale and William C. Wheaton, *Urban Economics and Real Estate Markets*, Prentice Hall, 1996 (瀬古美喜・黒田達朗訳『都市と不動産の経済学』創文社, 2001年)
- J. V. Henderson, *Economic Theory and the Cities, 2nd edition*, Academic Press, 1985
- Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds., *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.1: Regional Economics, Vol.2: Urban Economics*,

Vol.3: Applied Urban Economics, North-Holland and Elsevier Science Publisher

- ・ M. Fujita, P. Krugman and A. J. Venables, *The Spatial Economy*, MIT Press, 1999 (小出訳『空間経済学』, 東洋経済新報社)
- ・ M. Fujita and J-F Thisse, *Economics of Agglomeration*, Cambridge University Press, 2002
- ・ 日本住宅総合センター『季刊・住宅土地経済』(各版)
- ・ 中村良平・田淵隆俊『都市と地域の経済学』日本評論社, 1996年
- ・ 瀬古美喜『土地と住宅の経済分析—日本の住宅市場の計量経済学的分析』創文社, 1998年
- ・ 金本良嗣『都市経済学』東洋経済新報社, 1997年

環境経済論

教授 細田 衛 士
教授 大沼 あゆみ

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

本授業では、環境経済学の理論的基礎を講義する。環境経済学の理論としては、伝統的な新古典派的アプローチや新制度学派的アプローチなど多様な分析手法がある。ここでは、環境経済学のテキストで既に定着しつつあるものを中心に講義を進める。

授業内容：

講義の流れは以下の通りである。尚、取り上げる内容には若干の変更もあり得る。

- 第 1 章 環境経済学の流れ
- 第 2 章 公共財としての環境
- 第 3 章 環境問題と所有権：制度学派的アプローチ
- 第 4 章 オープンアクセスと再生可能資源
- 第 5 章 再生不可能資源
- 第 6 章 課税政策
- 第 7 章 排出権売買制度
- 第 8 章 デポジット制度
- 第 9 章 コースの定理
- 第 10 章 廃棄物とリサイクル
- 第 11 章 汚染者支払原則
- 第 12 章 開発と環境保全

テキスト：

特になし。

リーディング・リスト：

授業中に配布する。

社会史

教授 倉 沢 愛 子
教授 清 水 透

授業形態：春学期2単位・合同講義

目標・意義・方法：

歴史学におけるフィールドワークの重要性を認識するとともに、その過程で行き当たるであろう様々な問題を考え、解決策を見出す努力をする。

授業内容：

フィールドワークを基礎とする歴史研究を踏まえつつ、以下の3点を中心に議論・検討する。

- (1) 歴史研究学の方法：文献史学とオーラルヒストリー
- (2) 研究者と研究対象との関係性：知的営みとしての歴史研究と日常
- (3) 個と普遍の問題：個と大状況、日常と非日常

テキスト：

フィールドワークに基づいて書かれた研究書を皆で読みながら進めていく。どの本を選ぶかは、受講生の顔ぶれを見てから決める。

リーディング・リスト：

適宜指定する。

社会史

教授 松 村 高 夫

授業形態：春学期 2 単位・講義

授業内容：

社会史は、「下からの歴史」を「上からの歴史」との関連において描くために、「総合の学」=関連諸ディシプリンの援用をもってその方法的特徴としている。講義とそれに続く討論を通じて、新しい論点の提起、方法的枠組の再構築を試行したい。読むべき文献は、そのテーマ毎に指示する。

成績評価方法は平常点（出席状況および授業態度による評価）とする。

社会史

教授 松 村 高 夫

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

春学期参照。

人口論

教授 津 谷 典 子

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目的・意義・方法：

本科目の目的は、わが国の少子高齢化について、近年の人口学および経済学における理論的および計量分析の展開を理解し、それを学生諸君の今後実証的分析に基づく研究に応用するための学習をすることにある。ここでは特に、人口高齢化や出生率低下などの人口変動に関する形式人口学的研究と、ライフコース分析（Life course analysis）を中心とした多変量解析モデルを用いた研究に関する内外の文献を講読し、その理論的（theoretical）かつ技術的（technical）意味を多面的に検討する。

近年、多変量解析のためのマイクロ・データの入手が以前に比べ容易になり、またライフコース分析を応用することのできるパネル調査および出産歴、就業歴、結婚歴などのライフ・ヒストリーに関する大規模調査データも収集されている。これら調査データを使っての学生諸君自身の研究への応用についても適宜アドバイスする。春学期に「社会科学分析演習（Ⅰ），（Ⅱ）」を受講した学生諸君の受講を歓迎する。

授業内容：

本科目では、担当者があらかじめ選定した論文のリーディング・リストに従い、毎週学生諸君が論文の内容について報告を行う。その後、担当者および学生報告者への質疑応答、そしてクラス全体での討論を行い、最後に担当者が論文テーマおよび内容についてのまとめとして短い講義を行う。学期の終わりには、担当者が指示するテーマについてレポートを課すが、もし自分自身のテーマでレポートを書きたい場合は、それも可能である。

さらに、学生諸君が現在行っている（もしくは行うためのプロポーザルを作成中である）研究論文についての報告も、時間的余裕とニーズがあれば実施する。担当者および他の学生諸君からの質問とコメントをもらい、クラス討論を行う。これによって、学会での報告および論文執筆の準備とすることが望まれる。

リーディング・リスト：

学期の最初に配布する。

演習科目

ミクロ経済学演習

教授 長 名 寛 明

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

文献講読

授業内容：

機構設計（mechanism design）の問題に関する文献を中心に幾つかの基本的文献を展望した上で、学生の関心を考慮して関連文献を講読する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

ミクロ経済学演習

教授 長 名 寛 明

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

文献講読

授業内容：

春学期に引き続き、機構設計（mechanism design）の問題に関する文献を講読する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

ミクロ経済学演習

教授 長 名 寛 明

名誉教授 川 又 邦 雄

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

—不確実性と情報—

履修のためには、ミクロ経済学中級の基礎知識を前提とする。情報の非対称性、シグナリング、依頼人（プリンシパル）と使用人（エイジェント）の問題等について研究し、論文指導を行う。

—社会的選択理論上—

社会的選択理論を中心とする領域の研究指導を行う。集団的意思決定機構の望ましい性質を、結果の効率性、機構の運営に必要な情報伝達量、参加者の行動

誘因との両立性、民主主義の要請等の側面から把握し、市場機構や企業組織等の性質を吟味する。研究領域としては、実行 (implementation) 理論、本人・代理人問題等も含む。

リーディング・リスト：

- (1) Matthew O. Jackson and Sanjay Srivastava, *A Characterization of Game-Theoretic Solutions Which Lead to Impossibility Theorems*, Review of Economic Studies, Vol.63, 1996, 23-38
- (2) F. Vega-Redondo, *Evolution in Games: Theory and Economic Applications*, Oxford University Press, 1995
- (3) J. Hofbauer and J. W. Weibull, *Evolutionary Selection against Dominated Strategies*, Journal of Economic Theory, Vol.71, 1996, 558-573

ミクロ経済学演習

教授 長 名 寛 明
名誉教授 川 又 邦 雄

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法

—厚生経済学—

履修のためには、ミクロ経済学中級及び厚生経済学の基礎理論の知識を前提とする。資源配分の効率性の条件、非効率の尺度、分配の公正、市場の失敗、最適課税論等について研究し、論文指導を行う。

—社会的選択理論下—

春学期に開講される「ミクロ経済学演習」(社会的選択理論上)と同じ領域について、秋学期にも引き続いて研究指導を行う。

ミクロ経済学演習

助教授 白 井 義 昌
助教授 石 橋 孝 次
助教授 玉 田 康 成

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

経済主体が意思決定を行う際に用いる情報そしてその行動誘引の問題を明示的に扱う経済諸モデルの文献を講読する。論文をいかに読み込むか、そして経済問題をどのように組み立て分析するのかということを知得すること、さらに修士論文作成のための問題意識醸成を演習の目的とする。

授業内容：

扱うトピックスとしては契約および組織の基礎理

論、その応用としての産業組織論、労働市場金融市場分析などである。

ミクロ経済学演習

助教授 白 井 義 昌
助教授 石 橋 孝 次
助教授 玉 田 康 成

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

ミクロ経済学演習

教授 中 村 慎 助

授業形態：春学期 2 単位・演習

授業内容：

ミクロ経済学ならびにゲームの理論に関する基本的な文献の講読及び各自の論文報告を行う。詳細は開講時に指定する。

ミクロ経済学演習

教授 中 村 慎 助

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

ミクロ経済学ならびにゲームの理論に関する基本的な文献の講読及び各自の論文報告を行う。詳細は開講時に指定する。

マクロ経済学演習

教授 尾 崎 裕 之

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

「非期待効用理論のマクロ経済学への応用」をテーマとし、関係する論文の輪読を行う。最先端の研究論文を精読することによって、知的訓練を行い、参加者が自分の知的関心に合ったリサーチ・トピックを見出していき、あるいは、自分の修士論文の完成に役立てていくことを目的とする。

授業内容：

以下の内容に関する論文の輪読を行う。(1) von-Neumann=Morgenstern によるリスクの下での選好の表現定理、(2) Savage による不確実性下における選好の表現定理、(3) Gilboa や Schmeidler による CEU 理論・MMEU 理論に代表される非期待効用理論とその公理的基礎、(4) これら非期待効用理論のマクロ経済学への応用。

リーディング・リスト：

Kreps, D., *Notes on the Theory of Choice*, Boulder, Colorado, Westview Press, 1998, 他, 授業中に指示する。

マクロ経済学演習

教授 尾崎 裕之

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

春学期に準ずる。

マクロ経済学演習

教授 塩澤 修平
名誉教授 大山 道廣

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

家計の貯蓄行動，企業の投資行動，さらには企業の生産技術や労働，土地等の本源的生産要素の賦存量およびその効率が所与とされるような静態経済のマクロ均衡モデルを分析対象とする文献を展望し，学生の関心を考慮して幾つかの重要なトピックスを選び，関連文献を講読するとともに修士論文の作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

マクロ経済学演習

教授 塩澤 修平
名誉教授 大山 道廣

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

企業の生産技術や労働，資本等の本源的生産要素の賦存量およびその効率が時間を通じて変化するような動態経済のマクロ均衡モデルを分析対象とする文献を展望し，学生の関心を考慮して幾つかの重要なトピックスを選び，関連文献を講読するとともに修士論文の作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

マクロ経済学演習

教授 前多 康男
講師 酒井 良清

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

マクロ経済学に関する内外の論文を読み進むことにより，マクロ経済学で用いられているさまざまなフレームワークを理解することを目的とする。今年度は，経済の金融の側面をテーマとする。

成績は平常点により決定する。

授業内容：

内外の論文の輪読。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

授業中に適宜配付する。

数理経済学演習（Ⅰ）

教授 丸山 徹
教授 須田 伸一
商学部教授 小宮 英敏

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

参加者による数理経済学上の新しい研究結果の報告ならびにそれをめぐる討論。塾内だけでなく塾外からも，経済学・数学両分野の専門家に参加を求め，研究の向上と視野の拡大に資したいと願っている。

授業内容：

とりわけ経済分析を支える解析学的方法を中心とするが，今年度の重点的テーマは次のとおりである。

- (Ⅰ) 非線形動学と景気変動
- (Ⅱ) 確率解析と金融資産価格の変動
- (Ⅲ) 凸解析と変分法 (多価作用素の解析を含む)
- (Ⅳ) 均衡分析の基本問題

「数理経済学演習（Ⅱ）」と併せて履修することが望ましい。

数理経済学演習（Ⅱ）

教授 丸山 徹
教授 中村 慎助
商学部教授 小宮 英敏

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

参加者による数理経済学上の新しい研究結果の報告ならびにそれをめぐる討論。塾内だけでなく塾外からも、経済学・数学両分野の専門家に参加を求め、研究の向上と視野の拡大に資したいと願っている。

授業内容：

とりわけ経済分析を支える解析学的方法を中心とするが、今年度の重点的テーマは次のとおりである。

- (I) 非線形動学と景気変動
- (II) 確率解析と金融資産価格の変動
- (III) 凸解析と変分法（多価作用素の解析を含む。）
- (IV) 均衡分析の基本問題

「数理経済学演習（I）」と併せて履修することが望ましい。

経済数学演習

教授 須田 伸一

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

一般均衡理論に関する基本的論文を輪読する。今年度は特に、正則経済（regular economy）の理論を中心に関連文献を読み進む予定である。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

授業中に適宜配布する。

経済数学演習

教授 須田 伸一

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期に引き続き、一般均衡理論に関する基本的論文を輪読する。今年度は特に、正則経済（regular economy）の理論を中心に関連文献を読み進む予定である。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

授業中に適宜配布する。

計量経済学演習

助教授 田中 辰雄

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

本講義の目的は 2 つある。(1) GAUSS を使って計量経済学の基礎を学ぶこと、(2) IT 産業に関するペー

パーを読み、自分の論文のテーマを見つけること、の 2 点である。どちらを主としてとりあげるかは集まった学生の要望を聞いて決める。以下、順に説明する。

(1) ガウス(GAUSS)は行列演算が得意なソフトウェアであり、計量分析の推定プログラムが効率よく組める。たとえば、最小 2 乗法の推定値は $b=(X^*X)^{-1}X^*y$ であるが、ガウスではこのままこの式をプログラム中に書けば良い。理論式がそのままプログラム中に現われるので、理論との対応関係が明瞭であり、理解に役立つ。コマンド一つで統計量をやまほど計算してくれる統計ソフトウェアと異なり、自分で理論内容を理解しないと利用できないが、その代り、推定の中身を自分で確認できるうえに、必要に応じて自分で推定方法を工夫できる利点がある。演習参加にあたっては、コンピュータプログラムの知識は必須ではないがあつた方が便利であろう。少なくとも厭わない覚悟は必要である。

(2) IT 産業は近年、もつとも成長が著しく、また産業構造に大きな影響を与えている産業である。90 年代の日米逆転の一因もこの産業での成功・失敗にある。また理論的にもネットワーク外部性や収穫逓増、スイッチングコスト、ベンチャー型産業構造、コンテンツ産業での知的財産権訴訟など特徴的な現象が多く観察されており興味はつきない。しかし、経済学の間から見ると、理論研究も実証研究も遅れている。特に実証分析の遅れは大きく、たとえばマイクロソフト裁判はそれが端的に現われた例で、訴訟にまでなっているにもかかわらず、結局有力な実証分析は経済学者から出されなかった。本講義では学生諸君の興味に合わせてテーマ設定を行ってペーパーを読み、学生諸君の論文のテーマを探していく。たとえば著作権問題に関心が高い学生がいればそれに合わせてペーパーを選択する。

計量経済学演習

教授 辻村 和佑
兼担教授 清水 雅彦

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

この演習では、経済発展過程における経済構造の変化、とりわけ生産構造（産業部門間の技術的相互依存関係）の変化に関する比較静学分析の基礎的手法である産業連関分析の応用問題を取りあげる。伝統的な一國産業連関表に基づく分析手法に対して、最近では、さまざまな拡充がなされている。その一つは、国際取

引すなわち交易関係をもつ国々の産業連関表を、各国間財別輸出・入統計によって連結した国際産業連関表に基づく分析手法である。この手法によれば、従来の集計された輸出および輸入概念による国際経済関係に対して、各国産業構造の相互依存関係を計量的に分析することが可能である。また、発展段階の異なる国々の間における貿易パターンを、伝統的な要素賦存による分析だけでなく、各国産業構造の技術特性によって分析することも可能である。さらに、異時点の国際産業連関表に基づけば、各国の産業構造変化と相互依存関係の変化を分析することもできる。なかでも注目すべきは、産業技術の国際間移転をもたらす国際相互依存関係の変化に関する分析である。いまなお未開拓の分析領域であるが、今後、国際産業連関モデルの拡充によって開拓可能な領域である。この演習の履修者としては、およそ以上のような問題あるいは関連する領域に研究上の関心をもつ人が望ましい。

なお、履修希望者は、学部設置の「計量経済学」、研究科設置の「計量経済学中級」もしくは「応用計量経済学」を履修しておくことが望ましい。演習の形式としては、上記の応用問題に関連する領域を自らの研究テーマとする履修者の報告とそれに対する討論を中心とするが、随時、関連論文の講読と講義も行う。

計量経済学演習

教授 辻村和佑
兼担教授 清水雅彦

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：
春学期参照。

計量経済学演習

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この演習は修士論文作成の指導・研究を行うこと、応用エコノメトリックスの知識を深めること、質の高い実証研究ができることや他人の実証分析を建設的に批判することを目的とする。

授業内容：

各院生が興味を持っている分野に関する論文を紹介し、その文献又は自分の論文について順番に報告してもらう。“報告”は文献（又は文献の議論）を日本語に訳することだけではなく、著者の言いたいことを簡潔にまとめること、内容について疑問点を投げかけるこ

と、日本の関係する文献を紹介することになる。利用できるデータセットの一つとしては慶應家計パネル調査 (KHPS) がある。

テキスト：

テキストとして指定しないが、一番近いものとして Wooldridge, J. M., *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press, Cambridge, MA, 2002 がある。

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

質問・相談：

気楽に mckenzie@econ.keio.ac.jp に問い合わせてください。

計量経済学演習

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：
春学期参照。

計量経済学演習

名誉教授 蓑谷千風彦

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

計量経済学の基礎的知識を復習した後で、制限従属変数のさまざまなモデルと推定を行う。TSP あるいは STATA を用いて演習する。

授業内容：

1. 基礎的知識の復習（回帰分析，自己相関，不均一分散）
2. 3つの大標本検定
3. 正規性の検定
4. プロビットモデル
5. ロジットモデル
6. スコビットモデル，補対数対数モデル
7. 計数データのモデル
 - (1) ポアソン回帰
 - (2) 負の2項分布回帰
 - (3) ZIPモデル
 - (4) ポアソン障壁モデル
8. トービットモデル
 - (1) タイプ I
 - (2) タイプ II
 - (3) タイプ III
 - (4) 切断タイプ

テキスト：

開講時に紹介する。

リーディング・リスト：

開講時に紹介する。

計量経済学演習

名誉教授 蓑谷 千風彦

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

春学期の継続。

経済学史演習

火曜日 4 時限

教授 池田 幸弘

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

アダム・スミスの『国富論』を輪読する。スミス『国富論』の重要性についてはいまさら述べる必要がないほどである。経済学の始点となった著作であるばかりでなく、社会思想史上の古典でもある。また、現代の政策的な議論にあたって常参照されるべき著作だといっても過言ではない。今年度は昨年度に引きつづき、新しく出た杉山忠平訳を使いながら輪読をすすめていく。既存の邦訳との比較対照それ自体も試みてみたい。参加希望者は、水田洋監訳、杉山忠平訳『国富論(1)-(4)』岩波文庫を準備されたい。ときおり、参加者自身の研究テーマについて報告を求められることがある。

経済学史演習

火曜日 4 時限

教授 池田 幸弘

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期の続き。詳細については春学期の講義要綱を見られたい。

経済学史演習

火曜日 2 時限

教授 池田 幸弘

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

近年、研究文献の増加が著しいフリードリッヒ・ハイエクの著作を輪読する。かつて、この思想家の著作は主として新自由主義的な視角から扱われてきたが、現在ではさまざまな角度から自由に議論されるようになってきている。まずは、ハイエクのテキストに内在して、厳格な読解を訓練することからはじめたい。参

加者の積極的な討論に期待する。なお、初回にテキストの選択を含めて相談するので、参加希望者は必ず出席されたい。

授業内容：

輪読形式。もちろん、適宜担当者が解説を加える。

テキスト：

参加者の希望、関心も考慮したうえ、決定する。

リーディング・リスト：

毎回の授業の際に指示する。

社会思想演習

教授 坂本 達哉

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この授業の目標は、社会思想史研究の基本的方法を、文献解説、資料収集、論文執筆などの観点から身につけさせることである。授業は、履修者による研究発表を基本とするが、必要に応じて、最新の学術論文などを取り上げ、検討する。

社会思想演習

教授 高草木 光一

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

トクヴィルの思想を中心に、民主主義の問題点を考察する。

授業内容：

トクヴィル『アメリカの民主主義』をテキストに輪読を行う。参加者はリポーターの義務を負う。リポーターは、テキストまたは指定された文献中の割り当てられた箇所の要約をつくったうえで、参考文献を調べて問題点を整理する。

テキスト：

- ・Alexis de Tocqueville, *De la démocratie en Amérique*, Paris, 1835-40, nouvelle édition historico-critique revue et augmentée par Edouard Nolla, Paris: Vrin, 2vols, 1990
- ・井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治(全3巻)』(講談社学術文庫)があるが、翻訳に問題があるため、参考にとどめる。

リーディング・リスト：

- ・トクヴィル(小山勉訳)『旧体制と革命』ちくま学芸文庫, 1998年
- ・トクヴィル(喜安朗訳)『フランス二月革命の日々』トクヴィル回想録』岩波文庫, 1988年

経済思想演習（日本社会経済思想史演習）

教授 小室正紀

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

履修者に、何らかの意味で日本の経済思想を視野に置いた研究発表を求めながら、論文作成指導を行う。なお、小室担当の「経済思想（日本社会経済思想史）」とあわせて履修することが望ましい。

リーディング・リスト：

- ・川口浩『江戸時代の経済思想』頸草書房，1992 年
- ・経済学史学会編『日本の経済学』東洋経済新報社，1984 年
- ・小室正紀『草莽の経済思想』御茶の水書房，1999 年
- ・逆井孝仁他編『日本の経済思想四百年』日本経済評論社，1990 年
- ・テッサ・モーリス鈴木『日本の経済学』岩波書店，1984 年
- ・藤田貞一郎『国益思想の系譜と展開』清文堂，1998 年
- ・川口浩編『日本の経済思想世界』日本経済評論社，2004 年

経済史演習

教授 杉山伸也

教授 古田和子

教授 柳沢遊

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

経済史を専攻する院生を主な対象とする共同セミナーである。春学期は、個別の研究発表と討論を行なう。必要に応じて『社会経済史学の課題と展望』（有斐閣，2002 年）も参考にする。

成績は、授業での研究報告や討論への参加等を考慮して総合的に評価する。

経済史演習【経商連携 COE 科目】

教授 杉山伸也

教授 古田和子

教授 柳沢遊

商学部助教授 牛島利明

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

経商連携 COE プログラム「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析」の歴史分析班による共同セミナーである。2004 年度にひきつづき、今年度も、

テーマとして戦前・戦後における日本およびアジア諸地域のエネルギー産業、とくに石炭産業に焦点をあて、基本的な研究文献を体系的にとりあげて報告と討論を行なう。

成績評価は、授業での報告や討論への参加などを考慮に入れて、総合的に判断する。

古文書演習

教授 友部謙一

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

本演習は、経済学研究科の設置科目であることを考慮して、古文書（とくに本演習では、近世以降を扱う）とは何であり、それらがどのようにどこに保存され、そしてそれらを利用する者がどのようにアプローチするののかというきわめて基本的なことから始まって、つぎに、古文書の読解を行い、そして、それを加工してデータに仕上げ、実際の社会経済史研究に利用するという、〈分析のための古文書利用〉に必要なプロセスをできるかぎり、実体験を通じて、確認することを目的としたい。したがって、日本経済史にかぎらず興味をもつ幅広い分野からの院生諸君に加わっていただきたい。最後に、実際の分析結果を各自で報告することにしたい。

授業内容：

以下の要領にて進めることにしたい。

1. 分析アジェンダの設定／必要史料の確定／基本的読解訓練
2. 史料所在の探索と確認
(ライブラリーワークも含める)
3. 所蔵地訪問／史料の確認／史料の複写・筆写・撮影
(一連の最低限のマナーを確認する。その際 historian としての必要な skill を身につける)
4. 史料の解読／読み合わせ (ねばり強く、地道な作業です)
5. データの作成と利用
(分析アジェンダならびに仮説とのすりあわせ／machine readable data の作成も視野において)
6. 分析
7. 報告レポートの作成

テキスト：

「古文書解読辞典」(何でもよいので、1 冊用意すること)

古文書演習

教授 友部 謙一

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

本演習は、経済学研究科の設置科目であることを考慮して、古文書（とくに本演習では、近世以降を扱う）とは何であり、それらがどのようにどこに保存され、そしてそれらを利用する者がどのようにアプローチするののかというきわめて基本的なことから始めて、つぎに、古文書の読解を行い、そして、それを加工してデータに仕上げ、実際の社会経済史研究に利用するという、〈分析のための古文書利用〉に必要なプロセスをできるかぎり、実体験を通じて、確認することを目的としたい。したがって、日本経済史にかぎらず興味をもつ幅広い分野からの院生諸君に加わっていただきたい。最後に、実際の分析結果を各自で報告することにしたい。

授業内容：

以下の要領にて進めることにしたい。

1. 分析アジェンダの設定／必要史料の確定／基本的読解訓練
2. 史料所在の探索と確認
(ライブラリーワークも含める)
3. 所蔵地訪問／史料の確認／史料の複写・筆写・撮影
(一連の最低限のマナーを確認する。その際 historian としての必要な skill を身につける)
4. 史料の解読／読み合わせ（ねばり強く、地道な作業です）
5. データの作成と利用
(分析アジェンダならびに仮説とのすりあわせ／machine readable data の作成も視野において)
6. 分析
7. 報告レポートの作成

テキスト：

「古文書解読辞典」（何でもよいので、1冊用意すること）

産業論演習

教授 寺出 道雄

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この演習では、参加者の論文の作成にむけての報告を求めることの他、大きくは担当者が研究科における講義で取り上げる話題と関連した文献の講読を行う。

すなわち、環境と農業（林業・水産業を含む）の係

わりについての問題と、資本主義の発展と農業の変化に係わる問題についての文献である。第1回目の授業で、いくつかの候補をあげて、受講者の関心にも応じてその後に輪読する文献を決定する。

産業論演習

教授 寺出 道雄

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この演習では、参加者の論文の作成にむけての報告を求めることの他、大きくは担当者が研究科における講義で取り上げる話題と関連した文献の講読を行う。

すなわち、環境と農業（林業・水産業を含む）の係わりについての問題と、資本主義の発展と農業の変化に係わる問題についての文献である。第1回目の授業で、いくつかの候補をあげて、受講者の関心にも応じてその後に輪読する文献を決定する。

産業論演習

教授 渡辺 幸男

教授 北村 洋基

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

一現代資本主義と産業一

本演習では、現代資本主義論と産業論との接合に留意しながら、主要には日本を対象として、現代資本主義の現段階把握、そして諸産業・産業構造の急速な変化と現段階把握をめざす。

春学期は主に現代産業経済の全体構造を検討する。

産業論演習

教授 渡辺 幸男

教授 北村 洋基

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

一現代資本主義と産業一

本演習では、現代資本主義論と産業論との接合に留意しながら、主要には日本を対象として、現代資本主義の現段階把握、そして諸産業・産業構造の急速な変化と現段階把握をめざす。

秋学期は主に現代産業経済の分業構造を検討する。

産業組織論演習

教授 中澤敏明
助教授 河井啓希

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

学生が修士論文のテーマを模索し、プレゼンテーションの練習をする場を提供している。

産業組織論の領域を主たる対象として、この分野で行われてきた優れた研究論文を担当者・履修学生が選択し、学生が当該論文を解説する中で、研究系譜、研究者の着眼点・論理展開・データ所在・計量的手法などを学ぶ。個々の学生は、1 学期を通じて研究するテーマを決め、当該テーマの論文として優れていると定評のあるもの、それに準ずるもの、顕著に新規性のある論文などを選ぶ。輪番で行う。修士 2 年生については、修士論文作成のプロセスに合わせ仮説提示・関係論文解説・中間発表・完成論文発表を行うことを、選択できる。

授業内容：

産業組織論および計量経済学の学部レベルの知識をそなえていることが望ましい。

テキスト：

テーマは、産業組織論の領域にかかわるものであれば基本的に自由である。しかし、他の履修者も予習する必要があるために、担当者が選択についてチェックする。可能なテーマを例示すると、

1. SCP Approach and New Empirical IO
2. Supply and Demand
3. Monopoly and Contestable Market
4. Cartel and Collusion
5. Product Differentiation
6. Market Power
7. Entry Dynamics
8. Price Discrimination
9. Innovation and R&D
10. Standards and Network Externality
11. Firm Structure and Incentives
12. Vertical Integration
13. Information and Advertising
14. Price Rigidity and Macro Economics
15. Optimal Regulation

昨年、選択された論文を、キーワードで例示すれば、Installed Base, Hedonic Price, Conjectural Variation, Network Effects, Tournaments 等がある。

産業組織論演習

教授 中澤敏明
助教授 河井啓希

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

学生が修士論文のテーマを模索し、プレゼンテーションの練習をする場を提供している。

産業組織論の領域を主たる対象として、この分野で行われてきた優れた研究論文を担当者・履修学生が選択し、学生が当該論文を解説する中で、研究系譜、研究者の着眼点・論理展開・データ所在・計量的手法などを学ぶ。個々の学生は、1 学期を通じて研究するテーマを決め、当該テーマの論文として優れていると定評のあるもの、それに準ずるもの、顕著に新規性のあるものなどを選ぶ。輪番で行う。修士 2 年生については、修士論文作成のプロセスに合わせ仮説提示・関係論文解説・中間発表・完成論文発表を行うことを、選択できる。

授業内容：

産業組織論および計量経済学の学部レベルの知識をそなえていることが望ましい。

テキスト：

テーマは、産業組織論の領域にかかわるものであれば基本的に自由である。しかし、他の履修者も予習する必要があるために、担当者が選択についてチェックする。可能なテーマを例示すると、

1. SCP Approach and New Empirical IO
2. Supply and Demand
3. Monopoly and Contestable Market
4. Cartel and Collusion
5. Product Differentiation
6. Market Power
7. Entry Dynamics
8. Price Discrimination
9. Innovation and R&D
10. Standards and Network Externality
11. Firm Structure and Incentives
12. Vertical Integration
13. Information and Advertising
14. Price Rigidity and Macro Economics
15. Optimal Regulation

昨年、選択された論文を、キーワードで例示すれば、Semiconductor, Positioning, Tournaments, Promotion, Asymmetric Information, Procurement 等がある。

労働経済論演習

教授 島田 晴雄

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

労働経済を中心とした研究テーマにつき、演習参加者の研究発表ならびに各自の研究の発展を促進するための指導と助言を行う。指導や助言は、演習における発表時のみでなく、eメール等を通じて適時、必要に応じて、密接に行う。

労働経済論演習

教授 島田 晴雄

教授 太田 聡一

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

労働経済を中心とした研究テーマにつき、演習参加者の研究発表ならびに各自の研究の発展を促進するための指導と助言を行う。指導や助言は、演習における発表時のみでなく、eメール等を通じて適時、必要に応じて、密接に行う。

社会政策論演習

助教授 山田 篤裕

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

一定のテーマを定めて、社会政策（特に社会保障）に関する内外の論文を輪読します。今年度は、国内研究であまり扱われて来なかった経済格差や健康格差をテーマにしたいと考えています。暫定的に下記リストの論文のいくつかを取り上げようと考えています。ただし、どの論文を取り上げるかの詳細については受講者と相談して決めます。他研究科からの参加も歓迎します。

リーディング・リスト：

- ・ Arrow, K. J., S. Bowles and S. N. Durlauf (eds.), *Meritocracy and Economic Inequality*, Princeton University Press, 2000
- ・ Atkinson, A. B. and F. Bourguignon (eds.), *Handbook of Income Distribution (Vol.1)*, Elsevier, 2000
- ・ Barr, N. (ed.), *Economic Theory and the Welfare State (International Library of Critical Writings in Economics Series)*, Edward Elgar, 2001
- ・ Kawachi, I., B. P. Kennedy, and R. G. Wilkinson (eds.), *Income Inequality and Health*, The New

Press, 1999

経済政策論演習

教授 大村 達弥

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

担当者が担当する「経済政策論」の講義内容と関連したテーマを選択し、受講者の事情を考慮しつつ運営も一体で進める。ねらいは経済システムや産業構造の動きを踏まえ、法・政治システムとの関わりも含め学際的視点から現代の経済問題の検討を進めることにある。

授業内容：

今年度の具体的内容としては、情報通信および関連産業における規制緩和とネットワークの発展が産業構造の変化を促している点に着目して、関連する経済規制改革、ネットワーク外部性、電子取引の理論的・実際の検討等を扱う予定である。

テキスト：

授業開始の時点で指定する。

リーディング・リスト：

下記の文献は 2004 年度で取り上げたものである。

- ・ Laffont, Rey, Tirole, *Network competition: I Overview and non discriminatory pricing, Network competition: II Price discrimination*, Rand, JE, 1998

経済政策論演習

教授 大村 達弥

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法、テキスト 他：

春学期参照。

金融論演習

教授 前多 康男

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

金融経済学に関する内外の論文を読み進むことにより、金融経済学で用いられているさまざまなフレームワークを理解することを目的とする。

授業内容：

具体的なトピックスについては、以下の通りである。

1. 金融取引の機能について、
2. リレーションシップ取引と市場取引、
3. 間接金融、直接金融、市場型

間接金融, 4. 銀行の規律付け, 5. 銀行の業務, 6. 金融業に対する規制

リーディング・リスト:

授業中に適宜配付する。

金融論演習

教授 前多康男

授業形態: 秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他:

春学期参照。

金融論演習【経商連携 COE 科目】

教授 吉野直行

授業形態: 秋学期 2 単位・演習

授業内容:

21 世紀 COE による経済学部と商学部の連携により, 大学院教育の充実を目的とした演習である。21 世紀 COE で実施しているパネルデータを大学院生が利用しながら, 修士論文・博士論文の作成を行っている。(i) 家計行動に関する計量分析, (ii) 家計の金融資産選択行動の実証分析, (iii) 財政のサステナビリティに関するシミュレーション分析, (iv) ミクロデータを用いた金融行動に関する実証分析など, 大学院生の論文発表を通じた演習を行う。経済学部と商学部の多数の教員による合同の演習であり, さまざまな角度からの議論が展開される。

金融論演習

教授 吉野直行

教授 池尾和人

授業形態: 秋学期 2 単位・合同演習

授業内容:

財政・金融政策に関連する大学院生の論文作成に関する演習であり, 内容としては, (i) 地方への資金配分とその要因分析, (ii) 金融機関の行動分析, (iii) 高齢化と日本の財政赤字, (iv) 景気変動とマクロ経済政策などである。毎回, レジメを用意し, 大学院生は作成している論文の内容に関して発表を行う。また, それぞれの分野における基礎的な論文を輪読する。

財政論演習

教授 飯野靖四

授業形態: 春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法:

この授業では原則として各履修者の論文発表と検討が中心となる。論文発表者がいない時は財政論の基本的文献の輪読を行う。

授業内容:

- ・各履修者の論文発表と検討
- ・財政論の基本的文献の輪読

(何を輪読するかは, 授業の最初に相談して決める)

財政論演習

教授 飯野靖四

授業形態: 秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他:

春学期参照。

財政論演習

教授 山田太門

授業形態: 春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法:

我々の経済学はもはや純粋な市場経済を分析することはできない。何らかの市場の失敗を修正する経済政策が施された混合経済しか存在しない。このような経済を公共経済とよび, この演習ではこの公共経済に関連した事象をさまざまな分析手法で検討することによって, 分析手法自体の習得を目的とする。

我々の経済はかなりの速度でグローバル化している。それにとまなう技術や制度の変化を公共性という観点と, 選択行動という経済学的な定式化とによって把えてみようと思っている。我々の経済の変化の本質的特徴と原因が何なのかを探求してゆきたい。

授業内容:

参加者は数冊の文献を輪読することによって思索し, 討論することによって互いに啓発しあうことが求められ, 同時並行的に各自の論文作成をすすめなければならない。

財政論演習

教授 山田太門

授業形態: 秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他:

春学期参照。

公共経済学演習

教授 瀬古美喜
教授 木村福成
教授 マッケンジー, コリン
教授 若杉隆平
助教授 グレーヴァ香子

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

公共経済学を中心とした理論経済学および応用理論経済学に関する参加者の研究報告ならびに討論を行う。

授業内容：

出席者は議論への積極的な参加が望まれる。履修者は、原則として自己の論文かまたは各自の関心分野の代表的な文献の内容を報告するものとする。なお、定期的に学内外の専門家を招いての講演ならびに討論を行うことにより、セミナーの活性化をはかる予定である。

公共経済学演習

教授 瀬古美喜
教授 木村福成
教授 マッケンジー, コリン
教授 若杉隆平
助教授 グレーヴァ香子

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

公共経済学を中心とした理論経済学および応用理論経済学に関する参加者の研究報告ならびに討論を行う。

授業内容：

出席者は議論への積極的な参加が望まれる。履修者は、原則として自己の論文かまたは各自の関心分野の代表的な文献の内容を報告するものとする。
なお、定期的に学内外の専門家を招いての講演ならびに討論を行うことにより、セミナーの活性化をはかる予定である。

公共経済学演習

教授 矢野 誠

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

論文指導を行う。参加者は英語論文の作成、提出、および公共セミナーへの参加を義務づけられる。

公共経済学演習

教授 矢野 誠

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

日本経済論演習

教授 渡辺 幸男

教授 北村 洋基

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

本演習では、主要には日本経済を対象として、現代資本主義の現段階把握、そして日本経済の急速な変化と現段階把握をめざす。

日本経済論演習

教授 渡辺 幸男

教授 北村 洋基

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

国際経済論演習

名誉教授 大山 道廣

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

国際貿易論の理論的文献を展望・解説し、最近の重要トピックスをいくつか選んで、関連文献を講読するとともに学生自身による論文作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

国際経済論演習

名誉教授 大山 道廣

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

国際金融論の理論的文献を展望・解説し、最近の重要トピックスについて関連文献を講読する。併せて学生自身による論文作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

国際経済論演習 (1) 水曜日 4 時限 (2) 水曜日 5 時限

教授 櫻川 昌 哉

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

マクロ経済学・金融・国際経済に関する最新のテーマに触れる。最終的には論文を仕上げることを目標とする。

授業内容：

マクロ経済学・金融・国際経済に関する最新の学術論文を輪読する。2 コマ連続で行なうので履修者は注意されたい。金融のミクロ的構造とマクロ経済学の相互作用のメカニズムについて理解を深めることを念頭に置いた内容とする。この分野は理論だけやっても意味がないので実証の論文も適宜読む。

テキスト：

- ・ Blanchard and Fischer, *Lectures on Macroeconomics*, MIT Press
- ・ D. Romer, *Advanced Macroeconomics*, McGraw-Hill
- ・ Freixas and Rochet, *Microeconomics of Banking*, MIT Press
- ・ Dewatripont and Tirole, *The Prudential Regulation of Bank*, MIT Press
- ・ 櫻川昌哉『金融危機の経済分析』東京大学出版社

リーディング・リスト：

追って指示する。

国際経済論演習

教授 高 梨 和 紘

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

基本的には、修士論文作成のための指導・研究を行うことを目標とする。しかし修士1年生に対しては、そのための基礎的学習や分析の方法・方向についての指導に重点をおいていきたい。具体的な方法としては、その中心を履修する学生達の報告とそれをめぐる討論・指導におきたい。ここでは国際経済論と国際政治経済論および経済発展論とアジアを中心とする地域研究に重点をおく。

授業内容：

まず履修者それぞれの問題意識や意図する研究テー

マ等について、全体的・個別的に指導を行った上で、それに資するリーディング・リストを与え、それに基づいて各自の研究を進めてもらい、隔月1回程度研究報告を課し、その報告をめぐって徹底的な討論や追加指導を行う形で演習を進めたい。

テキスト：

履修者のテーマ・問題意識に応じて、演習開始後指示・配付する。

国際経済論演習

教授 高 梨 和 紘

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

国際経済論演習

教授 竹 森 俊 平

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

指定されたテキストの輪読を通じ、国際金融論の分析手法を学ぶが、その間に受講者の自分で選んだトピックについての報告を交え、また修士論文の指導をする。

テキスト：

- ・ M. Obstfeld and K. Rogoff, *Foundations of International Macroeconomics*, MIT Press

リーディング・リスト：

受講者の自発的な報告に関連のあるものを適宜指定する。

国際経済論演習

教授 若 杉 隆 平

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

国際貿易あるいは技術革新・R&D に関連して、修士論文作成の指導・研究を行う。

授業内容：

各学生が関心を有する分野に関する諸文献を報告してもらい、作成する論文に関連する先行研究をサーベイする。

また、各自が取り組んでいる論文についても順次報告してもらい、論文指導を行う。

テキスト：

参照する文献・論文等に関しては、適宜指定する。

国際経済論演習

教授 若杉隆平

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

都市経済論演習

教授 瀬古美喜

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

市場メカニズムが都市においてどのように働いているのかという観点に立って、都市経済学の基礎的な理論モデルと実証研究について学ぶ。具体的には、理論的・実証的分析手法に基づいて各自が選んだ研究テーマに関する論文指導を行う。

リーディング・リスト：

- ・ Edwin S. Mills and Bruce W. Hamilton, *Urban Economics, 5th edition*, Scott, Foresman & Co., 1994
- ・ J. V. Henderson, *Economic Theory and the Cities*, 2nd edition, Academic Press, 1985
- ・ Denise DiPasquale and William C. Wheaton, *Urban Economics and Real Estate Markets*, Prentice Hall, 1996 (瀬古美喜・黒田達朗訳『都市と不動産の経済学』, 創文社, 2001年)
- ・ Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds., *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.1: Regional Economics*, North-Holland and Elsevier Science Publisher, 1987
- ・ Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds., *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.2: Urban Economics*, North-Holland and Elsevier Science Publisher, 1987
- ・ *Regional and Urban Economics, Part1, Part2*, Harwood and Academic Publishers, 1996
- ・ Masahisa Fujita, Paul Krugman and Anthony J. Venables, *The Spatial Economy*, MIT Press, 1999 (小出訳『空間経済学』東洋経済新報社)
- ・ M. Fujita and J-F Thisse, *Economics of Agglomeration*, Cambridge University Press, 2002
- ・ 日本住宅総合センター『季刊・住宅土地経済』(各版)
- ・ 中村良平・田淵隆俊『都市と地域の経済学』日本評論社, 1996年
- ・ 瀬古美喜『土地と住宅の経済分析』創文社, 1998年

・ 金本良嗣『都市経済学』東洋経済新報社, 1997年

環境経済論演習

教授 細田衛士

教授 大沼あゆみ

専任講師(有期) 河田幸視

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

本演習においては、環境経済論の理解を促進し、より発展した水準の内容にまで到達できるようにすることを目的とする。

授業内容：

次のような内容を持った原著論文から適宜選択して読む予定である。具体的にどのような論文を読むかは、授業の開始前に提示する予定である。

1. 廃棄物の処理・再資源化に関する理論・実証分析。
2. デポジット制度など、回収に関する理論・実証分析。
3. グリーン・デザインや拡大生産者責任に関する理論分析。
4. 物質フローの制御問題に関する理論分析。
5. 生態系や種の多様性についての理論・実証分析。
6. 汚染物質制御に関する理論・実証分析。(水質汚染, 大気汚染, 土壌汚染などをモデル化したものあるいは実証的に扱ったもの。)
7. 環境問題を所有権の観点から扱った分析。
8. 排出権売買の静的および動的理論分析。
9. 枯渇性資源の最適利用に関する理論・実証分析。
10. 再生可能資源の最適利用に関する理論・実証分析。

本演習は、環境経済論の基礎知識を有していることが前提となる。

なお、学会・セミナー発表用の論文が完成あるいは準備できた場合、その論文をこの演習で報告することもあり得る。発表を希望するものは、担当教員に申し出ること。

リーディング・リスト：

授業中に配布する。

環境経済論演習(環境政策)

講師 山口光恒

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

年間を通して行う演習の春期分。春学期・秋学期連

続した内容となっているので極力年間を通した履修が望ましい。

本演習は環境政策オリエンテッドな内容である。現在国際的に流動的な環境問題を最新且つオリジナルな資料によりながら研究し、日本或いは世界がどうしたらよいかにつき演習形式で進める。

授業内容：

今年は春秋とも温暖化問題に集中する。講義内容は履修者の知識を見て決める。気候変動枠組条約や京都議定書の理解を前提に、議定書目標達成の為の日、EU、米の政策を学び論議する。EUについては2005年1月に域内排出権取引が開始され、これに伴い部門別CO₂排出配分を決めるNational Allocation Planも決まる。域内排出権取引の理論と実際の乖離も取り上げるつもりである。

テキスト：

- ・ European Commission, *European Climate Change Report*, June, 2001
- ・ European Commission, *Second ECCP Progress Report*, 2003
- ・ European Commission, *Communication from the Commission on National Allocation Plan*, 2003
- ・ European Commission, *Directive on establishing a scheme for greenhouse gas emission allowance trading*

なお、日本については中央環境審議会の環境税提案及び自主参加型排出権取引を取り上げその是非を論じる。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

環境経済論演習（環境政策）

講師 山口 光 恒

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法：

年間を通して行う演習の秋期分。春学期・秋学期連続した内容となっているので極力年間を通した履修が望ましい。

本演習は環境政策オリエンテッドな内容である。現在国際的に流動的な環境問題を最新且つオリジナルな資料によりながら研究し、日本或いは世界がどうしたらよいかにつき演習形式で進める。

授業内容：

秋学期は京都議定書後の新たな枠組みを中心テーマとする。これにはアメリカおよび中国を初めとする主

要途上国の参加が必須であるが、どのようにすればその目標を達することが出来るのかを巡って論議を行う。先ず中央環境審議会及び産業構造審議会の間とりまとめを理解した上で、海外の学者の論文や書物を読み解決策を模索する。

さらに時間の余裕があれば、日中環境協力の具体的な可能性についても論議したい。

テキスト：

- ・ 産業構造審議会将来枠組み検討専門委員会「気候変動に関する将来の持続可能な枠組みについて」2004年11月18日
- ・ D. Victor, *The collapse of the Kyoto Protocol*, Princeton University Press, 2001
- ・ M.Grubb et al., *Keeping Kyoto*, Climate Strategies
- ・ T. Schelling, *What makes Greenhouse Sense, Time to rethink the Kyoto Protocol*, Foreign Affairs, May/June 2002 など

リーディング・リスト：

都度指示する。

社会史演習

教授 鈴木 晃 仁

授業形態：春学期2単位・演習

目標・意義・方法：

この授業では「疾病と医療の社会史」を集中的に演習します。現在進行中の学術創成研究「歴象オーサリング・システムによる危機管理研究」（研究代表：友部謙一）に絡めた授業を行います。具体的な狙いは3点にまとめられます。1) この研究プロジェクトの一環として構築している近代日本の疾病・医療のデータベースを実際に動かすことで、疾病と医療の計量的な歴史に必要なデータベースの操作を習得すること 2) 具体的にデータを分析し、それを解釈するために医学文献などの資料を読むことで、20世紀の日本の疾病と医療の社会史を部分的に深く掘り下げること 3) 日本から出発して、国際的な比較の視座を築くこと。

テキスト：

以下の書物は随時参照しますので、各自購入してください。

- ・ Roger Cooter and John Pickstone eds., *Companion to Medicine in the Twentieth Century*, pbk edition, Routledge, 2000

社会史演習

教授 鈴木 晃 仁

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

社会史演習（生活環境の社会史）

教授 友部 謙 一

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

「生活水準」は社会経済史の伝統的な課題である。しかし、それを世帯の問題としてとらえ、さらにそこでの世帯員のバーゲニングパワーがかれらの各個人の「生活水準」を決定しているという分析フレームワークで考えると、再度エキサイティングな問題としてよみがえる。歴史の中の「生活水準」とは、すなわち各個人の生活環境そのものを再構築することに他ならない。とくに、本演習では母親と乳幼児の生活環境に着目していきたい。

授業内容：

演習であるからには、年度末には受講生は各自研究報告書を提出することになる。そのために、まず「生活環境」の範囲を比較的広く考え、18世紀から20世紀前半にかけての医療・疾病・衛生・保健・人口・家族に関する基本的な文献について講読・議論する。つぎに、各自のテーマを尊重しつつ、「生活環境の社会史」に関する共同のデータベースを構築していく（データベースの作成については演習時に指示する）。とくに、本年度は日本の各機関に所蔵されている19世紀後半から20世紀前半の日本に残された伝染病流行に関する資（史）料の収集と分類に力を入れていきたい。つまり、本年度はそのことに関する本格的な分析を進めていくための「体力」を蓄える時期として位置付けたい。

最初の時間に演習予定表とシラバスを各担当者が配布する。

社会史演習（生活環境の社会史）

教授 友部 謙 一

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

社会史演習

教授 松村 高 夫

教授 倉 沢 愛 子

教授 清 水 透

教授 金 子 勝

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

授業内容：

社会史とは、人間社会を経済のみならず、政治・社会・文化などさまざまな側面からなる全体ととらえる研究方法である。この全体としての人間社会に接近する方法も、経済学のみならず、政治学・社会学・人類学など隣接する人間諸科学を包含したものである。社会史は、具体的・歴史的な事象を細部にわたり分析すると同時に、絶えず新しい領域を開拓し、新しい方法論的枠組を創りだすことにある。その意味で、固定した方法・領域をもたない。

教員（担当者）と院生による報告と討論を重ねていく。担当者の専門には限定されないような仕方で運営していきたい。活発な議論を通して参加者各自の研究が刺激されるよう配慮していきたい。

成績評価方法は、平常点（出席状況および授業態度による評価）とする。

社会史演習

教授 松村 高 夫

教授 倉 沢 愛 子

教授 清 水 透

教授 金 子 勝

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

授業内容：

春学期の継続。

人口論演習

教授 津 谷 典 子

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

本演習は、人口学および経済学で近年よく行われる個票データを用いた様々な多変量解析（multivariate analysis）の手法について、実際の応用例を多数検討することにより、各モデルの意味、用途、および長所と短所、さらに変数の構築などについて学ぶことを目的とする。具体的には、最近刊行された学術論文を読み、そこで用いられている分析モデル、データ、変数の構築について検討し、そして分析・推計結果の意味を解釈・理解する。講読の対象となる学術論文は、講

師があらかじめ選択・準備し、そのリーディング・リストを第1回目の授業時に配布する。

授業はまず、学生諸君の中から各週1名が論文内容についてのレジュメをあらかじめ準備し、クラスで報告する。次いでそれについてのクラス討論とクラス全体での質疑応答を行い、最後に講師が説明とまとめを行う。

授業内容：

本演習で取り扱う多変量解析モデルは、Linear causal models と呼ばれるモデルを中心とした以下のようなものである。

- ① Ordinary least-square multiple regression model
- ② Multiple classification analysis (MCA)
- ③ (Binary) Logistic regression model
- ④ Ordered logit/probit model
- ⑤ Multinomial logit model
- ⑥ Cox proportional hazard model
- ⑦ Time-dependent hazard model

また、本演習では、モデルに使用される変数についても、その構築方法（プロセス）だけでなく、多重線形性（multi-collinearity）、内生性（endogeneity）、同時性（simultaneity）などの問題点についても説明・検討する。さらに、学生諸君が各自の研究において使用することができる内外の個票データについて学ぶため、各学術論文の分析で使用されているデータの内容について、入手方法も含め紹介する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

第1回授業時に配布する。

産業社会論演習

教授 金子 勝

授業形態：春学期2単位・演習

目標・意義・方法：

産業社会にかかわる諸問題を、理論的制度的に考察する。

授業内容：

今年度は、日本における経済格差問題について考察する。年金・介護・雇用問題など具体的問題を取り上げながら。

テキスト：

経済政策に関する文献を対象に、参加者と相談して決定する。

リーディング・リスト：

- ・神野直彦・金子勝『「福祉政府」への提言』岩波書店
- ・ジョン・ロールズ『公正としての正義再説』岩波書店

産業社会論演習

教授 金子 勝

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法：

日本経済の現状と経済政策について、テキストを取り上げつつ議論する。

授業内容：

本年度は、つぎの2つのテーマを主に取り上げる予定である。一つは、財政赤字と財政政策にかかわる諸問題。いま一つは、三位一体改革と地方分権にかかわる諸問題である。この2つのテーマを具体的に考えつつ、マクロ経済学の理論的問題についても深めてゆきたい。

テキスト：

参加者と相談して決めたい。

リーディング・リスト：

- ・金子勝『市場と制度の政治経済学』東京大学出版会
- ・神野直彦・金子勝編『財政崩壊を食い止める』岩波書店
- ・神野直彦・金子勝『地方に税源を』東洋経済新報社

プロジェクト科目

プロジェクト

本年度休講。

博士課程設置科目講義要綱

おおむね下記のように構成されています。

| 学則に示される科目名（具体的な科目名）*1 | 担当者名 |
|-----------------------|------|
| 1. 授業形態*2 | |
| 2. 当科目の目標・意義・方法 | } |
| 3. 授業内容 | |
| 4. テキスト | |
| 5. リーディング・リスト | |
| | |

*1 : () 内の記載がないもの、および項目の記載のないものはそれぞれ省略されています。

*2 : 本書作成後に変更される場合もありますので、時間割及び掲示を参照してください。

注 : 同一名称の科目については、担当者名は五十音順で並べられています。

特 論 科 目

ミクロ経済学特論

教授 塩澤修平
助教授 玉田康成

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期に開講される「ミクロ経済学特論（個別経済主体の行動）」に引き続き、ミクロ経済学の理論について講義する。

授業内容：

1. 競争均衡の存在，局所の一意性，安定性
2. 厚生経済学の基本定理
3. 競争均衡とコア

テキスト：

- ・ Mas-Colell, Whinston and Green, *Microeconomic Theory*, Oxford University Press, 1995

ミクロ経済学特論（都市経済論）

教授 瀬古美喜

授業形態：春学期 2 単位・講義および演習

目標・意義・方法：

市場メカニズムが都市においてどのように働いているのかという観点に立って，都市経済学や新経済地理学の基礎的な理論モデルと実証研究について学ぶ。学部修了程度の経済理論と，計量経済学の知識がある方が望ましい。

授業内容：

具体的には，都市空間構造の理論的実証的分析，住宅市場と住宅問題，都市における集積と規模の経済，都市の成長，都市交通などに関する文献を取り上げ，検討する。

テキスト：

具体的な文献については，授業の中で指示する。

リーディング・リスト：

- ・ Edwin S. Mills and Bruce W. Hamilton, *Urban Economics, 5th edition*, Scott, Foresman & Co., 1994
- ・ Denise DiPasquale and William C. Wheaton, *Urban Economics and Real Estate Markets*, Prentice Hall, 1996 (瀬古美喜・黒田達朗訳『都市と不動産の経済学』創文社，2001年)
- ・ J. V. Henderson, *Economic Theory and the Cities, 2nd edition*, Academic Press, 1985

- ・ Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds., *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.1: Regional Economics, Vol.2: Urban Economics, Vol.3: Applied Urban Economics*, North-Holland and Elsevier Science Publisher

- ・ M. Fujita, P. Krugman and A. J. Venables, *The Spatial Economy*, MIT Press, 1999 (小出訳『空間経済学』，東洋経済新報社)

- ・ M. Fujita and J-F Thisse, *Economics of Agglomeration*, Cambridge University Press, 2002

- ・ 日本住宅総合センター『季刊・住宅土地経済』（各版）

- ・ 中村良平・田淵隆俊『都市と地域の経済学』日本評論社，1996年

- ・ 瀬古美喜『土地と住宅の経済分析—日本の住宅市場の計量経済学的分析』創文社，1998年

- ・ 金本良嗣『都市経済学』東洋経済新報社，1997年

ミクロ経済学特論（都市経済論）

教授 瀬古美喜

授業形態：秋学期 2 単位・講義および演習

目標・意義・方法：

市場メカニズムが都市においてどのように働いているのかという観点に立って，都市経済学や新経済地理学の基礎的な理論モデルと実証研究について学ぶ。学部修了程度の経済理論と，計量経済学の知識がある方が望ましい。

授業内容：

具体的には，都市空間構造の理論的実証的分析，住宅市場と住宅問題，都市における集積と規模の経済，都市の成長，都市交通などに関する文献を取り上げ，検討する。

テキスト：

具体的な文献については，授業の中で指示する。

リーディング・リスト：

- ・ Edwin S. Mills and Bruce W. Hamilton, *Urban Economics, 5th edition*, Scott, Foresman & Co., 1994
- ・ Denise DiPasquale and William C. Wheaton, *Urban Economics and Real Estate Markets*, Prentice Hall, 1996 (瀬古美喜・黒田達朗訳『都市と不動産の経済学』創文社，2001年)
- ・ J. V. Henderson, *Economic Theory and the Cities, 2nd edition*, Academic Press, 1985
- ・ Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds.,

Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.1: Regional Economics, Vol.2: Urban Economics, Vol.3: Applied Urban Economics, North-Holland and Elsevier Science Publisher

- ・ M. Fujita, P. Krugman and A. J. Venables, *The Spatial Economy*, MIT Press, 1999 (小出訳『空間経済学』, 東洋経済新報社)
- ・ M. Fujita and J-F Thisse, *Economics of Agglomeration*, Cambridge University Press, 2002
- ・ 日本住宅総合センター『季刊・住宅土地経済』(各版)
- ・ 中村良平・田淵隆俊『都市と地域の経済学』日本評論社, 1996年
- ・ 瀬古美喜『土地と住宅の経済分析—日本の住宅市場の計量経済学的分析』創文社, 1998年
- ・ 金本良嗣『都市経済学』東洋経済新報社, 1997年

ミクロ経済学特論 (個別経済主体の行動)

教授 中村 慎 助
教授 須田 伸 一

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

学部レベルのミクロ経済学を修了している学生を対象にして、消費者行動、生産者行動の基本的性質について講義する。

分析用具としては凸解析および線形代数の初歩を用いる。

授業内容：

1. 消費者行動
2. 生産者行動
3. 不確実性下の意思決定

リーディング・リスト：

- ・ A. Mas-Colell, M. D. Whinston, and J. R. Green, *Microeconomic Theory*, Oxford University Press, 1995

ミクロ経済学特論 (ゲーム理論)

教授 中山 幹 夫
名誉教授 川 又 邦 雄

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

ゲーム理論の上級の基本的文献を理解し、最近の発展について議論する。

リーディング・リスト：

- ・ R. J. Aumann and S. Hart, *Handbook of Game Theory, Vols. I, II and III*.

ミクロ経済学特論 (ゲーム理論)

教授 中山 幹 夫
名誉教授 川 又 邦 雄

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

ミクロ経済学特論 (産業組織論)

教授 中山 幹 夫
助教授 グレーヴァ 香子

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

この授業では講義と演習を通じて、産業組織理論を中心とした経済分析に使われる中級ゲーム理論を学ぶ。学部レベルの初級ゲーム理論の知識を前提とする。成績は演習と学期末のレポートによって決まる。

授業内容：

1. 非協力ゲーム
 - (a) 復習：ナッシュ均衡，部分ゲーム完全均衡，フォーク定理，契約
 - (b) ベイジアンゲームとベイジアンナッシュ均衡
 - (c) Trembling-hand perfect equilibrium, 完全ベイジアン均衡，逐次均衡とその応用
 - (d) 進化ゲーム
2. 協力ゲーム
 - (a) TU ゲームとその応用：コア，安定集合，交渉集合，カーネル，仁
 - (b) NTU ゲームとその応用： λ -transfer value, 市場ゲーム
 - (c) 協力ゲームの戦略形：強均衡，coalition-proof ナッシュ均衡
 - (d) コア分析：アルファコア，ベータコア，自己拘束的戦略，優位懲罰戦略など
 - (e) Scarf の定理と純粋交換ゲーム，NTU 市場ゲーム

リーディング・リスト：

1. 中山幹夫『はじめてのゲーム理論』有斐閣，1997年
2. 岡田章『ゲーム理論』有斐閣，1996年
3. Fudenberg and Tirole, *Game Theory*, MIT Press, 1991
4. Osborne and Rubinstein, *A Course in Game*

マクロ経済学特論

教授 前 多 康 男
教授 尾 崎 裕 之

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

マクロ経済の諸問題を扱う基本的なモデルとしてはいくつかの型がある。時間の取り扱い方で離散型と連続型に分かれ、対象とする期間の長さによって、有限期のモデルと無限期のモデル、また基本的な枠組みで世代重複モデル、無限期まで生きる経済主体のモデル等に分かれる。公共経済学では、世代重複モデルと無限期まで生きる経済主体のモデルの離散型のモデルを講義するが、特に、モデルの基本的な構造に焦点を置く。講義の目的は、世代重複モデルや無限期まで生きる経済主体のモデルの基本的な枠組みを理解し、実際のモデル構築に自在に理論を使用できるようになることにある。また、そのための数学ツールをマスターすることも本講義の目的とするが、主にモデルの使い方が講義の主な内容であり、高度に数学的な講義にはならない。したがって、履修者の数学的なバックグラウンドとしては、基本的な微分・積分に関する知識を想定している。特に、政府の政策が資源配分に与える影響について、講義の重点が置かれる。受講者には、積極的に学習する態度が望まれる。

授業内容：

内容として以下を含む。1. 経済環境の描写, 2. 競争均衡, 3. 政府の導入, 4. 新古典派成長モデル, 5. 貨幣モデル

テキスト：

講義前半のテキスト：マッキヤンドレス・ウォレス著（川又・國府田・酒井・前多訳）『動学マクロ経済学』, 創文社, 1994 年（原書：Introduction to Dynamic Macroeconomics, Harvard）（注：2 刷りで 1 刷りのタイプミスが訂正されている）。

講義後半のテキストは、授業開始時に知らせる。

リーディング・リスト：

- ・ Azariadis, C., *Intertemporal Macroeconomics*, Blackwell, 1993
- ・ Sargent, T.J., *Dynamic Macroeconomic Theory*, Harvard, 1987
- ・ Roger E. A. Farmer, *Macroeconomics of Self-fulfilling Prophecies, 2nd edition*, MIT Press, 1999
- ・ Stokey, N.L. and R.E. Lucas, *Recursive Methods in*

マクロ経済学特論

教授 矢 野 誠

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

マクロ経済学に関する数学的分析手法を検討する。

授業内容：

1. 消費者の行動における動学的最適化
2. 企業の行動における動学的最適化
3. 動学的均衡の経路
4. 非線型動学と経済変動
5. 確率過程と経済変動
6. 確率的モデルと決定論的モデル

数理経済学特論（I-A）

教授 丸 山 徹

授業形態：春学期 2 単位・講義

授業内容：

古典的一般均衡理論における数学解析からの方法を、静学・動学の両面にわたって概説する。

テキスト：

- ・ P.A. Samuelson, *Foundations of Economic Analysis*, Harvard University. Press, Cambridge 1947
- ・ 丸山徹『数理経済学の方法』創文社, 1995 年

数理経済学特論（I-B）

教授 丸 山 徹

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

数理経済学特論（I-A）の続論。

数理経済学特論（II）

講師 高 橋 明 彦

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

数理ファイナンスの基礎事項を習得すること。

授業内容：

条件付請求権や最適ポートフォリオに関する理論的・数値的話題を講義する。

テキスト：

特になし。

リーディング・リスト：

授業中に指示する。

数理経済学特論 (Ⅲ)

理工学部 教授 菊池 紀夫

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

函数解析を通して変分問題・最適化問題の理解。

授業内容：

Lebesgue 積分, Sobolev 空間, 函数解析の基礎理論から始めて変分問題の数理解析を扱う。多様体間の調和写像型変分問題, 即ち, 制限条件付でのエネルギー型変分問題にも触れたい。変分汎函数の最小化写像とは限らぬ一般臨界点解析は数理解析におけるこれからの大切な課題である。

テキスト：

配布する講義原稿。

計量経済学特論 (パネルデータの計量経済学)

【経商連携 COE 科目】

教授 辻村 和 佑
助教授 宮内 環
助教授 河井 啓 希

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期と秋学期を通じて, パネルデータを用いた実証分析に必要な計量経済学の方法を講義する。

なおこの授業は, 21 世紀 COE プログラム「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析—構造的経済政策の構築に向けて—」の連携科目として設置され, 商学研究科の「計量経済学」(修士課程)(担当は新保一成教授)と合同で行う。

授業内容：

授業の計画

- 1 パネルデータの特徴と既存のパネルデータ
- 2 資料発生機構, 構造, 識別, 統御実験
- 3 通常最小二乗法の前提と推定量の性質
- 4 観測されない変数を含む線形モデル
一般化最小二乗法と実行可能一般化最小二乗法
ランダム効果と固定効果
1 元配置と 2 元配置
特定化検定
- 5 パネルデータモデルと一般積率法
- 6 漸近理論と最尤推定法

春学期と秋学期の両方を履修することが望ましい。

成績評価方法は, 各学期末に各自の研究と計量経済学との関連について述べたタームペーパーを提出してもらう。

テキスト：

・ Paul A. Ruud, *An Introduction to Classical Econometric Theory*, Oxford University Press

リーディング・リスト：

- ・ Jefferey M. Wooldridge, *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press
- ・ Badi H. Baltagi, *Econometric Analysis of Panel Data*, Wiley
- ・ 小尾恵一郎『計量経済学入門』日本評論社

計量経済学特論 (パネルデータの計量経済学)

【経商連携 COE 科目】

教授 辻村 和 佑
助教授 宮内 環
助教授 河井 啓 希

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期と秋学期を通じて, パネルデータを用いた実証分析に必要な計量経済学の方法を講義する。

なおこの授業は, 21 世紀 COE プログラム「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析—構造的経済政策の構築に向けて—」の連携科目として設置され, 商学研究科の「計量経済学」(修士課程)(担当は新保一成教授)と合同で行う。

授業内容：

授業の計画

- 1 パネルデータと不均一分散
- 2 パネルデータと系列相関
- 3 パネルデータと多変量回帰
- 4 パネルデータと同時方程式体系
- 5 離散的選択モデル
- 6 打ち切りデータと切断データ
- 7 動学的パネルデータ分析
- 8 その他のパネルデータに関する話題
不完全パネルデータ, 擬似パネルデータ, 非定常パネルデータなど

春学期と秋学期の両方を履修することが望ましい。

成績評価方法は, 各学期末に各自の研究と計量経済学との関連について述べたタームペーパーを提出してもらう。

テキスト：

・ Paul A. Ruud, *An Introduction to Classical Econometric Theory*, Oxford University Press

リーディング・リスト：

- ・ Jefferey M. Wooldridge, *Econometric Analysis of*

Cross Section and Panel Data, MIT Press

- ・ Badi H. Baltagi, *Econometric Analysis of Panel Data*, Wiley
- ・ 小尾恵一郎『計量経済学入門』日本評論社

計量経済学特論

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この授業の目的は計量経済学の理論的な知識を高めること、同時に高度なデータ分析ができることである。実証分析に関する指導のために、数回パソコンによる演習を行う。

授業内容：

授業の内容は下記の通りである。

1. 予備知識
 - a. 行列代数
 - b. 条件付き期待値
 - c. 漸近理論
2. モメント法による推定・仮説検定
 - a. 標準的回帰モデルと最小自乗法 (OLS)
 - b. 操作変数法 (IV)・2 段階最小自乗法 (2SLS)
 - c. 一般化最小自乗法 (GLS)
 - d. 診断検定 (過剰識別テスト, 外生性のテストなど)
3. LIMDEP による計量分析
4. 他の推定方法
 - a. M—推定
 - b. 最尤法 (ML 法)
 - c. GMM 法
5. 時系列分析
 - a. 単位根検定
 - b. 共和分分析
 - c. 誤差修正モデル

実証分析のために、LIMDEP8.0 という計量ソフトを利用し、演習を行うが、LIMDEP に関する予備知識は全く必要としない。

テキスト：

- ・ Wooldridge, J.M., *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press, Cambridge, MA, 2002
- ・ Greene, W.H., *Econometric Analysis, 5th edition*, Prentice Hall, Upper Saddle River, NJ, 2003

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

質問・相談：

気楽に mckenzie@econ.keio.ac.jp に問い合わせてください。

計量経済学特論

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

経済学史・思想史特論 (日本社会経済思想史)

教授 小室正紀

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

荻生徂徠『政談』を輪読しながら、徂徠の具体的政治経済政策論と基本哲学との関係を考察する。徂徠学は、江戸時代日本儒学を特色づける最も注目すべき思想の一つであり、その基本哲学は『弁道』『弁名』の二著で展開されている。それに対して、『政談』は時務策に関して幕府からの諮問に答える形で書かれた具体的政策論である。本講義では、本書を読みながら徂徠において現実と理論がいかなる形で結びついていたかを考察する。また、関連して荻生徂徠関係の文献につき、履修者に報告を求めることもある。なお、小室担当の「経済学史・思想史演習 (日本社会経済思想史演習)」とあわせて履修することが望ましい。

リーディング・リスト：

- ・ 丸山真男『日本政治思想史研究』東京大学出版会、1952 年
- ・ 田原嗣郎『徂徠学の世界』東京大学出版会、1991 年
- ・ 尾藤正英『江戸時代とはなにか』岩波書店、1992 年
- ・ 吉川幸次郎『仁斎・徂徠・宣長』岩波書店、1975 年
- ・ 尾藤正英編『荻生徂徠』中央公論社 (中公バックス；日本の名著)、1983 年
- ・ 子安宣邦『「事件」としての徂徠学』青土社、1990 年

経済学史・思想史特論

教授 高草木 光 一

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

トクヴィルの思想を中心にして、民主主義の問題点を考察する。

授業内容：

トクヴィル『アメリカの民主主義』および仏語・英語・邦語の研究文献を題材に用いる。必要に応じて、

参加者にはリポーターの役割を果たしてもらおう。

テキスト：

- ・ Alexis de Tocqueville, *De la démocratie en Amérique*, Paris, 1835-40, nouvelle édition historico-critique revue et augmentée par Edouard Nolla, Paris: Vrin, 2vols, 1990
- ・ 井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治（全 3 巻）』（講談社学術文庫）があるが、翻訳に問題があるため、参考にとどめる。

リーディング・リスト：

- ・ トクヴィル（小山勉訳）『旧体制と革命』ちくま学芸文庫，1998 年
- ・ トクヴィル（喜安朗訳）『フランス二月革命の日々―トクヴィル回想録』岩波文庫，1988 年

経済史特論

助教授 飯 田 恭
助教授 崔 在 東

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

本科目では、社会経済史の視点から、欧米を中心とする各地の歴史を考察する。とりわけ「日常」にかかわる個別の具体的な歴史事象を、社会経済全体の「構造」と関連づけながらとらえる方法を陶冶することを目的としつつ、活発に討論したい。

授業内容：

本科目で取り上げるテーマ（担当教員の守備範囲）は、およそ次の通りである。

1. 個と共同体
2. 家族・親族問題
3. 社会的移動の諸相

受講者の専門・研究テーマ・興味関心が広い意味でこれらのテーマと重なり合えば、問題はない。また、考察対象地域についても、欧米に限定するものではない。

演習形式を採用する。参加者には、本科目の趣旨を踏まえた上で、各自の専門領域の研究史・研究動向を幅広くしかも詳細に紹介し、その中で自らの研究の位置づけを明らかにするような報告を求める。この報告を参加者全員で共有し、それについて議論したい。このことを通じて、何よりも参加者各自の研究が刺激され、またそれが同時に参加者全員への刺激となることが望まれる。

経済史特論

助教授 飯 田 恭
助教授 崔 在 東

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法 他：
春学期参照。

経済史特論

名誉教授 岡 田 泰 男

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

アメリカ経済史の研究

授業内容：

アメリカ経済史の諸問題

アメリカ経済史の研究は、近年大きく変化している。かつて「新しい経済史」と呼ばれた理論的、計量的分析の方法は、もはや一般化し、「新しい」とはいえなくなった。他方、社会史や女性史の研究が進み、その成果を経済史がとり入れることも多くなった。この講義では、研究史的サーヴェイをおこなうと共に、近年話題を集めている市場革命、消費革命、フロンティア理論の再構成などについて述べることにしたい。

経済史特論

名誉教授 岡 田 泰 男

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

春学期の継続。

経済史特論（日本経済史）

教授 杉 山 伸 也
教授 柳 沢 遊

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

徳川期以降、現代にいたるまでの日本経済の変遷について概観する。テキストは、石井寛治編『近代日本流通史』（東京堂出版，2005 年 4 月刊）を使用する予定である。

成績評価は、授業での報告や討論への参加等を考慮して総合的に判断する。

履修に際しては、日本経済史の基本的事実関係について、すでに履修していることが前提となる。また留学生の場合は、日本経済史の基本的用語をふくめ、十分な日本語能力を備えていることが望ましい。

経済史特論（日本経済史）

教授 杉山 伸也
教授 柳沢 遊

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

徳川期および明治期の日本経済に関する研究書・論文をとりあげ、院生による報告とディスカッションを中心に行なう。テキストは高村直助編『明治前期の日本経済』（日本経済評論社、2004 年）を予定しているが、受講者の関心を考慮に入れて選択する。

成績評価は、授業での報告や討論への参加等を考慮して総合的に判断する。

履修に際しては、日本経済史の基本的事実関係について、すでに履修していることが前提となる。また留学生の場合は、日本経済史の基本的用語をふくめ、十分な日本語能力を備えていることが望ましい。

経済史特論

教授 古田 和子

授業形態：春学期 2 単位・演習

授業内容：

19 世紀後半から 20 世紀前半における東アジアおよび東南アジアの社会経済構造を、貿易・植民地経済・アジア域内労働力移動の観点から検討していく。参加者は、これらのテーマに関する文献リストの作成とその検討作業を通して、テーマへの専門的な理解を深めていくことが求められる。

経済史特論

教授 古田 和子

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期に引続いて、19 世紀後半から 20 世紀前半における東アジアおよび東南アジアの社会経済構造を、貿易・植民地経済・アジア域内労働力移動の観点から検討していく。検討してきた研究文献の整理を通して、先行研究による成果と残された課題について考察を深め、具体的な研究対象を設定する作業を進める。

制度・政策論特論

教授 飯野 靖 四

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この授業は学部時代に財政論を履修しなかった諸君のために行われる。したがって授業内容は原則として

学部の授業と同じであるが、少人数であることを利用して討論も混じえて進めたいと考えている。

授業内容：

1. 財政論の種類
2. スウェーデンの財政と税制
3. 政府の仕事
4. 公共財
5. 日本の税制、特に所得税
6. 法人税（国際課税も含む）

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

- ・『図説・日本の財政』東洋経済新報社
- ・『図説・日本の税制』財経詳報社

制度・政策論特論

教授 飯野 靖 四

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この授業は学部時代に財政論を履修しなかった諸君のために行われる。したがって授業内容は原則として学部の授業と同じであるが、少人数であることを利用して討論も混じえて進めたいと考えている。

授業内容：

7. 日本の消費税
8. 公債の理論
9. 日本の社会保障制度
10. いわゆるフィスカル・ポリシー
11. 環境税

（春学期予定通り進まなかった場合にはその続きから始める可能性有）

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

- ・『図説・日本の財政』東洋経済新報社
- ・『図説・日本の税制』財経詳報社

制度・政策論特論

教授 大村 達 弥

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

講義の目標は、変容しつつある経済システムや産業構造の動きを踏まえ、法・政治システムとの関わりも含め学際的視点から現代の経済問題の検討を進めることにある。

授業内容：

今年度の具体的内容としては、情報通信および関連産業における規制緩和とネットワークの発展が産業構造の変化を促している点に着目して、関連する経済規制改革、ネットワーク外部性、電子取引の理論的・実際の検討等を扱う予定である。

テキスト：

授業開始の時点で指定する。

リーディング・リスト：

以下の文献は 2004 年度で取り上げたものである。

- ・ Church & Gandal, *Network Effects, Software Provision, and Standardization*, J. Indust. Econ., 1992
- ・ Farrell & Saloner, *Standardization, compatibility, and innovation*, Rand, JE, 1985

制度・政策論特論

教授 大村 達 弥

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

制度・政策論特論

教授 北村 洋 基

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

現代資本主義を情報化という視点から分析する。そのことによって現代資本主義の何が明らかになるのかを検討するとともに、経済学の理論的課題を探る。

授業内容：

テキストの講読と討論を中心とする。マルクス経済学についての一定の理解・素養を必要とする。

テキスト：

- ・ 北村洋基『情報資本主義論』大月書店

リーディング・リスト：

適宜紹介する。

制度・政策論特論

教授 北村 洋 基

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

現代日本経済の到達点と問題点について、批判的視点から検討する。

授業内容：

テキストの読解と討論を中心に進める。

テキスト：

第 1 回目の講義の際に指示する。

リーディング・リスト：

適宜紹介する。

制度・政策論特論

教授 櫻川 昌 哉

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

国内外の金融にかかわる重要なテーマに触れ、論文を書けるようにする。

授業内容：

国内外の金融にかかわる最新の英語の学術論文を読む。「国際経済論特論」と 2 コマ続けて行う。

テキスト：

なし。初回にリーディングリストを渡す。

リーディング・リスト：

初回にリーディングリストを渡す。櫻川昌哉『金融危機の経済分析』（東京大学出版会）を参考書として適宜使う。

制度・政策論特論

教授 島田 晴 雄

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

日本経済の制度と政策に関する主要なテーマを選んで、概説を行うとともに、関連文献を読み、参加者の興味も勘案して議論を深める。

制度・政策論特論

教授 島田 晴 雄

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

春学期参照。

制度・政策論特論

教授 寺出 道 雄

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

この講義では、農業経済論の領域から大きく 2 つの問題をとりあげて概観する。

すなわち、環境と農業（林業・水産業を含む）の係わりについての問題と、資本主義の発展と農業の変化に係わる問題である。この 2 つの話題は、それぞれ農業経済論の新たな研究課題と伝統的な研究課題であ

り、相互に十分に連続した問題として講義することは困難であるが、研究課題が大きく変わっていったなかで、農業経済論の概観を得るためには、双方にふれる必要があると考える。

授業内容：

前者については、1. 植物の物質生産と農業 2. 農法・農業技術の変化 3. 再生可能資源の利用 4. 現代の農業技術等の話題を、

後者については、1. 農民層分解 2. 農工間の労働力移動 3. 19世紀末以来のいくつかの農業不況 4. 現代の農業政策等の話題を取り上げる。

リーディング・リスト：

講義の全体をカバーする文献はないので、授業中に参考文献を指示する。なお、後者の話題では、速水佑次郎他『農業経済論』（岩波書店、2002年）に言及することが多い。

制度・政策論特論

教授 中澤敏明
助教授 河井啓希

授業形態：春学期2単位・合同講義

目標・意義・方法：

このコースは、修士課程開講の「産業組織論」と同じであるが、博士課程の学生については、その蓄積された知見をもとに質疑・コメントにおいて、クラスへの質的貢献を期待する。

このコースは、産業組織論の分野全体について広く紹介することを課題とせず、産業組織論の実証分析をレビューすることを通じて、組織論の3分割法でいえばとくに構造・行動に焦点をあてて、事実発見・理論検証を行うことを直接的に目的としている。中澤・河井2名で毎週交代しながら、一方が講義し他がコメントを加え質疑する。典型的には、実証分析の中で主要な先行研究を紹介し相互比較しながら論じ、扱われている争点が産業組織論の進展の系譜の中で占める位置・研究が明らかにした点・問題点・今後に残された課題などを紹介する。必要に応じて、実証分析にかかわる基本的な理論をレビューする。昨年の例（春）では、中澤がコーポレート・ガバナンスと株式市場・市場競争に係る理論と実証分析、河井が製品差別性・参入等の市場構造・行動にかかわる実証分析を扱った。今年度も、コーポレート・ガバナンスと市場競争との関係についての理論的研究を基礎にして、これにかかわる実証分析に進む予定である。河井は、市場参入にかかわる実証研究を特に、ニュー・エンピリカル

IOのアプローチの系譜にウエイトを置きながらサーベイする。秋学期の説明も参照されたい。

授業内容：

学部レベルの知識をもっていることを前提とする。計量経済学・ゲーム理論についても基礎的知識を備えていることが望まれる。後者については、博士課程で設けられている「ミクロ経済学特論（産業組織論）」を並行して履修することが望ましい。河井の内容を例示すると、昨年度は次のようであった。

Market Power の測定

1. New Empirical Industrial Organization
2. Early Studies: Conduct Parameter Models
3. Some Developments on Conduct Parameter Model
4. Nonparametric Studies
5. Product Differentiation 1: Price Reaction Curve
6. Product Differentiation 2: Dynamic Expansions

テキスト：

講義に使用する参考文献については、講義中に説明するが、履修判断の参考のために、これまで扱った代表的なテキストをいくつか紹介する。論文については、秋学期の案内に例示するので、参照されたい。

- M. Stephen, *Advanced Industrial Organization*, Blackwell, 1993, 2002
- P. Ghemawat, *Games Business Play*, MIT Press, 1997
- O. Hart, *Firms, Contracts, and Financial Structure*, Oxford, 1995
- L. Phlips (ed), *Applied Industrial Economics*, Cambridge, 1998
- L. Cabral (ed), *Readings in Industrial Organization*, Blackwell, 2000
- X. Vives (ed), *Corporate Governance*, Cambridge, 2002
- E. Rasmusen, *Games and Information*, Blackwell, 1989, 2001
- E. Wolstetter, *Topics in Microeconomics*, Cambridge

制度・政策論特論

教授 中澤敏明
助教授 河井啓希

授業形態：秋学期2単位・合同講義

目標・意義・方法：

講義の目的・進め方は、春学期に同じである。そちらを参照されたい。テーマとしては、昨年の例（秋）では、中澤がコーポレート・ガバナンスとの関連で、

会社本質論・垂直統合に係る理論分析を紹介した。河井は、春学期に続き、製品差別性他の市場構造・行動にかかわる実証分析をレビューするとともに、市場への参入の実態・参入発生件数および均衡企業数の実証分析の系譜を紹介した。今年度は、春学期の進捗をみて、カバーするテーマを確定することになる。

授業内容：

学部レベルの知識をもっていることを前提とする。計量経済学・ゲーム理論についても基礎的知識を備えていることが望まれる。後者については、博士課程で設けられている「ミクロ経済学特論（産業組織論）」を並行して履修することが望ましい。

昨年度、河井の扱ったテーマは次のとおりである。

参入退出の実証研究

1. 記述的分析：サーベイ、企業動態と生産性、企業動態と雇用
2. Entry-Exit Decision: Entry Deterrence, Sunk cost の測定
3. 参入退出と市場の成果：Market Structure, Market Performance
4. Dynamic Model: 市場動態の確率モデル
5. 差別化市場における参入の分析

リーディング・リスト：

講義に使用する参考文献については、講義中に説明するが、履修判断の参考のために、昨年扱った論文をいくつか紹介する。テキストについては、春学期の案内を参照されたい。

昨年度、中澤の扱ったものを例示する。

- ・ S. Bhagat and R. H. Jefferis, Jr, *The Econometrics of Corporate Governance Studies*, MIT press, 2002
- ・ M. Bertrand and S. Mullainathan, *Are CEOs rewarded for luck? The ones without Principals are*, QJE, Vol.116, 2001
- ・ M. J. Conyon, *Perspectives on the governance of executive compensation*, M. Waterson edited, *Competition, Monopoly and Corporate Governance*, Essays in Honor of Keith Cowling, Edward Elagar, 2003
- ・ M. Hellwig, *On the Economics and Politics of Corporate Finance and Corporate Control*. X. Vives edited Corporate Governance, Cambridge, 2000
- ・ Motta, M. and M. Polo, *Leniency Programs and Cartel Prosecution*, International Journal of Industrial Organization, Vol.21, 2003 347-379 (Motta のサイトに改善版あり)

- ・ R. G. Rajan and L. Zingales, *Power in a theory of the firm*, QJE, Vol.113, No2, May 1998, 387-432
- ・ R. G. Rajan and L. Zingales, *The firm as a dedicated hierarchy: a theory of the origins and growth of firms*, QJE, Vol.116, 2001, 805-851
- ・ R. G. Rajan and L. Zingales, *The influence of the financial revolution on the nature of firms*, AER, Vol.91, 2001, 206-211

制度・政策論特論

教授 渡辺 幸男
 助教授 駒形 哲哉

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

急速に発展する中国工業を題材にとりあげ、それを地域産業・産業集積の視点から検討する。具体的には、駒形、渡辺の中国工業発展について研究成果を利用して講義を行うとともに、中国研究者による中国地域産業発展についての研究も取り上げる。

中国研究者による中国語での研究成果も輪読することになるが、その場合は駒形等による日本語でのレジュメを利用して検討することになる。それゆえ中国語での輪読が困難なものにも履修可能である。

制度・政策論特論

教授 渡辺 幸男
 助教授 駒形 哲哉

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

春学期参照。

国際経済論特論

教授 櫻川 昌哉

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

国内外の金融にかかわる重要なテーマに触れ、論文を書けるようにする。

授業内容：

国内外の金融にかかわる最新の学術論文を読む。特にアジア通貨危機に関する文献も読む。

テキスト：

なし。

リーディング・リスト：

- ・ 櫻川昌哉『金融危機の経済分析』東京大学出版会
- ・ Freixas and Rochet, *Microeconomics of Banking*,

国際経済論特論

教授 竹 森 俊 平

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

国際金融、および国際貿易についての重要な Issue について講義する。また、研究を進めるための文献を紹介する。

リーディング・リスト：

文献等については、第一回目の講義の際に指示する。

国際経済論特論

教授 若 杉 隆 平

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

国際貿易・直接投資に関して、基礎理論と実証分析について、中級レベルの講義をする。

授業内容：

対象とする内容は以下のようなものである。

1. Ricardo の貿易理論
2. ヘクシャー=オリーの貿易理論
3. 貿易均衡
4. 特殊要素モデル
5. 完全競争市場の下での貿易政策
6. 不完全競争市場下での貿易政策
7. 直接投資
8. イノベーションと貿易
9. 自由貿易と地域貿易協定

テキスト：

- ・ Robert Feenstra, *Advanced International Trade-Theory and Evidence*, Princeton University Press, 2004
- ・ Jagdish Bhagwati, Arvind Panagariya, and T. N. Srinivasan, *Lectures on International Trade*, 2nd edition, The MIT Press, 1998
- ・ 伊藤元重・大山道広『国際貿易』岩波書店, 1985 年

リーディング・リスト：

論文に関するリーディング・リストは、その都度、紹介する。

国際経済論特論

教授 若 杉 隆 平

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

社会・環境論特論

教授 倉 沢 愛 子

教授 清 水 透

授業形態：秋学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

歴史学におけるフィールドワークの重要性を認識するとともに、その過程で行き当たるであろう様々な問題を考え、解決策を見出す努力をする。

授業内容：

フィールドワークを基礎とする歴史研究を踏まえつつ、以下の 3 点を中心に議論・検討する。

- (1) 歴史研究の方法：文献史学とオーラルヒストリー
- (2) 研究者と研究対象との関係性：知的営みとしての歴史研究と日常
- (3) 個と普遍の問題：個と大状況、日常と非日常

テキスト：

フィールドワークに基づいて書かれた研究書を皆で読みながら進めていく。どの本を選ぶかは、受講生の顔ぶれを見てから決める。

リーディング・リスト：

適宜指定する。

社会・環境論特論

教授 杉 浦 章 介

授業形態：春学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

トランスナショナルな生産、物流ネットワークや、FDI パターンの変化に伴って、各国民経済のみならず、都市経済や産業集積に大きな変化が起こっている。このような現状とその将来について、基礎的な文献や最新の動向を紹介しながら、この分野における分析的研究や論文の作成を支援することを目的とする。

授業内容：

下記のテキストに収録されている論文を読み、報告を行うという方法で進めてゆく。なるべく広い範囲にわたる関連するトピックスも取り上げて行きたい。

主なトピックスは、上記のコンテキストにおける、テクノロジー、企業戦略、企業組織、そして空間的側面としての都市や地域（グローバル都市ネットワークや産業クラスターなど）である。

テキスト：

- ・ Chandler, Hagstrom and Solvell (eds), *The Dynamic Firm: The Role of Technology, Strategy, Organization, and Regions*, Oxford University Press, 1998, 2003

リーディング・リスト：

- ・ Henderson and Thisse (eds), *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.4, Cities and Geography*, Elsevier, 2004
- ・ Clark, Feldman and Gertler (eds), *The Oxford Handbook of Economic Geography*, Oxford University Press, 2000

社会・環境論特論

教授 杉浦章介

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

春学期の継続。

社会・環境論特論

教授 津谷典子

授業形態：秋学期 2 単位・講義

目標・意義・方法：

本特論の目的は、わが国の少子高齢化について、近年の人口学および経済学における理論的および計量分析的展開を理解し、それを学生諸君の今後実証的分析に基づく研究に応用するための学習をすることにある。ここでは特に、人口高齢化や出生率低下などの人口変動に関する形式人口学的研究と、ライフコース分析 (Life course analysis) を中心とした多変量解析モデルを用いた研究に関する内外の文献を講読し、その理論的 (theoretical) かつ技術的 (technical) 意味を多面的に検討する。

近年、多変量解析のためのマイクロ・データの入手が以前に比べ容易になり、またライフコース分析を応用することのできるパネル調査および出産歴、就業歴、結婚歴などのライフ・ヒストリーに関する大規模調査データも収集されている。これら調査データを使っての学生諸君自身の研究への応用についても適宜アドバイスする。

授業内容：

本特論では、担当者が予め選定した論文のリーディング・リストに従い、毎週学生諸君が論文の内容について報告を行う。その後、担当者および学生報告者への質疑応答、そしてクラス全体での討論を行い、最後に講師が論文テーマおよび内容についてのまとめとし

て短い講義を行う。学期の終わりには、担当者が指示するテーマについてレポートを課すが、もし自分自身のテーマでレポートを書きたい場合は、それも可能である。

さらに、学生諸君が現在行っている（もしくは行うためのプロポーザルを作成中である）研究論文や学位論文についての報告も、ニーズがあれば実施する。担当者および他の学生諸君からの質問とコメントをもらい、クラス討論を行う。これによって、学会での報告および学位論文執筆の準備とすることが望まれる。

リーディング・リスト：

学期の最初に配布する。

社会・環境論特論

教授 細田衛士

教授 大沼あゆみ

授業形態：春学期 2 単位・合同講義

目標・意義・方法：

本授業では、環境経済学の理論的基礎を講義する。環境経済学の理論としては、伝統的な新古典派のアプローチや新制度学的アプローチなど多様な分析手法がある。ここでは、環境経済学のテキストで既に定着しつつあるものを中心に講義を進める。

授業内容：

講義の流れは以下の通りである。尚、取り上げる内容には若干の変更もあり得る。

- 第 1 章 環境経済学の流れ
- 第 2 章 公共財としての環境
- 第 3 章 環境問題と所有権：制度学派的アプローチ
- 第 4 章 オープンアクセスと再生可能資源
- 第 5 章 再生不可能資源
- 第 6 章 課税政策
- 第 7 章 排出権売買制度
- 第 8 章 デポジット制度
- 第 9 章 コースの定理
- 第 10 章 廃棄物とリサイクル
- 第 11 章 汚染者支払い原則
- 第 12 章 開発と環境保全

テキスト：

特にない。

リーディング・リスト：

授業中に配布する。

社会・環境論特論

教授 松村 高夫

授業形態：春学期 2 単位・講義

授業内容：

社会史は、「下からの歴史」を「上からの歴史」との関連において描くため、「総合の学」=関連諸ディシプリンの援用をもってその方法的特徴としている。講義とそれに続く討論を通じて、新しい論点の提起、方法的枠組の再構築を試行したい。読むべき文献は、そのテーマ毎に指示する。

成績評価方法は平常点（出席状況および授業態度による評価）とする。

社会・環境論特論

教授 松村 高夫

授業形態：秋学期 2 単位・講義

授業内容：

春学期参照。

演習科目

ミクロ経済学演習（均衡理論）

教授 長名 寛明

名誉教授 川又 邦雄

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

理論経済学の基本的問題に関する討論、研究報告を行う。修士課程で「ミクロ経済学」を履修済の学生、あるいはそれと同等の学力を有する者を対象とする。

授業内容：

博士論文の基礎となる文献についての要約、あるいは各人の博士論文の構想について報告し、出席者の意見をきく。さらに自分独自のまとまった論文について発表することが要請される。

リーディング・リスト：

- ・ J. Tirole, *The Theory of Industrial Organization*, MIT Press, 1988
- ・ D. Fudenberg and J. Tirole, *Game Theory*, MIT Press, 1991
- ・ D. M. Kreps, *A Course in Microeconomic Theory*, Princeton University Press, 1990
- ・ O. J. Blanchard and S. Fischer, *Lectures on Macroeconomics*, MIT Press, 1989
- ・ G. M. Grossman and E. Helpman, *Innovation and Growth in the Global Economy*, MIT Press, 1991
- ・ K. Arrow and M. D. Intriligator (eds.), *Handbook of Mathematical Economics*, North-Holland, Vol. II 1982, Vol. III 1986
- ・ A. Mas-colell, M. D. Whinston and J. R. Green, *Microeconomic Theory*, Oxford University Press, 1995

ミクロ経済学演習（均衡理論）

教授 長名 寛明

名誉教授 川又 邦雄

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

ミクロ経済学演習（都市経済論）

教授 瀬古 美喜

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

市場メカニズムが都市においてどのように働いているのかという観点に立って、都市経済学の基礎的な理論モデルと実証研究について学ぶ。具体的には、理論的・実証的分析手法に基づいて各自が選んだ研究テーマに関する論文指導を行う。

リーディング・リスト：

- ・ Edwin S. Mills and Bruce W. Hamilton, *Urban Economics, 5th edition*, Scott, Foresman & Co., 1994
- ・ J. V. Henderson, *Economic Theory and the Cities, 2nd edition*, Academic Press, 1985
- ・ Denise DiPasquale and William C. Wheaton, *Urban Economics and Real Estate Markets*, Prentice Hall, 1996 (瀬古美喜・黒田達朗訳『都市と不動産の経済学』創文社, 2001年)
- ・ Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds., *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.1: Regional Economics*, North-Holland and Elsevier Science Publisher, 1987
- ・ Peter Nijkamp and Edwin S. Mills, eds., *Handbook of Regional and Urban Economics, Vol.2: Urban Economics*, North-Holland and Elsevier Science Publisher, 1987
- ・ *Regional and Urban Economics, Part 1, Part 2*, Harwood and Academic Publishers
- ・ Masahisa Fujita, Paul Krugman and Anthony J. Venables, *The Spatial Economy*, MIT Press, 1999 (小出訳『空間経済学』東洋経済新報社)
- ・ M. Fujita and J-F Thisse, *Economics of Agglomeration*, Cambridge University Press, 2002
- ・ 日本住宅総合センター『季刊・住宅土地経済』(各版)
- ・ 中村良平・田淵隆俊著『都市と地域の経済学』日本評論社, 1996年
- ・ 瀬古美喜著『土地と住宅の経済分析』創文社, 1998年
- ・ 金本良嗣『都市経済学』東洋経済新報社, 1997年

ミクロ経済学演習

教授 中村 慎 助

授業形態：春学期 2 単位・演習

授業内容：

ミクロ経済学ならびにゲームの理論に関する基本的な文献の講読及び各自の論文報告を行う。詳細は開講時に指定する。

ミクロ経済学演習

教授 中村 慎 助

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

ミクロ経済学ならびにゲームの理論に関する基本的な文献の講読及び各自の論文報告を行う。詳細は開講時に指定する。

ミクロ経済学演習 (ゲーム理論)

教授 中山 幹 夫
名誉教授 川 又 邦 雄

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

ゲーム理論、ミクロ経済学とそれらの応用、とりわけ産業組織論についての特徴ある論文を輪読し、独自の研究成果をまとめる。

授業内容：

ミクロ経済学上級およびゲーム理論についての修士レベルの授業を履修していることを前提とする。

リーディング・リスト：

- ・ R. J. Aumann and S. Hart, *Handbook of Game Theory, Vols. I, II and III*
- ・ J. Tirole, *The Theory of Industrial Organization*, MIT Press, 1988

ミクロ経済学演習 (ゲーム理論)

教授 中山 幹 夫
名誉教授 川 又 邦 雄

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

授業内容：

春学期参照。

リーディング・リスト：

- ・ R. J. Aumann and S. Hart, *Handbook of Game Theory, Vols. I, II and III*
- ・ J. Tirole, *The Theory of Industrial Organization*, MIT Press, 1988

マクロ経済学演習

教授 尾崎 裕 之

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

「非期待効用理論のマクロ経済学への応用」をテーマとし、関係する論文の輪読を行う。最先端の研究論

文を精読することによって、知的訓練を行い、参加者が自分の知的関心に合ったリサーチ・トピックを見出していき、あるいは、自分の博士論文の完成に役立てていくことを目的とする。

授業内容：

以下の内容に関する論文の輪読を行う。(1) von-Neumann=Morgenstern によるリスクの下での選好の表現定理、(2) Savage による不確実性下における選好の表現定理、(3) Gilboa や Schmeidler による CEU理論・MMEU理論に代表される非期待効用理論とその公理的基礎、(4) これら非期待効用理論のマクロ経済学への応用。

リーディング・リスト：

Kreps, D., *Notes on the Theory of Choice*, Boulder, Colorado, Westview Press, 1988, 他、授業中に指示する。

マクロ経済学演習

教授 尾崎 裕之

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

春学期に準ずる。

マクロ経済学演習

教授 塩澤 修平
名誉教授 大山 道廣

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

家計の貯蓄行動、企業の投資行動、さらには企業の生産技術や労働、土地等の本源的生産要素の賦存量およびその効率が所与とされるような静態経済のマクロ均衡モデルを分析対象とする文献を展望し、学生の関心を考慮して幾つかの重要なトピックスを選び、関連文献を講読するとともに博士論文の作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

マクロ経済学演習

教授 塩澤 修平
名誉教授 大山 道廣

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

企業の生産技術や労働、資本等の本源的生産要素の賦存量およびその効率が時間を通じて変化するような動態経済のマクロ均衡モデルを分析対象とする文献を展望し、学生の関心を考慮して幾つかの重要なトピックスを選び、関連文献を講読するとともに博士論文の作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

マクロ経済学演習

教授 前多 康男
講師 酒井 良清

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

マクロ経済学に関する内外の論文を読み進むことにより、マクロ経済学で用いられているさまざまなフレームワークを理解することを目的とする。今年度は、経済の金融の側面をテーマとする。

成績は平常点により決定する。

授業内容：

内外の論文の輪読。

テキスト：

教科書は使用しない。

リーディング・リスト：

授業中に適宜配付する。

数理経済学演習 (I)

教授 丸山 徹
教授 須田 伸一
商学部教授 小宮 英敏

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

参加者による数理経済学上の新しい研究結果の報告ならびにそれをめぐる討論。塾内だけでなく塾外からも、経済学・数学両分野の専門家に参加を求め、研究の向上と視野の拡大に資したいと願っている。

授業内容：

とりわけ経済分析を支える解析学的方法を中心とするが、今年度の重点的テーマは次のとおりである。

(I) 非線形動学と景気変動

- (II) 確率解析と金融資産価格の変動
- (III) 凸解析と変分法 (多価作用素の解析を含む。)
- (IV) 均衡分析の基本問題

「数理経済学演習 (II)」と併せて履修することが望ましい。

数理経済学演習 (II)

教授 丸山 徹
教授 中村 慎助
商学部教授 小宮 英敏

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

参加者による数理経済学上の新しい研究結果の報告ならびにそれをめぐる討論。塾内だけでなく塾外からも、経済学・数学両分野の専門家に参加を求め、研究の向上と視野の拡大に資したいと願っている。

授業内容：

とりわけ経済分析を支える解析学的方法を中心とするが、今年度の重点的テーマは次のとおりである。

- (I) 非線形動学と景気変動
- (II) 確率解析と金融資産価格の変動
- (III) 凸解析と変分法 (多価作用素の解析を含む。)
- (IV) 均衡分析の基本問題

「数理経済学演習 (I)」と併せて履修することが望ましい。

経済数学演習

教授 須田 伸一

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

一般均衡理論に関する基本的論文を輪読する。今年度は特に、正則経済 (regular economy) の理論を中心に関連文献を読み進む予定である。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

授業中に適宜配布する。

経済数学演習

教授 須田 伸一

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期に引き続き、一般均衡理論に関する基本的論文を輪読する。今年度は特に、正則経済 (regular economy) の理論を中心に関連文献を読み進む予定であ

る。

テキスト：

使用しない。

リーディング・リスト：

授業中に適宜配布する。

計量経済学演習

助教授 田中 辰雄

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

本講義の目的は 2 つある。(1) GAUSS を使って計量経済学の基礎を学ぶこと、(2) IT 産業に関するペーパーを読み、自分の論文のテーマを見つけること、の 2 点である。どちらを主としてとりあげるかは集まった学生の要望を聞いて決める。以下、順に説明する。

(1) ガウス(GAUSS)は行列演算が得意なソフトウェアであり、計量分析の推定プログラムが効率よく組める。たとえば、最小 2 乗法の推定値は $b=(X^*X)^{-1}X'y$ であるが、ガウスではこのままこの式をプログラム中に書けば良い。理論式がそのままプログラム中に現われるので、理論との対応関係が明瞭であり、理解に役立つ。コマンド一つで統計量をやまほど計算してくれる統計ソフトウェアと異なり、自分で理論内容を理解しないと利用できないが、その代り、推定の中身を自分で確認できるうえに、必要に応じて自分で推定方法を工夫できる利点がある。演習参加にあたっては、コンピュータプログラムの知識は必須ではないがあった方が便利であろう。少なくとも厭わない覚悟は必要である。

(2) IT 産業は近年、もっとも成長が著しく、また産業構造に大きな影響を与えている産業である。90 年代の日米逆転の一因もこの産業での成功・失敗にある。また理論的にもネットワーク外部性や収穫増、スイッチングコスト、ベンチャー型産業構造、コンテンツ産業での知的財産権訴訟など特徴的な現象が多く観察されており興味はつきない。しかし、経済学の目から見ると、理論研究も実証研究も遅れている。特に実証分析の遅れは大きく、たとえばマイクロソフト裁判はそれが端的に現われた例で、訴訟にまでなっているにもかかわらず、結局有力な実証分析は経済学者から出されなかった。本講義では学生諸君の興味に合わせてテーマ設定を行ってペーパーを読み、学生諸君の論文のテーマを探していく。たとえば著作権問題に関心が高い学生がいればそれに合わせてペーパーを選択する。

計量経済学演習

教授 辻村和佑
兼担教授 清水雅彦

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

この計量経済学演習では、「経済発展過程における構造変化の実証理論分析」に関連した研究テーマに取り組んでいる大学院生を対象にして、各人の研究報告とそれに対する討論を行う。したがって、履修者は、どのような段階であれ自らの研究内容について報告することが義務づけられる。

上記の共通テーマに関連していえば、「経済発展」は、必ずしも発展途上国だけの問題ではない。アメリカをはじめ西ヨーロッパ諸国や最近の日本のように、先進工業国といわれる国々においても、新たな「経済発展」の在り方とその可能性が模索されている。経済発展に関する分析の歴史を振り返ってみると、意外なことに、経済発展に関する一般理論といえるものは、ほとんど見当たらない。このことは、一般理論の可能性を否定するものではないが、時間的にも空間的にもさまざま異なる条件をもつ経済社会に対して普遍的な経済発展の在り方を模索するという従来の分析視点あるいは分析の姿勢について、再検討する必要があることを示唆しているともいえる。他方、これまでの経験的分析によれば、どのような段階であれ、経済発展は現象形態として経済構造の変化を随伴すること、さらに発展過程における構造変化が経済成長と強く結び付いていることなどが、観測事実としての長期経済統計に基づいて指摘されている。しかし、これらの経験的事実をもってしても、「経済発展は、構造変化と経済成長が結び付いた経済社会の動態現象である」という蓋然的な指摘にとどまるといわざるをえない。この演習では、およそ以上のような分析状況を脱却するためにいかなる分析視点が必要かを議論しながら、履修者各人のテーマ毎に研究指導をすすめていく。なお、この演習は、春学期と秋学期に設置されており、履修者は 2 学期とも連続して履修することが望ましい。

リーディング・リスト：

参考文献等については、各人の報告と討論の際に取り上げる。

計量経済学演習

教授 辻村和佑
兼担教授 清水雅彦

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

計量経済学演習

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この演習は修士論文作成の指導・研究を行うこと、応用エコノメトリックスの知識を深めること、質の高い実証研究ができることや他人の実証分析を建設的に批判することを目的としている。

授業内容：

各院生が興味を持っている分野に関する論文を紹介し、その文献又は自分の論文について順番に報告してもらう。“報告”は文献（又は文献の議論）を日本語に訳することだけではなく、著者の言いたいことを簡潔にまとめること、内容について疑問点を投げかけること、日本の関係する文献を紹介することになる。利用できるデータセットの一つとしては慶應家計パネル調査（KHPS）がある。

テキスト：

テキストとして指定しないが、一番近いものとして Wooldridge, J. M., *Econometric Analysis of Cross Section and Panel Data*, MIT Press, Cambridge, MA, 2002 がある。

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

質問・相談：

気軽に mckenzie@econ.keio.ac.jp に問い合わせてください。

計量経済学演習

教授 マッケンジー, コリン

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

計量経済学演習

名誉教授 蓑谷 千風彦

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

計量経済学の基礎的知識を復習した後で、制限従属変数のさまざまなモデルと推定を行う。TSP あるいは STATA を用いて演習する。

授業内容：

1. 基礎的知識の復習（回帰分析，自己相関，不均一分散）
2. 3つの大標本検定
3. 正規性の検定
4. プロビットモデル
5. ロジットモデル
6. スコビットモデル，補対数対数モデル
7. 計数データのモデル
 - (1) ポアソン回帰
 - (2) 負の2項分布回帰
 - (3) ZIP モデル
 - (4) ポアソン障壁モデル
8. トービットモデル
 - (1) タイプ I
 - (2) タイプ II
 - (3) タイプ III
 - (4) 切断タイプ

テキスト：

開講時に紹介する。

リーディング・リスト：

開講時に紹介する。

計量経済学演習

名誉教授 蓑谷 千風彦

授業形態：秋学期2単位・演習

授業内容：

春学期の継続。

経済学史・思想史演習

火曜日4時限

教授 池田 幸弘

授業形態：春学期2単位・演習

目標・意義・方法：

アダム・スミスの『国富論』を輪読する。スミス『国富論』の重要性についてはいまさら述べる必要がないほどである。経済学の始点となった著作であるばかりでなく、社会思想史上の古典でもある。また、現代の政策的な議論にあたって常参照されるべき著作だといっても過言ではない。今年度は昨年度に引きつづき、新しく出た杉山忠平訳を使いながら輪読をすすめていく。既存の邦訳との比較対照それ自体も試みてみたい。参加希望者は、水田洋監訳、杉田忠平訳

『国富論(1)-(4)』岩波文庫を準備されたい。ときおり、参加者自身の研究テーマについて報告を求めることがある。

経済学史・思想史演習

火曜日4時限

教授 池田 幸弘

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法：

春学期の続き。詳細については春学期の講義要綱を見られたい。

経済学史・思想史演習

火曜日2時限

教授 池田 幸弘

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法：

近年、研究文献の増加が著しいフリードリッヒ・ハイエクの著作を輪読する。かつて、この思想家の著作は主として新自由主義的な視角から扱われてきたが、現在ではさまざまな角度から自由に議論されるようになってきている。まずは、ハイエクのテキストに内在して、厳格な読解を訓練することからはじめたい。参加者の積極的な討論に期待する。なお、初回にテキストの選択を含めて相談するので、参加希望者は必ず出席されたい。

授業内容：

輪読形式。もちろん、適宜担当者が解説を加える。

テキスト：

参加者の希望、関心も考慮したうえ、決定する。

リーディング・リスト：

毎回の授業の際に指示する。

経済学史・思想史演習（日本社会経済思想史演習）

教授 小室 正紀

授業形態：春学期2単位・演習

目標・意義・方法：

履修者に、何らかの意味で日本の経済思想を視野に置いた研究発表を求めながら、論文作成指導を行う。なお、小室担当の「経済学史・思想史特論（日本社会経済思想史）」とあわせて履修することが望ましい。

リーディング・リスト：

- ・川口浩『江戸時代の経済思想』頸草書房，1992年
- ・経済学史学会編『日本の経済学』東洋経済新報社，1984年
- ・小室正紀『草莽の経済思想』御茶の水書房，1999年
- ・逆井孝仁他編『日本の経済思想四百年』日本経済評論

社, 1990年

- ・テッサ・モーリス鈴木『日本の経済学』岩波書店, 1984年
- ・藤田貞一郎『国益思想の系譜と展開』清文堂, 1998年
- ・川口浩編『日本の経済思想世界』日本経済評論社, 2004年

経済学史・思想史演習

教授 坂本達哉

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法：

この授業の目標は、社会思想史研究の基本的方法を、文献解説、資料収集、論文執筆などの観点から身につけさせることである。授業は、履修者による研究発表を基本とするが、必要に応じて、最新の学術論文などを取り上げ、検討する。

経済学史・思想史演習

教授 高草木光一

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法：

トクヴィルの思想を中心にして、民主主義の問題点を考察する。

授業内容：

トクヴィル『アメリカの民主主義』をテキストに輪読を行なう。参加者はリポーターの義務を負う。リポーターは、テキストまたは指定された文献中の割り当てられた箇所の要約をつかったうえで、参考文献を調べて問題点を整理する。

テキスト：

- ・Alexis de Tocqueville, *De la démocratie en Amérique*, Paris, 1835-40, nouvelle édition historico-critique revue et augmentée par Edouard Nolla, Paris: Vrin, 2vols, 1990
- ・井伊玄太郎訳『アメリカの民主政治（全3巻）』（講談社学術文庫）があるが、翻訳に問題があるため、参考にとどめる。

リーディング・リスト：

- ・トクヴィル（小山勉訳）『旧体制と革命』ちくま学芸文庫, 1998年
- ・トクヴィル（喜安朗訳）『フランス二月革命の日々―トクヴィル回想録』岩波文庫, 1988年

経済史演習

教授 杉山伸也

教授 古田和子

教授 柳沢遊

授業形態：春学期2単位・合同演習

目標・意義・方法：

経済史を専攻する院生を主な対象とする共同セミナーである。春学期は、個別の研究発表と討論を行う。必要に応じて『社会経済史学の課題と展望』（有斐閣, 2002年）も参考にする。

成績は、授業での研究報告や討論への参加を考慮して総合的に評価する。

経済史演習【経商連携 COE 科目】

教授 杉山伸也

教授 古田和子

教授 柳沢遊

商学部助教授 牛島利明

授業形態：秋学期2単位・合同演習

目標・意義・方法：

経商連携 COE プログラム「市場の質に関する理論形成とパネル実証分析」の歴史分析班による共同セミナーである。2004年度に引きつづき、今年度も、テーマとして戦前・戦後における日本およびアジア地域のエネルギー産業、とくに石炭産業に焦点をあて、基本的な研究文献を体系的にとりあげて報告と討論を行う。

成績評価は、授業での報告や討論への参加などを考慮に入れて、総合的に判断する。

制度・政策論演習

教授 飯野靖四

授業形態：春学期2単位・演習

目標・意義・方法：

この授業では原則として各履修者の論文発表と検討が中心となる。論文発表者がいない時は財政論の基本的文献の輪読を行う。

授業内容：

- ・各履修者の論文発表と検討
- ・財政論の基本的文献の輪読（何を輪読するかは、授業の最初に相談して決める）

制度・政策論演習

教授 飯野 靖 四

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

制度・政策論演習

教授 大村 達 弥

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

担当者が担当する「制度・政策論特論」の講義内容と関連したテーマを選択し、受講者の事情を考慮しつつ運営も一体で進める。ねらいは経済システムや産業構造の動きを踏まえ、法・政治システムとの関わりも含め学際的視点から現代の経済問題の検討を進めることにある。

授業内容：

今年度の具体的内容としては、情報通信および関連産業における規制緩和とネットワークの発展が産業構造の変化を促している点に着目して、関連する経済規制改革、ネットワーク外部性、電子取引の理論的・実際の検討等を扱う予定である。

テキスト：

授業開始の時点で指定する。

リーディング・リスト：

下記の文献は 2004 年度で取り上げたものである。

- ・ Laffont, Rey, Tirole, *Network competition: I Overview and non discriminatory pricing, Network competition: II Price discrimination*, Rand, JE, 1998

制度・政策論演習

教授 大村 達 弥

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

制度・政策論演習

教授 島田 晴 雄

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

日本経済の制度と政策を中心とした研究テーマにつき、演習参加者の研究発表ならびに、各自の研究の発展を促進するための指導と助言を行う。

指導と助言は演習における発表時のみでなく、e

メール等を通じて、必要に応じ、適時、密接に行う。

制度・政策論演習

教授 島田 晴 雄

教授 太田 聰 一

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

日本経済の制度と政策を中心とした研究テーマにつき、演習参加者の研究発表ならびに、各自の研究の発展を促進するための指導と助言を行う。

指導と助言は演習における発表時のみでなく、eメール等を通じて、必要に応じ、適時、密接に行う。

制度・政策論演習【経商連携 COE 科目】

教授 瀬古 美 喜

教授 木村 福 成

教授 マッケンジー, コリン

教授 若杉 隆 平

助教授 グレーヴァ 香子

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

公共経済学を中心とした理論経済学および応用理論経済学に関する参加者の研究報告ならびに討論を行う。

授業内容：

出席者は議論への積極的な参加が望まれる。履修者は、原則として自己の論文かまたは各自の関心分野の代表的な文献の内容を報告するものとする。

なお、定期的に学内外の専門家を招いての講演ならびに討論を行うことにより、セミナーの活性化をはかる予定である。

制度・政策論演習【経商連携 COE 科目】

教授 瀬古 美 喜

教授 木村 福 成

教授 マッケンジー, コリン

教授 若杉 隆 平

助教授 グレーヴァ 香子

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

公共経済学を中心とした理論経済学および応用理論経済学に関する参加者の研究報告ならびに討論を行う。

授業内容：

出席者は議論への積極的な参加が望まれる。履修者

は、原則として自己の論文かまたは各自の関心分野の代表的な文献の内容を報告するものとする。

なお、定期的に学内外の専門家を招いての講演ならびに討論を行うことにより、セミナーの活性化をはかる予定である。

制度・政策論演習

教授 寺 出 道 雄

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この演習では、参加者の論文の作成にむけての報告を求めることの他、大きくは担当者が研究科における講義で取り上げる話題と関連した文献の講読をおこなう。

すなわち、環境と農業（林業・水産業を含む）の係わりについての問題と、資本主義の発展と農業の変化に係わる問題についての文献である。第 1 回目の授業で、いくつかの候補をあげて、受講者の関心にも応じてその後に輪読する文献を決定する。

制度・政策論演習

教授 寺 出 道 雄

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この演習では、参加者の論文の作成にむけての報告を求めることの他、大きくは担当者が研究科における講義で取り上げる話題と関連した文献の講読をおこなう。

すなわち、環境と農業（林業・水産業を含む）の係わりについての問題と、資本主義の発展と農業の変化に係わる問題についての文献である。第 1 回目の授業で、いくつかの候補をあげて、受講者の関心にも応じてその後に輪読する文献を決定する。

制度・政策論演習

教授 中 澤 敏 明
助教授 河 井 啓 希

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

学生に論文のテーマを模索し、プレゼンテーションの練習をする場を提供することが主たる目的になっているが、博士課程の学生にはその蓄積された知見をもとにクラスの水準を高めることを期待したい。

産業組織論の領域を主たる対象として、この分野で行われてきた優れた研究論文を担当者・履修学生が選

択し、学生が当該論文を解説する中で、研究系譜、研究者の着眼点・論理展開・データ所在・計量的手法などを学ぶ。個々の学生は、1 学期を通じて研究するテーマを決め、当該テーマの論文として優れていると定評のあるもの、それに準ずるもの、顕著に新規性のあるものなどを選ぶ。輪番で行う。

授業内容：

産業組織論および計量経済学の学部レベルの知識をそなえていることが望ましい。

テキスト：

テーマは、産業組織論の領域にかかわるものであれば基本的に自由である。しかし、他の履修者も予習する必要があるために、担当者が選択についてチェックする。可能なテーマを例示すると、

1. SCP Approach and New Empirical IO
2. Supply and Demand
3. Monopoly and Contestable Market
4. Cartel and Collusion
5. Product Differentiation
6. Market Power
7. Entry Dynamics
8. Price Discrimination
9. Innovation and R&D
10. Standards and Network Externality
11. Firm Structure and Incentives
12. Vertical Integration
13. Information and Advertising
14. Price Rigidity and Macro Economics
15. Optimal Regulation

昨年、選択された論文を、キーワードで例示すれば、Installed Base, Hedonic Price, Conjectural Variation, Network Effects, Tournaments 等がある。

制度・政策論演習

教授 中 澤 敏 明
助教授 河 井 啓 希

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

学生に論文のテーマを模索し、プレゼンテーションの練習をする場を提供することが主たる目的になっているが、博士課程の学生にはその蓄積された知見をもとにクラスの水準を高めることを期待したい。

産業組織論の領域を主たる対象として、この分野で行われてきた優れた研究論文を担当者・履修学生が選

択し、学生が当該論文を解説する中で、研究系譜、研究者の着眼点・論理展開・データ所在・計量的手法などを学ぶ。個々の学生は、1 学期を通じて、ほぼテーマを決め、当該テーマの論文として優れていると定評のあるもの、それに準ずるもの、顕著に新規性のあるものなどを選ぶ。輪番で行う。

授業内容：

産業組織論および計量経済学の学部レベルの知識をそなえていることが望ましい。

テキスト：

テーマは、産業組織論の領域にかかわるものであれば基本的に自由である。しかし、他の履修者も予習する必要があるために、担当者が選択についてチェックする。可能なテーマを例示すると、

1. SCP Approach and New Empirical IO
2. Supply and Demand
3. Monopoly and Contestable Market
4. Cartel and Collusion
5. Product Differentiation
6. Market Power
7. Entry Dynamics
8. Price Discrimination
9. Innovation and R&D
10. Standards and Network Externality
11. Firm Structure and Incentives
12. Vertical Integration
13. Information and Advertising
14. Price Rigidity and Macro Economics
15. Optimal Regulation

昨年、選択された論文を、キーワードで例示すれば、Semiconductor, Positioning, Tournaments, Promotion, Asymmetric Information, Procurement 等がある。

制度・政策論演習

教授 前多康男

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

金融経済学に関する内外の論文を読み進むことにより、金融経済学で用いられているさまざまなフレームワークを理解することを目的とする。

授業内容：

具体的なトピックスについては、以下の通りである。

1. 金融取引の機能について、2. リレーションシップ取引と市場取引、3. 間接金融、直接金融、市場型

間接金融、4. 銀行の規律付け、5. 銀行の業務、6. 金融業に対する規制

リーディング・リスト：

授業中に適宜配付する。

制度・政策論演習

教授 前多康男

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

制度・政策論演習

教授 山田太門

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

混合経済における政府の財政の役割を、経済学の枠組を抜け公共経済論の立場から検討する。国家の権限を民主主義システムの中で位置づけたり、制度としての行政のあり方なども研究の対象となる。市場経済と非市場経済の相互関係は最も重要な分析対象となり、通常の経済学の範囲からは与件とされる文化的背景などについても議論されよう。参加者は各自のテーマにしたがって論文作成をすすめ中間報告しなければならない。

制度・政策論演習

教授 山田太門

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

制度・政策論演習【経商連携 COE 科目】

教授 吉野直行

授業形態：秋学期 2 単位・演習

授業内容：

21 世紀 COE による経済学部と商学部の連携により、大学院教育の充実を目的とした演習である。21 世紀 COE で実施しているパネルデータを大学院生が利用しながら、修士論文・博士論文の作成を行っている。(i) 家計行動に関する計量分析、(ii) 家計の金融資産選択行動の実証分析、(iii) 財政のサステナビリティに関するシミュレーション分析、(iv) ミクロデータを用いた金融行動に関する実証分析など、大学院生の論文発表を通じた演習を行う。経済学部と商学部の多数の教員による合同の演習であり、さまざま

まな角度からの議論が展開される。

制度・政策論演習

教授 吉野 直行
教授 池尾 和人

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

授業内容：

財政・金融政策に関連する大学院生の論文作成に関する演習であり、内容としては、(i) 地方への資金配分とその要因分析、(ii) 金融機関の行動分析、(iii) 高齢化と日本の財政赤字、(iv) 景気変動とマクロ経済政策などである。毎回、レジメを用意し、大学院生は作成している論文の内容に関して発表を行う。また、それぞれの分野における基礎的な論文を輪読する。

制度・政策論演習

教授 渡辺 幸男
教授 北村 洋基

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

現代資本主義ならびに日本経済は大きな曲がり角にある。今日の主要な現代資本主義論の日本経済論を政治経済学的方法によって理論的・批判的に再検討し、問題意識の涵養と理論的深化をめざす。今年度は主に日本の産業経済に焦点をあてる。

制度・政策論演習

教授 渡辺 幸男
教授 北村 洋基

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

制度・政策論演習

教授 渡辺 幸男
教授 北村 洋基

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

本演習では、主要には日本経済を対象として、現代資本主義の現段階把握、そして日本経済の急速な変化と現段階把握をめざす。

制度・政策論演習

教授 渡辺 幸男
教授 北村 洋基

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

制度・政策論演習

教授 矢野 誠

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

論文指導を行う。参加者は英語論文の作成、提出、および公共セミナーへの参加を義務づけられる。

制度・政策論演習

教授 矢野 誠

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

春学期参照。

国際経済論演習

名誉教授 大山 道廣

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

国際貿易論の理論的文献を展望・解説し、最近の重要トピックスをいくつか選んで、関連文献を講読するとともに学生自身による論文作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

国際経済論演習

名誉教授 大山 道廣

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

文献講読と論文指導

授業内容：

国際金融論の理論的文献を展望・解説し、最近の重要トピックスについて関連文献を講読する。併せて学生自身による論文作成を指導する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

開講時に配布する。

国際経済論演習 (1) 水曜日 4 時限 (2) 水曜日 5 時限

教授 櫻川昌哉

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

マクロ経済学・金融・国際経済に関する最新のテーマに触れる。最終的には論文を仕上げることを目標とする。

授業内容：

マクロ経済学・金融・国際経済に関する最新の学術論文を輪読する。2 コマ連続で行なうので履修者は注意されたい。金融のミクロ的構造とマクロ経済学の相互作用のメカニズムについて理解を深めることを念頭に置いた内容とする。この分野は理論だけやっても意味がないので実証の論文も適宜読む。

テキスト：

- ・ Blanchard and Fischer, *Lectures on Macroeconomics*, MIT Press
- ・ D. Romer, *Advanced Macroeconomics*, McGraw-Hill
- ・ Freixas and Rochet, *Microeconomics of Banking*, MIT Press
- ・ Dewatripont and Tirole, *The Prudential Regulation of Bank*, MIT Press
- ・ 櫻川昌哉『金融危機の経済分析』東京大学出版社

リーディング・リスト：

追って指示する。

国際経済論演習

教授 高梨和紘

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

基本的には、博士論文作成のための指導・研究を行うことを目標とする。

授業内容：

まず履修者それぞれの問題意識や意図する研究テーマ等について、全体的・個別的に指導を行った上で、それに資するリーディング・リストを与え、それに基づいて各自の研究を進めてもらい、隔月 1 回程度研究報告を課し、その報告をめぐって徹底的な討論や追加指導を行う形で演習を進めたい。

テキスト：

履修者のテーマ・問題意識に応じて、演習開始後指

示、配付する。

国際経済論演習

教授 高梨和紘

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

国際経済論演習

教授 竹森俊平

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

指定されたテキストの輪読を通じ、国際金融論の分析手法を学ぶが、その間に受講者の自分で選んだトピックについての報告を交え、また博士論文の指導をする。

テキスト：

- ・ M. Obstfeld and K. Rogoff, *Foundations of International Macroeconomics*, MIT Press

リーディング・リスト：

受講者の自発的な報告に関連のあるものを適宜指定する。

国際経済論演習

教授 若杉隆平

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

国際貿易あるいは技術革新・R&D に関して、博士論文作成の指導・研究を行う。

授業内容：

各学生が関心を有する分野に関する諸文献を報告してもらい、作成する論文に関連する先行研究をサーベイする。

また、各自が取り組んでいる論文についても順次報告してもらい、論文指導を行う。

テキスト：

参照する文献・論文等に関しては、適宜指定する。

国際経済論演習

教授 若杉隆平

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

社会・環境論演習

教授 金子 勝

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

産業社会にかかわる諸問題を、理論的制度的に考察する。

授業内容：

今年度は、日本における経済格差問題について考察する。年金・介護・雇用問題など具体的問題を取り上げながら。

テキスト：

経済政策に関する文献を対象に、参加者と相談して決定する。

リーディング・リスト：

- ・神野直彦・金子勝『「福祉政府」への提言』岩波書店
- ・ジョン・ロールズ『公正としての正義再説』岩波書店

社会・環境論演習

教授 金子 勝

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

日本経済の現状と経済政策について、テキストを取り上げつつ議論する。

授業内容：

本年度は、つぎの 2 つのテーマを主に取り上げる予定である。一つは、財政赤字と財政政策にかかわる諸問題。いま一つは、三位一体改革と地方分権にかかわる諸問題である。この 2 つのテーマを具体的に考えつつ、マクロ経済学の理論的問題についても深めてゆきたい。

テキスト：

参加者と相談して決めたい。

リーディング・リスト：

- ・金子勝『市場と制度の政治経済学』東京大学出版会
- ・神野直彦・金子勝編『財政崩壊を食い止める』岩波書店
- ・神野直彦・金子勝『地方に税源を』東洋経済新報社

社会・環境論演習

教授 鈴木 晃 仁

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

この授業では「疾病と医療の社会史」を集中的に演習します。現在進行中の学術創成研究「歴象オーサリング・システムによる危機管理研究」（研究代表：友

部謙一）に絡めた授業を行います。具体的な狙いは 3 点にまとめられます。1) この研究プロジェクトの一端として構築している近代日本の疾病・医療のデータベースを実際に動かすことで、疾病と医療の計量的な歴史に必要なデータベースの操作を習得すること 2) 具体的にデータを分析し、それを解釈するために医学文献などの資料を読むことで、20 世紀の日本の疾病と医療の社会史を部分的に深く掘り下げること 3) 日本から出発して、国際的な比較の視座を築くこと。

テキスト：

以下の書物は随時参照しますので、各自購入してください。

- ・ Roger Cooter and John Pickstone eds., *Companion to Medicine in the Twentieth Century*, pbk edition, Routledge, 2000

社会・環境論演習

教授 鈴木 晃 仁

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

社会・環境論演習

教授 津 谷 典 子

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

本演習は、人口学および経済学で近年よく行われる個票データを用いた様々な多変量解析 (multivariate analysis) の手法について、実際の応用例を多数検討することにより、各モデルの意味、用途、および長所と短所、さらに変数の構築などについて学ぶことを目的とする。具体的には、最近刊行された学術論文を読み、そこで用いられている分析モデル、データ、変数の構築について検討し、そして分析・推計結果の意味を解釈・理解する。講読の対象となる学術論文は、講師があらかじめ選択・準備し、そのリーディング・リストを第 1 回目の授業時に配布する。

授業はまず、学生諸君の中から各週 1 名が論文内容についてのレジュメをあらかじめ準備し、クラスで報告する。次いでそれについてのクラス討論とクラス全体での質疑応答を行い、最後に講師が説明とまとめを行う。

授業内容：

本演習で取り扱う多変量解析モデルは、Linear causal models と呼ばれるモデルを中心とした以下の

ようなものである。

- ① Ordinary least-square multiple regression model
- ② Multiple classification analysis (MCA)
- ③ (Binary) Logistic regression model
- ④ Ordered logit/probit model
- ⑤ Multinomial logit model
- ⑥ Cox proportional hazard model
- ⑦ Time-dependent hazard model

また、本演習では、モデルに使用される変数についても、その構築方法（プロセス）だけでなく、多重線形性（multi-collinearity）、内生性（endogeneity）、同時性（simultaneity）などの問題点についても説明・検討する。さらに、学生諸君が各自の研究において使用することができる内外の個票データについて学ぶため、各学術論文の分析で使用されているデータの内容について、入手方法も含め紹介する。

テキスト：

特に指定しない。

リーディング・リスト：

第1回授業時に配布する。

社会・環境論演習（生活環境の社会史）

教授 友部 謙一

授業形態：春学期2単位・演習

目標・意義・方法：

「生活水準」は社会経済史の伝統的な課題である。しかし、それを世帯の問題としてとらえ、さらにそこでの世帯員のバーゲニングパワーがかれらの各個人の「生活水準」を決定しているという分析フレームワークで考えると、再度エキサイティングな問題としてよみがえる。歴史の中の「生活水準」とは、すなわち各個人の生活環境そのものを再構築することに他ならない。とくに、本演習では母親と乳幼児の生活環境に着目していきたい。

授業内容：

演習であるからには、年度末には受講生は各自研究報告書を提出することになる。そのために、まず「生活環境」の範囲を比較的広く考え、18世紀から20世紀前半にかけての医療・疾病・衛生・保健・人口・家族に関する基本的な文献について講読・議論する。つぎに、各自のテーマを尊重しつつ、「生活環境の社会史」に関する共同のデータベースを構築していく（データベースの作成については演習時に指示する）。とくに、本年度は日本の各機関に所蔵されている19世紀後半から20世紀前半の日本に残された伝染病流

行に関する資（史）料の収集と分類に力を入れていきたい。つまり、本年度はそのことに関する本格的な分析を進めていくための「体力」を蓄える時期として位置付けたい。

最初の時間に演習予定表とシラバスを各担当者が配布する。

社会・環境論演習（生活環境の社会史）

教授 友部 謙一

授業形態：秋学期2単位・演習

目標・意義・方法 他：

春学期参照。

社会・環境論演習

教授 細田 衛士

教授 大沼 あゆみ

専任講師（有期） 河田 幸視

授業形態：秋学期2単位・合同演習

目標・意義・方法：

本演習においては、環境経済論の理解を促進し、より発展した水準の内容にまで到達できるようにすることを目的とする。

授業内容：

次のような内容を持った原著論文から適宜選択して読む予定である。具体的にどのような論文を読むかは、授業の開始前に提示する予定である。

1. 廃棄物の処理・再資源化に関する理論・実証分析。
2. デポジット制度など、回収に関する理論・実証分析。
3. グリーン・デザインや拡大生産者責任に関する理論分析。
4. 物質フローの制御問題に関する理論分析。
5. 生態系や種の多様性についての理論・実証分析。
6. 汚染物質制御に関する理論・実証分析。（水質汚染、大気汚染、土壌汚染などをモデル化したものあるいは実証的に扱ったもの。）
7. 環境問題を所有権の観点から扱った分析。
8. 排出権売買の静学および動学的理論分析。
9. 枯渇性資源の最適利用に関する理論・実証分析。
10. 再生可能資源の最適利用に関する理論・実証分析。

本演習は、環境経済論の基礎知識を有していることが前提となる。

なお、学会・セミナー発表用の論文が完成あるいは準備できた場合、その論文をこの演習で報告すること

もあり得る。発表を希望するものは、担当教員に申し出ること。

リーディング・リスト：

授業中にリストを配布する。

(注意) この他、定期的な研究会に出席し、報告することが義務づけられる。

社会・環境論演習

教授 松村 高夫
教授 倉沢 愛子
教授 清水 透
教授 金子 勝

授業形態：春学期 2 単位・合同演習

授業内容：

社会史とは、人間社会を経済のみならず、政治・社会・文化などさまざまな側面からなる全体ととらえる研究方法である。この全体としての人間社会に接近する方法も、経済学のみならず、政治学・社会学・人類学など隣接する人間諸学科を包含したものである。社会史は、具体的・歴史的事象を細部にわたり分析すると同時に、絶えず新しい領域を開拓し、新しい方法論的枠組を創りだすことにある。その意味で、固定した方法・領域をもたない。

教員（担当者）と院生による報告と討論を重ねていく。担当者の専門には限定されないような仕方で運営していきたい。活発な議論を通して参加者各自の研究が刺激されるよう配慮していきたい。

成績評価方法は平常点（出席状況および授業態度による評価）とする。

社会・環境論演習

教授 松村 高夫
教授 倉沢 愛子
教授 清水 透
教授 金子 勝

授業形態：秋学期 2 単位・合同演習

授業内容：

春学期参照。

社会・環境論演習（環境政策）

講師 山口 光恒

授業形態：春学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

年間を通して行う演習の春期分。春学期・秋学期連続した内容となっているので極力年間を通した履修が

望ましい。

本演習は環境政策オリエンテッドな内容である。現在国際的に流動的な環境問題を最新且つオリジナルな資料によりながら研究し、日本或いは世界がどうしたらよいかにつき演習形式で進める。

授業内容：

今年は春秋とも温暖化問題に集中する。講義内容は履修者の知識を見て決める。気候変動枠組条約や京都議定書の理解を前提に、議定書目標達成の為の日、EU、米の政策を学び論議する。EU については 2005 年 1 月に域内排出権取引が開始され、これに伴い部門別 CO₂排出配分を決める National Allocation Plan も決まる。域内排出権取引の理論と実際の乖離も取り上げるつもりである。

テキスト：

- ・ European Commission, *European Climate Change Report*, June, 2001
- ・ European Commission, *Second ECCP Progress Report*, 2003
- ・ European Commission, *Communication from the Commission on National Allocation Plan*, 2003
- ・ European Commission, *Directive on establishing a scheme for greenhouse gas emission allowance trading*

なお、日本については中央環境審議会の環境税提案及び自主参加型排出権取引を取り上げその是非を論じる。

リーディング・リスト：

適宜指示する。

社会・環境論演習（環境政策）

講師 山口 光恒

授業形態：秋学期 2 単位・演習

目標・意義・方法：

年間を通して行う演習の秋期分。春学期・秋学期連続した内容となっているので極力年間を通した履修が望ましい。

本演習は環境政策オリエンテッドな内容である。現在国際的に流動的な環境問題を最新且つオリジナルな資料によりながら研究し、日本或いは世界がどうしたらよいかにつき演習形式で進める。

授業内容：

秋学期は京都議定書後の新たな枠組みを中心テーマとする。これにはアメリカおよび中国を初めとする主要途上国の参加が必須であるが、どのようにすればそ

の目標を達することが出来るのかを巡って論議を行う。先ず中央環境審議会及び産業構造審議会の中間とりまとめを理解した上で、海外の学者の論文や書物を読み解決策を模索する。

さらに時間の余裕があれば、日中環境協力の具体的可能性についても論議したい。

テキスト：

- ・産業構造審議会将来枠組み検討専門委員会「気候変動に関する将来の持続可能な枠組みについて」2004年11月18日
- ・D. Victor, *The collapse of the Kyoto Protocol*, 2001 Princeton University Press
- ・M.Grubb et al., *Keeping Kyoto*, Climate Strategies
- ・T. Schelling, *What makes Greenhouse Sense, Time to rethink the Kyoto Protocol*, Foreign Affairs, May/June 2002 など

リーディング・リスト：

都度指示する。

プロジェクト科目

プロジェクト

本年度休講。

慶應義塾大学 在外研修プログラム

慶應義塾大学では、全学部および研究科に在籍している学生を対象に、夏季休業中に海外で在外研修プログラム「慶應義塾大学 ウィリアム・アンド・メアリー大学夏季講座」「慶應義塾大学 ケンブリッジ大学ダウニングコレッジ夏季講座」を開講します。

これは、外国語による講義およびディスカッションのほか、大学内の寮生活などを初めとする多彩な諸活動を通して、さまざまな異文化交流を体験することで、国際性豊かな学生を育成することを目的としています。

短期間に質の高い充実した内容が盛り込まれていますので、海外生活体験をしたい方、外国語によるコミュニケーション能力向上を期待する方、将来長期の留学を考えている方などにとって、ふさわしい講座といえるでしょう。

形態は原則として、往復とも大学手配の航空便による団体旅行形式で、現地研修には本学の教職員が同行します。

また、現地への出発前には事前研修を数回実施します。(事後研修を実施する場合もあります。)

なお、環境をめぐるテーマを扱い、講義やディスカッションだけでなく豊かな自然環境を活かした体験学習旅行を含むワシントン大学でのプログラムを今年度から開設します。

このほか、春季休業期間中には、パリ政治学院の講師陣による EU に関する講義のほか、フランス語会話のクラスや EU の諸機関の訪問も含む「パリ政治学院春季講座」についても引き続き実施することを計画しています。

これら 2 つのプログラムについては国際センターのホームページを参照してください。

なお、プログラムは、自然災害、戦争、航空機等交通機関にかかわる事故並びに前記以外の人為的、不慮不可抗力による事故などのために中止する可能性があることをあらかじめご了承ください。

問合せ先 三田国際センター

URL: <http://www.ic.keio.ac.jp/j-index.html> 詳細や変更は、随時ホームページ等で発表します。

ガイダンス 4月4日(月) 三田 528 教室 13:00~14:30
4月5日(火) 藤沢 12 教室 15:45~17:15
4月6日(水) 矢上 14-201 教室 13:00~14:30
4月6日(水) 日吉 J11 教室 17:00~18:30

慶應義塾大学 ウィリアム・アンド・メアリー大学夏季講座

The Keio University College of William & Mary Cross-Cultural Collaboration

原 田 隆 史 文学部助教授

柏 崎 千佳子 経済学部助教授

授業科目の内容:

ウィリアム・アンド・メアリー大学は、米国東海岸ヴァージニア州ウィリアムズバーグにあり、教育・研究で高い評価を得ている州立大学です。創立は 1693 年で、アメリカではハーバード大学について古い歴史を誇っています。

本講座は、毎年定められるテーマに沿った英語による講義、グループワーク、フィールドワーク、インタビュー、プレゼンテーション等で構成されています。また、大学内での寮生活や、ボランティアワーク、住民との交流、講演会、ワシントン DC 近郊の家庭でのホームステイ等を通じ、さまざまな異文化交流を体験することができます。

単位数:

4 単位

本講座の科目は、卒業に必要な単位として認められることがあります。その扱いは各学部・研究科によって異なりますので各自確認をしてください。

教科書:

特にありませんが、研修に参加するにあたり必要と思われる文献・資料は事前研修の際にお知らせします。

授業の計画:

現地研修期間: 2005 年 7 月 29 日(金)~8 月 16 日(火)(予定)

4 月下旬より事前研修(6 回程度)、また、帰国後には事後研修(2 回程度)を行います。

研修内容: ウィリアム・アンド・メアリー大学教員による講義および質疑応答、ダイアログクラス、ウィリアム・アンド・メアリー大生をまじえてのグループワーク、フィールドワーク、プレゼンテーション、ワシントン DC 近郊の家庭でのホームステイなど。

参加申し込みについて:

- (1) 募集人数: 40 名(提出書類により選考を行います。)
- (2) 募集対象: 全学部・研究科正規生(ただし通信教育部をのぞく)
- (3) 提出書類: 参加申込書(所定用紙)、学習計画書(日本語及び英語。各 A4 一枚程度)、最新の学業成績表のコピー(3 月中旬に保証人宛に送付されるもの)、英語能力証明書のコピー(TOEFL, TOEIC, 各種英語検定など)、RESEARCH PROPOSAL(所定用紙)書類選考後、グループ分けの時に利用します。
- (4) 募集期間: 4 月 7 日(木)~4 月 14 日(木) 各地区国際センター(窓口時間終了後の提出は一切受け付けません。)

(5) 選考結果発表： 4月28日(木)13:00(予定)

成績評価方法：

事前・事後研修の出席，中間発表，現地研修期間中の活動，Final Presentation，日本帰国後の Final Report により採点します。

慶應義塾大学 ケンブリッジ大学ダウニングコレッジ夏季講座

中野 誠彦 理工学部助教授

スネル，ウィリアム 文学部助教授

授業科目の内容：

ケンブリッジ大学は、オックスフォード大学と並ぶ英国の名門校で、美しいキャンパスは勉学に最適な環境にあります。

授業は英語による講義，ケンブリッジ大学在籍生を交えてのディスカッション，エッセイの作成・提出を中心としており，ケンブリッジ大学の教員が指導に当たります。講座期間中は，専門分野の知識を深めるだけでなく，ダウニングコレッジ内での寮生活や，ケンブリッジ大生が企画する諸活動に積極的に参加することで，幅広い異文化交流を体験することができます。

単位数：

4単位

本講座の科目は，卒業に必要な単位として認められることがあります。その扱いは各学部・研究科によって異なりますので各自確認をしてください。

教科書：

現地での開講科目の参考文献を，国際センター作成の募集要項に記載しています。また，事前研修時にリストにして配布します。

授業の計画：

現地研修期間： 2005年8月8日(月)～9月7日(水)

5月～7月に三田キャンパスにて事前研修を3回程度行います。

講義日程： 第1週：

Placement Interviews, English & writing preparation classes

第2週：

Ancient Greece and Western Civilization, Genethics: ethical issues arising from developments in genetics

第3週：

English Literature, The Science of Chaos

第4週：

Society and Politics in Contemporary Britain, Astronomy: Unveiling the Universe

9月6日(火) Closing ceremony

第2週から第4週までは，各週2科目ずつ用意された授業の内1科目を選択，合計3科目を選択履修。

各科目とも定員が30名のため，事前に参加者の希望をもとに履修調整を行います。

開講科目は事情により変更されることがあります。

研修内容： ケンブリッジ大学の教員による講義及び質疑応答(午前)

ケンブリッジ大生(TA: Teaching Assistant)を交えてのディスカッション(午後) エッセイ作成・提出。

参加申し込みについて：

(1) 募集人数：60名(提出書類により選考を行います。)

(2) 募集対象：全学部・研究科正規生(ただし通信教育部をのぞく)

(3) 提出書類： 参加申込書(所定用紙)，学習計画書(日本語及び英語。各A4一枚程度)，最新の学業成績表のコピー(3月中旬に保証人宛に送付されるもの)，英語能力証明書のコピー(TOEFL, TOEIC, 各種英語検定など)，履修希望科目申告表(所定用紙)

(4) 募集期間：4月7日(木)～4月14日(木) 各地区国際センター(窓口時間終了後の提出は一切受け付けません。)

(5) 選考結果発表： 4月28日(木)13:00(予定)

成績評価方法：

現地でのエッセイの評価をもとに行います。

国際センター設置講座

国際研究講座ならびに日本研究講座受講希望者へ

国際センターでは、外国および日本の文化や社会、国際関係を理解するための英語による講座を開講しています。本年度国際研究講座で取り扱う国／地域は、米国、カナダ、オーストラリア、アジア、ラテンアメリカにおよび、EU関係の講座も開講します。一方日本研究講座では、政治、経済、産業、文学、芸術、思想など幅広い側面から日本を探求します。

海外からの外国人留学生と共に英語で学ぶ授業としてユニークなものであり、学問を通しての国際交流の場として日本人学生の積極的な参加を歓迎します。

なお、本講座の履修単位の取り扱いは各学部・研究科により異なりますので、所属する学部・研究科の履修案内に従ってください。

1. 対象 大学学部生，大学院生，ならびに別科生
2. 単位 各科目 2 単位
(なお，医学部・医学研究科および法務研究科ではすべての授業科目が履修の対象となりません)

3. 手続方法

学事センターで所定の履修申告をしてください。国際センターに出向く必要はありません。

学部・大学院が設置主体の科目については、学部・大学院の登録番号を使用して登録手続きをしてください。

所属する学部・研究科で履修対象とならない場合は、三田、日吉の国際センターで相談してください。

4. 受講料 無料
5. 掲示 休講などの連絡事項は、三田の国際センター掲示板に掲示されます。

国際研究講座 (INTERNATIONAL STUDIES)

オーストラリアのビジュアルアート

(春学期)(Spring)

AUSTRALIAN VISUAL ARTISTS: AN INTRODUCTORY COURSE

ニコルズ , クリステーン 国際センター講師 (東京大学客員教授)

Christine Nicholls

Lecturer, International Center (Visiting Professor, University of Tokyo)

Course Description:

In this topic Dr Nicholls will introduce students to a selection of (mainly) contemporary Australian visual artists, and their work. Approximately half of the artists whose work will be discussed in the course will be Aboriginal. This will necessitate an introduction to the religious basis and underlying philosophy of Indigenous artistic production. In addition to powerpoint presentations introducing the class to the work of individual artists, the class will view and then discuss a number of films showing the artists' approach to their work. The course will also introduce cultural theory required for understanding contemporary art: postmodernism; cultural hybridity; simulacra; theories of "the gaze"; "the spectacle" and Judith Butler's ideas about gender and performativity

Text Books:

Nicholls, Christine, 2003, Art, Land, Story, Working Title Press, Adelaide, Australia, ISBN 1 876288 41 8 , price \$13.00 Australian (about 1200 yen) and Nicholls, Christine, 2003, Art, History, Place, Working Title Press, Adelaide, ISBN 1876288434 Australian price \$13.00 Australian (about 1200 yen)

Note that I will also be using handouts, so that students can avoid buying more expensive books. Text materials can be downloaded from the following Website <http://seekbooks.com.au>

Reference Books:

Andrew Sayers, Publisher: Oxford University Press, ISBN: 0192842145

Format: Paperback AUD\$39.95

Grading Methods:

Reports, and some oral presentation in class. Attendance, Participasion will also be taken into consideration.

Questions, Requests:

The two text books can be purchased on <http://www.seekbnooks.com.au> at a very reasonable rate (less than \$12.00 Australian dollars)

異文化と自己理解

(春学期)(Spring)

CULTURE AND THE UNCONSCIOUS

シヨールズ , ジョセフ 国際センター講師 (立教大学助教授)

Joseph Shaules

Lecturer, International Center (Associate Professor, Rikkyo University)

Sub Title:

Looking for the hidden roots of cultural difference

Course Description:

Culture has two sides, a visible side — food, clothing, architecture — and a hidden side of unconscious beliefs, values and assumptions. In this course we will learn the story of the discovery of hidden culture. We will explore culture's unconscious influence over us, and see how hidden cultural difference creates conflict in relationships and communication. This will involve learning hidden patterns of cultural difference related to things like: time, personal space, cooperation, independence, fairness, equality, emotion. Students will discuss their intercultural experiences, share their opinions and give presentations. The ultimate goal of this course is a deeper self-understanding.

Text Books:

Handouts to be supplied by the teacher.

Reference Books:

- 1) Different Realities — Adventures in intercultural communication, by Shaules & Abe, published by Nan'un-do.
- 2) Riding the Waves of Culture, by Trompenaars and Hampden-Turner, published by McGraw Hill

Class Schedule per week:

1. Class introduction
2. The discovery of hidden culture — Mead, Sapir & Whorf, Hall
3. A model of hidden culture — The onion model.
4. Student presentations
5. Cultural in human relations — independence and cooperation
6. Culture, emotion and self-expression — How we show feelings
7. Culture and status — Who is important and why?
8. Student presentations
9. Culture and gender — Gender separate vs. gender similar
10. Different modes of time — polychronic and monochronic
11. Student presentations
12. Final class

Message to those taking this Course:

This course is designed for students who have an interest in understanding people. An important part of our identity and values comes from how we were raised — in particular, the hidden values and assumptions of our culture. To understand this hidden side of ourselves, we must examine not only cultural difference, but our own personality. There will be lectures, discussion, and students presentations.

Grading:

Grades will be based on attendance, in-class presentations and a short final exam.

東南アジア世界の諸相

(春学期) (Spring)

WORLD OF SOUTHEAST ASIA

野村 亨

総合政策学部教授

Toru Nomura

Professor, Faculty of Policy Management

Sub Title:

Understanding Contemporary & Historical Aspects

Course Description:

In this class, students are exposed to contemporary as well as historical aspect of Southeast Asia. The information acquired in this lecture will surely be quite useful for those who want to be engaged in business in this fast-developing region.

Text Books:

None. Handouts will be given from time to time.

Reference Books:

Several books will be suggested during the class.

Class Schedule per week:

1. Orientation
2. What is SEA ?
3. SEA & Japan
4. SEA & European Power
5. Nature and Climate of SEA
6. Languages of SEA
7. Music of SEA
8. Politics of SEA
9. Other aspects of SEA

Please note that above order may change with short notice. For further information, please ask the professor directly.

Message to those taking this Course:

Students are recommended to bring along a map of Asia and / or Southeast Asia in every session.

Classroom rules will be indicated at the first session.

Grading Methods:

In class Exams, Attendance, Participation

Questions, Requests:

Should be forwarded to : nomura@sfc.keio.ac.jp

No petition on scores will be acceptable.

現代中国の国家と社会

(春学期) (Spring)

STATE AND SOCIETY IN CONTEMPORARY CHINA

ワンク , デイビッド

国際センター講師 (上智大学教授)

David L. Wank

Lecturer, International Center (Professor, Sophia University)

Course Description:**Overview**

This course assumes no prior knowledge about contemporary China, or about communist social and political organization. It is designed to provide a historical and thematic overview of post-1949 authority relations and patterns of politics in China. The first half of the course looks at the distinguishing features of state and society, such as central economic planning and one-party rule, that took shape during the first decade of the People's Republic in the 1950s. The second half of the course looks at the ensuing patterns of politics and conflict and how they have evolved over time. The course readings include original documents, autobiographies, and writings by sociologists, as well as political scientists and anthropologists.

Organization

Each class meeting will consist of a lecture. The lectures are a historical narrative of economy, society, and politics from 1949 to present. They are coordinated with the readings, which illustrate specific themes mentioned in the lectures. In addition we will see one Chinese movie.

Text Books:**Readings**

All readings listed in the course outline are required of all students. All readings are available online except for the following three books which are available for purchase.

GAO Yuan. *Born Red: A Chronicle of the Cultural Revolution*. Stanford University Press, 1987.

Shu-min HUANG. *The Spiral Road: Change in a Chinese Village Through the Eyes of a Communist Party Leader*. Westview Press, 1998 (second edition),

Andrew G. WALDER. *Communist Neo-Traditionalism: Work and Authority in Chinese Industry*. University of California Press, 1986,

Class Schedule per week:**INTRODUCTION****Unit 1**

Lecture on the "state and society" concept in political sociology

Reading on models of state and society for China

Wank, "State and Society in American Studies of Contemporary China"

HISTORICAL BACKGROUND**Unit 2**

Lecture on historical background

Reading on the origins of the party-state

Mao, "The Role of the Chinese Communist Party in the National War"

Unit 3

Lecture on communism in China and the Chinese Communist Party, 1917-1949

Reading on defining features of the party-state

Huang, *The Spiral Road*, chps. 1-5

Movie: To Live (directed by Zhang Yimou)

THE NEW ORDER, 1949-1957

Unit 4:

Lecture on stabilization immediately after the revolution, 1949–1953,

Readings on the party as an organization and status group

Vogel. “From Revolutionary to Semi-bureaucrat”

P. Link (ed.). “What if I Really Where?”, “A Bundle of Letters”, and “The Tyrant Bids Farewell to His Mistress”

Liu, “People or Monsters”

Unit 5

Lecture on building a centrally planned economy

Readings on the “corporateness” of social institutions

Whyte and Parish. *Urban Life in Contemporary China*, chps. 2,4,8,9,12.

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, chps 1-3.

Unit 6

Lecture on the bureaucratic administration of state and society

Readings on social inequality

Whyte and Parish. *Urban Life in Contemporary China*, ch. 3

Unger. “The Class System in Rural China”

DEEPENING THE REVOLUTION, 1958–1976

Unit 7

Lecture on the Great Leap Forward, 1958–1960

Readings on careers and social mobility;

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, ch. 4

Shirk. *Competitive Comrades*, pp. 63-178.

Unit 8

Lecture on economic retrenchment and competition within the elite, 1961–1965

Readings on the personalization of authority

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, chps. 5, 8

Oi. “Comunism and Clientelism: Rural Politics in China”

Unit 9:

Lecture on the Cultural Revolution

Readings on the conflict and instability in the polity

Gao. *Born Red*, entire

CHINESE SOCIALIST MODERNIZATION, 1979–

Unit 10

Lecture on the interregnum and further elite conflict, 1974–1979

Readings on the commercialization of power

Huang. *The Spiral Road*, chps. 6-12

Oi. “Market Reform and Corruption in Rural China”

Walder. *Communist Neo-Traditionalism*, chps. 6-7

Shirk. “The Decline of Virtuocracy in China”

Unit 11

Lecture on marketization and new patterns of conflict, 1979–1989

Readings on the Democracy Movement

Han. *Cries for Democracy: Writings and Speeches from the 1989 Chinese Democracy Movement*. pp. 5-16, 28-33, 36-44, 50-57, 59-62, 72-81, 83-91, 97-111, 118-126, 134-187, 197-208, 217, 221, 231-241, 246-251, 255-280, 285-295, 299-318, 335-349, 355-367

Saich. *The Chinese People's Movement: Perspective on Spring*, 1989, pp. 25-49, 83-163.

Unit 12

Lecture on the deepening of marketization and new conflicts

Readings on new social movement
Mallee, "Migration, Hukou, and Resistance in Reform China"
Zweig. The Externalities of Development"

Grading Methods:

A. Short writing assignment (15 percent of final grade)

There will be a short writing assignment based on the movie. It will be graded Excellent, Satisfactory, Poor. If you miss the movie you will be asked to finish readings the Spiral Road and write a 1,000 word review of by the following class.

B. In-class exams (45 percent of final grade)

There will be two in-class exams of short identification and/or multiple choice answers based on the lectures. They will be graded on the regular A-F scale.

C. Final writing assignment (40 percent of final grade).

This will be graded on an A-F scale. As this assignment is considered a take-home final, failure to hand it results in an "F" grade for the entire course regardless of your grades on the other course assignments).

D. Attendance is expected of all students enrolled in course. Attendance will be taken.

グローバルヴィレッジ構築に向けて：日本とサブ サハラ アフリカ地域 (春学期 X Spring)
BUILDING THE GLOBAL VILLAGE

| | |
|-------------------|---|
| 高橋良子 | 環境情報学部教授 |
| Yoshiko Takahashi | Professor, Faculty of Environmental Information |
| フリードマン デビッド | 環境情報学部教授 |
| David Freedman | Professor, Faculty of Environmental Information |

Sub Title:

Perspectives on Japanese Policy in Sub-Saharan Africa

Syllabus:

In an increasingly connected world, there are no specialty areas. Integration into a growing global economy encompasses both economic and trans-economic issues. At the Davos World Economic Forum 2001, the term "culturomics" was coined to define how various intellectual disciplines need to be combined in order to offer a fuller world view.

This course will focus on geo-political areas that stand outside the "global economy" (at this point) and issues that such areas face as they plan to integrate their economies and cultures into the "global village."

As the countries of Sub-Saharan Africa attempt to formulate policies in areas such as HIV care and education, sustainable development, conflict management and the growth of open societies, these policies connect with similar policies and issues around the world. Japan has made aid for African nations and support for the NEPAD (New Partnership for Africa's Development) a major part of its international policy. Last year, for example, at the third TICAD (Tokyo International Conference on African Development), Japanese Prime Minister Junichiro Koizumi pledged US\$1 billion for education and health care in Africa, which made Japan as one of the largest aid donors to Africa. Yet despite these official policies, Japanese trade with some Sub-Saharan countries has actually dropped, and the Japanese public remains distantly aware of Sub-Saharan Africa and the forces that have shaped its present situation and the role of the Japanese government in Sub-Saharan countries.

This course will help deepen students' understanding of the contemporary Sub-Saharan African nations and their socio-political and cultural issues which affect global governance and Africa. Through a series of lectures offered by ambassadors and embassy officials from the African Union (<http://www.mbandi.co.za/orsadc.htm>) students will explore the variety of links diplomatic, educational, economic and cultural that tie Japan to contemporary Africa.

Texts (tentative recommendations):

- 1) <http://web.africa.ufl.edu/asq/v5/v5i2a4.htm> (African Studies Quarterly Japan-Emerging Trends in Japan-Africa Relations: An African Perspective)
- 2) Dynamics of Japan's Relations with Africa: South Africa, Tanzania and Nigeria By: Ampiah, Kweku Published By: Routledge

Tentative Course Schedule (this schedule is subject to change due to the availability of various Ambassadors and embassy officials.):

Class 1 Introduction and Organization: A short discussion of Japan's involvement in Sub-Saharan Africa and the organization of student research group based on country.

| | |
|-----------------|---|
| Class 2 | A Short History of Africa: Overview lecture on African histories |
| Class 3 | Sub-Saharan Africa and Japan: Overview lecture by an official of the Ministry of Foreign Affairs of Japan |
| Class 4 | Sub-Saharan African Aid and the Bretton Woods System: An examination of early aid projects to the newly independent African states and constraints by the prevailing economic theories of the Bretton Woods system; NEPAD's responses to some of the issues arisen from this system |
| Class 5 | “Mediated” Africa: The effect of the “classic” media images of African societies on policy, perceptions and tourism *Ambassador of Kenya *Ambassador of Tanzania |
| Class 6 | The African Response to AIDS: An examination of policies adopted to address the social and economic issues of AIDS pandemic. *Ambassador of Uganda *Ambassador of Zambia |
| Class 7 | Mid-term Review: Discussion of the students' ideas for their individual final papers, and work with their research group on their presentation. |
| Class 8 | African Issues and Solutions: An examination of the some of the issues of the post-colonial legacy *H.E. Dr. B. Nugbane, Ambassador of the Republic of South Africa *Ambassador of the Republic of Zimbabwe |
| Class 9 | Models of Development for Micro-Economies: Policy options pursued by smaller African nations with non-integrated economies *Ambassador of Botsawana *Ambassador of Malawi |
| Class 10 | African Policy and Japanese Scholarship : An intermediary role played by academic research and exchange between policy development and application. *Ambassador of Angola |
| Class 11 | Symposium (tentative) In case of scheduling problems with the symposium this class will be a concluding lecture covering such topics as African Resources: Eco-tourism. spiritualities and communitas-the possibilities of non-material resources in development. |
| Classes 12 & 13 | Final group project presentations and class summary |

Evaluation:

As this class is based on the talks given by the guest speakers and the students response attendance is of the UTMOST importance. Daily participation will account for 45% of the final grade. Group work both in hosting the guest speaker from the group's chosen country and the final oral group presentation will account for a further 20% of the evaluation. A final individual research paper of 5 page minimum (single space, 12 pt font) with a separate bibliography will account for the final 35% of the grade.

Note to Interested Students:

1. Students interested in this course, please be present at the first meeting and have researched the following sites:
<http://www.mofa.go.jp/region/Africa/> 2) and <http://www.jica.go.jp/English/activities/regions/09afr.html>
2. Although the class will take place in 4th period, there will sometimes be an opportunity for interested students to spend sometime after the class period with the visiting Ambassadors of that day. Please consider this when planning your schedule

国際人権法

(春学期)(Spring)

INTERNATIONAL HUMAN RIGHTS LAW

細谷明子

国際センター講師

Akiko Hosotani

Lecturer, International Center

Sub Title:

Issues, procedures, and advocacy strategies regarding the promotion and protection of human rights worldwide

Subject of the class:

Students will study five different aspects of international human rights including:

- (1) Procedures for implementing international human rights involving state reporting to treaty bodies; individual complaints; thematic, country rapporteurs, and other U.N. emergency procedures for dealing with gross violations; humanitarian intervention; criminal prosecution and procedures for compensating victims; diplomatic intervention; state v. state complaints; litigation in domestic courts; the work of nongovernmental organizations; etc.

- (2) Major international institutions including the human rights treaty bodies; the U.N. Commission on Human Rights and its Sub-Commission on the Promotion and Protection of Human Rights; the U.N. Security Council; international criminal tribunals; the International Criminal Court; U.N. field operations authorized by the U.N. Security Council or under the authority of the U.N. High Commissioner for Human Rights; the Inter-American Commission on and Court of Human Rights; the European Court of Human Rights and other parts of the European human rights system; the U.N. High Commissioner for Refugees; and the International Labor Organization
- (3) Human rights situations in various countries such as South Africa, Iran, Myanmar, East Timor, Kosovo, Cambodia, former Yugoslavia, the Democratic Republic of Congo, Japan, the United States, Europe, Sudan, Ghana, and India
- (4) Substantive human rights problems related to the rights of the child, economic rights, the right to development, torture and other ill-treatment, minority rights, the right to a free and fair election, human rights in armed conflict, crimes against humanity, arbitrary killing, indigenous rights, self-determination, discrimination against women, the rights of refugees, etc.
- (5) Learning methods such as advising a client, role-playing, the dialogue methods, drafting, and advocacy in litigation

The principal book:

David Weissbrodt, Joan Fitzpatrick, and Frank Newman, International Human Rights: Law, Policy and Process (3rd ed. 2001) and supplement Selected International Human Rights Instruments and Bibliography for Research on International Human Rights Law

Assignments:

Assignments are listed below as to each class session:

- Apr. 12: Preface and Chapter 1: Introduction to International Human Rights Law and Drafting Human Rights Treaties
- Apr. 19: Chapter 4: Ratification and Implementation of Treaties; the Covenant on Economic, Social, and Cultural Rights
- Apr. 26: Chapter 5: State Reporting under International Human Rights Treaties; Cultural Relativism
- May 10: Chapter 6: What U.N. Charter-Based Procedures are Available for Violation of Human Rights?
- May 17: Chapter 7: Humanitarian Intervention
- May 24: Chapter 8: Can Human Rights Violation Be Held Accountable?; ad hoc Tribunal for the former Yugoslavia, or; Documentary, Long Night's Journey into Day (South African Truth Commission)
- May 31: Chapter 9: International Human Rights Fact-Finding
Lecture: Professor David Weissbrodt, the Rights of Non-Citizens (tentative)
- Jun. 7: Chapter 10: How Can the Government Influence Respect for Human Rights in Other Countries?
- Jun. 14: Chapter 11: Inter-American Human Rights System; the Organization of African Unity
- Jun. 21: Chapter 12: European Human Rights System
- Jun. 28: Chapter 13: Domestic Remedies for Human Rights Violations; Enforcing International Human Rights in Japan's Courts, Legislature and Administration
- Jul. 5: Chapter 15: Refugee and Asylum Law; Jurisprudence of Human Rights; Cultural Relativism
- Jul.12: Questions & Answers for reviewing the exam

Comment on the Class:

The class encourages students to analyze case situation and to evaluate the most effective methods to prevent human rights violations. Because of the evolving nature of the laws and issues in this field, students can participate as strategists and investigators.

Grading Policy:

Students will receive their grade for the course based on (1) class attendance (10%), (2) significant contribution to class discussion (10%), (3) an essay (30%), and (4) a final Exam (50%).

Office Hours:

Wednesday, 1-3 p.m. or by appointment

世界政治におけるラテンアメリカ

(春学期) Spring)

LATIN AMERICA IN WORLD POLITICS

アントリネス, マリオ

国際センター講師

Mario Antolinez

Lecturer, International Center

Course Description:

The countries of Latin America and the Caribbean form a vast and complex part of the Western Hemisphere. Although the strategic geopolitical relevance of the region has been recognized, Latin American values and attitudes regarding politics, business and life in general

remain profoundly misunderstood, if not totally unknown by many. Not surprisingly, what people think they know about the region is based on unfair stereotypes and generalizations generated by some dramatic event covered by the world media.

Thus, the main objective of this course is to foster a greater understanding of the region's realities. The course is designed as a multidisciplinary study focusing on Latin American politics, economics and foreign policy, and it is divided in two parts. Part I deals with the main features of Latin America as a region, while Part II consists mainly of a country-by-country approach.

Text Books:

Hillman Richard, "Understanding Contemporary Latin America". Lynne Rienner Publishers, 2001.

Reference Books:

- Atkins Pope, "Latin America in the International Political System". Westview Press, 1995.
- Black Knippers Jan, "Latin America: Its Problems and Its Promise". Westview Press, 1998.
- Calvert Peter, "The International Politics of Latin America". Manchester University Press, 1994.
- Cortes Roberto, "The Latin American Economies". Holmes & Meir, 1985.
- Child Jack, "Geopolitics and Conflict in South America". Praeger, 1985.
- Lael Richard, "Arrogant Diplomacy". Scholarly Resources, 1987.
- Levine Donrel, "Religion and Politics in Latin America". Princeton University Press, 1981.
- Lowenthal Abraham, "Partners in Conflict: The United States and Latin America". Johns Hopkins University Press, 1990.
- Molineu Harold, "U.S Policy toward Latin America: From Regionalism to Globalism", Westview Press, 1990.
- Peeler John, "Latin American Democracies". University of North Carolina Press, 1983.
- Rosenberg Mark, "Americas: An Anthology". Oxford University Press, 1992.
- Smith Peter, "Modern Latin America". Oxford University Press, 1997.
- Tokatlian Juan, "Teoria y Practica de la Política Exterior Latinoamericana", 1983.
- Wesson Robert, "U.S. Influence in Latin American in the 1980's. Praeger.

Class Schedule per week:

PART I

- Session 1: Introduction
- Session 2: The Actors
- Session 3: The Inter-American System
- Session 4: Latin American Integration and Association
- Session 5: Economic Outlook
- Session 6: International Relations
- Session 7: Latin America and the United States

PART II

- Session 8: Mexico and Brazil: The Regional Giants
- Session 9: Cuba: The Socialist Way
- Session 10: The Andean Region: Breakdown and Recovery
- Session 11: The Southern Cone: Authoritarianism and Democracy
- Session 12: Central America: Dictatorship and Revolution
- The Caribbean: Colonies and Micro-states
- Session 13: Final Exam

Grading:

The course is organized as a combination of lecture and seminar, and will be conducted in English. Performance will be evaluated on the basis of attendance (30%), class participation (20%), oral presentation (20%) and a final exam (30%).

グローバルビジネスにおける革新と戦略

(春学期) Spring)

INNOVATION AND STRATEGY IN GLOBAL BUSINESS

トビン , ロバート I. 商学部教授

Robert I. Tobin

Professor, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

This course examines successful innovations in global organizations-including market-changing products, inventive approaches to leadership and work, synergy between technology and product development, and the crafting, implementing and executing of business

strategy. Ideas, customers, leadership, technology, markets, and talent are all part of the mix when companies innovate and craft business strategy—and will be examined in this course.

Students will develop the skills and tools that are critical for inventing and utilizing new business concepts, re-inventing old ones, and making innovation part of their lives.

The course will be conducted seminar -style with lecture-discussions, student group presentations, case studies, video segments, experiential class activities, and research assignments.

Text Books:

Leading the Revolution by Gary Hamel
Supplementary Reading Materials and Case Studies
Additional Book To Be Assigned

Reference Books:

Students are encouraged to read related materials in The Asian Wall Street Journal, Business Week, and Fast Company and to watch related business television broadcasts.

Class Schedule per week:

List of Topics:

- Introduction: Time of Change & Innovation
- Trends In International Business Leadership /and Strategy
- Encouraging Ideas / Innovation
- What to Do About Decaying Strategy
- How to Become A Global Innovator
- New Market Expansion and Entry
- U.S. ,China, Thailand, Japan
- Global Leaders/Global Partnerships
- A look at Global Leaders
- Global Companies/Working Overseas
- Impact and Meaning of Anti-Globalization Forces
- Creativity in Leadership
- Future of International Business

Additional information about this course available at www.tobinkeio.com

Message to those taking this Course:

A challenging, innovative course designed to encourage you to think in new, innovative ways. Be prepared for a challenging, rigorous course. This course attracts a large number of Keio's top students from every faculty and exchange students from around the world. No business background is necessary. There is substantial opportunity for student interaction and collaboration.

When students have questions, they can contact the instructor before or after class.

Grading:

Evaluation based on successful completion of assignments and projects, participation and on-time attendance, and an examination. In the event of unavoidable absence, please contact another student for assignments and be prepared for the next class. All assignments must be typed and no late papers are accepted.

Questions, Requests:

When students have questions, they can contact the instructor before or after class.

現代ロシア研究

(春学期)(Spring)

UNDERSTANDING RUSSIA

ナコルチェフスキー ,アンドリィ

文学部助教授

Andrei Nakortchevski

Associate Professor, Faculty of Letters

The main purpose of this course is an attempt to understand contemporary Russia, to understand people who live in this still somewhat enigmatic land in the context of its own history of contacts with other nations. This course will not be a standard course in history and culture. We will talk more about things which usually remain unsaid in academic papers — about how average Russians live, what they like and dislike,

what they value and what they hate. We will try to comprehend a legendary “enigmatic soul” of Russians, to enter their inner world and look at it from within. We will also discuss general features of unique Russian civilization developed geographically and culturally between East and West. We will try to understand Russia escaping any distortions as best we can, using a lot of video materials as illustrations and sometimes as a base for discussion.

What does it mean to be a Russian? This will be the main question to which we will try to find an answer during these classes.

アメリカ研究：アメリカの歴史・文化と外交政策

(春学期) (Spring)

AMERICAN STUDIES

ウィリアムス , ムケシュ 国際センター講師

Mukesh K. Williams Lecturer, International Center

Sub Title:

American History, Culture and Foreign Policy

Rationale:

After the collapse of the Soviet Union in 1991 the United States emerged as the most important nation in the world. Every nation has some kind of relationship with the United States, which is either profitable or unprofitable. No nation can ignore the United States or fail to understand American history, culture and foreign policy. Most nations therefore include American Studies within their academic, bureaucratic and administrative orientation. Since the nineteenth century nation states especially America have tried to define key words and ideas relating to freedom, welfare, civil rights, sovereignty, representation and democracy to create a composite intellectual and political culture. The American Studies Program will introduce students to the inter-disciplinary study of American history, culture and foreign policy and help them to understand how Americans and non-Americans think about America.

Course Outline:

The course will introduce 4 modules, each module containing a big idea namely:

1. Nation and Narration: constructs the Pocahontas story/myth; human arrival in North America; Native American life; the Americas, West Africa and Europe on the eve of contact; American industrial heritage; the work of Samuel Slater in the late eighteenth and early nineteenth centuries in Pawtucket in constructing industrial America.
2. Immigration and Cultural Change: ‘Old’ and ‘New’ immigration; the world of the immigrants; a new working class; the limits of mobility and ethnic diversity; the Chinese Exclusion Act; new forms of leisure and mass entertainment; the American Dream; 1965 Immigration Policy; multiculturalism and identity politics.
3. National and International Identities: Reconstructing World War II, American neutrality and the road to war; post-war economic boom, the rise of consumer society; the crabgrass frontier; the Baby Boom; the birth of television and the influence of advertising; roles of women and *The Feminine Mystique*; the Korean War; the arms race; the Red Scare and McCarthyism; the early civil rights movement; teen rebellion and rock’ n roll; the media and Vietnam War; rise of CNN.
4. American Foreign Policy—Neutrality to Involvement (1865–1917): Early American isolationism, moral foreign policy; postwar naval/air supremacy (1920–2004), manifest destiny, American unilateralism, America as the policeman of the world, clash of civilization and war against terror.

The course will help students to confront the contradictions and inherent tensions in the American narrative without the false hope of an easy solution. We will not fail to discuss democratic aspirations, concepts of justice, American solidarity/Christian and Islamic divide and national identity. Along the way we would also question the methods and perspectives by which we study our subject by asking some of the following questions:

- a) How do Americans think of themselves as a nation and the rest of the world? And how do people from other nations think about America? (Samuel Huntington, *The Clash of Civilization*; radical evil/Christian good; liberal/democratic frameworks—Richard Bernstein, *Radical Evil*)
- b) How is space constructed in the lives of individuals in America? How changes brought in by pre-industrial, industrial and post-industrial societies reconstituted the lives of people in the U.S.? (Vertical/horizontal expansion; notions of bigness/assertion; David Reisman, *The Lonely Crowd*; national parks—European signatures/Native American erasures—Yosemite and Yellowstone National Park)
- c) What are the popular methods of understanding the culture and society of America? (Clifford Geertz and others)
- d) How do we imagine the past and its effects on social and cultural representation? (Hayden White, Stuart Hall and David Hollinger)
- e) How do the concepts of American unilateralism and manifest destiny define American foreign policy?

Aims:

The students will get an opportunity to:

1. acquire presentation and negotiation skills
2. learn new concepts, methods and vocabulary
3. understand stereotypes of knowledge, reason/critical thinking, culture, gender and politics (bias, manipulation, prejudice, discrimination and hegemony)
4. synthesize diverse opinions and perspectives from within and outside America
5. develop skills to write/think purposefully and strategically
6. acquire the habit to pursue independent thinking

Reference Books:

Short selections from the following books and essays:

Richard J. Bernstein, *Radical Evil: A Philosophical Interrogation*, (Cambridge: Polity Press, 2002)

———, *The New Constellation: Ethical-Political Horizons of Modernity/Postmodernity*, rpt.,1998; (Cambridge, Massachusetts: The MIT Press, 1992).

Julia Kristeva, *Nations Without Nationalism*, (New York: Columbia University Press, 1993)

Samuel Huntington, *The Clash of Civilization and the Remaking of World Order*, (New York: Touchstone, 1997).

Clifford Geertz, *The Interpretation of Culture*, (New York: Basic Books: 1973).

———, *Available Light: Anthropological Reflections on Philosophical Topics*, (Princeton: Princeton University Press, 2000).

Todd Gitlin, *The Twilight of Common Dreams: Why America is Wracked By Culture Wars*, New York: Henry Holt & Company, 1995).

David A. Hollinger, *Postethnic America*, (New York: Basic Books, 1995).

Giles Gunn, "Introduction: Globalizing Literary Studies," *The Modern Language Association of America*, 2001, pp. 16-31.

Rober Young, *White Mythologies: Writing History and the West*, rpt 2003; (London: Routledge, 1990).

Tzvestan Todorov, *The Conquest of America: The Question of the Other*, (Norman: The University of Oklahoma Press, 1999).

Stuart Hall, *Representation: Cultural Representations and Signifying Practices*, (London: Sage, 1997).

David Reisman, *The Lonely Crowd*, (New Haven: Yale University Press, 2001).

Werner Sollors ed., *Theories of Ethnicity: A Classical Reader*, (London: Macmillan Press, Ltd., 1996).

Charles Taylor, *Multiculturalism: Examining the Politics of Recognition*, (Princeton: Princeton University Press, 1994).

Class Schedule per week:

- | | |
|------------------------|--|
| 1 st Week: | Shopping |
| 2 nd Week: | Introduction to the course, handouts, a short reading list; Imagining the nation—European and Native American ideas. Extract from Todorov's <i>The Conquest of America</i> ; Sollors, <i>Theories of Ethnicity</i> ; de Tocqueville, <i>Democracy in America</i> , |
| 3 rd Week: | 3 Worlds Meet—Europe, West Africa and Native Indian-Video Script. Disney imagining Pocahontas—multicultural, racial (anti-British and anti-Indian) and feminist issues |
| 4 th Week: | Immigration and Cultural Change, video; OMD Directive 15. Immigrant writers such as Saul Bellow/Malamud Isaac Singer/Anzia Yezeriska, Toshio Mori, Hisaye Yamamoto, John Okada, Jhumpa Lahiri, Amy Tan et. al. Handout: Giles Gunn, "Globalizing Literary Studies." |
| 5 th Week: | A brief discussion of topics of presentation such as European pioneers, Native American concept of land/music/family life/politics, immigrants/ multiculturalism/working class life in big cities (Reisman, <i>The Lonely Crowd</i>); personal is political, civil rights movement—Malcolm X/Martin Luther King/FBI; Japanese Americans/Internment camps/loyalties etc. Choose topics for presentation. |
| 6 th Week: | Make small groups (about 2/3 students) to discuss presentation topics followed by question-and-answer discussion session. Summing up—representation of social and political reality. Create a format for presentation/outline. |
| 7 th Week: | World Wars I and II/Postwar America. Extracts from Gitlin and Hollinger; Show all three videos (if time permits). |
| 8 th Week: | Readings form speeches of Malcolm X and Martin Luther King Jr., A discussion of Harlem and the First Abyssinian Church, New York; Handout from Stuart Hall, <i>Representation</i> ; Taylor and Appiah, <i>Multiculturalism</i> . |
| 9 th Week: | American Foreign Policy: Show video US and the World (1865-1917); extract from Huntington's <i>The Clash of Civilization</i> . |
| 10 th Week: | Henry Kissinger and others on American Foreign Policy |
| 11 th Week: | End-Semester Presentation and 4-page final report |
| 12 th Week: | End-Semester Presentation and 4-page final report |
| 13 th Week: | End-Semester Presentation for latecomers/course evaluation |

Message to those taking this Course:

Please read the handouts and textual material at home so that you are better prepared to discuss topics in class more enthusiastically and creatively.

Grading Methods:

1. End-Semester Class research-based presentation in class (60% credit)
2. An end-semester 4-page report on the topic chosen for presentation (20 % credit), homework based on the text/supplementary material (10% credit)
3. Attendance, Participasion 10% credit.

アフリカン イシューズ : アフリカにおける近代と危機の意味

(春学期)(Spring)

AFRICAN ISSUES

近藤英俊

国際センター講師 (関西外国語大学助教授)

Hidetoshi Kondo

Lecturer, International Center (Associate Professor, Kansai Gaidai University)

Sub Title:

The meaning of modernity and crises in Africa

Course Description:

Children, who are emaciated with protruding bellies and fly-infested faces, are crying for food, or worse, already motionless in their mothers' arms. For many, such a shocking scene is typically associated with Africa. This popular imagery has its origin in mass media that are often sensationalistic as to African coverage. The truth is that Africa is the continent of wonderfully rich and diverse cultures, where people live their vibrant everyday life. Yet, from this, it does not immediately follow that Africa is a trouble-free region. Just as Japan and other industrial countries have many social problems, Africa does have critical issues to be pursued.

This course is intended to explore some of the major problems that Africa is currently facing. This year we will focus on the issues of movement of people in contemporary Africa. Migration is an important feature of the lives of a large number of African. Contrary to a conventional view that African villagers never see the outside world, they often move away from their villages without severing their ties with homes. It is a practice of *longue durée* as well as experiencing contemporary transformations. However, movement does not merely refer to geographical movements of people but more importantly to social and cultural shifts. People commonly move between groups (therefore change their personal identities), between works, between religious faiths, between medical practices and lots more, which presupposes considerable social and cultural plurality.

Using wide range of academic disciplines, we will explore geographical movements, and social and cultural shifts in contemporary Africa. Thus, the topics we deal with include: (1) urban-rural migration, (2) multiplicity of identities and their changes, (3) diversification of occupations and jobs, (4) situational changes in religious and medical practice, (5) crisis situations attributable to such movements and plurality. The course will highlight movement as modernity in Africa.

Text Books:

Texts will be distributed in due course.

Reference Books:

1. Trager, L. 2001. *Yoruba Hometowns*. Linne Tiennen.
2. Kondo, H. 2003. "Illness in Between". *Japanese Review of Cultural Anthropology* 4

Message to those taking this Course:

The course comprises lectures and class works. For class works, students are required to read and summarise a part of books or articles (minimum 30 pages per week) before attending the class. In the class, students will discuss their readings in a small group and then present it in front of all the rest. This is by no means an easy course!

Grading Methods

Assessment is based on active participation in class works and an essay (3000 words) submitted at the end of the term.

国際開発協力論

(秋学期)(Fall)

INTERNATIONAL DEVELOPMENT COOPERATION

長谷川 純一

国際センター講師 (東京大学客員教授)

Junichi Hasegawa

Lecturer, International Center (Visiting Professor, University of Tokyo)

Sub Title:

Framework for Poverty Reduction in Developing Countries

Course Description:

70% of the world population live in developing countries. Discussions will be provided for the students who are expected to live and work in the global world. The main topics of the class are: 1) nature of developing countries and development strategies; 2) actual practice and methodology of aid; 3) public opinion on ODA, national interest and international society; and 4) international organizations, bilateral aid agencies and history of development cooperation.

Text Books:

Printed materials will be provided for the actual cost.

Reference Books:

Todaro, Michael and Stephen C. Smith, *Economic Development 8th Edition*, Harlow/Boston, Pearson Education/Addison-Wesley, 2002

Easterly, William, *The Elusive Quest for Growth Economists' Adventures and Misadventures in the Tropics*, Cambridge: The MIT Press, 2001

Class Schedule per week:

1. Introduction to International Development Cooperation
2. Economies of Developing Country
3. Evolution of Development Economics
4. Actual Practices of ODA
5. ODA, Governing Law and National Interest
6. Japanese ODA and Public Opinion
7. 50 Years of ODA and Thoughts behind It
8. Aid Organizations
9. What is the Role of NGOs?
10. Pursuing Effective Aid
11. Current Topics in Donors' Circle
12. Is Aid Effective? <Micro Macro Paradox>
13. (TBD)

Message to those taking this Course:

Let us think about Development! No prior knowledge is required, but your active participation is strongly encouraged.

Grading Methods:

One Term Paper will be requested. Evaluation will be made based on active class participation (50%) and Term Paper (50%).

Inquires

mailto: j-hasegawa@jbic.go.jp

異文化研究：国際化と異文化理解プロセス

(秋学期)(Fall)

INTERNATIONALISM AND CULTURAL LEARNING

シヨールズ, ジョセフ 国際センター講師 (立教大学助教授)

Joseph Shaules Lecturer, International Center (Associate Professor, Rikkyo University)

Sub Title:

Human relations in the new global community

Course Description:

Traveling, living abroad and dealing with people from other cultures sometimes leads to understanding, tolerance and rich human relations. At other times, it increases stereotypes, creates conflict, causes culture shock and even identity crises. In this course, we will study this process of cultural learning. We will look at the stages that sojourners (travelers, expatriates etc.) go through when adapting to new environments, including how one's view of the world, values, and even identity can change. We will try to understand what it means to be "international" or "bi-cultural". The emphasis will be on the personal cultural learning experience, rather than geopolitical issues. There will strong emphasis on student discussion, student presentations, and students' intercultural experiences.

Text Books:

Handouts to be supplied by the teacher.

Reference Books:

- 1) Different Realities — Adventures in intercultural communication, by Shaules & Abe, published by Nan'un-do
- 2) Identity, by Shaules, Tsujioka & Iida, published by Oxford University Press

Class Schedule per week:

1. Class introduction
2. The nature of intercultural contact — Deep and shallow cultural learning
3. Visible and invisible culture — the cultural onion
4. Student presentations
5. The goals of cultural learning — sympathy, empathy & constructions of reality
6. The “Deep difference” model of intercultural development — the three reactions
7. The roots of prejudice — Intercultural resistance
8. Student presentations
9. Towards ethnorelativism — Intercultural acceptance
10. Biculturalism and beyond — Intercultural adaptation
11. Community and the “multi-cultural man”
12. Student presentations
13. final class

Message to those taking this Course:

This class is especially recommended for students with interest in (or experience of) living abroad. Students will share their personal point of view, and are expected to share experiences and ideas during discussion and presentations. This class is open to all students, regardless of their previous level of intercultural experience.

カナダという国とカナダの国際的な役割

(秋学期) (Fall)

CANADA AND ITS INTERNATIONAL ROLE

イエローレース, ジェームズ 国際センター講師 (カナダ日本連盟日本代表)

James Yellowlees

Lecturer, International Center (Director-Japan, Canadian Education Alliance)

Course Description:

The course will focus on introducing the history, economy and social and political systems of Canada. Students will then examine contemporary Canada and its role in the international community. We will make use of videos and computer assisted media.

Message to those taking this Course:

Canada is a very interesting nation that has a lot of potential. If you are interested in learning more about Canada please consider taking this course.

Grading Methods:

Grading Criteria: A five-page written Report on one aspect of Canadian Politics, Economy, Society or Culture.

国際関係

(秋学期) (Fall)

INTERNATIONAL RELATIONS

セツト, アフターブ

慶應義塾大学 グローバルセキュリティ研究所 所長

Aftab Seth

Director, Keio University Global Security Research Center

Sub Title:

A view from a practitioner

Course Description

This series will cover a wide range of subject:

Civilisational cross fertilization, The Cold War, South Asia where one sixth of humanity resides, the vital questions arising from attempts being made to bring about integration at Track I and Track II levels, the increasing role being played by NGOs and civil society in harmonising divergences on a range of issues, the vibrant country Vietnam its troubled past and its bright future, and related topics. These lectures will be

presented in the context of 35 years spent by the lecturer, in the practice of Diplomacy, 7 of which were as a Consul General, in charge of post which is a sub office of an Embassy and 11 years as an Ambassador to 3 countries, Greece, Vietnam and Japan.

Text Books:

象は痩せても象である 英語版・“Even if an elephant gets thin, it is still an elephant”

Reference Books:

Leadership in an interdependent world by Ghita Ionescu, Longman
Reconciliation in the Asia Pacific edited by Yoichi Funabashi, US Institute of Peace Press
Peace and security in the Asia Pacific region edited by Kevin Clements, UN University Press
Contemporary Conflict Resolution, Hugh Miall, Oliver Ramsbotham, Tom Woodhouse by Polity Press
South Asia in the world edited by Ramesh Thakur and Oddny Wiggen UN University Press
The debate over Vietnam by David W. Levy, Johns Hopkins, University Press
Origins of the Cold War edited by Melvyn P Leffler and David S Painter Routledge publishers
Beyond the Judgement of Civilisation by Ushimura Kei Translated by Steven J Ericson by International House of Japan, Japanese title Bunmei no sabaki o koete.
Is Japan still number one, Ezra E Vogel Pelanduk Publications 2000
Victor's Justice Tokyo War Crimes Richard H Minear Princeton University Press
Japanese Higher Education a Myth by Brian J McVeigh published by ME Sharpe 2002
The Journal of Oriental Studies: Special Series The Spirit of India VOL 13 2003, by the Institute of Oriental Philosophy
The Man who Harvests Sunshine by Andras Erdelyi: the Modern Gandhi: MS Swaminathan (to be continued)
Ten Years of the Sasakawa South East Asia Cooperation Fund by Sasakawa Peace Foundation
Innovation and Change selected essays and Christianity in the Arab World by Prince El Hassan bin Talal of Jordan published by Majlis El Hassan Amman Jordan 2003 and SCM Press London respectively.
Bulletin of the Royal Institute for Inter-Faith Studies Vol 5 Number 2 Autumn/Winter 2003 printed by the Institute in Amman Jordan

Class Schedule per week:

- 1) Introduction
- 2) & 3) India and Japan in a resurgent Asia-2 lectures including the role of an embassy
- 4) Cross fertilization in civilizations. A shared past
- 5) The Cold War, origins and demise
- 6) Asian Integration: Economic and Cultural
- 7) Conflict Prevention, Management and Resolution
- 8) South Asia-Perspectives and prospects
- 9) Leadership-its role in diplomacy: governance and inner peace
- 10) Regionalism, Multiculturalism and Multilateralism
- 11) Vietnam: perspective and prospects
- 12) Europe-Unity-Peace
- 13) Role of NGO's in international relations a case study: the MS Swaminathan Foundation, Institute of Satya Sai Education, Sasakawa Peace foundation, Toyota Foundation, The Royal Institute for Inter-Faith Studies

Message to those taking this Course:

There will be an attempt to invite guest speakers who will be Ambassador from other countries. This may lead to some changes in the titles of the lectures and the structure. The aim is to share experiences in the craft of diplomacy, the practical aspects of conducting international relations, including bilateral relations between 2 countries. Students from all faculties are welcome.

Grading Methods:

- Written Exam
- Graded on the basis of participation in class and group discussions and regular attendance.
- There will also be an oral interview for meritorious students

VISIONS OF THE PAST: CROSS-CULTURAL COMPARISON OF HISTORICAL FILM

エインジ, マイケル W. 経済学部助教授

Michael W. Ainge Associate Professor, Faculty of Economics

Course Description:

Historical Drama is a well-established film genre in most nations. While the majority of historical films ostensibly try to “re-create” past events, and present a “window on the past”, others depict the past in such a way as to comment on the nature of presenting history on film. In this course, we will examine historical films from around the world—Asia, Africa, Europe, Latin America and North America—with an eye on how they treat their historical subjects and on which attendant historiographical issues they raise. We will learn to recognize the basic issues and problems of presenting history on film (as compared to history recorded in books and manuscripts, for example), and this will allow us to discuss and compare how filmmakers in different cultures have responded to those problems.

First, we will define the two dominant types of historical film, the drama and documentary, analyzing their conventions, as well as assessing their limitations. Then, we will proceed to survey some alternative approaches to representing the past on film. All along, we will try to uncover the “hidden” ideological and interpretive assumptions in the films. We will have to consider the relationship between fact and film, and the questions of accuracy, completeness, complexity, argument. Finally, students will be expected to view a film independently, and to write a paper analyzing that particular film in light of the questions and theories discussed in the class.

Text Books:

A partial list of films on the course syllabus:

CEDDO (SENEGAL, 1978)

HEARTS AND MINDS (U.S.A., 1975)

THE MARRIAGE OF MARIA BRAUN (W. GERMANY, 1979)

QUILOMBO (BRAZIL, 1984)

SANS SOLEIL (FRANCE, 1982)

TANGO (SPAIN/ARGENTINA, 1998)

WALKER (U.S.A., 1987)

Last Samurai (U.S.A., 2003)

Grading Methods:

Students will be required to watch the assigned films on video before class, as homework, and to prepare questions for discussion in English in class. Assigned films will be available with English and/or Japanese subtitles. Evaluation will be based on: class participation(40%), and understanding of the course material as demonstrated in a term paper(60%).

DEVELOPMENT AND SOCIAL CHANGE

倉沢 愛子

経済学部教授

Aiko Kurasawa

Professor, Faculty of Economics

Sub Title:

Effect of Development Policy and Social Change at Grass-roots Community in Indonesia

Course Description:

I will describe social changes brought by rapid and heavy development policy, taking a case of Indonesia. My analysis is based on field research in two sites (one urban and another rural) where I have been watching since 1996. I will focus on changes on such aspects as human relations within the community, flow of information and changes in communication mode, religious piety, life-style etc. I will show you video which I recorded at the research sites.

Through this course first of all I want you to get clear image on people's life in a relatively “unknown” world, and so doing, to reconsider such questions as what is “development” and what is “prosperity. Does economic development really bring you prosperity and happiness? Critical analysis and evaluation are most welcome.

Text Books:

give you hand-out

Reference Books:

倉沢愛子 『ジャカルタ路地裏フィールドノート』 中央公論新社 2001年

Class Schedule per week:

- (1) Introduction on Indonesia
- (2) Suharto's development policy and foreign aid (national level analysis)
- (3) Development policy in economic sector
- (4) Development policy in health sector (2 times)
- (5) Development policy in education
- (6) Neighborhood Association and Control of people
- (7) Increased flow of Information
- (8) Strengthening of Muslim belief (2 times)
- (9) Emergence of new urban middle class
- (10) Globalization and flow of pop culture
- (11) Definition of "prosperity"

Message to those taking this Course:

read several books on developing countries in Southeast Asia

Grading Methods:

Reports (4-5 pages (A4) of essay), Attendance,Participasion (requires 70% attendance)

アジア諸国におけるビジネスマネジメント

(秋学期)(Fall)

BUSINESS MANAGEMENT IN ASIAN COUNTRIES

トビン , ロバート I. 商学部教授

Robert I. Tobin

Professor, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

This course focuses on strengthening your understanding of the major issues and challenges involved in the leadership of businesses in Asia. There will be a special focus on business strategy and the styles of management of firms headquartered in Japan, North America and Europe.

Among the topics will be the unique political, economic, social and cultural influences on managing Asian operations, issues related to corporate governance and ownership, entrepreneurship and strategy.

The course will be conducted seminar-style with presentations and discussions based on assigned readings, case studies, video segments, projects, experiential class activities, case studies and research assignments.

Text Books:

Text TBA

Additional assigned articles, case studies and supplementary readings

Reference Books:

Students are encouraged to read related materials in The Wall Street Journal, Business Week, and The Economist and to watch related television broadcasts.

Class Schedule per week:

Introduction
 How to Succeed in Asian Markets
 Asian Market Leaders
 Hybrid Management Styles
 Leading Foreign Firms Successfully
 Local Company and Country Trends
 Country Information Presentations
 Pan-Asia Strategy
 Case Studies: Challenges of Joint Ventures and Blending Style
 Political and Economic Risks in Asia

Executive Development and HR
Challenges in Asia
Competition with Family Businesses
Business in Frontier Markets
Company Presentations

Additional information about this course available at www.tobinkeio.com

Message to those taking this Course:

A challenging, innovative course that examines the business approaches of countries in this region. Students call this an eye-opening course. Be prepared for a challenging, rigorous course. This course attracts a large number of Keio's top students from every faculty and exchange students from around the world. No background in business is required. There is substantial opportunity for student interaction and collaboration.

Evaluations:

Evaluation based on successful completion of assignments and projects, participation and on-time attendance, and an examination. In the event of unavoidable absence, please contact another student for assignments and be prepared for the next class. All assignments must be typed and no late papers are accepted.

Questions, Requests:

When students have questions, they can contact the instructor before or after class.

EU・ジャパン・エコノミック・リレーションズ

(秋学期 X Fall)

EU - JAPAN ECONOMIC RELATIONS

林 秀毅

経済学部非常勤講師 (新光証券商品企画部部长・グローバルストラテジスト)

Hayashi, Hideki

Part-time Lecturer, Faculty of Economics (Global Strategist, General Manager Financial Products Planning Department Shinko Securities Co., Ltd)

Course Description:

This course is intended to understand the EU-Japan relations, offered in English. Emphasis will be on the economic side of EU-Japan relations, rather than the political or historical.

In each lecture, points will be discussed based on Powerpoint documents. As it is expected to be a small class, active questions and comments by students are welcome.

At the end of each lecture, the topic to be discussed in the following week will be announced. Students are supposed to submit report on the topic one week after.

Text Books:

Julie Gilson, "Japan and the European Union. A Partnership for the Twenty-First Century", Palgrave Macmillan, 2000. (Several Copies of the text are on reserve at the library.)

References:

Kaji, Hama and Rice, "The Xenophobe's Guide to the Japanese," Oval Books, 1999.

Class Schedule (Subject to change):

Lectures will be based mostly on chapters of the text.

Chapter 1 Introduction: Assessing Bilateral Relations (1)

Chapter 2 Developing Cooperation 1950s - 80s (2)

Chapter 3 Japan and its Changing Views of Japan (3, 4)

Chapter 4 European Integration and Changing Views of Japan (5, 6)

Chapter 5 The 1990s and a New Era in Japan-EU Relations (7, 8)

Chapter 6 Cooperation in Regional Forums (9, 10)

Chapter 7 Addressing Global Agendas (11, 12)

Chapter 8 Conclusions: A partnership for the Twenty-first Century (13)

Each number in parenthesis indicates the number of the lectures subject to change. Additional articles and materials will be introduced, if necessary.

Message to Those Taking This Course:

The knowledge on European language (French, German, Italian, or Spanish) is preferable, but not essential.

Evaluation:

Exam. Reports. Attendance.

Questions and consultation:

Anytime during the class, also by e-mail.

産業史各論（科学技術政策史）

（春学期 X Spring）

HISTORY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY POLICY

ルイス，ジョナサン

商学部非常勤講師（一橋大学助教授）

Jonathan Lewis

Part-time Lecturer, Faculty of Business and Commerce (Associate Professor, Hitotsubashi University)

Course Description:

This course investigates the aims, effectiveness and unexpected consequences of science and technology policies around the world. It focuses on the roles of states, in promoting and regulating scientific research and technological development.

In previous years I have talked in Japanese for the first half of each class and English for the second half, but will adjust this to fit students' preferences.

Reference Books:

Etzkowitz, Henry, 2002. *MIT and the Rise of Entrepreneurial Science*. Routledge.

Fuller, Steve, 1997. *Science*. Open University Press.

Levy, Pierre, 2001. *Cyberculture*. University of Minnesota Press.

Low, Morris; Nakayama, Shigeru and Yoshika, Hitoshi, 1999. *Science, technology and society in contemporary Japan*. Cambridge University Press.

Penley, Constance. 1997. *NASA/Trek: popular science and Sex in America*. Verso.

Samuels, Richard J., 1994. *Rich Nation, Strong Army*. Cornell University Press.

加藤弘一 著「*電腦社会の日本語*」文春新書，2000

中山茂 他 著「*通史 日本の科学技術*」ガクヨウ書房，1995

Class Schedule per week:

1. オリエンテーション
2. 技術政策の概要
3. イノベーションと技術普及論
4. 宇宙ロケットの開発史
5. プロジェクト・オライオン（原子力ロケット）
6. 国際宇宙ステーション
7. 海洋研究
8. 規格の役割。文字コードを例に
9. 著作権制度
10. オープン・ソース・ソフトウェア
11. コンピュータセキュリティ
12. 科学技術政策と大学
13. まとめ

Evaluation:

Each student is provided with a website. Students follow policy developments in a field of science and technology of interest to them, and posts their findings frequently to their website. Points are awarded for class attendance and for website entries.

Inquiries:

Jonathan_lewis@mac.com

<http://www.lewis.soc.hit-u.ac.jp>

SEMINAR: LECTURE OF ETHICS 1

| | |
|-----------------|---|
| 樽井 正義 | 文学部教授 |
| Masayoshi Tarui | Professor, Faculty of Letters |
| エアトル, ヴォルフガング | 文学部助教授 |
| Ertl, Wolfgang | Associate Professor, Faculty of Letters |

Sub Title:

Global Justice

Course Description:

Having been focused almost exclusively on the structure of singular societies, contemporary political philosophy has only recently begun to tackle normative issues of a global scale. The most prominent example is John Rawls who reapplied his famous original position argument on the level of peoples. Strikingly enough and to the dismay of many of his followers, Rawls thinks that there are only extremely weak principles of redistribution operating globally in marked contrast to the demands within a liberal society. In reaction to Rawls's claims a lively debate developed as to whether it might be possible to derive far stronger principles of global distributive justice and what they might look like. Two issues turned out to be of crucial importance: is there an equivalent to the so-called difference principle according to which inequalities are only justified if they are to the benefit of the worst-off? Between which entities are these principles supposed to operate, between peoples or states or rather between individual human beings? We are going to look at these discussions in more detail without confining ourselves to considerations of Rawls scholarship. Instead we shall also try to take into account different lines of thought.

Texts:

Pogge, Thomas (ed.): Global Justice. Oxford, Malden (Mass.): Blackwell 2001.(available in paperback)

Course Schedule (Subject to Change):

- 1) Introduction
- 2) Background: Rawls's "Law of Peoples"
- 3) Priorities of Global Justice
- 4) Global Inequality and International Institutions
- 5) Global Distributive Justice
- 6) Contractualism and Global Economic Justice
- 7) The Disanalogy of States and Persons
- 8) Cosmopolitan Justice and Equalizing Opportunities
- 9) The Global Scope of Justice
- 10) Towards a Critical Theory of Transnational Justice

GRADUATE SEMINAR ON EUROPEAN INTEGRATION

| | |
|-----------------|------------------------------|
| 田中俊郎 | ジャン＝モネ チェア教授 |
| Toshiro Tanaka | Professor, Jean Monnet Chair |
| 細谷雄一 | 法学部専任講師 |
| Yuichi Hosoya | Lecturer, Faculty of Law |
| 庄司克宏 | 法務研究科 教授 |
| Shoji Katsuhiko | Professor, Law School |

Course Description:

The European Union strives to establish a new order in Europe. While the EU attempts to deepen its construction through the Maastricht Treaty, the Amsterdam Treaty, the Nice Treaty and the Treaty establishing a Constitution for Europe, it has enlarged its scope to South and East, from 15 to 25 member states on May 1 2004.

This year, the seminar will focus on the enlargement and the deepening of the EU, trying to shed more lights on the historical development, to analyze its problems and outline future perspectives on the subject.

Course Schedule (Subject to Change):

1. Official Language: English
2. Presentation by students and discussion to follow.
3. Special guests will be invited from the European Commission, Embassies of the member states and acceding countries in Japan, and researchers including professor from "Science Po" in Paris will be invited.

Evaluation:

Each student will be expected to give oral presentations and join in discussion during the semester. Each student is also expected to submit a term paper by the end of the semester (Length: 15 double-spaced typewritten pages including footnotes.)

Inquiries:

Call Extension 22006 for appointment.

金融特論

(秋学期) (Fall)

ADVANCED STUDY OF FINANCE

深尾光洋

商学部教授

Mitsuhiro Fukao

Professor, Faculty of Business and Commerce

Sub Title:

Corporate Governance and Financial System

Course Description:

The governance structure of limited liability companies that stipulates the relationship among the management, stockholders, creditors, employees, suppliers and customers is important in determining the performance of the economy. Although the OECD countries are generally characterized as market economies, there are considerable differences among these countries in the organizational structure of the economy.

One of the major aims of this course is to understand the institutional differences in corporate-governance structures of companies in major industrial countries including the United States, Japan, Germany, France and the United Kingdom. The differences in the corporate-governance structure have a number of implications for the performance of companies. For example, the cost of capital and the effective use of human resources would be affected by this structure.

In recent years, the deepening international integration of economic activities has heightened awareness of cross-country differences in corporate-governance structure and putting a strong pressures for convergence in some aspects of corporate governance systems. The course will also survey these trends.

1. General Concept

Fukao, Mitsuhiro, *Financial Integration, Corporate Governance, and the Performance of multinational Companies*, Brookings, 1995.

2. Hostile Takeovers

Scheifer, Andrei, and Lawrence H. Summers, "Breach of Trust in Hostile Takeovers", in *Corporate Takeovers: Causes and Consequences*, edited by Alan J. Auerbach, University of Chicago Press, 1988.

Roe, Mark J. "Takeover Politics", in *Dear Decade*, edited by M. Blair, 1993.

3. Elements of Governance

Kaplan, Steven N., "Top Executive Rewards and Firm Performance: A Comparison of Japan and the United States," *JPE*, Vol. 102, No.3, June 1992

Franks, Julian R., "Lessons from a comparison of US and UK Insolvency Codes," *Oxford Review of Economic Policy*, Vol.8, No.3, June 1994

Bank of Japan, "The Japanese Employment System," *Bank of Japan Quarterly Bulletin*, May 1994.

Black, Bernard, "Creating Strong Stock Market by Protecting Outside Shareholders," remarks at OECD/KDI conference on Corporate Governance in Asia: A comparative Perspective, Seoul, March 3-5, 1999.

Newbury, Robert W., Rachel Leahey, Annick Siegl and Stacey Burke, *Board Practices 2000*, IRRC, 2000.

William C. Powers, Jr., Raymond S. Troubh, and Herbert S. Winokur, Jr., "Report of Investigation by the special investigative committee of the board of directors of Enron corp.," February, 2002.

4. Financial System

Fukao, Mitsuhiro, "Japanese Financial Instability and Weaknesses in the Corporate Governance Structure," Seoul Journal of Economics, Vol.11, No.4, 1998.

Fukao, Mitsuhiro, "Barriers to Financial Restructuring: Japanese Banking and Life-Insurance Industries," paper for a NBER conference on "Structural Impediments to Growth in Japan" on March 18-19, 2002.

Grading will be based on the term paper and class participation.

The topic of the term paper has to be related to the content of the class. For example:

Comparison of governance structures among some countries, Governance structure of government owned companies and private companies, Issues related to bankruptcy procedures, Security exchange law and governance system, Incentive mechanism for directors, Banking problems and deposit insurance system.

Text:

Fukao, Mitsuhiro, Financial Integration, Corporate Governance, and the Performance of Multinational Companies, Brookings, 1995.

| | |
|------------|---|
| 会計学 | (秋学期) (Fall) |
| Accounting | |
| 伊藤 眞 | 商学部教授 |
| Makoto Ito | Professor, Faculty of Business and Commerce |

Course Description:

International Accounting Standard and International Financial Reporting Standard

International Accounting Standards (IAS) issued by the International Accounting Standards Committee (IASC), and International Financial Reporting Standards (IFRS) issued by International Accounting Standards Board (IASB), which is restructured from IASC, have been making their presence felt around the world recent years. IASB has been and is continuing to study accounting issues and prepare new IFRS and improve IAS.

Some multinational enterprises, whose headquarters are located in Europe, have been preparing their consolidated financial statements in compliance with IAS (including IFRS) for purpose of cross-boarder security offerings and listings on foreign securities offering.

All enterprises, which are domiciled and listed in the European Union, will be required to report in accordance with IAS from year 2005. Many countries are taking steps to harmonize their national accounting standards with IAS with some modifications to allow for local environment.

In this course, we will study the brief history of IAS, IASC and IASB, Framework for the Preparation and Presentation of Financial Statements, and some significant accounting standards, such as IAS2 "Inventory", IAS11 "Construction contracts", IAS12 "Income Taxes" and IAS39 "Financial Instruments: Recognition and Measurement", which will be compared with the US Generally Accepted Accounting Principles (US GAAP) and Japanese GAAP, when necessary.

After the first session of introduction to IAS, each student will be assigned in advance to report on a Standard, followed by discussion, case studies and my supplementary explanation or comments.

Text:

International Financial Reporting Standards 2005, IASB

The number of students who register this course through International Center will be limited to 5 persons.

| | |
|-----------------------|---|
| 国際経済 | (秋学期) (Fall) |
| International Economy | |
| 小島明 | 商学研究科教授 |
| Akira Kojima | Professor, Graduate School of Business and Commerce |

Course Description:

The class covers various international economic policy issues including trade, Investment (foreign direct investment), foreign exchange policy, WTO process, FTAs (Free Trade Agreements), regional integration, competitiveness issue, economic development strategy and so on.

Students will be put in the very front line of policy debate of international economy. Real voices of policy makers, business leaders and scholars will often be given to the students through recorded tapes and videos. As I have good many chances to participate to many important international policy debates, the student can be given the chance of sharing such experiences of mine. Practical, as well as theoretical approach will be introduced.

Texts:

“Globalization and its Discontent”, Joseph E. Stiglitz, Norton, 2002

METI “White Paper on International Trade 2004” (This document can be accessed through METI web site, both in Japanese and English.)

Recommended Readings:

Various analytical reports and documents of IMF, World Bank and other institutions are recommended as required.

日本研究講座 (JAPANESE STUDIES COURSES)

異文化コミュニケーション 1 日本のコミュニケーションパターンから見た場合
INTERCULTURAL COMMUNICATION 1

(春学期) (Spring)

手塚千鶴子
Chizuko Tezuka

国際センター教授
Professor, International Center

Sub Title:

Seen from Japanese communication patterns

Course Description:

This course has three interrelated purposes. The first is to help students learn some essential elements of Japanese psychology and culture, and their implications for communication patterns of Japanese people both among themselves and in intercultural settings. The second is to help students to examine both difficulties/challenges and excitements/joys of intercultural communication by learning key concepts and issues of intercultural communication. The third is to facilitate both Japanese and international students' on-going intercultural communication both by increasing self-awareness of how their respective cultures affect their communication patterns and by arranging them to learn to work together successfully on group projects which will serve as testing grounds for their intercultural communication.

Text Books:

No designated textbook and handouts will be distributed.

References:

Japanese culture and behavior: selected readings by Takie Lebra & William Lebra
Japanese patterns of behavior by Takie Sugiyama Leba
An introduction to intercultural communication by John C. Condon & Fathi Yousef
Intercultural communication :a reader (6th edition) by L. A. Samovar & R. E. Peter

Course Schedule:

1. Orientation and quiz on the impact of globalization on Japan
2. Conformity pressure vs. individualism in Japanese culture: a case study of Toko Shinoda, a female artist
3. What puzzles you about Japanese culture and society ? and Orientation to Group Projects
4. Understanding Japanese culture through examining mother-child relationship pictures and How to have good intercultural communication in class
5. Culture as mental software, functions of culture, and culture and communication
6. *Amae* psychology: prototype of *Amae* and definition of *Amae*
7. How *Amae* psychology and an emphasis on *Wa* gets translated into Japanese communication patterns: *Sasshi, Enryo and Honne* vs. *Tatema*
8. How to overcome difficulties in intercultural communication: attribution, empathy and ethnocentrism
9. Preparation for Group Project
10. The Concept of *Sunao* and its implications for Japanese communication patterns: conflict avoidance, readiness to compliance ?, and open-mind
11. Comparing concepts of self between individualistic cultures and collectivistic cultures and its implications for intercultural communication between the two
12. Group project presentation 1
13. Group project presentation 2
14. Wrap-up

Message to Those Taking This Course:

Students who take this course are strongly encouraged to do risk-taking by sharing your opinions and feelings. Thus contributing to class by active participation in pair-work, group work and class discussion is a must, as the instructor believes that students learn a great deal from their classmates. As group projects, a major source for students' satisfaction, take so much time and energy in and outside of class, students' commitment is essential here. And your input to make this class better and interesting is always welcome by the instructor.

Evaluation:

Overall grades will be based on attendance, essays, participation in class, group project presentation, and final individual project paper

based on group project.

Inquiries:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or through e-mail at ctezuka@ic.keio.ac.jp.

英国と米国のマスコミに描かれた日本
JAPAN IN THE FOREIGN IMAGINATION

(春学期) (Spring)

キンモンズ, アール H. 国際センター講師 (大正大学教授)
Earl H. Kinmonth Lecturer, International Center (Professor, Taisho University)

Course Description:

This course examines foreign (primarily Anglo-American) views of Japan from the earliest awareness of Japan until the present. For Japanese, the course serves as an introduction to the many ways Japan has been and is seen by foreign observers. For non-Japanese, the course serves to introduce students to the limits and peculiarities of scholarly and journalistic writing on Japan. For both, the course is intended to give students an awareness of the degree to which not just journalists but also allegedly objective scholarly observers are in fact heavily influenced by the historical and political circumstances in which they write.

Recommended Reading:

Appropriate readings will be suggested in conjunction with the lectures.

Class Schedule (Subject to change):

1. Introduction to the course — “Whose images of which Japan?”
2. European knowledge of Japan before the coming of Perry
3. The Meiji Restoration and the Meiji Renovation as seen by foreign observers
4. The avid students become the Yellow Peril
5. Taisho Democracy and interwar Japan as seen by foreigners
6. Shame and constipation — Anglo-American anthropologists psyche out the Japanese enemy during the Pacific War
7. New Dealers in the American Occupation — progressive misunderstanding of the causes of militarism
8. Cold War politics and post-war American studies of Japan
9. The many and varied explanations for Japanese economic and technological success
10. Rote memory or creative teaching — the variegated image of Japanese education
11. Erotic geisha or smothering mother — the variegated image of Japanese women
12. Waiting for convergence, planning for containment — rational choice versus revisionism in the American view of Japan’s “bubble economy”
13. “Comfort Women” and “The Rape of Nanking” — American self-righteousness confronts Japanese evasiveness
14. Taking Japan Seriously? The who, the why, and how of foreign reporting on Japan
15. From super state to superannuated state — American images of “post bubble Japan”

Message to Those Taking This Course:

The final examination will be based on the lectures. Because no textbook is used, attendance is particularly important.

Evaluation:

Students will be expected to write one short paper on some aspect the foreign image of Japan or the Japanese image of a foreign country. There will be a final examination for the course based on the lectures. The final examination will be given during the scheduled examination period. The course grade will be computed as attendance and participation (20%), report (40%), and final examination (40%).

Inquiries:

Questions during or after lecture are welcome. Questions may be submitted in English or Japanese by email to ehk@gol.com. Special consultation before or after lecture can be provided upon request.

Sub Title:

Understanding Key Success Factors for Developing and Implementing Corporate Strategies

Course Description:

Objectives:

1. This course tries to identify key success factors of linking corporate strategies with the management systems and practices. Using case studies and discussion, we will look at the micro level management strategies and practices.
2. The course also tries to develop analytical and experiential learning skills as well as discussion/presentation skills in students.

Under the increasingly global economy, companies are constantly reviewing their strategies and management practices to meet the new challenges. It is recognized that the competitiveness of corporations includes their ability to modify and change, as the environment changes, their management systems and practices. The course offers the opportunity to understand the linkage between corporate strategies and the process of developing management practices. In-depth understanding of selected corporations in Japan as "best practice" will be pursued through case studies, company visits and student's own research

Basic frameworks will be provided during the course. Each student is expected to develop individual list of key success factors of implementing strategies through management practices, based on the case studies used during the course.

Classes are conducted in English. Discussions and information sharing will also take place through e-mails. Both undergraduate and graduate level students are welcome.

Recommended Readings:

Will be advised at the beginning of the course.

Class Schedule (Subject to change):

1. Course Orientation (1 session)
2. Discussion of Strategy development framework (1 session)
3. Discussion of cases (Major Japanese companies) (4 sessions)
4. Discussion of cases (Medium scale and entrepreneur cases) (2 sessions)
5. Students research presentations (4 sessions)
6. Company visit (2 sessions)

Message to Those Taking This Course:

To develop these skills and enhance understanding, students are required to read and analyze assigned case studies and do some further fieldwork.

Evaluation:

Performance will be evaluated on the basis of:

1) Participation in class discussion, 2) field work report and presentations, and 3) a final report. Fieldwork can take either group visit to companies and/or research on a company with student's own initiative.

Inquiries:

Questions and discussions can take place through e-mails as well as in the classroom.

Course Description:

Japanese prose literature of the modern period will be discussed in this lecture course. In "Journey Through the Floating World" last summer, we covered the pre-modern literature of the Tokugawa period, an era that came to an abrupt end with the Meiji Restoration of 1868. The resulting political and social upheaval had a traumatic effect on many aspects of Japanese life, and literature was no exception. Some savored the sharp break with the past, while others looked back on their own cultural heritage for inspiration and continuity. We will focus on the development of the modern novel through the works of such writers as Natsume Soseki, Mori Ōgai, Akutagawa Ryūnosuke, Kawabata Yasunari, Tanizaki Junichirō and Mishima Yukio. Modern film adaptations will also be introduced.

Text Books:

Instructions and materials are provided on the class website (www.armour.cc/mezame.htm)

Recommended Reading:

A list of reference works and useful links are available on-line.

Class Schedule (Subject to change):

A detailed list of the works covered in this course is available on the class website.

On completion of this lecture course, students should:

1. Be familiar with the major works of poetry, prose and drama in the period covered;
2. Comprehend the major literary currents in the period covered and be able to identify the importance of the major works in the development of these currents;
3. Be familiar with the major figures in Japanese literary history (including commentators and critics) and their achievements;
4. Understand the cultural background (including religious aspects) of the works covered and, where necessary, the political events that form a backdrop to the literature;
5. Be familiar with the reception of Japanese literature in the West.

In the last few weeks of the course, those students requiring a grade will have an opportunity to report on a reading and research project of their own choosing.

Message to Those Taking This Course:

The course assumes that the student has a working knowledge of English. Prior knowledge of Japanese literature is not required, though it is desirable. Naturally some familiarity with the Japanese language, spoken and written, is a plus.

Evaluation:

Grading is primarily based on the student's research project, presented to the class (using PowerPoint) according to a published schedule; a Q&A session will follow each presentation and a student's responses are taken into consideration in the grading process. Overseas students who want their credits to be transferred to their home university are advised to present their research results in the form of an academic paper, complete with notes and bibliography. Naturally, regular attendance is important in order to receive a passing grade; the International Center requires that a record be kept.

Course Description:

Goal:

In this course, we will analyse contemporary Japanese society and business from an ethical perspective.

Through lecture and case discussion, I would like to find a balancing point of culturally contextualized management and globally acceptable norms for future international business. Also, I would like to discuss the strong points of Japanese Style Management which could be transferable to other cultures, and the weak points which would be universally unacceptable.

Method:

First, I will highlight the historical and theoretical aspects fundamental to analyzing Japanese society and business from an ethical perspective. Then I will assign you to read short cases which describe recent incidents that have caused public controversy both in Japan and elsewhere.

Texts:

Reischauer, E.O. The Japanese Today: Change and Continuity. The Belknap Press of Harvard University Press, 1988.

Handouts

Recommended Reading:

TBA

Class Schedule (Subject to change):

1. Introduction: Geography, Climate and Demography of Japan
2. Historical Orientation of Japan.
3. Interpretation of Contemporary Japanese Society 1
4. Interpretations of Contemporary Japanese Society 2
5. Interpretations of Contemporary Japanese Society 3
6. Midterm Exam.
7. Government and Business Interface
8. Japanese Corporate Governance
9. Ethical Issues in Japanese Workplace 1
10. Ethical Issues in Japanese Workplace 2
11. Japanese Business in Transition 1: Community
12. Japanese Business in Transition 2: Environment
13. Final Exam.

Message to Those Taking This Course:

This is a course for international students who want to learn about the fundamentals of Japanese society and business. It is necessary for you to have advanced-level English discussion skills. Through this discussion, I hope you will deepen your understanding of Japanese society and business, and develop cultural insights that help in dealing with practical issues in an international setting.

Evaluation:

Mid-Term Examination (TBA) 30%, Final Exam/ Project (TBA) 40%, Class Participation 20%, Home work 10%

美術を「よむ」 - 日本美術史入門

(春学期) Spring)

INTRODUCTION TO THE ARTS OF JAPAN

村井則子

国際センター講師

Noriko Murai

Lecturer, International Center

Description:

This course explores the history of Japanese art from the mid-nineteenth century to the present. Modernity was first and foremost articulated through the construction of the nation state “Japan.” Visual arts played a central role in providing the modern nation with a cultural, social, and psychological identity. We will study the significance of modernity and modernism in different media including painting, sculpture, photography, and architecture. We will also consider broader issues such as commodity consumption, gender, and imperialism in the context of visual representation.

Requirements:

1. Short paper (4-5 double-spaced pages)
2. Take-home midterm exam
3. Take-home final exam
4. Two field trips to museums in the area

Readings:

There are no textbooks for the course. A *Source Book* containing all required readings for the course will be put on reserve.

Proposed Syllabus:

1. *Introduction*
2. *Constructing "Japanese Art"*
READING: Ellen Conant, "Refractions of the Rising Sun: Japan's Participation in International Exhibitions 1862-1910," (1991); Christine Guth, "From Temple to Tearoom," (1993).
3. *From Edo to Meiji: Takahashi Yuichi and Kanô Hôgai*
READING: Tôru Haga, "The Formation of Realism in Meiji Painting: The Artistic Career of Takahashi Yuichi," (1971); Ellen Conant, "Tradition in Transition, 1868-1890," (1995).
4. *Body and the Nude*
READING: Norman Bryson, "Yôga and the Sexual Structure of Cultural Exchange," (1994).
5. *Okakura Kakuzô and the Aesthetic Ideology of Asia*
READING: Excerpts from Okakura Kakuzô, *The Ideals of the East*, (1903) and *The Book of Tea*, (1906); Emiko Usui, "National Identity, the Asiatic Ideal, and the Artist: Okakura Presents the Nihon Bijutsuin in Boston," (1999).
6. *The Modern Artist, Urban Spectacle and the Modernist Vision*
READING: John Clark, "Artistic Subjectivity in the Taisho and Early Showa Avant-Garde," (1994); Miriam Silverberg, "Constructing the Japanese Ethnography of Modernity," (1992).
7. *Orientalism, Nativism, and Traditionalism*
READING: Alexandra Munroe, "Circle: Modernism and Tradition," (1994); Yoko Kikuchi, "Hybridity and the Oriental Orientalism of *Mingei* Theory," (1997).
8. *Images After Ground Zero*
READING: John Dower, "Japanese Artists and the Atomic Bomb," (1993); Yamanashi Emiko, "Painting in the Time of 'Heavy Hands'," (1997).
9. *Action and Expression: the Gutai Association*
READING: Sin'ichiro Osaki, "Body and Place: Action in Postwar Art in Japan," (1998).
10. *"Anti-Art" in the 60s*
READING: Alexandra Munroe, "Morphology of Revenge: The Yomiuri Independent Artists and Social Protest Tendencies in the 1960s," (1994).
11. *The Postwar Unconscious: Performance and Photography*
READING: Mark Holborn, "The Object Eye," "Junin-no-me," and Eikoh Hose," (1986); Susan Klein, "The Origin and Historical Context of Ankoku Butô," (1988).
12. *Architecture and the Public Space*
READING: Kenneth Frampton, "Twilight Gloom to Self-Enclosed Modernity: Five Japanese Architects," (1986).
13. *Image in the Age of Digital Manipulation: the 90s and beyond*
READING: Norman Bryson, "Morimura: 3 READINGS," (1996); Yuko Hasegawa, "Pachinko, Mandala and Merry Amnesia," (1997); Alexandra Munroe, "*Hinomaru Illumination*: Japanese Art of the 1990s," (1994).

Bibliography:

Bibliography will be distributed at the first class.

日本の近代思想：福澤諭吉と丸山真男

(春学期) Spring)

JAPANESE TRADITION OF MODERN THOUGHT: FROM YUKICHI FUKUZAWA TO MASAO MARUYAMA

坂本 達哉

経済学部教授

Tatsuya Sakamoto

Professor, Faculty of Economics

Sub Title:

Seminar for reading and discussing some key texts from the works of the two most influential thinkers

Course Description:

This course aims to introduce students to a long and complicated history and its unique characteristics of Japanese modern thought as best represented by the works of Yukichi Fukuzawa, the founder of Keio University, and those of Masao Maruyama, the most single influential thinker in the post-war Japan.

Text Books:

No particular text book will be used, but excerpts from the central writings by Fukuzawa, Maruyama and other great Japanese thinkers will be provided as the course develops.

Class Schedule per week:

A feature of the course is its seminar style presentation. It uniquely attempts to include ample opportunities for an exchange of opinions between instructor and students and between students. Every class will be divided into three parts. First, an introductory lecture by the instructor will be made to highlight the historical and intellectual backgrounds of the relevant texts to be discussed every time. This is followed by a prepared essay presentation by students. The rest of the class will be devoted to a class discussion. The first half of the entire course will deal with the works of Fukuzawa and the second those of Maruyama.

Message to Those Taking This Course:

This course is intended for international as well as Japanese students who eagerly wish to learn the wealth of Japanese intellectual tradition from Fukuzawa to Maruyama in English.

Grading Methods:

Grading will be based on attendance, in-class presentations and a short term paper.

| | | |
|---|---------------------------------|--------------------|
| 日本人の心理学 (1) | コンフリクト・マネイジメント | (春学期) (Spring) |
| JAPANESE PSYCHOLOGY IN CONTEMPORARY JAPAN (1) | | |
| 手塚 千鶴子 | 国際センター教授 | |
| Chizuko Tezuka | Professor, International Center | |

Sub title:

Conflict Management

Course content:

This course is designed to explore how Japanese manage interpersonal conflict both among themselves as well as in interaction with foreigners and its implications for Japanese society which is becoming more multicultural in this accelerated globalization age. Though a Western notion of conflict in the West claims that it is inevitable yet not necessary bad, the Japanese society has been described to believe in its self-image as a conflict-free society and to abhor and avoid interpersonal conflicts at any cost. With this apparent contrast in mind, students will learn characteristics of Japanese conflict management strategies, their cultural and social psychological backgrounds, and the challenges for both Japanese people and foreigners in trying to creatively deal with intercultural conflicts. And students will be asked to take some social psychological measures for self-understanding.

Textbooks:

no designated textbook and handouts will be distributed.

References:

Conflict in Japan edited by Ellis Krauss, Thomas Rohlen, and Patricia G. Steinhoff, University of Hawaii Press, 1990.

Japanese Culture and Society: model of interpretation edited by Kreiner and Olscheleger, Monographien 12, Deutschen Institute fur Japanstudien der Philipp-Frantz-von-Siebold-Stiftung, 1996.

Course schedule (subject to change)

1. Orientation to the course and test-taking on conflict management style
2. Harmony Model vs Conflict Model of Japanese society and orientation to writing conflict episode journals
3. Non-confrontational Strategies of Conflict Management: Bullying in Japanese Schools
4. Non-confrontational Strategies of Conflict Management: *Karoushi and Gaman* in Japanese Work Place
5. Japanese cultural values underlying non-confrontational strategies
6. How Japanese express anger
7. Comparison of conflict management between Japan and U.S.A.
8. Intercultural conflict around the *Ehimemaru* Incident in Jan, 2001

9. Intercultural conflict between Japanese teachers and int'l students
10. Japanese conflict management seen from a perspective of a bicultural writer, Kyouko Mori
11. How to make use of our own anger creatively
12. Wrap-up session

Messages to students:

Students who take this course are strongly encouraged to do risk-taking by sharing your opinions. Active participation in pair-work, group work and class discussion is a must.

Evaluation:

Overall grade will be based on attendance, essays, participation in class, final presentation, and its resultant final paper. .

Questions and consultation:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or through e-mail at ctezuka@ic.keio.ac.jp.

近代日本の対外交流史

(秋学期) (Fall)

MODERN HISTORY OF DIPLOMATIC AND CULTURAL RELATIONS BETWEEN JAPAN AND THE WORLD

太田昭子

法学部教授

Akiko Ohta

Professor, Faculty of Law

Course Description:

The course aims to provide an introductory and comprehensive view of the history of diplomatic and cultural relations between Japan and the World in the latter half of the nineteenth century and early twentieth century. A basic knowledge of Japanese history is desirable, but no previous knowledge of this particular subject will be assumed. A small amount of reading will be expected each week.

Textbooks:

No specific textbook will be used.

Recommended Readings:

The reading list will be given at the beginning of the term.

Class Schedule (Subject to change):

1. Japan and the World before the Opening of Japan (2 lectures): General introduction and the reappraisal of the Seclusion Policy
2. The Opening of Japan and international society in the 1850s and 1860s
3. The First Treaty with the West and the subsequent treaties(2 lectures): the analysis of the U.S.-Japanese Treaty of Peace and Amity will be included
4. Japanese Visits Abroad (2 lectures): the evaluation of the cultural and diplomatic significance of the Japanese visits abroad (official missions / official students / stowaways and castaways
5. Japanese perception of the West, changing attitudes and feelings in the 1860s (1 lecture)
6. Western perception of Japan in the 1850s and 1860s (1 lecture)
7. The significance of the Iwakura Mission (1 ~ 2 lectures)
8. Development of Japanese Nationalism in the Meiji Era (2 lectures): comparative analysis of several primary sources
Optional excursion to the Yokohama Archives of History may be included in the programme.

Evaluation:

Students are expected to make a short report on a research project of their own choosing and hand in a term paper of about 3,000 words (about five pages, A4, double space) by the end of the term, and take the final examination.

Volunteers for a mini-presentation (about 10-15 minutes) on the topics related to the lecture are most welcome. (Details will be explained in class.)

手塚千鶴子
Chizuko Tezuka

国際センター教授
Professor, International Center

Sub Title:

Identity of Japanese sojourners

Course Description:

The first purpose is to help students learn how Japanese people have been experiencing exciting as well as confusing encounters with cultures different from their own and how such cross cultural encounters in and outside of Japan have been affecting their sense of identity and communication styles as an individual (and as people) from the times of Japan's First Opening to the world in the late Edo Period up to the present from the three perspectives: history, cultural adjustment, and intercultural communication, utilizing case studies. The second purpose is to help both Japanese and international students who are brought together to Mita campus by the globalization and internationalization to make best use of this class to communicate effectively through discussion and other student-centered activities.

Textbooks:

No designated textbook and handouts will be distributed.

Recommended Reading:

Tsuda Umeko and Women's Education in Japan by Barbara Ross, Yale Univ Press, 1992.

The White Plum: a biography of Ume Tsuda by Yoshiko Furuki, Weatherheel, 1991.

Intercultural Communication: reader 5th ed., Larry Samovar and Richard E Porter, Wadsworth Publishing Company, 1989.

Japanese Culture and Behavior (revised edition) ed.by Takie Sugiyama Lebra and William Lebra, Univ. of Hawaii Press, 1986.

Japanese Patterns of behavior ed by Takie Sugiyama Lebra, Univ. of Hawaii Press, 1976.

Exploring Japaneseness: on Japanese Enactments of Culture and Consciousness ed by Ray

Class Schedule (Subject to change):

1. Orientation to the course
2. A brief historical review of Japan's encounter with the outside world as an island nation up to the late Edo Period
3. Japan's attitude towards the West after the First Opening of Japan with an emphasis on absorbing the Western civilization
4. Japan's endeavor to modernize herself in comparison with Korea and China
5. A case study of Umeko Tsuda 1: a successful sojourn in America
6. A case study of Umeko Tsuda 2: many years of struggle adjusting back to Japan
7. Cross cultural adjustment I: culture as mental softwear, stages of cross cultural adjustment, and facilitating factors of cross cultural adjustment
8. A case study of Paris Syndrome or Double Suicide in Los Angeles: overadjustment and challenges for Japanese sojourners
9. A case study of a Malaysian woman married to a Japanese: cultural identity
10. Identity: ego identity, personal identity, and social identity, process of identity formation, and issues of identity fluctuation in cross cultural adjustment
11. A case of Jiro, a Japanese returnee who spent 6 years in U.S.A.: formulation and transformation of cultural identity and adjustment issue back in Japan
12. A case study of Masao Miyamoto adjusting back to Japan in the Showa Period in comparison with Umeko Tsuda in the Meiji Period
13. Challenge for both Japanese and non-Japanese in the globalizing world
14. Wrap-up

Messages to Those Taking This Course:

Those students who are willing to participate actively in class are most welcome. Students are strongly encouraged to engage actively in pair work, a small group discussion and class discussion.

Evaluation:

Overall grad will be based on attendance, homework, essays, participation in class, and final term paper.

Inquiries:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or

Sub Title:

A case study of cross-cultural contact

Course Description:

Christianity in Japan presents us with a number of paradoxes. For example, although the majority of Japanese today choose Christian-style weddings, the actual number of Christians amounts to less than one per cent of the total population (as opposed to about 25 per cent in its close cultural neighbour, South Korea). This 'failure' contrasts with the relatively greater growth of Christianity in the late sixteenth and early seventeenth centuries, even though the total number of missionaries was much smaller and the linguistic and logistical barriers greater. Perhaps the greatest paradox occurred after Christianity was virtually eliminated through an increasingly severe campaign of persecution from 1614 onwards. Small groups in isolated communities succeeded in preserving recognisably Christian beliefs and practices. However, many of these groups refused to accept the authority of Roman Catholic missionaries when they returned to Japan in the second half of the nineteenth century.

In the course we will consider these and other issues, using a combination of primary and secondary materials. By studying the activities and ideas of missionaries, Japanese Christians, and Japanese who did not become Christian, students will gain general understanding of the dynamics of cross-cultural contact. They will also learn about the nature of history through interpreting primary materials and studying different approaches to the history of Christianity in Japan.

Recommended Reading:

There will be a selection of assigned readings for each class (in Japanese, English and occasionally in other European languages or Chinese). Students will find it useful to start the course with a basic knowledge of Japanese history, Japanese religion, and Christianity. All suggestions for reading will be displayed on my web site (<http://web.hc.keio.ac.jp/~hjb/>).

Class Schedule per week:

1. Orientation and overview
2. The background: Christianity missionary activity and religion in Japan
3. Jesuit approaches to Japan
4. Japanese approaches to Christianity
5. Christianity and Japanese politics
6. Christianity in Tokugawa Japan (1) Government policies
7. Christianity in Tokugawa Japan (2) Responses to government policies
8. The return of Roman Catholic missionaries and the 'hidden' Christians
9. Christianity and social change in Japan 1859-1945
10. Christianity and patriotism in Japan 1859-1945
11. Christianity in Japan in the second half of the twentieth century
12. Christianity in Japan today
13. Concluding remarks

Message to those taking this Course:

I hope to attract students from a variety of backgrounds. This is because the course will gain from the combined viewpoints of people from areas which have sent Christianity missionaries to Japan, such as Portugal and the United States, and of people from areas which have played host to Christian missionaries, both in Asia (including Japan itself) and elsewhere.

I will expect students to attend all classes, on time, to do the assigned readings, and to participate in class presentations and discussions. Sessions will be organised into a combination of formal lectures and interactive seminars.

Grading Methods:

Oral presentations(30%), Reports(At least one short and one long (50%)), Attendance and Participation(20%)

Questions, Requests:

Students wishing to ask a question or arrange an appointment should talk to me before or after classes, or send an e-mail. My e-mail address is given on my web site (<http://web.hc.keio.ac.jp/~hjb/>)

多民族社会としての日本

(秋学期)(Fall)

MULTIETHNIC JAPAN

柏崎千佳子

経済学部助教授

Chikako Kashiwazaki

Associate Professor, Faculty of Economics

Course Description:

This course introduces students to 'multiethnic Japan'. Although Japanese society is often portrayed as ethnically homogeneous, its members include diverse groups of people such as the Ainu, Okinawans, *zainichi* Koreans, and various 'newcomer' foreign residents. In this course, students will learn about minority groups in Japan and their relations with the majority 'Japanese' population. The goal of this course is to acquire basic knowledge and analytic tools to discuss issues concerning ethnic relations in Japan and elsewhere.

Texts:

Reading materials consist of excerpts from a variety of sources and will be provided by the instructor.

Class Schedule (Subject to change):

1. Introduction
2. Is Japan ethnically/culturally homogeneous?
3. Theories of ethnic relations
4. Zainichi Koreans: past and present
5. Zainichi Koreans: identity formation
6. Nikkei-Brazilians
7. Visa overstayers
8. "Foreign brides"
9. People from buraku
10. The Ainu
11. Okinawans
12. Presentations on the final project
13. Summary — Rethinking Japanese society

Message to Those Taking This Course:

The class is conducted entirely in English. Much of class activity is devoted to oral presentations and discussion. Students are expected to read the assigned materials beforehand and to participate actively in the class.

Evaluation:

Evaluation will be based on participation in classroom discussion (20%), presentations (20%), and reading/writing assignments including a short essay and a term paper of 1,800+words (60%).

政策決定、歴史的記憶、人種から見る明治期日本外交

(秋学期)(Fall)

JAPANESE DIPLOMACY IN THE MEIJI ERA

飯倉章

国際センター講師 (城西国際大学教授)

Akira Iikura

Lecturer, International Center (Professor Josai International University)

Sub Title:

Decision-making, historical memory and race

Course Description:

This course aims to examine Japanese diplomacy in the Meiji era from diverse angles and provide students with some new perspectives on the historical events in the period such as the triple intervention, the Anglo-Japanese alliance, and the Russo-Japanese War. Students will gain an understanding of Japanese diplomacy in the Meiji era and learn how to analyze historical events through decision-making theories, historical memory, and the concept of race.

Text Books:

No textbook will be used. Handouts will be given as reading assignments.

Reference Books:

Recommended readings will be suggested in the course of the lecture.

Class Schedule per week:

1. Introduction to the course and decision-makers in the Meiji era
2. The trauma of Japanese diplomacy: unequal treaties, the triple intervention and the Portsmouth treaty
3. The Yellow Peril and its influence on Japanese foreign relations
4. The Anglo-Japanese alliance and the question of race
5. The lessons of the Anglo-Japanese alliance: Is an alliance with an “Anglo-Saxon” state reliable?
6. Was the war evadable or inevitable?: perception and misperception of Japanese decision-makers before the Russo-Japanese war
7. The Russo-Japanese war as an icon in historical memory
8. Wrong lessons from the “success” of the war and the “defeat” in diplomacy
9. Explaining the Russo-Japanese war through the application of Graham Allison’s decision-making theories
10. The changing views of Japan during the Russo-Japanese war: Japan from protégé to world power
11. The wars and leaders in the Meiji era that live in Japanese culture

Message to those taking this Course:

The lecturer will put special emphasis on the Russo-Japanese war of 1904–05 by showing some new scholarly works, popular history and commemorative articles on the war that appear mainly during the years 2004 and 2005, the hundredth anniversary of the war. The lecturer will illustrate the lecture by using slides and videotapes.

Grading Methods:

The final exam will be given based on the lecture. A short term paper on one of designated questions will be assigned. Attendance and class participation will be particularly important.

日本の文学

(秋学期)(Fall)

JAPANESE LITERATURE

アーマー , アンドルー 文学部教授

Andrew Armour Professor, Faculty of Letters

Course Description:

This course is intended to cover the history of Japanese literature from earliest times up to the modern era. Starting with the writing system, we will trace the conspicuous developments in poetry, prose and drama through the Nara, Heian, Kamakura, Muromachi and Edo periods. Included are such works as the *Manyōshū*, *Genji monogatari*, *Heike monogatari*, *Oku-no-hosomichi* and *Sonezaki shinjū*.

Texts:

Instructions and materials are provided on the class website (www.armour.cc/jlit.htm).

Recommended Readings:

A list of reference works and useful links are available on-line.

Class Schedule (Subject to change):

A detailed list of the works covered in this course is available on the class website.

On completion of this lecture course, students should:

1. Understand how the Japanese writing system developed, how it came to be used to compose works of literature, the problems it poses, and how the modern reader can decipher a manuscript such as that of *Genji monogatari*;
2. Be familiar with the major works of poetry, prose and drama in the period covered;
3. Comprehend the major literary currents in the period covered and be able to identify the importance of the major works in the development of these currents;
4. Be familiar with the major figures in Japanese literary history (including commentators and critics) and their achievements;
5. Understand the cultural background (including religious aspects) of the works covered and, where necessary, the political events that form a backdrop to the literature;
6. Be familiar with the reception of Japanese literature in the West.

In the last few weeks of the course, those students requiring a grade will have an opportunity to report on a reading and research project of their own choosing.

Messages to Those Taking This Course:

The course assumes that the student has a working knowledge of English. Prior knowledge of Japanese literature is not required, though it is desirable. Naturally some familiarity with the Japanese language, spoken and written, is a plus.

Evaluation:

Grading is primarily based on the student's research project, presented to the class (using PowerPoint) according to a published schedule; a Q&A session will follow each presentation and a student's responses are taken into consideration in the grading process. Overseas students who want their credits to be transferred to their home university are advised to present their research results in the form of an academic paper, complete with notes and bibliography. Naturally, regular attendance is important in order to receive a passing grade; the International Center requires that a record be kept.

20 世紀日本の文学に与えたヨーロッパ文学の影響

(秋学期) (Fall)

THE IMPACT OF WESTERN LITERATURE ON JAPANESE TWENTIETH-CENTURY FICTION

レイサイド, ジェイムス 法学部教授

James M. Raeside

Professor, Faculty of Law

Course Description:

This course of lectures is intended to give a selective account of the way that Western literature was received in Japan during the 20th century, and the different ways that Japanese novelists engaged with the genres and techniques of foreign predecessors and contemporaries.

Consideration will be limited to Japanese novelists, though poets will also figure amongst the Western writers. The lectures will follow a basically chronological order, beginning with the Natsume Soseki and ending with Murakami Haruki.

Reference Books:

Students interested in this course should try to read at least some of the following (names appear without macrons).

Natsume Soseki 夏目漱石 『草枕』

English Translation A Three-Cornered World/ Unhuman Tour

Nagai Kafu 永井荷風 『墨東奇談』

English Translation: A strange Tale from East of the River

Akutagawa Ryunosuke 芥川龍之介 『蜘蛛の糸』、『地獄変』、『河童』

English Translation "The Spider's Thread"; "The Hell Screen" Kappa

Tanizaki Junichiro 谷崎潤一郎 『痴人の愛』、『蓼喰う虫』

English Translation Naomi; Some Prefer Nettles

Mishima Yukio 三島由紀夫 『愛の渇き』、『憂国』

English Translation: Thirst for Love; "Patriotism"

Endo Shusaku 遠藤周作 『沈黙』

English Translation Silence

Noma Hiroshi 野間宏 『わが塔はそこに立つ』

(There Stands my Pagoda)

Oe Kenzaburo 大江健三郎 『新しい人よ眼ざめよ』

English Translation Rouse Up O Young Men of the New Age!

Murakami Haruki. 『世界の終りとハードボイルド・ワンダーランド』

English Translation Hard-boiled Wonderland

General surveys of Japanese literature such as those by Donald Keene and Shuichi Kato will also provide good background information.

Grading Methods:

Reports

Sub Title:

The slow pace of economic reform

Course Description:

This course aims to help the student to understand the Japanese economic system, the style of economic regulations/deregulations and how the central/local government's involvement in many areas of the economy differs from other industrial nations. The lectures will (A) cover the contents of the text book, 'Arthritic Japan' which is useful in explaining the postwar Japanese economic system and the problems the Japanese have been facing during the last decade, (B) show several illustrative videos and (C) survey some distinctively Japanese approaches to developing infrastructure and regulating industries. There will also be some special one-off guests who will talk about their experiences in dealing with regulations in the Japanese trade environment (all speeches will be given in English).

Text Books:

Edward, J. Lincoln, Arthritic Japan: the slow pace of economic reform, Brookings, 2001.
(Now available in Japanese translation (Nippon-hyoron-sha, 2004))

Reference Books:

Additional materials will be provided during some sessions as necessary.

Class Schedule per week:

(Subject to some changes):

Session 1 guidance and introduction

Session 2-4 the Japanese postwar economic system and related theories

Session 5-6 industrial policy and government involvement in the economy

Session 7-8 the bubble economy and macroeconomic policies

Session 9 the arguments about the current "structural reform" issue

Session 10-11 Japanese society, its traditions, structure and implications for the economic system

Session 12-13 problems (in topics) with regard to current systemic economic reform and deregulation

Message to those taking this Course:

The students who will attend this course do not need to have more than a basic knowledge of economics, but they are expected to have a general interest in the Japanese economy in all its aspects. Quite often the lecturer will give the students copies of journal articles (such as those from the Japan Times) as supplementary materials. The students will discuss these during the sessions. Sometimes the lecturer will ask the students to submit specific essays based on some of these articles or the videos shown in the lectures.

Grading Methods:

Evaluation will be carried out by (A) essays which will be submitted after the course ends and (B) essays submitted during some sessions based on articles provided.

Questions, Requests

The lecturer's contact address is noriko@fbc.keio.ac.jp

Sub Title:

'Amae' Reconsidered

Course content:

This course is designed to reconsider comprehensively the concept of 'Amae' which was first introduced as a key concept for understanding Japanese psychology by Dr. Doi, as the Japanese society itself has undergone a considerable change under the influence of the globalization since then, and because there has been the accumulated theoretical, speculative or empirical research including cross cultural one which shows the existence of *Amae* outside of Japan. Therefore, this course will explore answers to the following questions: 1) is *Amae* still a key concept for understanding Japanese psychology?, 2) how the expression and satisfaction of *Amae* needs is transformed in contemporary Japan, 3) to what extent and in what form *Amae* is found among people across cultures, and 4) what kind of challenges and/or benefits this Japanese concept can give to those people who do not find the exact equivalent in their mother tongues.

Textbooks:

no designated textbook and handouts will be distributed.

References:

The Anatomy of Dependence by Takeo Doi, Kodansha International, .1973.

The Anatomy of Self by Takeo Doi, Kodansha International, 1986.

Dependency and Japanese Socialization by Frank A. Johnson, New York University Press, 1993.

Course schedule:

1. Orientation to the course and the drawing task of "my relationship with my mother in my childhood"
2. Multiple definitions of *Amae*
3. Understanding *Amae* through visual images: comparison of 'Peanuts' and '*Doraemon*'
4. Healthy *Amae* Interaction: mutuality and reciprocity in Japanese social relationships
5. Transformation of *Amae* in contemporary Japanese companies
6. Transformation of *Amae* in contemporary Japanese families seen through empirical research
7. Transformation of *Amae* in contemporary Japanese families seen through children's drawings of meals and HTP test
8. Cross cultural empirical research on *Amae*
9. An American expatriate's response to *Amae* interaction in Japan
10. *Amae* in cross cultural counseling cases in Japan
11. Functions of healthy *Amae*: social support?
12. *Amae* and Aggression from cross cultural perspectives
13. What do foreigners gain by learning about the concept of *Amae* contribute to peoples
14. Wrap-up session

Messages to students:

Those students who are willing to participate actively in class are most welcome. Students are strongly encouraged to engage actively in pair work, a small group discussion and class discussion. Students are expected to complete reading assignment before coming to class.

Evaluation:

Overall grade will be based on attendance, homework, essays, participation in class, and final term paper.

Questions and consultation:

You are welcome to ask questions or to consult with the instructor in person during the office hour (to be announced at the first session) or through e-mail at ctezuka@ic.keio.ac.jp.

日本の宗教：救済の探求

(秋学期 X Fall)

RELIGIONS IN JAPAN: IN SEARCH OF SALVATION

ナコルチェフスキー, アンドロイ

文学部助教授

Andrei Nakortchevski

Associate Professor, Faculty of Letters

Course Description:

In this course I would like to introduce main religious teachings existed in Japan from old times and up to our days. For the reason the name of the course is specified purposely as "Religions in Japan" and not as "Japanese Religions." Otherwise we have to limit our discourse to the only genuine Japanese religion — Shinto and maybe some eclectic so called "new religions", and forget about Buddhism or Christianity.

Each of these religions will be presented in three aspects: dogmatic (the only exception will be done for Christianity and I will accent the peculiarity of a perception of this religion in Japan), historical and cultural. Dogmatic aspect means an introduction to the core postulates and their transformation over time. Historical aspect allows us to trace a destiny of a religious teaching in Japanese history, and cultural aspect implies a study of influences to and interactions with other spheres of cultural activities — art, literature, science, etc.

Besides the above mentioned aspects, the fourth theme, namely religion's promise to solve the individual's existential and social problems, will be constantly touched on in this course. From these theme derives the subtitle — "In Search of Salvation." Especially this aspect becomes important when we deliberate "new religions", including the notorious Aum Shinrikyo in particular.

About half of the lectures will be devoted to Buddhism as the most philosophically profound and variable teaching, but I would like to introduce not only institutionalized religion as Buddhism, Shinto, Christianity, as well as Taoism and Confucianism to some extension, but also the most interesting so called folk religions, for example, tradition of shugendou (mountain asceticism), different variants of shamanic practices, etc.

日本経済の展望

(秋学期)(Fall)

ECONOMIC SURVEY OF CONTEMPORARY JAPAN

市川博也

国際センター講師 (上智大学教授)

Hiroya Ichikawa

Lecturer, International Center (Professor, Sophia University)

Course Description:

An advanced applied course of economics concerning the contemporary Japanese economy. The course will examine the roots of the instability of the present financial system and critically examine the Japan Model, which once was used to explain the success of the Japanese economy in the postwar period. This examination includes discussion of the legacy of wartime control and debates over the East Asia Miracle. Problems related to the aging population, social security, the burden of government debt, competition policy, deregulation (including the financial big bang), corporate governance, government-business relations, trade disputes, foreign direct investment, ODA policy, environmental issues, and the role of Japan in the world will be discussed. Students are required to read economic and financial news every day for class discussion.

Text Books:

Takafusa Nakamura "The Postwar Japanese Economy" University of Tokyo Press, 1995

Class Schedule per week:

1. Introduction
Identify major economic problems facing Japanese economy.
2. Discuss Paul Krugman "The Myth of Asia's Miracle" *Foreign Affairs*, November/December 1994.
3. Discuss Takafusa Nakamura "The Postwar Japanese Economy," chapter 2. "Reform and Reconstruction" University of Tokyo Press. 1995.
4. Discuss chapter 3 "Rapid Growth" in Takafusa Nakamura "The Postwar Japanese Economy"
5. Discuss "The Mechanism and Policies of Growth"
See Nakamura chapter 4.
6. Discuss the dual structure: Labor, Small Business, and Agriculture" Richard Katz, "Japanese Phoenix-the long road to economic Revival", M.E. Sharp. 2003.
chapter 3 "Overcoming the dual economy — backward sectors are the key to Japan's revival".
chapter 4 "Overcoming Anorexia — the labours Sisyphus —"
See Nakamura chapter 5.
7. Discuss "The End of Rapid Growth" See Nakamura Chapter 6.
8. Discuss Japanese Economy and International Environment
Richard Katz, chapter 9 "Globalization — the Linchpin of Reform-"
chapter 11 "Foreign Direct Investment — A Sea Change —".
See Nakamura chapter 7.
9. Discuss "The Collapse of the Bubble Economy" Thomas F. Cargill, Michael M. Hutchinson, Takatoshi Ito, "The political Economy of Japanese monetary Policy,"
chapter 5 "The Bubble Economy and its Collapse"
chapter 6 "Asset-Price Deflation: Nonperforming Loans, Jusen Companies, and Regulatory Inertia." The MIT Press. 1997
Richard Katz, chapter 12. "Financial integration — The Iceberg Cracks —".
See also Nakamura chapter 8.
10. Restoring Japan's Economic Growth
chapter 1 "Diagnosis: Macroeconomic Mistakes, Not Structural Stagnation"
chapter 2 "Fiscal Policy Works When it is tried".
chapter 3 "The Short and Long of Fiscal Policy" in Adam S. Posen, Restoring Japan's Economic Growth, Institute for International Economics, 1998.
Richard Katz, chapter 6 "Fiscal dilemmas," chapter 7 "Monetary magic bullets are blanks", chapter 8 "Japan cannot export its way

out”.

Richard Katz, chapter 13 “What is structural reform?” chapter 14 “Financial reform” chapter 15 “Corporate Reform-No competitiveness without more competition”.

11. Discuss Financial and International Risks and Inflation Target.
Chapter 4. “Mounting Downside Risks: Financial and International”
Chapter 6. Recognizing a mistake, not blaming a model” in Adam S Posen.
12. Can Japan Compete?
Chapter 2. “Challenging the Japanese Government Model”
Chapter 3. “ Rethinking Japanese Management”,
Chapter 5. “ How Japan can Move Forward: The Agenda for Government”
Chapter 6. “Transforming the Japanese Company” Michael E. Porter, Hirotaka Takeuchi & Mariko Sakakibara, “Can Japan Compete?” Macmillan Press Ltd. 2000
Richard Katz, chapter 16 “Competition policy — Not enough competition, even less policy”.
13. Deregulation and state enterprises, Tax reform Richard Katz, chapter 18 “deregulation and state enterprises — The Moment is Clear, the destination is not.”
Chapter 19. “Tax Reform — Don’t Exacerbate Anorexia”.

Message to Those Taking This Course:

Basic knowledge of Microeconomics & Macroeconomics prerequisite.
High proficiency in English required: TOEFL (PB)550+ (CB)213+

Evaluation:

Class Participation (Active Discussion) + Essay + Term Examination

家族の近代

(秋学期)(Fall)

THE FAMILY IN HISTORICAL PERSPECTIVE

ノッター , デビッド 経済学部助教授

David M. Notter Associate Professor, Faculty of Economics

Course Description:

In this course we will examine the family in historical and sociological perspective. The emphasis will be on “modern” family arrangements in nineteenth- and twentieth-century America, but some consideration will also be given to the family in Japan and Europe, and modern family arrangements will also be compared and contrasted with traditional family arrangements. The course will be organized thematically in accordance with the stages of the life course: childhood; adolescence; marriage; and old age.

Text Books:

Family: The Making of an Idea, an Institution, and a Controversy in American Culture by Betty G. Farrell

Grading Methods:

Evaluation will be based on attendance, participation in formal class discussions, essays, and a final paper.

日本の金融ビッグバン

(春学期)(Spring)

FINANCIAL DEREGULATION (BIG BANG) IN JAPAN

ハリス , グレアム O.B.E. 商学部非常勤講師

Graham Harris O.B.E. Part-time Lecturer, Faculty of Business and Commerce

Course Description:

In this class we will study the role of foreign and Japanese financial institutions in Japan including banks, securities and insurance companies. We will evaluate the Big Bang changes and ascertain whether or not they are achieving their purpose.

Text Books:

Current materials will be used.

Class Schedule (Subject to change):

Big Bang deregulatory changes, together with the general turmoil in the financial markets are creating new opportunities for both foreign

and Japanese institutions. Existing companies are having to modify their strategies and new financial companies are being established — many basing their business model on the Internet.

We will examine these opportunities, separate the real from the imaginary and discuss the currents and future effect that foreign financial institutions are having on the Japanese financial scene.

We will also include topics such as the Japanese Post Office; accountancy changes leading to more corporate disclosure and transparency; and the government/FSA involvement in the continuing deregulation process.

Evaluation:

Students will be evaluated on the basis of attendance, class participation, essays, and oral presentation

ジャパニーズ・エコノミー

(春学期)(Spring)

JAPANESE ECONOMY

小島 明

商学研究科教授

Akira Kojima

Professor, Graduate School of Business and Commerce

Course Description:

Japan's Economic Performance and policy debate in post war period up to now is covered with global economy perspective. Issues such as management practices, financial big-bang, foreign direct investment (FDI), bad loan problems, exchange rate, system reforms are all discussed with preferably active participation of students. Students can have real exposure to the most current policy debate amongst special through Video and Tapes etc.

Recommended Readings:

“Japan's Policy Trap Dollars, Deflation and the Crisis of Japanese Finance”, by Akio Mikuni and R. Taggart Murphy. (Brookings Institution Press, 2002)

“Balance Sheet Recession Japan's Struggle with Uncharted Economics and its global implications”, by Richard C, Koo, 2003 John Wiley & Sons Pte Ltd.

Message to Those Taking This Course:

Active participation by students strongly desired.

Evaluation:

Report and in-class exam

ECONOMY OF JAPAN

吉野 直行

経済学部教授

Naoyuki Yoshino

Professor, Faculty of Economics

Course Schedule per week (Subject to Change):

「Economy of Japan」

1. Historical fluctuations of Japanese Economy and the Monetary Policy
2. Flow of Funds Table of Japanese Economy
(Government Sector, Financial Sector, Firm Sector, Households' Sector)
3. Monetary Policy of Japan, Asset Price Inflation and Recent Recession
4. Fiscal Policy of Japan, Budget Deficits
5. Industrial Policy of Japan, Tax Policy and Fiscal Investment Policy
6. Capital Market of Japan (Bond market, equity market)
7. Bank Failures and Bank Restructuring
8. Aging population of Japan and Its impact on Japanese Economy
9. Privatization of Postal Savings and Japanese Financial Market
10. Currency Crisis of Asia, Its causes and consequences
11. Exchange Rate Policy of Asia and Optimal Exchange Rate System
12. Effectiveness of Public Works in Japan and Revenue Bond
13. Central and Local Government Relations in Japan
14. Japanese Policy Making and Incentive Mechanism
15. Final Examination

科学技術文化特論

(秋学期) (Fall)

SCIENCE, TECHNOLOGY AND CULTURE

ドゥウルフ, チャールズ

理工学部教授

Charles De Wolf

Professor, Faculty of Science and Technology

Course Description:

The leitmotif of this course is the question of how our perceptions of and approaches to science are influenced both by the Zeitgeist and by the particular culture in which we have grown up. How, for example, is the "evolution controversy" in America a peculiarly "American" phenomenon? How is it that Japanese scientists and engineers appear to be (on the whole) remarkably indifferent to ideological issues? Other topics include: (1) What is a proper or possible subject of scientific inquiry. To what extent, for example, can the study of language be considered "scientific"? (2) What is the appropriate role of scientists in matters political and social? In addition to the primary goals discussed above, it is hoped that this course will enable non-Japanese students to have a better understanding of Japanese history and culture through a cross-cultural approach to the philosophy of science. Students are strongly encouraged to participate actively, discussion being preferred to "lecturing."

Texts:

Materials to be distributed by instructor

Recommended Readings:

To be announced

Class Schedule (Subject to change)

1. Words for science: the concept of science in historical and cultural perspective
2. "Hard sciences" vs. "Soft sciences"
3. Linguistic science I: an historical overview
4. Linguistic science II: How "scientific" is linguistics?
5. Science and culture
6. Science and ideology
7. Science vs. scientism

- 8.The evolution debate in cross-cultural perspective
- 9.Science in Japan: an historical overview
- 10.Science and technology: science vs. technology
- 11.The role of the scientist in society: a cross-cultural persepective
- 12.Loose ends

Evaluation:

Attendance and participation are most important.

知的資産センター設置講座（平成 17 年度開講）

1. 知的資産センター設置講座開講にあたり

慶應義塾大学では、研究成果の社会への還元を、教育・研究と並ぶ大学の使命と考えています。そして、「慶應義塾で生れた研究成果は義塾にとって貴重な知的資産であり、大学はこれら知的資産の保護と活用を積極的に促進・支援する」という理念を公表しています。

こうした方針に基づき、知的資産センターは慶應義塾で生れた研究成果を社会へ還元するために、慶應義塾大学の技術移転機関として 1998 年 11 月に設立されました。技術に関するものだけでなく、電子メディアを始めとして広汎な研究成果を対象とするとともに、新しい事業の創出に資するという意味をこめて「知的資産センター」と名付けられました。

知的資産センターの事業は、研究成果の特許保護、技術の移転、起業の支援と拡大しています。そして、教職員の熱意と高いポテンシャルをもった研究成果に支えられ、既に数多くの慶應義塾の特許出願が生まれ、技術移転も活発化し、多くの新製品を生み出しています。さらに、バイオ分野を中心にベンチャー企業のスタートアップも相次いでいます。

また、知的資産センターは技術移転に密接に関係する知的財産に関する教育・研究も任務としています。

情報技術の劇的な革新に伴い電子メディア、ビジネスモデル特許に代表されるように、知的財産は社会のあらゆる分野に密接に関係してきました。こうした時代の変化に対応していくためには、専攻分野に係わらず知的財産に関する幅広い知識と理解が求められています。

そこで、知的財産に関する教育の一貫として、全学部の学生を対象として知的財産全般について基本的な事項の理解を図るため、設置講座を開設しました。

2. 設置科目、履修上の取扱いについて

今年度は「知的資産概論」の 1 科目を、春学期三田キャンパスで開講します。

授業時間は 18:10~19:40、単位は 2 単位です。その他授業に関する情報は、三田掲示板、<http://www.ipc.keio.ac.jp> でお知らせします。

受講を希望する場合は、履修の取扱いについて各学部、研究科の履修案内で確認の上、各学部窓口で履修申告をしてください。

3. 講義要綱

知的資産概論 ―知的財産の保護と活用をめぐる課題―
(ナテグリニド特別講座)

知的資産センター所長（商学部教授）清水 啓 助

授業科目の内容：

研究活動や創造活動の成果を知的財産として、戦略的に保護・活用し、我が国産業の国際競争力を強化するという国家戦略が策定され、知的財産に対する関心は高まっています。知的財産には、技術（特許）、デザイン（意匠）、ブランド（商標）、音楽・映画のコンテンツ（著作権）といったものがあり、権利の内容や活用法はそれぞれ固有な特色があります。本講義では、代表的な知的財産の権利保護・活用における現状と課題についての理解を深め、知的財産に関する幅広い知識を得ることを目標とします。

テキスト：

講義資料を配布します。

参考書：

「知的創造時代の知的財産」 清水啓助他著、慶應義塾大学出版会

「特許がわかる12章」 竹田著 ダイアモンド社

「著作権の考え方」 岡本著 岩波新書

授業の計画：

- 1 知的財産の新たな時代
- 2 特許の仕組み

- 3 著作権の仕組み
- 4 商標ブランドの価値
- 5 マルチメディアに関する知的財産
- 6 キャラクタービジネス
- 7 音楽に関する著作権問題
- 8 企業における知的財産戦略
- 9 知的財産に関する世界の動向
- 10 知的財産の紛争処理
- 11 ベンチャー・起業の仕組み
- 12 知的財産ビジネス
- 13 技術の移転

なお、講義は外部講師を含め、オムニバス形式で行います。

履修者へのコメント：

積極的に学ぶ意欲を持つ学生を歓迎します。

単位の取扱については、学部により異なりますので注意してください。

成績評価方法：

平常点及びレポートによる評価

質問・相談：

授業の最後に質問の時間を設けます。

関係規程抜粋

経済学研究科在籍者に特に関わりの深い規程について抜粋してありますので、履修要項と合わせて参照してください。なお、大学院学則については、入学時に配付する慶應義塾大学大学院学則を参照してください。

〈1 学 位〉

- 1-1 学位規程（抜粋）
- 1-2 学位の授与に関する内規

〈2 奨 学 金〉

- 2-1 大学院奨学規程
- 2-2 小泉信三記念大学院特別奨学金規程
- 2-3 小泉信三記念大学院特別奨学金規程細則

〈3 授業料減免〉

- 3-1 授業料等減免規程
- 3-2 留学期間中の学費の取り扱いに関する規程

〈4 そ の 他〉

- 4-1 学生の国外留学に関する取扱い規則
- 4-2 大学院在学期間延長者取扱い内規
- 4-3 大学院在学期間延長者並びに年度途中の修了者に対する在学料その他の学費に関する取扱い内規

学位請求論文製本表紙見本

1 学 位

1-1 学位規程 (抜粋)

昭和31年2月17日制定
平成13年12月7日改正

第1条 (目的) 本規程は、慶應義塾大学学部学則及び大学院学則に規定するもののほか、慶應義塾大学が授与する学位について必要な事項を定めることを目的とする。

第2条 (学位) 本大学において授与する学位は次の通りとする。

1 学 士

文 学 部

| | |
|-----------|--------------|
| 人文社会学科 | |
| 哲学専攻 | 学士 (哲学) |
| 倫理学専攻 | 学士 (哲学) |
| 美学美術史学専攻 | 学士 (美学) |
| 日本史学専攻 | 学士 (史学) |
| 東洋史学専攻 | 学士 (史学) |
| 西洋史学専攻 | 学士 (史学) |
| 民族学考古学専攻 | 学士 (史学) |
| 国文学専攻 | 学士 (文学) |
| 中国文学専攻 | 学士 (文学) |
| 英米文学専攻 | 学士 (文学) |
| 独文学専攻 | 学士 (文学) |
| 仏文学専攻 | 学士 (文学) |
| 図書館・情報学専攻 | 学士 (図書館・情報学) |
| 社会学専攻 | 学士 (人間関係学) |
| 心理学専攻 | 学士 (人間関係学) |
| 教育学専攻 | 学士 (人間関係学) |
| 人間科学専攻 | 学士 (人間関係学) |

経 済 学 部

学士 (経済学)

法 学 部

学士 (法学)

商 学 部

学士 (商学)

医 学 部

学士 (医学)

理 工 学 部

機械工学科 学士 (工学)

電子工学科 学士 (工学)

応用化学科 学士 (工学)

物理情報工学科 学士 (工学)

管理工学科 学士 (工学)

数理科学科

数学専攻 学士 (理学)

統計学専攻 学士 (工学)

物理学科 学士 (理学)

化学科 学士 (理学)

システムデザイン工学科 学士 (工学)

情報工学科 学士 (工学)

生命情報科 学士 (理学) 又は

学士 (工学)

総合政策学部 学士 (総合政策学)

環境情報学部 学士 (環境情報学)

看護医療学部 学士 (看護学)

2 修 士

文学研究科

哲学・倫理学専攻 修士 (哲学)

| | |
|------------|-----------------------|
| 美学美術史学専攻 | 修士 (美学) |
| 史学専攻 | 修士 (史学) |
| 国文学専攻 | 修士 (文学) |
| 中国文学専攻 | 修士 (文学) |
| 英米文学専攻 | 修士 (文学) |
| 独文学専攻 | 修士 (文学) |
| 仏文学専攻 | 修士 (文学) |
| 図書館・情報学専攻 | 修士 (図書館・情報学) |
| 経済学研究科 | 修士 (経済学) |
| 法学研究科 | 修士 (法学) |
| 社会学研究科 | |
| 社会学専攻 | 修士 (社会学) |
| 心理学専攻 | 修士 (心理学) |
| 教育学専攻 | 修士 (教育学) |
| 商学研究科 | 修士 (商学) |
| 医学研究科 | |
| 医科学専攻 | 修士 (医科学) |
| 理工学研究科 | |
| 基礎理工学専攻 | 修士 (理学) 又は 修士 (工学) |
| 総合デザイン工学専攻 | 修士 (理学) 又は 修士 (工学) |
| 開放環境科学専攻 | 修士 (工学) |
| 経営管理研究科 | 修士 (経営学) |
| 政策・メディア研究科 | |
| 政策・メディア専攻 | 修士 (政策・メディア) |

3 博 士

| | |
|------------|-----------------------|
| 文学研究科 | |
| 哲学・倫理学専攻 | 博士 (哲学) |
| 美学美術史学専攻 | 博士 (美学) |
| 史学専攻 | 博士 (史学) |
| 国文学専攻 | 博士 (文学) |
| 中国文学専攻 | 博士 (文学) |
| 英米文学専攻 | 博士 (文学) |
| 独文学専攻 | 博士 (文学) |
| 仏文学専攻 | 博士 (文学) |
| 図書館・情報学専攻 | 博士 (図書館・情報学) |
| 経済学研究科 | 博士 (経済学) |
| 法学研究科 | 博士 (法学) |
| 社会学研究科 | |
| 社会学専攻 | 博士 (社会学) |
| 心理学専攻 | 博士 (心理学) |
| 教育学専攻 | 博士 (教育学) |
| 商学研究科 | 博士 (商学) |
| 医学研究科 | 博士 (医学) |
| 理工学研究科 | |
| 基礎理工学専攻 | 博士 (理学) 又は 博士 (工学) |
| 総合デザイン工学専攻 | 博士 (理学) 又は 博士 (工学) |
| 開放環境科学専攻 | 博士 (工学) |
| 経営管理研究科 | 博士 (経営学) |
| 政策・メディア研究科 | |
| 政策・メディア専攻 | 博士 (政策・メディア) |

② 前項第3号に定めるほか博士 (学術) の学位を授与することができる。

③ 第5条に定める者には、学位論文を提出した研究科に応じ第1項第3号の学位を授与する。

第2条の2（学士学位の授与要件） 学士の学位は、大学を卒業した者に与えられる。

第3条（修士学位の授与要件） 修士の学位は、大学院前期博士課程を修了した者に与えられる。

第4条（課程による博士学位の授与要件） 博士の学位は、大学院博士課程を修了した者に与えられる。

第5条（論文による博士学位の授与要件） 博士の学位は、研究科委員会の承認を得て学位論文を提出して論文の審査に合格し、かつ大学院博士課程の修了者と同等以上の学識があることを確認（以下「学識の確認」という）された者に与えられる。

第6条（学識の確認の特例） ① 大学院博士課程における教育課程を終え、学位論文を提出しないで退学した者のうち、退学の日から起算して研究科委員会が定める年限以内に論文による博士学位を申請した者については、研究科委員会が適当と認めた場合、学識の確認の一部若しくはすべてを行わないことができる。

② 学位論文以外の業績及び経歴の審査によって、研究科委員会が学識の確認の一部若しくはすべてを行う必要がないと認めた場合には、当該審査をもって学識の確認の一部若しくはすべてに代えることができる。

第7条（課程による学位の申請） ① 第3条の規定に基づき修士学位を申請する者は、学位論文3部を指導教授を通じて当該研究科委員会に提出するものとする。

② 第4条の規定に基づき博士学位を申請する者は、学位申請書に学位論文3部及び所定の書類を添え、指導教授を通じて当該研究科委員会に提出するものとする。

第8条（論文による学位の申請） 第5条の規定に基づき博士学位を申請する者は、学位申請書に学位論文3部及び所定の書類を添え、その申請する学位の種類を指定して、学長に提出しなければならない。

第9条（審査料） 第5条の規定に基づき博士学位を申請する者に対する審査料は、次の通りとする。

- 1 本大学大学院博士課程の教育課程を終え学位論文を提出しないで退学した者 50,000円
- 2 本大学学士又は修士の学位を与えられた者で前号の定め以外の者 70,000円
- 3 第1号・第2号のいずれにも該当しない者 100,000円
- 4 本塾専任教職員である者 20,000円
(医学研究科については40,000円)

第10条（審査並びに期間） ① 修士及び博士の学位論文の審査並びにこれに関連する試験等の合否は、当該研究科委員会が判定する。

② 博士の学位論文の審査並びにこれに関連する試験及び学識の確認等は、論文受理後1年以内に終了するものとする。

第11条（審査委員会） 研究科委員会は、学位論文の審査並びにこれに関連する試験等を行うために、関係指導教授及び関連科目担当教授2名以上から成る審査委員会（主査及び副査）を設置しこれに当たらせる。ただし、必要がある場合は助教教授又は専任講師・講師（非常勤）等を特に審査委員会に加えることができる。

第12条（審査結果の報告・判定方法） ① 審査委員会は、論文審査の要旨並びに試験の成績等を記録して研究科委員会に報告し、かつ、その意見を開陳する。

② 研究科委員会は、委員の3分の2以上の出席により成立し、その3分の2以上の賛同をもって学位論文の審査並びに試験の合否を決定する。

③ 前項の議決は、無記名投票をもって行う。

第13条（学位授与） 研究科委員会において学位論文の審査並びに試験に合格した者に対し、学長は当該研究科委員会の報告に基づき学位を授与する。

第14条（学位論文要旨の公表） 本大学は博士の学位を授与したとき、当該博士の学位を授与した日から3月以内にその論文の内容の要旨及び論文審査の結果の要旨を公表する。

第15条（学位論文の公表） 博士の学位を授与された者は、当該博士の学位の授与を受けた日から1年以内にその論文を印刷公表し「慶應義塾大学審査学位論文」と明記するものとする。ただし、学位の授与を受ける前にすでに印刷公表したときはこの限りではない。

第16条（学位の表示） 学位の授与を受けた者が学位の名称を用いるときは、学位の後にこれを授与した本大学名を「（慶應義塾大学）」と付記するものとする。

第17条（学位の取消） 不正の方法により学位の授与を受けた事実が判明したとき、又は学位を得た者がその名誉を汚辱する行為があったときは、当該研究科委員会及び大学院委員会の議を経てその学位を取消すものとする。

第18条（学位記及び書類） 学位記及び学位授与申請関係書類の様式は、別表の通りとする。

第19条（規程の改廃） この規程の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。ただし、第2条第1項第1号及び第2条の2については大学評議会の議を経てこれを行う。

附 則

① この規程は平成14年4月1日から施行する。
〔以下省略〕

1-2 学位の授与に関する内規

昭和59年3月16日制定
平成12年5月16日改正

第1条 慶應義塾大学学位規程第13条（学位授与）に関する取扱いは、この内規の定めるところによる。

第2条 論文博士の学位授与及び博士課程単位修得退学者で再入学しない者に対する課程博士の学位授与に関しては、次の通り行うものとする。

1 学位授与日は、研究科委員会の議決日とする。

2 研究科委員会が学位論文審査合格を議決した日以降、「学位取得証明書」を発行できるものとする。

3 学位の授与手続きは、次の通りとする。

イ 研究科委員会の合否判定議決に基づき、研究科委員長はその結果を速やかに学長に報告する。

ロ 学長は、研究科委員長の報告に基づき合格者に学位を授与する。

4 学位記は、学位授与式において授与する。

第3条 修士の学位授与及び博士課程に在学している者に対する課程博士の学位授与に関しては、前第2条第3号と同様の手続きを経て当該年度末（3月23日）をもって学位を授与する。

② 前項の規定にかかわらず、修士課程においてあらかじめ研究科委員会の承認を得て、学位論文を提出締切期日までに提出せず次年度も引続き在学している者が、研究科委員会の特に認めた期日までに学位論文を提出し課程修了を認定された場合には、春学期末日をもって学位を授与することができる。

- ③ 第1項の規定にかかわらず、後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）に在学する者で、大学院学則第109条第3項のただし書（医学研究科については同条第4項のただし書）の適用を受け、春学期末日をもって課程修了を認定された場合には、当該春学期末日をもって学位を授与することができる。
- ④ 前項の規定にかかわらず後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）に在学する者で、大学院学則第109条第3項のただし書（医学研究科については同条第4項のただし書）の適用を受け、在学する年度途中において特に課程修了を認定された場合には、認定された日をもって学位を授与することができる。
- ⑤ 第1項の規定にかかわらず、「大学院在学期間延長者取扱い内規」により在学する者が、春学期末日をもって課程修了を認定された場合には、当該第1学期末日をもって学位を授与することができる。
- ⑥ 前項の規定にかかわらず、「大学院在学期間延長者取扱い内規」により在学する者が、在学する年度途中において、特に課程修了を認定された場合には、認定された日をもって学位を授与することができる。
- ⑦ 学位記は、学位授与式において授与する。

第4条 学長は、学位を授与した者の氏名その他必要事項を取りまとめて、年2回大学院委員会の各委員に報告しなければならない。

第5条 この内規の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。

附 則（平成8年3月8日）

第1条 この内規は、平成12年4月1日から実施する。

第2条 この内規の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。

2 奨学金

2-1 大学院奨学規程

平成2年4月13日制定

平成10年4月21日改正

第1章 総 則

第1条（根拠） 慶應義塾大学は、大学院学則第16節奨学制度に基づき、貸費及び給費の奨学制度を置く。

第2条（奨学金の種類・金額） ① 奨学金の種類は、次の通りとする。

- 1 貸費奨学金（無利子） 修士課程（前期博士課程）学生対象（但し、外国人留学生を除く。）
- 2 給費奨学金 後期博士課程（以下「博士課程」という。）学生、医学研究科博士課程学生、私費外国人留学生対象

② 前項に定める奨学金の年額は、次の通りとする。

- | | |
|-------------------|----------|
| 1 文、経済、法、社会、商学研究科 | 400,000円 |
| 2 医学、経営管理研究科 | 600,000円 |
| 3 理工学、政策・メディア研究科 | 500,000円 |

第2章 貸 費 生

第3条（資格） 貸費生の資格は、大学院修士課程の学生（但し、外国人留学生を除く。）とし、次の条件を備えていなければならない。

- 1 研究の意欲を持ち、経済的に修学が困難であること。

- 2 学業成績・人物共に優秀で健康であること。

- 3 原則として、修士課程1年生であること。

第4条（期間） 貸費の期間は、大学院学則に定める修士課程標準修業年限の2か年とする。但し、修士課程2年生が貸費生に採用された場合は、1か年とする。

第5条（申請） 貸費を受けようとする者は、所定の申請書に学業成績証明書、健康診断書及び連帯保証人等の所得証明書を添えて、学生総合センターに申請するものとする。

第6条（選考） 貸費生は、第3条の条件により選考する。

第7条（決定） 前条による選考は、別に定める大学院奨学委員会（以下「委員会」という。）において行い、塾長がこれを決定する。

第8条（家計急変者に対する救済措置等） 天災その他の災害及び家計支持者の死亡、失職等のため家計が急激に変化し、学費の納入が困難になった者等若干名については、第3条第3号の規定にかかわらず、貸費生として追加採用することができる。

第9条（誓約書） 貸費生として決定された者は、所定の誓約書を連帯保証人と連署の上、学生総合センターに提出しなければならない。

第10条（身分等変更の届出） 貸費生は、次の各号に該当する場合は、直ちに学生総合センターに届け出なければならない。但し、本人の病氣・死亡などの場合は、連帯保証人が代わって届け出なければならない。

- 1 休学、留学、就学、退学
- 2 本人及び連帯保証人の氏名、住所、その他重要事項の変更

第11条（貸与の休止） 委員会は、貸費生が休学・留学した場合、その間貸費生の資格を休止することができる。

第12条（貸与の復活） 前条の規定により貸費生の資格を休止された者が、休止の理由となったものが消滅した場合、委員会は、申請により貸与を復活することができる。但し、休止された時から3か年を経過したときは、この限りではない。

第13条（失格） 委員会が次の各号により不適格と認めた場合、貸費生はその資格を失う。

- 1 大学院学則に基づく退学、停学の場合
- 2 申請書及び提出書類の記載内容に虚偽があった場合
- 3 正当な理由がなく第10条に定める届け出を怠った場合
- 4 その他貸費生として不適当と認められた場合

第14条（貸与の辞退） 貸費生は、いつでも貸与を辞退することができる。この場合には、連帯保証人と連署の届出書を、学生総合センターに提出しなければならない。

第15条（貸与金借用証書の提出） 貸費生が次の各号に該当する場合は、貸与金借用証書に貸与金返還総額等を記載し、連帯保証人及び保証人と連署の上、学生総合センターに提出しなければならない。連帯保証人及び保証人の使用する印鑑については、印鑑証明を必要とする。

- 1 貸与期間が満了した場合
- 2 貸与を期間中に辞退した場合
- 3 第13条による失格の場合

第16条（貸与金の返還） ① 貸与金の返還は、原則として貸与が終了した年の12月から毎年1回の年賦とし、貸与年数の4倍の年数以内に全額を返還するものとする。但し、貸与金はいつでも繰り上げ返還することができる。

② 第13条による失格者については、貸与金の全額を直ちに返還しなければならない。

第17条（返還猶予） ① 貸費生であった者が次の各号に該当

する場合には、委員会は、本人の申請により貸与金の返還を猶予することができる。

- 1 災害又は疾病により返済が困難となった場合
- 2 貸与期間終了後、引き続き修士課程に在学している場合
- 3 修士課程修了後、博士課程進学を目指している場合

② 前項の規定にかかわらず、委員会は、その理由が相当であると認めるときは、申請により貸与金の返還を猶予することができる。

③ 返還猶予期間は1か年とするが、返還猶予の理由が存続する場合は、第1項第3号に基づく場合を除いて、申請により1年ごとに延長することができる。但し、原則として3か年を越えて延長することはできない。

第18条（返還免除） ① 貸費生であった者が次の各号に該当する場合には、委員会は、本人又は連帯保証人の申請により、貸与金の全部又は一部の返還を免除することができる。

- 1 博士課程に進学し、学位を取得した場合、あるいは博士課程に3か年以上在学して所定の単位を取得し退学した場合。但し、博士課程を途中で退学した者については免除を認めない。
- 2 貸与金返還完了前に死亡した場合。この場合には、連帯保証人又は相続人は、死亡時から6か月以内に、貸与金返還免除申請書を、死亡診断書又は戸籍抄本を添えて、学生総合センターに提出しなければならない。

② 前項の規定にかかわらず、委員会は、その理由が相当であると認めるときは、申請により貸与金の全部又は一部の返還を免除することができる。

第3章 給費生

第19条（資格） 給費生の資格は、大学院博士課程学生及び私費外国人留学生とし、次の条件を備えていなければならない。

- 1 研究の意欲を持ち、経済的に修学が困難であること。
- 2 学業成績・人物共に優秀で健康であること。

第20条（期間） 給費の期間は、1か年とする。引き続き給費を希望する場合、再申請は妨げないが、3か年（医学研究科は4か年）を超えて給費を受けることはできない。

第21条（申請） 給費を受けようとする者は、所定の申請書に、学業成績証明書、健康診断書及び連帯保証人等の所得証明書を添えて、学生総合センターに申請するものとする。

第22条（選考） 給費生は、第19条の条件により選考する。

第23条（決定） 前条による選考は、委員会において行い、塾長がこれを決定する。

第24条（身分等変更の届出） 給費生は、次の各号に該当する場合は、直ちに学生総合センターに届け出なければならない。但し、本人の病気・死亡などの場合は、連帯保証人が代わって届け出なければならない。

- 1 休学、留学、退学
- 2 本人及び連帯保証人の氏名、住所、その他重要事項の変更

第25条（失格） 委員会が次の各号により不適格と認めた場合、給費生はその資格を失う。

- 1 大学院学則に基づく休学、退学、停学の場合
- 2 申請書及び提出書類の記載内容に虚偽があった場合
- 3 正当な理由がなく第24条に定める届け出を怠った場合
- 4 その他給費生として不適当と認められた場合

第26条（返還） ① 給費生が前条の規定により給費生としての資格を失った場合は、既にその年度に給付された金額の全部又は一部を返還しなければならない。委員会は、この場合の返還方法を、審査の上定める。

② 前項の規定にかかわらず、次の各号に該当する場合は、委員会は、申請により既に給付された奨学金の全部又は一部の返還を免除することができる。

- 1 死亡した場合
- 2 第25条第1号の規定により、給費生として資格を失った場合

第27条（事務） 本制度の運営事務は、学生総合センターの所管とする。

第28条（規定の改廃） この規程の改廃は、委員会の議を経て、塾長がこれを行う。

附 則（平成10年4月21日）

- ① この規程は、平成10年4月1日から施行する。
- ② 平成3年3月31日以前の課程入学者については、旧・慶應義塾大学大学院奨学規程を適用する。
- ③ 平成10年4月1日以後の修士課程（前期博士課程）第1学年入学者については、本規程第3条から第18条を適用しない。
- ④ 平成10年4月1日以後の修士課程（前期博士課程）入学者を、本規程第2条第1項第2号及び第19条の対象に加えるものとする。

2-2 小泉信三記念大学院特別奨学金規程

昭和52年4月12日制定
昭和54年7月27日改正
平成14年5月1日改正
平成16年3月15日改正

第1条 小泉信三記念奨学金規程第2条第1号に基づき、研究者の養成を目的として大学院に特別奨学金による奨学研究生を置く。

第2条 奨学研究生は、学部第4学年に在学し大学院への進学を志願する学生、または大学院に在学する学生の中から、これを選考する。

第3条 奨学研究生の選考は、各研究科委員会の推薦により、小泉基金運営委員会の議を経て塾長がこれを決定する。

第4条 奨学研究生には特別奨学金として、月額30,000円を給付し、その期間は1年とする。ただし、審査の上、この期間を更新することができる。

第5条 この特別奨学金規程に関する事務は、研究支援センター本部が担当する。

第6条 この規程に関する細則は別に定める。

付 則

- ① この規程は、昭和52年4月1日から施行する。
- ② 現行小泉信三記念大学院特別奨学金規程は旧・小泉信三記念大学院特別奨学金規程とする。

付 則（昭和54年7月27日）

この規程は、昭和54年9月1日から施行する。

付 則（平成14年5月1日）

この規程は、平成14年5月1日から施行する。

付 則（平成16年3月15日）

この規程は、平成16年3月15日から施行する。

2-3 小泉信三記念大学院特別奨学金規程施行細則

昭和52年4月12日制定
昭和54年7月27日改正
平成14年5月1日改正
平成16年3月15日改正

第1条 小泉基金運営委員会委員長は、毎年奨学研究生を公募する。

第2条 奨学研究生は、大学院に在学し、次に掲げる各号の条件を備えていなければならない。

- 1 学業成績・人物共に優秀であること
- 2 将来、研究者たり得る資質ありと認められること
- 3 健康であること

第3条 奨学研究生を志望する者は、次の書類を整えて、保証人連署の上、研究支援センター本部に提出しなければならない。

- 1 願書
- 2 履歴書
- 3 成績証明書 大学学部1年から申請時までの成績証明書
- 4 健康診断書

第4条 各研究科委員会は、奨学研究生を志望した者について審議し、順位を付して小泉基金運営委員会に推薦しなければならない。

第5条 奨学研究生は、次の理由により身分に変更を生じた場合は、保証人連署の上、直ちに学長に届け出なければならない。

- 1 休学・復学・退学
- 2 本人及び保証人の身分・住所その他重要事項の変更。ただし、本人が病氣・死亡等の場合は、保証人が代って届け出なければならない。

第6条 小泉基金運営委員会が、次の理由により不適格と認めた場合は、奨学研究生としての資格を失うものとし、すでに支給した奨学金の全部もしくは一部を返還させることがある。

- 1 この奨学金設定の趣旨に反し、かつ塾生としての本分にもとる行為があった場合
- 2 提出書類に虚偽の記載をした場合
- 3 正当な理由なく第5条に定める届け出を怠った場合

第7条 奨学研究生が退学した場合は、給付を打ち切るものとする。

付 則

- ① この細則は、昭和52年4月1日から施行する。
- ② 現行小泉信三記念大学院特別奨学金規程施行細則は旧・小泉信三記念大学院特別奨学金規程施行細則とする。

付 則 (昭和54年7月27日)

この細則は、昭和54年9月1日から施行する。

付 則 (平成14年5月1日)

この細則は、平成14年5月1日から施行する。

付 則 (平成16年3月15日)

この細則は、平成16年3月15日から施行する。

3 授業料減免

3-1 授業料等減免規程

平成元年7月18日制定
平成2年4月1日施行
平成11年11月26日改正
平成14年7月12日改正

第1条 (目的) 慶應義塾大学は、疾病・傷害によって授業を長期にわたり休学している学部学生並びに大学院生で、経済上授業料等(大学院にあつては在学科等、以下授業料等という)の納入が著しく困難な学生に対し、審査のうえ、一定の期間授業料等を減免することが出来る。

第2条 (対象) ① 減免を受けようとする者は、1年以上の長期にわたり入院又は通院している者並びに自宅療養をしている者で、休学の2年目以降の者でなければならない。

② 母国において兵役に就くために休学する者。この場合に限り1年目から減免する。

第3条 (申請) 前条に該当する者が減免を申請する場合は、所定の申請書に休学許可書、診断書並びに家計支持者の所得を証明する書類を添えて、学生総合センター長に提出しなければならない。

第4条 (減免額) ① 減免を認められた者の減免額は、文科系学部・同大学院研究科については授業料等の半額、医学部・同大学院研究科、理工学部・同大学院研究科、総合政策学部、環境情報学部、大学院政策メディア研究科及び看護医療学部については授業料等の半額及び実験実習費の半額とする。なお、総合政策学部、環境情報学部、大学院政策・メディア研究科及び法学部政治学科9月入学者は、休学期間が6か月毎のため減免額も半年分の半額とする。

② 正課又は課外活動中の事故による傷害で休学している場合、その事由を斟酌し、減免額を全額とすることができる。

第5条 (審査) 第1条による審査は、大学学部生については大学奨学委員会、大学院生については大学院奨学委員会が行い、塾長が決定する。

第6条 (減免の取消し) 休学者が虚偽の申請その他不正の方法で減免を受けた場合には、減免の措置を取り消すとともに、既に減免を受けた授業料等の全部又は一部を納入させることが出来る。

第7条 (就学の届出) 休学者が就学した時は、速やかに書面をもってその旨学生総合センター長に届け出なければならない。

第8条 (規程の改廃) この規程の改廃は、大学奨学委員会並びに大学院奨学委員会の議を経て、塾長が決定する。

第9条 (所管) この規程の運営事務は、学生総合センターの所管とする。

附 則 (平成元年7月18日)

この規程は、平成2年4月1日から施行する。

附 則 (平成11年11月26日)

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

附 則 (平成14年7月12日)

この規程は、平成14年8月1日から施行する。

3-2 留学期間中の学費の取り扱いに関する規程

平成元年5月23日制定
平成2年4月1日施行
平成12年5月30日改正

第1条 慶應義塾大学学部学則第153条及び慶應義塾大学大学院学則第124条により外国の大学に留学する学生(以下留学生という)の学費に関する取り扱いは、この規程の定めるところによる。

第2条 留学期間中の学費の取り扱いは、次の通りとする。

- 1 留学の始まる日（以下留学開始日という）の属する年度の学費は納入するものとする。但し、留学の奨励を図るため、別に定めるところにより、留学に要する経費の一部を補助することができる。
- 2 留学の延長が認められ、その許可された延長期間が留学開始日から起算して1年6か月以上2年以内（医学研究科博士課程は2年6か月以上3年以内）の場合は、留学開始日から1年（医学研究科博士課程は2年）を経過した日の属する年度の授業料（在学科）及び実験実習費の半額を免除する。
- 3 留学の再延長が認められ、その許可された延長期間が留学開始日から起算して2年6か月以上3年以内（医学研究科博士課程は3年6か月以上4年以内）の場合は、留学開始日から2年（医学研究科博士課程は3年）を経過した日の属する年度の授業料（在学科）及び実験実習費の半額を免除する。

第3条 留学生が留学の許可を取り消された場合は、その間に免除した学費の一部又は全額を納入させることがある。

第4条 この規程の適用に当たり疑義を生じた場合は、その都度塾長が決定する。

第5条 この規程の改廃は、塾長がこれを決定する。

附 則（平成元年5月23日）

- ① この規程は、平成2年4月1日から施行する。
- ② この規程の制定により、昭和56年5月12日制定、同年4月1日施行の留学期間中の学費の取り扱いに関する規程は、これを旧・留学期間中の学費の取り扱いに関する規程とする。
- ③ この規程は、留学開始日が平成2年4月1日以降の者に適用する。
- ④ この規程の施行前、既に留学を許可され留学している者の学費については、旧・留学期間中の学費の取り扱いに関する規程を適用する。

附 則（平成12年5月30日）

この規程は、平成12年4月1日から施行する。

4 その他

4-1 学生の国外留学に関する取扱い規則

昭和56年5月7日経済学研究科委員会報告
昭和56年4月1日実施

第1条 学部学則第153条及び大学院学則第124条により、学生が外国の大学へ留学する場合の取扱いは、この規則の定めるところによる。

第2条 国外留学を希望する者は、原則として、出発の3カ月前迄に所定の国外留学申請書を学長に提出しなければならない。所定の国外留学申請書には、履修を希望する授業科目名、履修期間、単位数、授業時間数、講義内容等を明記しなければならない。なお、事情により申請内容の一部を欠く場合には、教授会（または研究科委員会）の指示により、後日改めて追加することができる。

第3条 教授会（または研究科委員会）は、前項により提出のあった国外留学申請書に基づき、外国の大学において学習することが教育上有益であると判断した場合は、学則第153条（または大学院学則第124条）に定める留学として取扱う。

審議にあたっては、国際センター所長に意見を徴することができる。

第4条 この適用を受けて留学する学生の学籍の取扱いは留学とする。ただし、在学中に休学が認められ外国の大学において学習することはさしつかえない。この場合、この規則は適用しない。

第5条 外国の大学で履修する期間は1年以内とする。ただし、やむを得ない事情があると認めるときは、更に学部学生は1年、大学院生は2年以内に限り、その延長を許可することができる。留学期間の延長を希望する者は、国外留学延長申請書を提出しなければならない。

第6条 留学の期間は1年間に限り、学部学則（または大学院学則）に定める在学年数に含めることができる。

第7条 外国の大学で取得した単位は学部において30単位、大学院においては10単位を超えない範囲内で、これを学部学則（または大学院学則）の規定する単位に認定することができる。

第8条 外国の大学で取得した単位を学部学則（または大学院学則）の規定する単位として認定を希望する者は、所定の取得単位認定申請書に、次の資料を添付して、学部長（または研究科委員長）に提出しなければならない。

- 1 履修証明書（授業科目名、学習期間、時間数、単位数、成績等を明記）
- 2 受講した授業科目の内容

第9条 教授会（または研究科委員会）は科目の内容、授業時間数、評価等について審査し、単位認定の可否を決定する。この際、必要に応じて書類による審査の他、面接による審査を行うことがある。教授会（または研究科委員会）は、外国の大学等で修得した授業科目を本大学（または本学大学院）の授業科目として認定する場合は、次の事項を決定する。

- (1) 授業科目名
- (2) 授業科目の単位数
- (3) 授業科目の評価（必修科目、選択科目、専門科目等の区別）
- (4) 評価（学則上の評語）

第10条 外国の大学に留学する前後に履修した授業科目は、次のとおり取扱うものとする。

- (1) 前期集中、前期終了科目の前期末試験を受験した場合は、その成績を評価し、所定の単位を与えることができる。
- (2) 通年授業科目は前期に受講し、帰国後、同一担当者の同一科目名の授業科目を後期に履修した場合は、その成績を評価し、所定の単位を与えることができる。
- (3) 後期科目、後期集中科目は、後期授業開始以前に帰国している場合には履修できるものとする。

第11条 履修申告書は帰国後、教授会（または研究科委員会）の指示に基づき、所定の期間内に提出しなければならない。

第12条 外国の大学に留学することによって、学部の研究会・卒業研究の履修（または修士・博士学位論文の研究）が中断する場合の取扱いについては担当指導教員の指示によるものとする。

第13条 学部学生の外国の大学で取得した単位の認定による進級・卒業の取扱いは、次により取扱うものとする。

- (1) 外国の大学において取得した単位を認定し、進級に必要な単位数を取得した場合の進級の時期は、帰国後単位認定した時期の属する年度初めとする。
- (2) 外国の大学に留学中に、外国の大学の単位を取得しなかった場合は原級に留めるものとする。

留学中に取得した単位を認定し、その結果、進級に必要な

な単位数を充足しなかった場合も同様とする。

- (3) 前項により、同一学年に2年間在学し、なお、進級し得ない場合の学部学則第156条の適用については、事情を考慮した上で決定するものとする。第5条ただし書きにより2年間の留学を認め、この2年間で進級に必要な単位を取得できなかった場合も同様とする。
- (4) 外国の大学で取得した単位の認定により卒業に必要な単位を充足できた場合の卒業の時期は、帰国した期日の属する年度末とする。

第14条 大学院学生が外国の大学で取得した単位を研究科委員会が認定することにより、課程修了に必要な単位が充足された場合、課程修了認定の時期は研究科委員会が決定する。

第15条 外国の大学に留学している学生が、次の各号の1つに該当するときは、学長は留学先大学長と協議のうえ、留学生としての許可を取消すときがある。

- (1) 留学先大学において、学習の実があがらないと認められたとき。
- (2) 学生としての本分に反する行為があると認められたとき。
- (3) 留学の趣旨に反する行為があると認められたとき。

第16条 留学期間中の学費は所定のとおり納入しなければならない。ただし、事情を考慮して別に定める規定により減免することがある。

第17条 この規則の改廃は、各学部教授会（または各研究科委員会）に諮り大学評議会の審議を経て、学長が決定する。

付 則

第1条 この規則は昭和56年4月1日から施行する。

4-2 大学院在学期間延長者取扱い内規

昭和59年3月16日制定

第1条 本塾大学大学院後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）において、当該課程修了要件のうち学位論文の審査並びに最終試験を除き所定の教育課程を終えた後、引続き博士学位取得のため在学する者の取扱いは、この内規の定めるところによる。

第2条 在学期間延長を希望する者は、指導教授の許可を得て研究科委員会に「在学期間延長許可願」を提出し、承認を得なければならない。

第3条 研究科委員会は、研究継続の必要性等在学を延長する充分な理由があると認め、かつ教育並びに研究に支障のない場合、大学院学則第128条に定める在学最長年限を超えない範囲で引続き1年間（4月1日～翌年3月31日）の在学を許可できるものとする。

第4条 在学期間延長者が延長期間終了後も引続き在学を希望するときには、新たに「在学期間延長許可願」を提出し、研究科委員会の承認を得なければならない。

第5条 学則定員その他の理由から延長が認められない場合は、大学院学則第153条に定める研究生として受け入れることができる。

付 則

第1条 この内規は、昭和59年4月1日から施行する。

第2条 この内規は、昭和58年度以降に医学研究科博士課程に入学した者並びに昭和60年度以降に後期博士課程に入学又は進学した者に適用する。

第3条 付則第2条の規定にかかわらず、博士課程所定単位修

得退学者に対して課程による学位論文提出年限を「博士学位に関する内規」に沿って定めている研究科に在学する者については、昭和59年4月1日からこの内規を適用することができる。

第4条 この内規の改廃は、大学院委員会の議を経て学長が行う。

4-3 大学院在学期間延長者並びに年度途中の修了者に対する在学科その他の学費に関する取扱い内規

昭和59年3月30日制定

平成8年3月8日改正

第1条 本塾大学大学院において「学位の授与に関する内規」第3条第2項若しくは第3項により第1学期末日をもって課程修了する者の学費は、次の通りとする。

- 1 在学科（毎年）
大学院学則第131条に定める金額の2分の1に相当する額
- 2 施設設備費（毎年）
大学院学則第131条に定める金額
- 3 実験実習費（毎年）
大学院学則第132条に定める金額

第2条 本塾大学大学院後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）において「大学院在学期間延長者取扱い内規」による在学期間延長者の学費は、次の通りとする。

- 1 在学科（毎年）
大学院学則第131条に定める金額の4分の3
- 2 施設設備費（毎年）
免除
- 3 実験実習費（毎年）
大学院学則第132条に定める金額

② 在学期間延長者が「学位の授与に関する内規」第3条第4項および第5項により年度途中の日をもって課程修了する場合の在学科は、その課程修了の日が第1学期末日までの者に限り前項に定める金額の2分の1に相当する額。

第3条 「大学院在学期間延長者取扱い内規」第5条による研究生は、大学院学則第153条第2項に定める登録料を免除し、初年度に限り選考料を徴収しない。

附 則

第1条 この内規は、平成8年4月1日から施行する。

第2条 この内規の修士課程に係る本則第1条については、昭和59年4月1日から適用する。

第3条 この内規の後期博士課程（医学研究科にあっては博士課程）に係る本則第2条及び第3条については、昭和58年度以降に医学研究科博士課程に入学した者並びに昭和60年度以降に後期博士課程に入学又は進学した者に適用する。

② 前項の規定にかかわらず、博士課程所定単位修得退学者に対して課程による学位論文提出期限を「博士学位に関する内規」に沿って定めている研究科に在学する者については、昭和59年4月1日からこの内規を適用することができる。

第4条 この内規の改廃は、塾長が決定する。

学位請求論文製本表紙見本

(1) 表紙

| |
|-------------------|
| 〇〇論文 平成〇年度 (20〇〇) |
| 論 題 |
| 慶應義塾大学大学院〇〇研究科 |
| 氏 名 |

(2) 背表紙

| | |
|--------------|----------------|
| | } 1.0 cm |
| 20〇〇 | |
| | } 1.0 cm |
| 〇 〇 論文 | |
| | } 1.0 cm |
| 論 題 | |
| 氏 名 | } 5.0 ~ 6.0 cm |
| | |

